

東大阪市下水道事業関係 発掘調査概要報告

— 平成 12 年度 —

平成 13 年 3 月

東大阪市教育委員会

例　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会文化財課が、東大阪市建設局下水道部の委託を受け、平成12年1月～12月末日まで実施した公共下水道管きょ築造工事に伴う埋蔵文化財調査の概要報告である。
2. 本書には西代遺跡、日下遺跡、馬場川遺跡、千手寺山遺跡、鬼塚遺跡、辻子谷遺跡、鬼虎川遺跡、神並古墳群、暗峠越奈良街道、下六万寺遺跡、神並遺跡、若宮古墳群、段上遺跡、出雲井遺跡群、岩滝山遺跡、みかん山古墳群、水走氏館跡、半堂遺跡、馬場遺跡、芝ヶ丘遺跡、縄手遺跡、上六万寺遺跡、額田寺跡、衣摺遺跡、西ノ辻遺跡の概要を収録した。
3. 現場は才原金弘・東徹志・木村健明・東朋子・吉田綾子・松田留美、遺物整理は現場担当者と横原美智子がおこない、報告の分担は各章の表に記した。
4. 本書に収録した現場写真は、各担当者が撮影し、遺物は株式会社アステムに委託して実施した。
5. 西ノ辻遺跡第43次調査に収録した遺構図の一部は、株式会社アコードに委託して実施した。
6. 土色名に数字が入っているものは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じている。
7. 調査の実施にあたっては、東大阪市建設局下水道部のご協力のもと、施工業者ならびに近隣市民の方々のご協力を賜った他、現場作業および整理作業には井上成、田中実、国分陽介、高畠慎太郎、松田亮一、村上昇、坂野正典、中谷圭伸、磯崎雅弘、宮浦和也、西川美奈子、大山えりか、大畑洋恵、川田純子、朝平琴、八田美代子、西村慶子、永井佐都子、堂阪加奈、釜田友里恵、久詰裕代、大久知子、宮田佳代が従事した。これらの方々に記して感謝いたします。

目 次

第1章	平成12年度の下水道関係調査について	1
第2章	西代遺跡の調査	4
第3章	日下遺跡の調査	6
第4章	馬場川(第11次)・西代遺跡の調査	8
第5章	千手寺山遺跡の調査	15
第6章	鬼塚遺跡の第24次調査	17
第7章	辻子谷遺跡の調査	25
第8章	鬼虎川遺跡の第51次調査	27
第9章	神並古墳群の調査	34
第10章	暗峠越奈良街道・鬼塚遺跡(第25次)の調査	37
第11章	鬼塚遺跡の調査	42
第12章	下六万寺遺跡の調査	45
第13章	神並遺跡(第28次)・若宮古墳群の調査	47
第14章	段上遺跡の調査	52
第15章	出雲井遺跡群の調査	54
第16章	岩滝山遺跡の調査	56
第17章	みかん山古墳群の調査	58
第18章	水走氏館跡の調査	60
第19章	半堂遺跡の第2次調査	62
第20章	馬場遺跡の調査	70
第21章	鬼塚遺跡の調査	72
第22章	芝ヶ丘遺跡の第10次調査	74
第23章	岩滝山遺跡の調査	80
第24章	縄手(第15次)・上六万寺遺跡(第5次)の調査	82
第25章	額田寺跡(第2次)・鬼塚遺跡(第26次)の調査	86
第26章	衣摺遺跡の調査	90
第27章	西ノ辻遺跡の第43次調査	92

第1章 平成12年度の下水道関係調査について

東大阪市教育委員会が下水道管埋設工事に伴う発掘調査を実施して、3年目も終わろうとしている。下水道工事は前年と同様に東地区を中心におこなわれた。

今年度の調査件数及び調査内容の概略は下記の調査一覧表に記した。調査にあたり下水道部と文化財課で協議したが、工事は道幅の狭い旧集落内や道路の迂回路が確保できない場所が多かった。種々の条件により立会調査が大部分を占めた。西ノ辻遺跡では、付帯工事に伴い広範囲で発掘調査を実施した。また、交通量の問題から夜間工事になり、調査を断念した遺跡もある。

今年度の調査成果は西ノ辻遺跡で弥生時代の集落を検出したことや鬼塚遺跡の範囲がさらに東に伸びることを確認したことなどが上げられる。

今回の収録した調査は平成12年1月1日より12月31日までに実施したものとし、それ以後のものは次年度に報告することとした。

平成12年度下水道工事に伴う埋蔵文化財の調査一覧表

(平成12年12月31日現在)

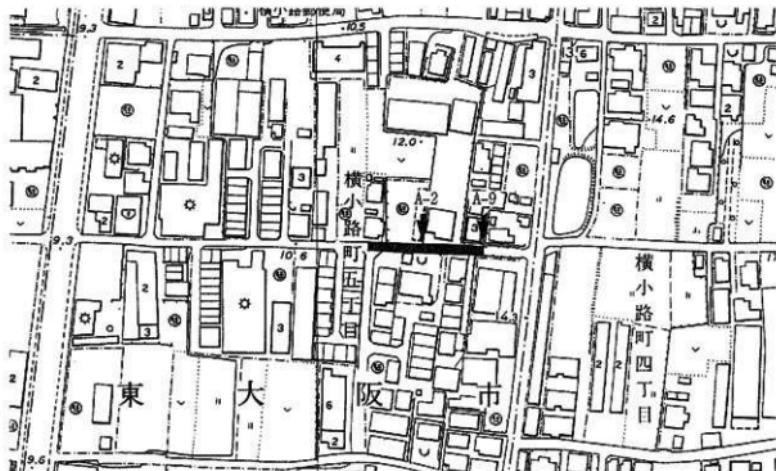
調査番号	下水管番	地名	施設の工事名称	調査場所	調査	調査期間	調査結果・所見
1	11-128	下段-47	西代 遺跡	平成10年度公共下水道第 3工区引ききと施設工事	猪小路町5 丁目	立会 ~ 12.3.15	第2章で報告。
2	11-413	橋-11-8	日下 遺跡	平成10年度公共下水道第 4工区引ききと施設工事	片下町7丁 目	立会 ~ 12.1.20 12.1.28	第3章で報告。
3	11-415	橋-11-67	西代 遺跡	平成10年度公共下水道第 7工区引ききと施設工事	猪小路町4 丁目	立会 ~ 11.8.33 12.2.22	第4章で報告。
4	11-416	橋-11-67	馬場川 遺跡	平成10年度公共下水道第 7工区引ききと施設工事	猪小路町4 丁目	立会 ~	同上
5	11-495	下段-131	鬼塚川 遺跡	平成11年度公共下水道第 3工区引ききと施設工事	鬼塚町	慎重	表面工事のため状況工事に 変更。工作実績。
6	11-497	下段-131 橋-11-54	西ノ辻 橋梁追加 整備	平成11年度公共下水道第 3工区引ききと施設工事	鬼塚町	慎重	同上
7	11-498	下段-135 橋-11-70	千手寺 山田跡	平成11年度公共下水道第 1工区引ききと施設工事	上石切町2 丁目~新 切町4丁目	立会 ~ 12.1.11	第5章で報告。
8	11-499	下段-129 橋-11-54	鬼塚 遺跡	平成10年度公共下水道第 7工区引ききと施設工事	市原町~ 新町	立会 ~ 12.4.20	第6章で報告。
9	11-500	下段-128 橋-11-42	近子谷 遺跡	平成10年度公共下水道第 5工区引ききと施設工事	中石切町2 丁目	立会 ~ 12.5.15	第7章で報告。
10	11-501	下段-127 橋-11-22	鬼塚川 遺跡	平成10年度公共下水道第 6工区引ききと施設工事	鹿石切町4 丁目~5丁 目	立会 ~ 12.1.31	第8章で報告。
11	11-509	下段-425	神坂古 墳群	平成11年度公共下水道第 11-4工区引ききと施設工事	上石切町1 丁目	立会 ~ 12.7.18	第9章で報告。
12	11-657	下段-171 橋-11-14	昭和高 森久野 通	平成10年度公共下水道第 6工区引ききと施設工事	立花町地内	立会 ~ 12.1.6	第10章で報告。
13	11-657	下段-171 橋-11-14	鬼塚 通	平成10年度公共下水道第 6工区引ききと施設工事	立花町地内	立会 ~ 12.1.6	同上
14	11-689	下段-175 橋-11-52	鬼塚 遺跡	平成11年度公共下水道第 9工区引ききと施設工事	立花町	立会 ~ 12.3.8	第11章で報告。
15	11-690	下段-176 橋-11-65	下六谷 守道跡	平成11年度公共下水道第 11工区引ききと施設工事	下六万寺町 2丁目地内	立会 ~ 12.3.1	第12章で報告。
16	11-691	下段-177 橋-11-47	津屋 遺跡	平成11年度公共下水道第 20工区引ききと施設工事	鬼塚町地内	立会 ~ 12.5.15	第13章で報告。

届出番号	F番号	道路名	認定の工事名称	認定場所	調査	実定期間	提出結果・所見
17	11-002	下段-178 協-11-17 培塿	平成11年度公共下水道第 20工区管きよ整理工事	高島町地内 立会	立会 12.3.13 ～ 12.5.15		第13章で報告。
18	11-065	下段-179 協-11-35 街路	平成11年度公共下水道第 25工区管きよ整理工事	吉根寺町5 丁目～2丁 目	立会		工事実施。
19	11-094	下段-180 協-11-95 道路	平成11年度公共下水道第 25工区管きよ整理工事	吉根寺町5 丁目	立会		同上
20	11-095	下段-181 協-11-75 道路	平成11年度公共下水道第 25工区管きよ整理工事	下六万寺町 3丁目	立会 12.1.25 ～ 12.1.28		第14章で報告。
21	12-20	F段-5 協-11-72 道路	平成11年度公共下水道第 26工区管きよ整理工事	特田町内 立会			収納工事のため慎重工事に 変更。工事実施。
22	12-21	F段-3 協-11-72 街路	平成11年度公共下水道第 26工区管きよ整理工事	西高岡・市 田舎町 立会			同上
23	12-22	下段-4 協-11-30 道路	平成11年度公共下水道第 26工区管きよ整理工事	南四条町地 内 立会			同上
24	12-23	F段-2 協-11-50 五合田 道路	平成11年度公共下水道第 10工区管きよ整理工事	御幸町地内 立会	12.4.19 ～ 12.6.5		延べ6日間の立会調査を実施。 工事は設置計画の入れ替えで あり、雨露文化館への影響は なかった。
25	12-24	F段-5 協-11-16 松井井 道路	平成11年度公共下水道第 26工区管きよ整理工事	山田井本町 立会	12.5.15 ～ 12.7.7		第15章で報告。
26	12-25	下段-7 協-11-63 道路	平成11年度公共下水道第 31工区管きよ整理工事	六万寺町1 丁目 立会	12.5.17 ～ 12.5.25		第16章で報告。
27	12-36	F段-12	みかん 山古頓 群	平成11年度公共下水道第 11-2工区管きよ整理工事	山手町～長 瀬町 立会	12.4.7 ～ 12.8.2	第17章で報告。
28	12-39	F段-13	木戸氏 能路	平成11年度公共下水道第 11-3工区管きよ整理工事	瓦堀町 立会	12.9.4 ～ 12.9.22	第18章で報告。
29	12-124	下段- 協-11-13 底生堂 道路	平成11年度公共下水道第 18工区管きよ整理工事	中坂4丁 目～下坂4 丁目 立会			收納工事のため慎重工事に 変更。工事実施。
30	12-134	F段-37 協-11-66 半堀	平成11年度公共下水道第 27工区管きよ整理工事	下六万寺町 1丁目～猪 小頭町1・ 2丁目 立会	12.4.12 ～ 12.6.2		第19章で報告。
31	12-170	下段-32 協-11-40 堺筋 道路	平成11年度公共下水道第 36工区管きよ整理工事	日下町2丁 目 立会	12.7.11 ～ 12.7.27		第20章で報告。
32	12-171	F段-53 協-11-25 電線 道路	平成11年度公共下水道第 41工区管きよ整理工事	御幸町地内 立会	12.10.26 ～ 12.12.16		第21章で報告。
33	12-172	下段-54 協-11-41 芝ヶ丘 道路	平成11年度公共下水道第 43工区管きよ整理工事	日下町4丁 目・中坂第 4丁目 立会	12.7.27 ～ 12.10.6		第22章で報告。
34	12-173	F段-55	山崎古 須野	平成11年度公共下水道第 44工区管きよ整理工事	上坂町 立会	12.9.6 ～	調査中。
35	12-174	下段-56 協-11-62 鈴山	平成11年度公共下水道第 46工区管きよ整理工事	上六万寺町 立会	12.8.1 ～ 12.11.22		第23章で報告。
36	12-178	F段-57	椎島東 道路	平成11年度公共下水道第 48工区管きよ整理工事	椎島町 立会		工事実施。
37	12-176	F段-47 協-11-64 細手	平成11年度公共下水道第 28工区管きよ整理工事	南四条町地 内 立会	12.7.12 ～ 12.8.1		第24章で報告。
38	12-177	F段-48 協-11-46 上六万 寺通り	平成11年度公共下水道第 28工区管きよ整理工事	南四条町地 内 立会			同上

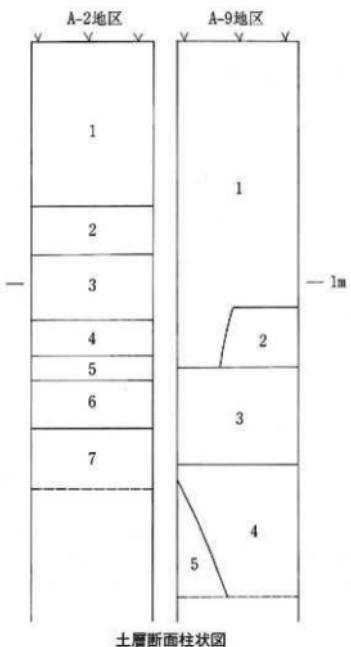
届出番号	下水番号	道路名	届出の工事名	開封場所	開封	開封期間	監査結果・意見
39 12-176	下水-46 協-11-49	朝日守 津	平成11年度公共下水道第 26工区管きよ整理工事	立花町 立会	12.8.25 ～ 12.10.13	第25章で報告。	
40 12-179	下水-49 協-11-49	丸塚 道路	平成11年度公共下水道第 26工区管きよ整理工事	立花町 立会	同上	同上	
41 12-180	下水-50 協-11-511	路上 道路	平成11年度公共下水道第 30工区管きよ整理工事	六万寺町3 丁目地内	協成		工事実施。
42 12-181	下水-51 協-11-511	馬手 道路	平成11年度公共下水道第 30工区管きよ整理工事	南四条町 立会		同上	
43 12-279	下水-107	西ノ辻 道路	平成11年度公共下水道第 11-1工区管きよ整理工事	森北町・東 山町	発組 12.5.9 ～ 12.10.18	第27章で報告。	
44 12-333	下水-6	船山 道路	平成11年度公共下水道第 1-1工区管きよ整理工事	六万寺町2 丁目	協成		工事実施。
45 12-334	下水-4	コモ田 道路	平成11年度公共下水道第 1-1工区管きよ整理工事	六万寺町2 丁目	協成		同上
46 12-358	下水-9 協-12-56	神並 道路	平成11年度公共下水道第 1-3工区管きよ整理工事	東石切町1 丁目	立会	12.9.6 ～ 12.10.16	延べ17日の立会調査を実施。 遅延・落合は確認できなかっ た。
47 12-363	下水-11 協-12-2	农園 道路	平成11年度公共下水道第 17工区管きよ整理工事	衣留3丁目 立会	12.12.14 ～ 12.12.15	第36章で報告。	
48 12-364	下水-12 協-12-57	幼稚園 春日井 町	平成11年度公共下水道第 1-6工区管きよ整理工事	松原1丁目 立会			工事実施。
49 12-365	下水-13 協-12-24	猪山守 野	平成11年度公共下水道第 1-8工区管きよ整理工事	東山町～北 河町	立会	12.10.16 ～	終了中。
50 12-366	下水-14 協-12-44	北島 道路	平成11年度公共下水道第 1-12工区管きよ整理工事	中石切町7 丁目	立会	12.6.30 ～ 12.6.30	延べ2日の立会調査を実施。 現状が水路であり、堆積文化 財への影響になかった。
51 12-479	協-12-10	植村 道路	平成11年度公共下水道第 1-10工区管きよ整理工事 (施設工事)	西石切町1 丁目～3丁 目	協成		工事実施。
52 12-471	協-12-28	和泉 道路	平成11年度公共下水道第 1-7工区管きよ整理工事	中石切町5 丁目～6丁 目	発組 12.8.8		誤差を実施したが、工事予定 地は既存の堆積で被覆を 受けており、遅延・遺物は確 認できなかった。
53 12-637		鬼見川 道路	平成12年度公共下水道管 きよ整理工事	森山町 立会			平成12年10月20日提出
54 12-665	下水-54 協-12-8	芝ヶ丘 道路	平成11年度公共下水道第 1-5工区管きよ整理工事	中石切町4 丁目～2丁 目	立会		平成12年11月2日提出
55 12-666	下水-53 協-12-7	岡田守 野	平成12年度公共下水道第 5工区管きよ整理工事	木原町・河内 町 立会			平成12年11月3日提出
56 12-667	下水-55 協-12-9	東高野 街道	平成12年度公共下水道第 7工区管きよ整理工事	森里町南 立会			平成12年11月2日提出
57 12-668	下水-55 協-12-8-7	みかん 山公園 前	平成12年度公共下水道第 12-1工区管きよ整理工事	内山町 立会			平成12年11月3日提出
58 12-669	下水-62 協加	福庭 道路	平成12年度公共下水道第 200工区管きよ整理工事	森里川南 立会			平成12年11月2日提出
59 12-683		市南岸 道路部	平成12年度公共下水道第 30工区管きよ整理工事(復 工)(復竣工)	山根井町 立会			平成12年11月20日提出
60 12-684		阿久守 站	平成12年度公共下水道第 40工区管きよ整理工事(復 工)(復竣工)	客居町 立会			平成12年11月20日提出
61 12-685		伊豆古 墳群	平成12年度公共下水道第 12-2 丁区管きよ整理工事	山手町 立会			平成12年11月20日提出

第2章 西代遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第33工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市横小路町5丁目
3	調 査 面 積	88m ²
4	調 査 期 間	平成12年3月1日～3月15日（延べ11日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事範囲は外環状線（国道170号線）と旧170号線の間に位置する。予定地の東約1/3は西代遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事は幅約0.9～1.0mで長さ88mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



土層断面柱状図

1. 調査の概要

A-2 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土。
- 第3層 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。
- 第4層 極灰色(10YR4/1)粘質土。
- 第5層 黒褐色(7.5YR3/1)礫混じり粘質土。
- 第6層 オリーブ黒色(5Y3/1)細砂。
- 第7層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)極細砂。

A-9 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰色(5Y4/1)細礫混じり中粒砂。
- 第3層 黄灰色(2.5Y4/1)細～中粒砂。
- 第4層 暗灰黄色(2.5Y4/2)細礫。
- 第5層 黑褐色(2.5Y3/1)粘土。

2.まとめ

立会調査を実施したが、遺構、遺物は検出できなかった。



調査地遠景



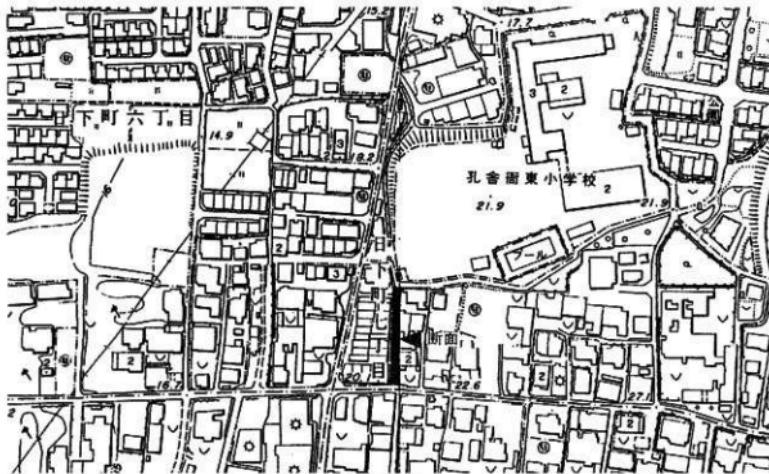
調査状況

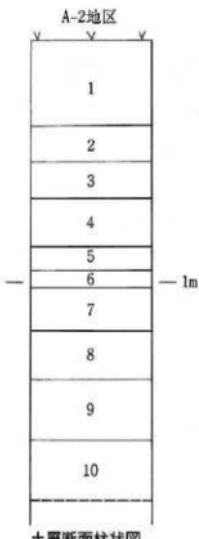


土層断面

第3章 日下遺跡の調査

名 称		内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第67工区管きく築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市日下町7丁目
3	調 査 面 積	52m ²
4	調 査 期 間	平成12年1月20日～1月28日（延べ4日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は孔舎衛東小学校の西になる。南側部分が日下遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ52mの間であり、開削工法である。





1. 調査の概要

A-2 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ黒色(5Y3/1)細砂
混じり粘質土。

第3層 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂。

第4層 灰黄褐色(10YR4/2)細～中
粒砂。

第5層 黒褐色(7.5YR3/2)細粒砂。

第6層 黒褐色(7.5YR3/2)中粒砂
混じり粘質土。

第7層 青灰色(10BG5/1)中粒砂混
じり粘質土。

第8層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)小
礫混じり中粒砂。

第9層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)小
礫混じり細粒砂。

第10層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質
土。

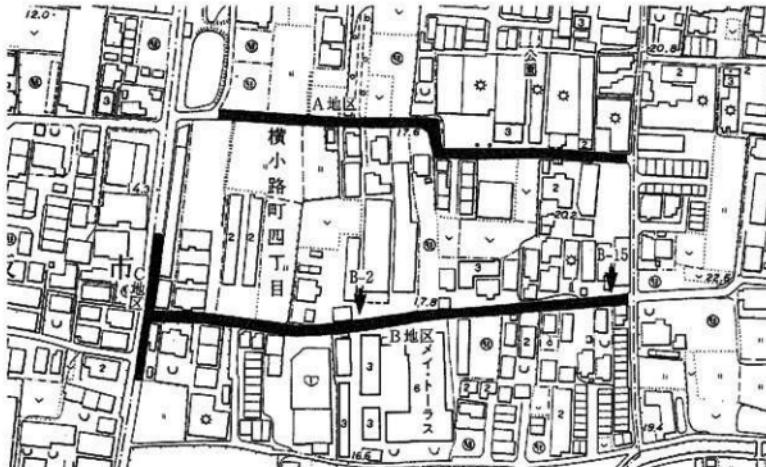
2.まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺
物は検出できなかった。



第4章 馬場川(第11次)・西代遺跡の調査

	名 称	内 容
1 事 業 名		平成10年度公共下水道第78工区管きょ築造工事
2 調 査 地 点		東大阪市横小路町4丁目
3 調 査 面 積		125m ² (B地区のみ)
4 調 査 期 間		平成11年8月23日～12年2月22日 (延べ40日)
5 報 告 担 当		才原金弘
6 調 査 の 経 過		A地区は平成11年度に調査を終了し報告済である。今年度はB地区が立会調査の対象である。B地区はT字形を呈する。西側の約1/3は夜間工事のため、立会調査はできなかった。工事範囲は幅約0.9mで長さ約139mの間であり、開削工法である。



1. 調査の概要

立会調査は西側より実施した。B-1～3地区では遺物包含層は確認できなかった。B-4地区より東では庄内式期～弥生時代後期の遺物包含層が広がっている。庄内式期のものは微量であり、弥生時代後期のものが多い。B-8地区より東では下層に縄文時代晚期の遺物包含層を確認した。また、B-16地区では人骨を探集した。

2. 層序

B-1地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(10YR3/1)中疊混じり粘質土。中疊は多量に含む。

第3層 黒褐色(2.5Y3/2)中疊混じり中粒砂。

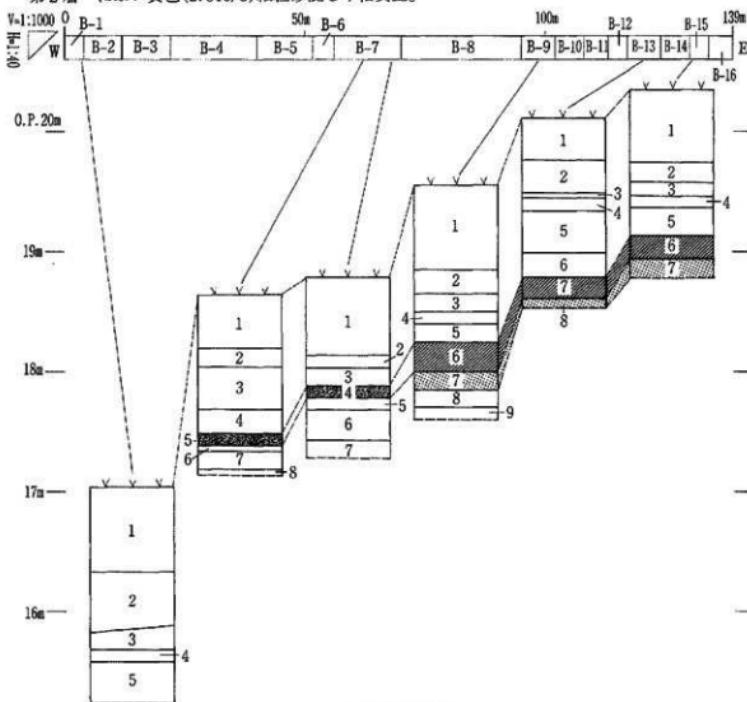
第4層 黄褐色(2.5Y5/3)細疊混じり繊粒砂。

第5層 黄褐色系のラミナ堆積。極細粒砂からなる。

B-7地区(西)の層序

第1層 盛土。

第2層 にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂混じり粘質土。



土層断面柱状図

- 第3層 黄褐色(2.5Y5/6)中～粗粒砂。
- 第4層 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。
- 第5層 暗灰黄色(2.5Y4/2)中～粗粒砂混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
- 第6層 青黒色(10BG2/1)粗粒砂混じり粘質土。粗粒砂は少量含む。
- 第7層 暗緑灰色(10GY3/1)細～中粒砂。
- 第8層 暗オリーブ灰色(5GY3/1)細～粗粒砂。

B-7地区(東)の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黄灰色(2.5Y4/1)中～粗粒砂混じり粘質土。
- 第3層 褐灰色(7.5YR4/1)粗粒砂混じり粘質土。マンガンを含む。
- 第4層 黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
- 第5層 黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂混じり粘質土。
- 第6層 黄褐色(2.5Y5/6)細～中粒砂。
- 第7層 暗緑灰色(5G4/1)粗粒砂。

B-9地区的層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ灰色(2.5Y4/3)砂質土。
- 第3層 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土。
- 第4層 褐色(10YR4/4)中疊混じり粗粒砂。
- 第5層 にぶい黄褐色(10YR5/4)細疊混じり粗粒砂。
- 第6層 黒色(2.5Y3/1)細疊混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
- 第7層 黒色(7.5Y2/1)細疊混じり粘質土。縄文時代晚期の遺物が出土。
- 第8層 暗青灰色(10BG3/1)細疊混じり粘質土。
- 第9層 灰色(7.5Y4/1)細～中疊混じり粗粒砂。

B-13地区的層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土。
- 第3層 黒褐色(7.5YR3/2)中粒砂。
- 第4層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。
- 第5層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂混じり砂疊。
- 第6層 黄褐色(10YR5/6)細～中疊。
- 第7層 黒色(2.5Y3/1)細疊混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。
- 第8層 黒色(7.5Y2/1)細疊混じり粘質土。縄文時代晚期の遺物が出土。

B-15地区的層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土。
- 第3層 暗灰黄色(2.5Y4/2)砂質土。
- 第4層 にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂混じり砂疊。
- 第5層 黄褐色(10YR5/6)細疊混じり粘質土。
- 第6層 黒色(2.5Y3/1)細疊混じり粘質土。庄内式期～弥生時代後期の遺物が出土。

第7層 黒色(7.5Y2/1)細礫混じり粘質土。縄文時代晚期の遺物が出土。

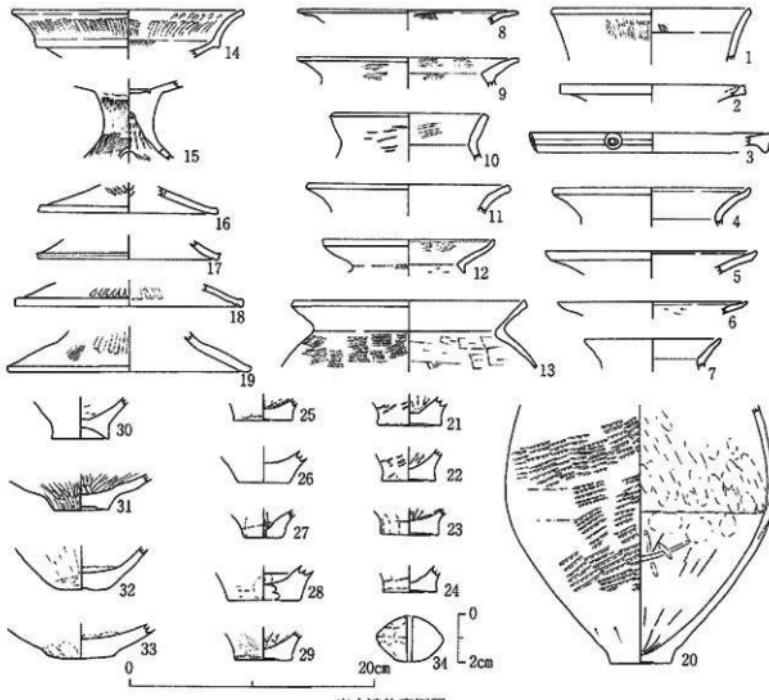
3. 出土遺物

縄文時代～庄内式期の土器と土製品が出土した。量的には弥生時代後期のものが多い。

縄文土器 形状の判るものはないが、底部(32・33)がある。丸底に近い平底で、外面をケズリ調整する。胎土は生駒西麓産である。晚期の時期と考えられる。他に図化しなかったが、口縁部や体部の破片がある。

弥生土器 壺・壺・高杯・底部の器種がある。いずれも後期の土器である。1～3は壺である。1は口頭部がやや外方に伸び、口縁端部が面をもつ。2・3は口縁端部であり、面をもつ。3は端面に2条の擬凹線を施し、その上に竹管文を押した円形浮文を貼り付ける。4～11は壺である。口縁端部が受口を呈するもの(4・5)、丸く終わるもの(6～8)、面をもつもの(9～11)がある。10は体部外面にタタキ調整が残る。14～19は高杯である。14が杯部、15が柱状部、16～19が裾部である。14は中位に明瞭な段がつき、口縁部が外反する。15は柱状部が短く、裾上部に円孔を穿つ。16～19の裾部は立ち上がりが緩い。端部は面をもつ。20～31は底部である。底部は平底と上げ底のものがある。20は壺の底部であり、外面をタタキ調整する。

庄内式土器 12・13は壺である。張りのある体部より口縁部がくの字状に外反する。口縁端部は上



出土遺物実測図

方へ拡張し、受口を呈するもの(12)と面をもつもの(13)がある。体部外面は細いタキ調整し、内面はヘラケズリ調整する。胎土は生駒西麓産である。

土製品 34は土製品である。算盤玉形を呈し、中央に小孔を穿つ。幅2.8cm、高さ1.9cmを測る。弥生時代後期～庄内式期の時期と考えられる。用途不明。

人骨 写真図版に人骨を掲載した。部位は大阪市立大学医学部の安部みき子氏にご教授を受けた。1は左大腿骨(歛筋粗面周辺)、2は大腿骨(左右不明・骨幹)、3・4は大腿骨(左右不明・骨頭)、5は尺骨(右近位部)、6は側頭骨(左錐体の一部)、7は側頭骨(右錐体)、9～21は頭頂骨である。縄文時代晩期の可能性が高い。

4.まとめ

今回の調査は、工事等の都合により、立会調査であったが、庄内式期～弥生時代後期と縄文時代晩期の遺物包含層を確認できた。特にB-16地区で採集した人骨は大腿骨や頭骨などがあり、1体分と考えられる。また、出土状況は確認できなかったが、断面精査から縄文時代晩期の所産と思われ、周辺に当時期の墓がある可能性が高い。



調査地遠景

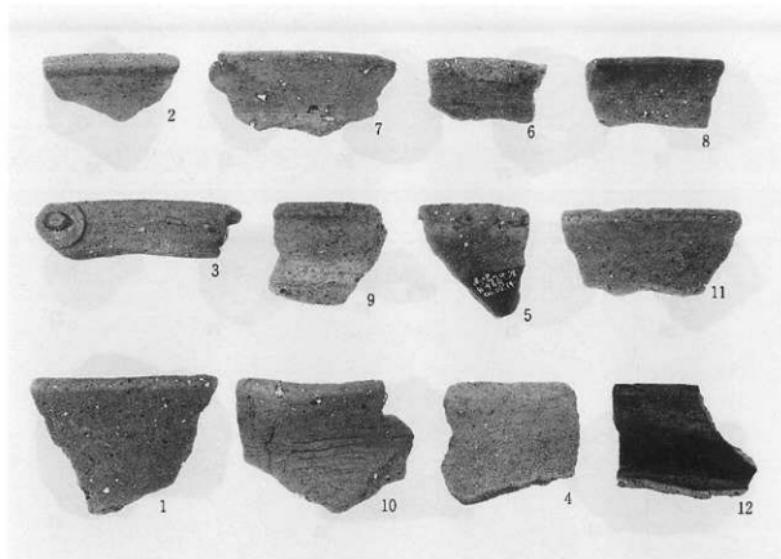


土層断面

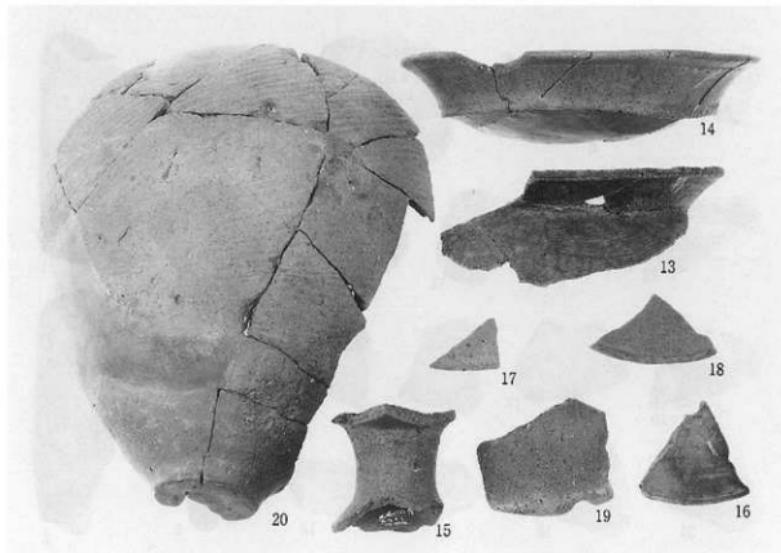


34

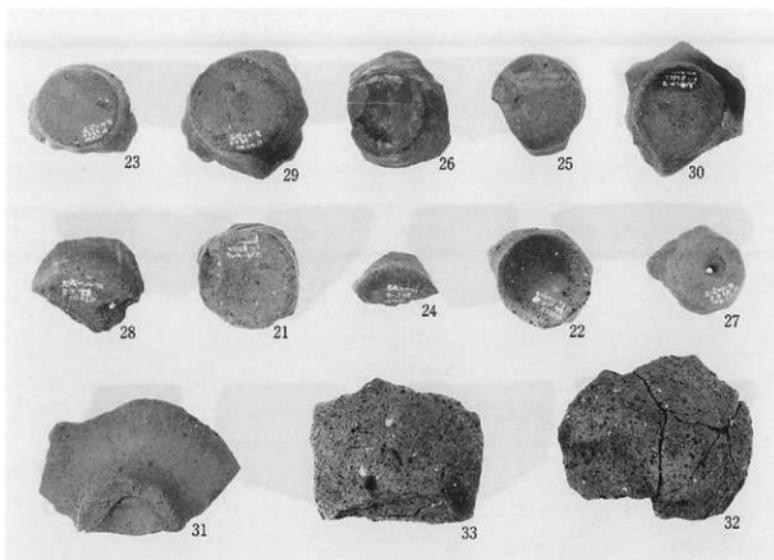
土製品



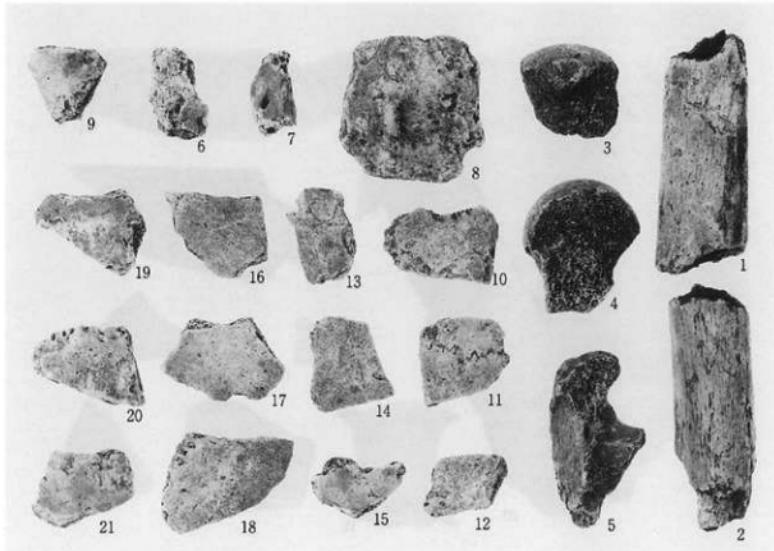
出土遺物（弥生土器・庄内式土器）



出土遺物（弥生土器・庄内式土器）



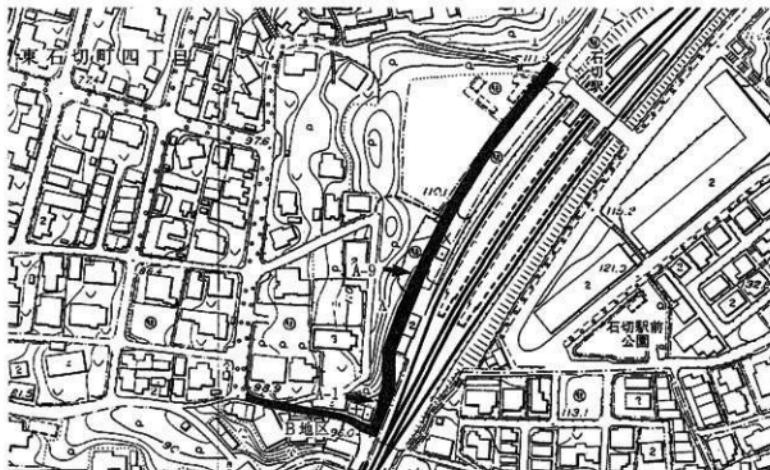
出土遺物（弥生土器）



人骨

第5章 千手寺山遺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成11年度公共下水道第1工区管きょ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市上石切町2丁目～東石切町4丁目
3 調 査 面 積	281m ²
4 調 査 期 間	平成11年11月22日～12年1月11日（延べ16日）
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線石切駅の西側道路である。当地点は千手寺山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ281mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



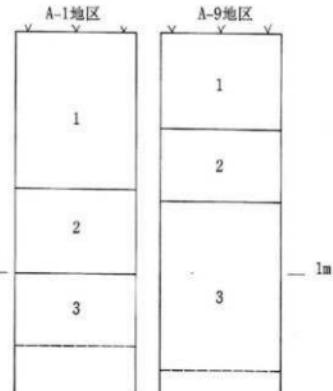
調査地遠景



掘削状況



土層断面



土層断面柱状図

1. 調査の概要

A-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 明黄褐色(2.5Y7/6)シルト。

第3層 黄橙色(10YR7/8)シルト。

A-9 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土。

第3層 灰黄色(2.5Y6/2)シルト。

2.まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第6章 鬼塚遺跡の第24次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第77工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市南莊町～新町
3	調 査 面 積	1190m ²
4	調 査 期 間	平成11年11月15日～12年4月20日（延べ67日）
5	報 告 担 当	吉田綾子
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪枚岡奈良線と旧170号線の交差点付近に位置する。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事区をA～D地区と仮称した。D地区は夜間工事のため立会調査を実施することはできなかった。工事範囲は幅約0.8～1.0mで長さ1337mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/3300)

1. 調査の概要

A - 3 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 青灰色(5B5/1)シルト。
- 第3層 青灰色(5B5/1)粘質土。
- 第4層 青灰色(5PB5/1)シルト。黄灰色(2.5Y5/4)のしみこみあり。
- 第5層 灰オリーブ色(5Y5/2)シルト。

B - 5 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黄色(5Y6/3)粘土。
- 第3層 黒褐色(10YR2/3)細粒砂混じり粘質土。

A - 5 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗紫灰色(5P3/1)小礫混じりシルト。炭化物を含む。
- 第3層 暗青灰色(5B3/1)粘質土。
- 第4層 暗青灰色(10BG4/1)粘質土。
- 第5層 暗緑灰色(10G4/1)細粒砂混じり粘土。
- 第6層 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。
- 第7層 暗紫灰色(5P4/1)シルト。古墳時代の遺物が出土。
- 第8層 暗紫灰色(5P3/1)粘質土。弥生時代の遺物が出土。

B - 8 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 青黒色(5PB2/1)粘質土。
- 第3層 緑灰色(5G5/1)粗粒砂混じり粘質土。粗粒砂を少量含む。
- 第4層 灰オリーブ色(5Y4/2)粘質土。
- 第5層 暗青灰色(5BG4/1)中～粗粒砂。
- 第6層 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト。
- 第7層 オリーブ黒色(5Y3/2)シルト。古墳時代の遺物が出土。
- 第8層 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。古墳時代の遺物が出土。上面でピット1を検出。

ピット1 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土。白色粗砂を含む。

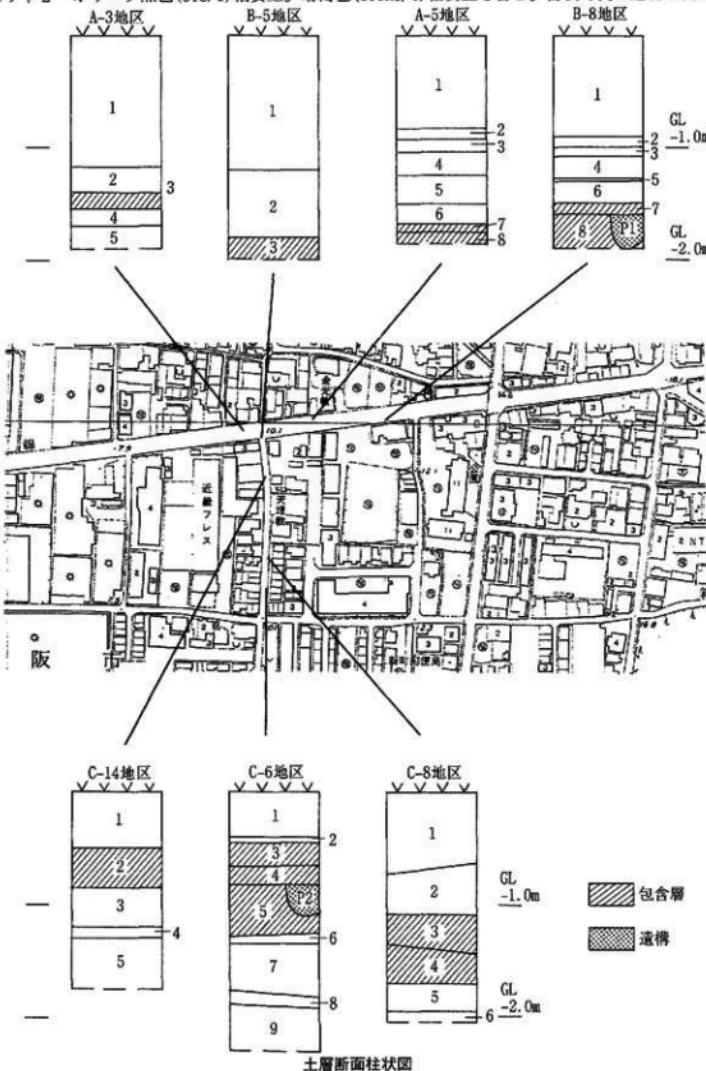
C - 14地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)中疊混じり粘質土。古墳時代の遺物が出土。
- 第3層 暗緑灰色(7.5GY4/1)細粒砂混じりシルト。
- 第4層 緑灰色(7.5GY5/1)粗粒砂混じりシルト。
- 第5層 暗緑灰色(7.5GY3/1)シルト。

C - 6 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土。
- 第3層 オリーブ黒色(5Y3/2)シルト。褐色(10YR4/6)粘質土を含む。古墳時代の遺物が出土。

第4層 灰色(7.5Y4/1)小砾混じりシルト。小砾を少量含む。古墳時代の遺物が出土。
 第5層 灰色(5Y4/1)小砾混じり粘質土。小砾を少量含む。上面でピット2を検出。古墳時代の遺物出土。
 ピット2 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質土。暗褐色(10YR3/4)粘質土を含む。古墳時代の遺物が出土。



第6層 オリーブ黒色(5Y2/2)小礫混じり粘質土。小礫を少量含む。

第7層 黒色(10YR1.5/1)細粒砂・小~中礫混じり粘質土。

第8層 暗青灰色(5BG3/1)細粒砂。オリーブ黒色(10Y3/1)粘質土をブロック状に含む。

第9層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

C-8 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 灰色(7.5Y4/1)シルト。

第3層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト質細粒砂。弥生~古墳時代の遺物が出土。

第4層 黒色(7.5Y2/1)礫混じり粘質土。直径0.3~2cm大の礫を含む。弥生~古墳時代の遺物が出土。

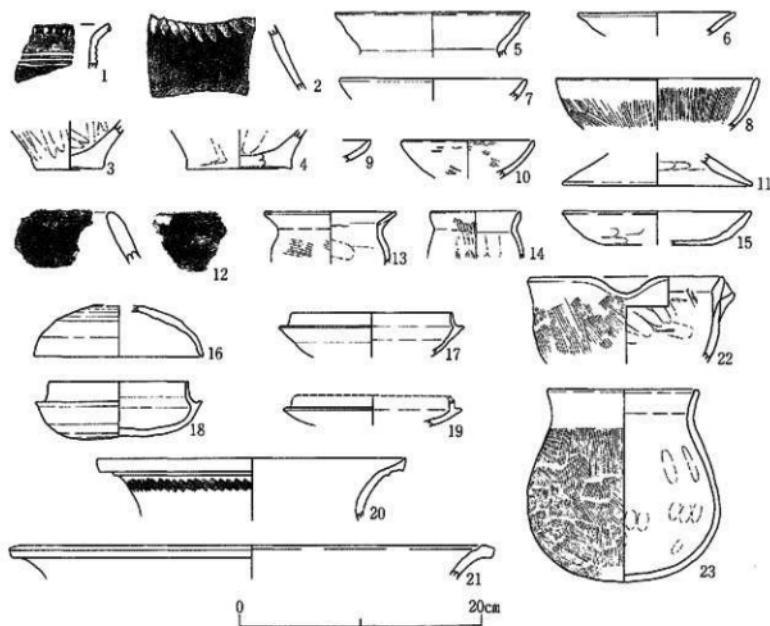
第5層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂。

第6層 黒色(10Y2/1)礫混じり粘質土。直径0.2~1.5cm大の礫を含む。

2. 出土遺物

今回の調査では、弥生土器、土師器、須恵器などがコンテナ1箱分出土した。

弥生土器は1~4である。1は鉢である。横方向のナデ調整で、外面部には櫛描直線文、口縁部に刻み目が施されている。2は壺で、内外面に縦方向のハケメ調整が見られ、外面にはハケによる列点文が施されている。3、4は平底の底部である。3の底部径は5.4cmで、外面に縦方向の粗いヘ



出土遺物実測図

ラミガキ調整が見られる。外面底部には指頭圧痕が、また外面には黒斑も見られる。4の底部径は8.5cmを測る。内面と外面底部に指頭圧痕が見られる。外面は縦方向の工具痕が見られ、おそらく縦方向のハケメ調整と思われる。いずれも生駒西麓産である。

5～14、22、23は土師器である。5は壺である。口径は16.0cmを測り、横方向のナデ調整と内面に横方向のヘラミガキ調整が見られる。6も壺で、口径は12.6cmを測る。口縁端部は丸く、横方向のナデ調整が見られる。7～10は高杯の杯部である。7は口径15.2cmで、内面は風化のため調整が不明瞭であるが、外面に横方向のナデ調整が見られる。8の口径は16.4cmを測り、内面に細かいヘラミガキ調整、外面にもヘラミガキ調整が施されている。9は横方向のナデ調整と外面に1条の沈線が見られる。10は口径10.6cmで、風化のため調整はやや不明瞭だが、内面は横方向のハケメ調整の後ヘラミガキ調整を、外面は不定方向のヘラケズリ調整の後ヘラミガキ調整を行ったものと思われる。11は高杯の脚部である。据部径は15.4cmで、内面には指頭圧痕が見られるものの風化のため調整は不明瞭である。12は竈形土器の口縁部である。横方向と縦方向のハケメ調整が見られる。内面には煤が付着している。13は小型壺で、口径は10.8cmである。口縁端部は平面を有し、内面に横方向のユビナデ調整、外面に横方向のハケメ調整が見られる。14は小型壺である。口径は7.2cmを測り、口縁部はやや肥厚である。内面にユビオサエ、外面に縦方向のヘラミガキ調整が見られる。23は内面に稜を有する壺である。口径は12.3cmを測るが、ひずんでいる。内面はナデ調整、外面は縦方向のハケメ調整である。内面に指頭圧痕、外面に黒斑が見られる。22は片口の鉢で、口径は15.6cmである。内面にユビナデ調整と一部工具痕が、外面に2種類のハケを用いた縦方向のハケメ調整が見られる。おそらく細かいハケによる調整の後に別のハケでもう一度ハケメ調整を行ったものと思われる。

16～21は須恵器である。16は杯蓋で、口径は13.9cmである。明瞭な稜を有さず、内面には回転ナデ調整と一定方向のナデ調整が、外面には回転ナデ調整と回転ヘラケズリ調整が見られる。回転方向は時計回りである。17は口径13.2cmの杯身で、たちあがりはやや内傾し、短い。回転ナデ調整で、外面には自然釉がゴマ状に付着する。18は杯身で、口径は11.5cmを測る。たちあがりはやや内傾し端部を丸く仕上げている。内面に回転ナデ調整と一定方向のナデ調整が、外面に回転ナデ調整と回転ヘラケズリ調整が見られ、回転方向は時計回りである。19は有蓋高杯である。口径は12.5cmで、たちあがりはやや内傾して真上に立ち上がり、短い。内外面ともに回転ナデ調整である。20は壺である。口径は25.4cmで、回転ナデ調整である。外面には1条の突帯と柳葉波状文が施され、自然釉が付着している。21は口径38.0cmを測る壺で、口縁端部が肥厚し、断面は方形を呈する。回転ナデ調整である。

15は土師器皿で、口径15.4cmである。内面に不定方向のユビナデ調整、外面に指頭圧痕が見られる。

3.まとめ

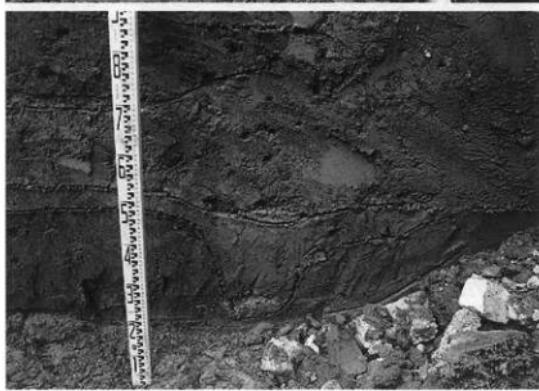
当遺跡は縄文時代晚期から平安時代に至る複合遺跡である。当調査地より西方で行われた第8次調査では、古墳時代の掘立柱建物や土坑、溝が検出され、集落の中心の一つであることが判明している。弥生時代では方形周溝墓が3基検出され、墓域と考えられている。今回の調査で古墳時代の包含層の確認とピットの検出ができたことから、当調査地にも古墳時代の集落がひろがっていた可能性が考えられ、集落の東限を考える上で重要になってくる。またわずかではあるが弥生土器も出土したことは、弥生時代の墓域を考える上でも注目したい。第8次調査では出土した縄文土器が当調査地では出土していないことも今後の参考にしておきたい。



A・B地区遠景



C-8地区土層断面



ピット1検出状況



B-8 地区土層断面



18



23

出土遺物（須恵器・土師器）



13



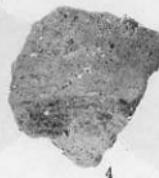
14



1



2

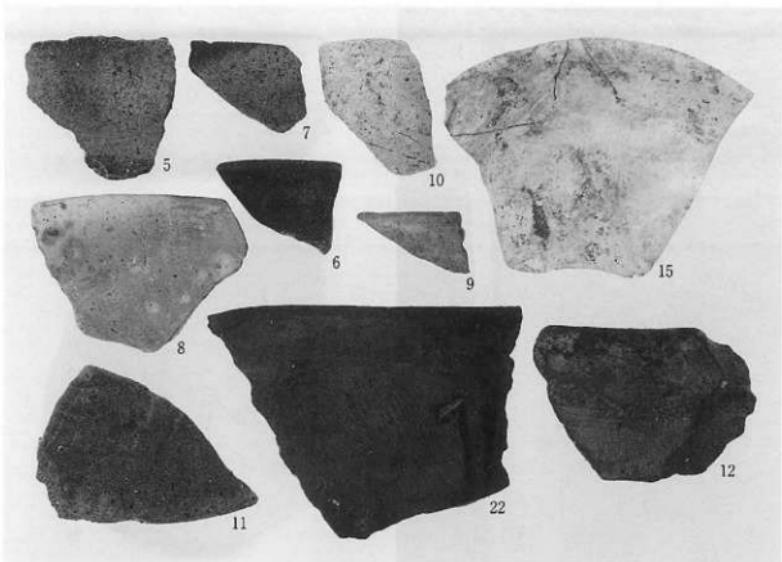


4

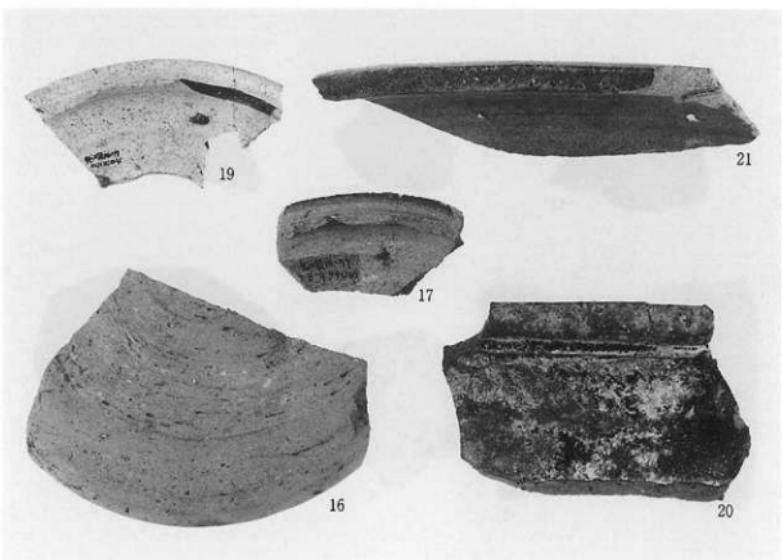


3

出土遺物（弥生土器・土師器）



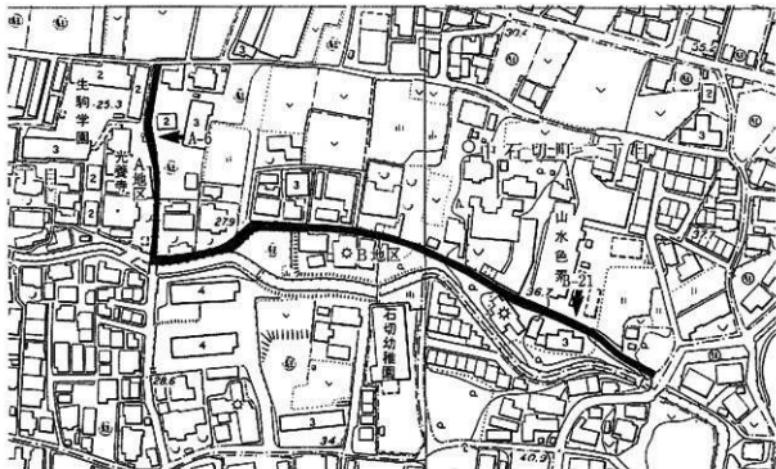
出土遺物（土師器）



出土遺物（須惠器）

第7章 洗子谷遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第75工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市中石切町2丁目
3	調 査 面 積	328m ²
4	調 査 期 間	平成12年3月1日～5月15日（延べ36日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は音川の北側道路である。当地点は洗子谷遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ387mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



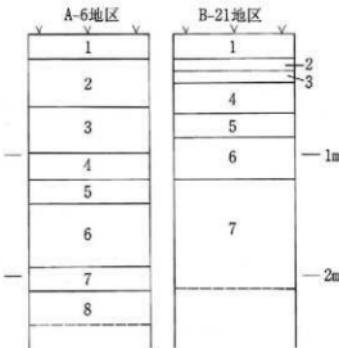
調査地遠景



土層断面



土層断面



土層断面柱状図

1. 調査の概要

A-6地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂。
- 第3層 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土。
- 第4層 黄褐色(2.5Y4/1)粘質シルト。
- 第5層 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。
- 第6層 喰褐色(7.5YR3/3)粘質土。
- 第7層 にぶい黄褐色(10YR2/3)砂質土。
- 第8層 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土。

B-21地区的層序

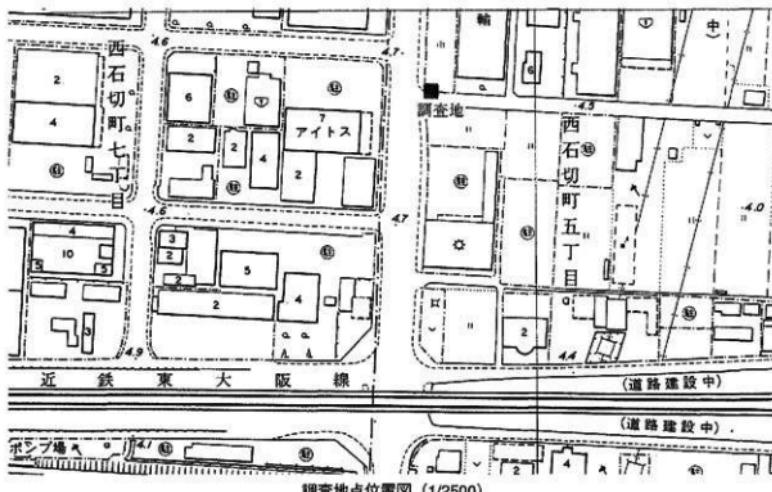
- 第1層 盛土。
- 第2層 暗灰色(7.5YR5/1)粘質土。
- 第3層 灰黄色(2.5Y7/2)細粒砂。
- 第4層 灰色(5Y5/1)粘質土。
- 第5層 にぶい黄橙色(10YR7/2)細～粗粒砂。
- 第6層 黄灰色(2.5Y5/1)粘質土。
- 第7層 灰黄褐色(10YR6/2)粗粒砂～細礫。

2.まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第8章 鬼虎川遺跡の第51次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第69工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市西石切町4丁目～5丁目
3	調 査 面 積	39m ²
4	調 査 期 間	平成12年1月6日～1月31日（延べ15日）
5	報 告 担 当	東朋子
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は外環状線（国道170号線）と国道308号線の交差点より北に位置する。工事は推進工法でおこなわれることになり、発進立坑が鬼虎川遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。調査範囲は6.4×6.0mである。



1. 調査概要

本調査は、国道170号線(外環状線)と国道308号線の立体交差に伴う工事に先行して下水管を移動、埋設するため発掘調査を実施することとなった。工事は推進工法による下水管敷設のため、協議の結果、4つの人孔部分のうちの一つを発掘調査、残りを立会調査とすることになった。

2. 略序

調査は盛土部分を機械で掘削した後、最終掘削深度まで人力による掘削を行った。調査区の南半分は地表下2.2mまで既設の下水管によって搅乱されていた。第1層から第33層は掘り上げ田に伴う溝の堆積土である。T.P.-0.6mまで面による調査を行い、T.P.-1.5mまで確認掘りを行った。

調査地は、同時期に調査が行われた鬼虎川第49次調査のほぼ東向かいに位置しており、多少のT.P.値の違いはあるが基本的な層序は同じであることを確認した。

3. 出土遺物

出土遺物のすべてが掘り上げ田の中から出土した。遺物には瓦、陶磁器、瓦質土器がある。

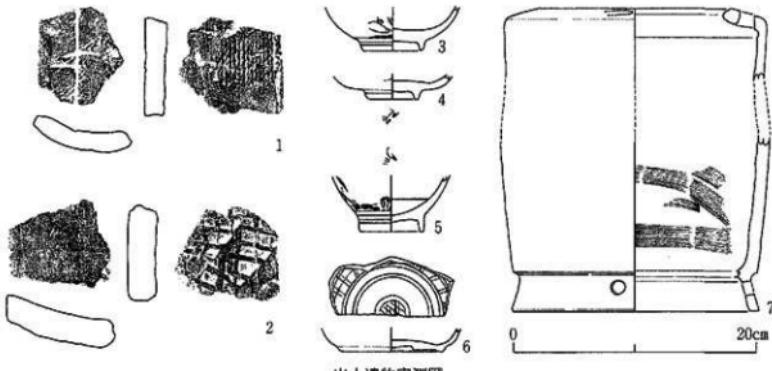
1・2は平瓦である。共に凹面に布面が残る。1は凸面に繩目、2は格子のタタキが残る。
3～5は染付碗、6は染付皿である。3の外面は淡い紺色で文様が施され、内面の見込みには蛇の目釉ハギが見られる。高台端部に離れ砂が付着する。4は高台見込みに銘らしきものが黒に近い紺色で入れられている。高台端部には離れ砂が付着する。5は広東碗である。内面見込みには淡い藍色で文様が施され、外面は半輪と草花文様が淡い藍色と淡い紺色の二色によって描かれている。6の内面は淡い紺色で格子状の文様が施され、内面見込みと高台とに蛇の目釉ハギが見られる。

7は瓦質の火舎である。全体が黄褐色で外面をナデ、内面をナデとハケで仕上げている。

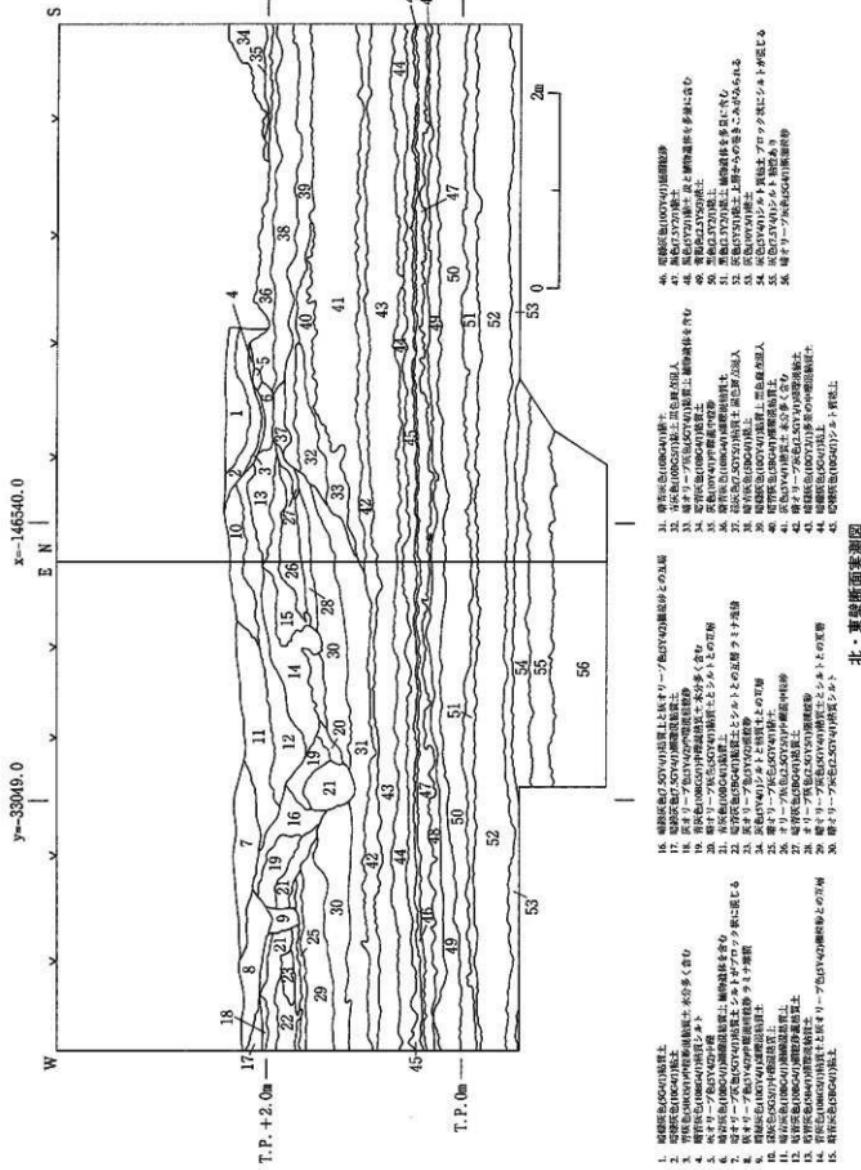
4.まとめ

今回の調査では近代のものと思われる掘り上げ田を確認したが、それ以外の時代の遺構や遺物包含層は確認出来なかった。調査面積が狭かったこともあるが、調査地の南西で落ち込みを確認したのみである。弥生時代の生活域は当調査地までは至っていないと考えられる。

立体交差に伴う発掘調査は引き続続行中である。本調査地を含む調査が平成12年度現在実施されており、その調査によって鬼虎川遺跡の北限がより明らかになるであろう。詳細な報告が近々なされるので検討は後の調査報告に委ねたい。



出土遺物実測図





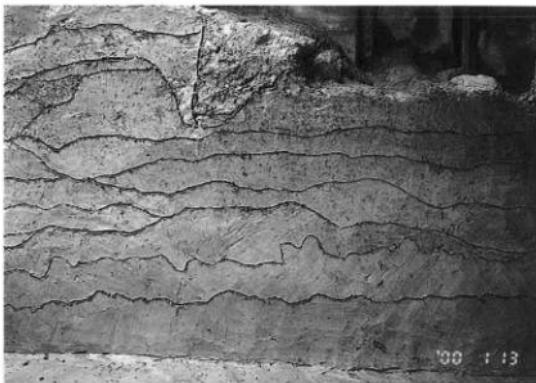
調査地遠景



調査地近景（南より）



調査風景



北壁土層断面



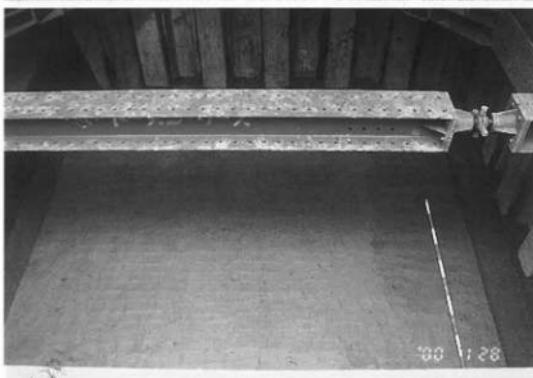
掘り上げ田の構内堆積状況



落ち込み（南西部）



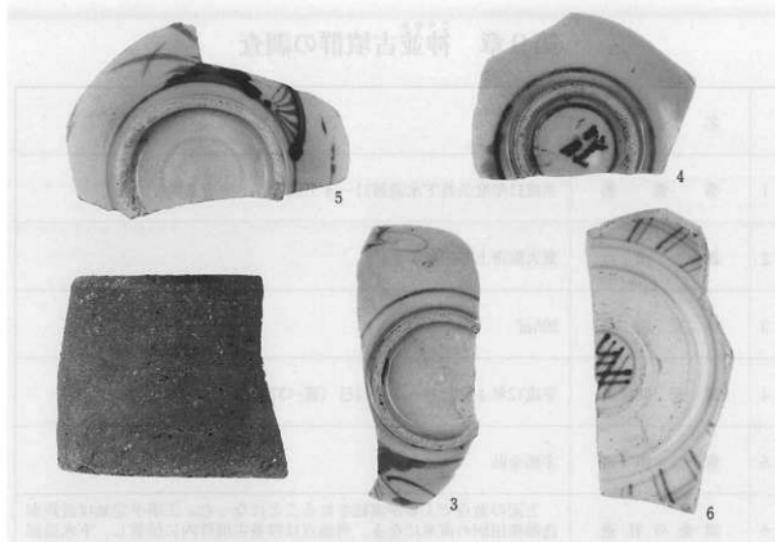
北壁土層断面



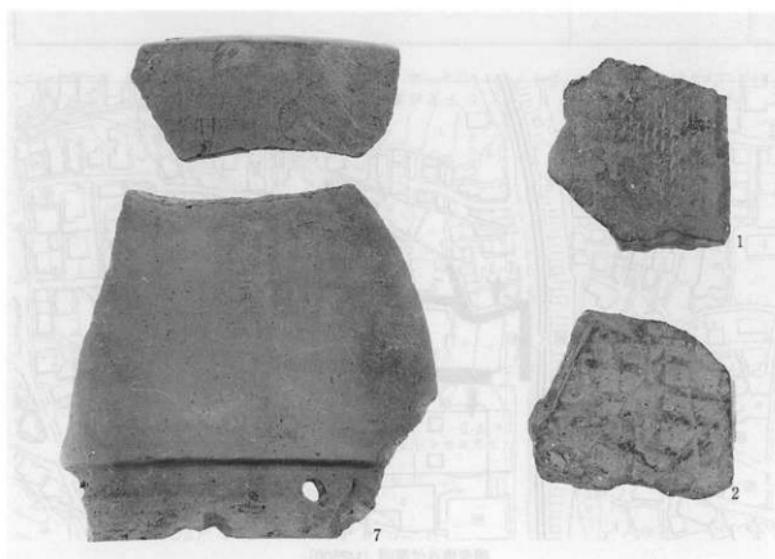
完掘状況



確認掘り北壁土層断面



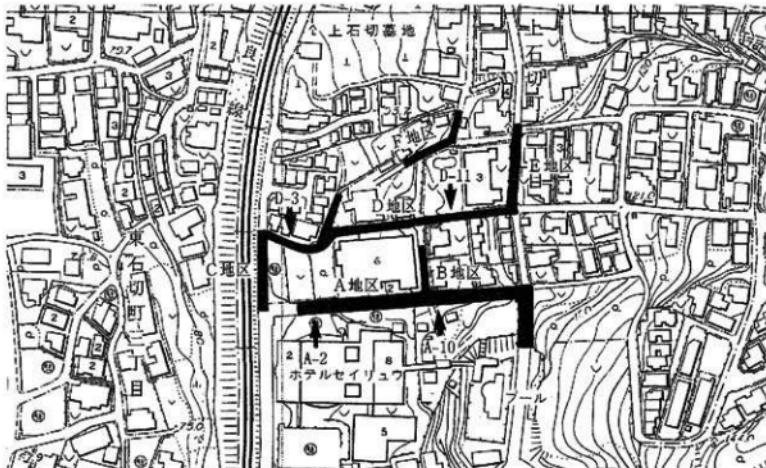
出土遺物



出土遺物

第9章 神並古墳群の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成11年度公共下水道第11-4工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市上石切町1丁目
3 調 査 面 積	396m ²
4 調 査 期 間	平成12年4月12日～7月14日（延べ37日）
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線額田駅の南東になる。当地点は神並古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ466mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)

1. 調査の概要

A-2地区の層序

第1層 盛土。

第2層 棕褐色(10YR4/4)小～中疊混じり粘質土。

第3層 明褐色(7.5YR5/8)粘質土。

A-10地区的層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘土。

第3層 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘土。

第4層 黄褐色(2.5Y5/4)粘質土。

第5層 黄褐色(10YR4/6)粗粒砂混じりシルト。

第6層 灰白色(10VR8/2)小疊混じり粗粒砂。

D-3地区的層序

第1層 盛土。

第2層 黄褐色(10YR5/8)小疊混じり粘質土。

第3層 明黄褐色(10YR6/8)小疊混じり粘質土。

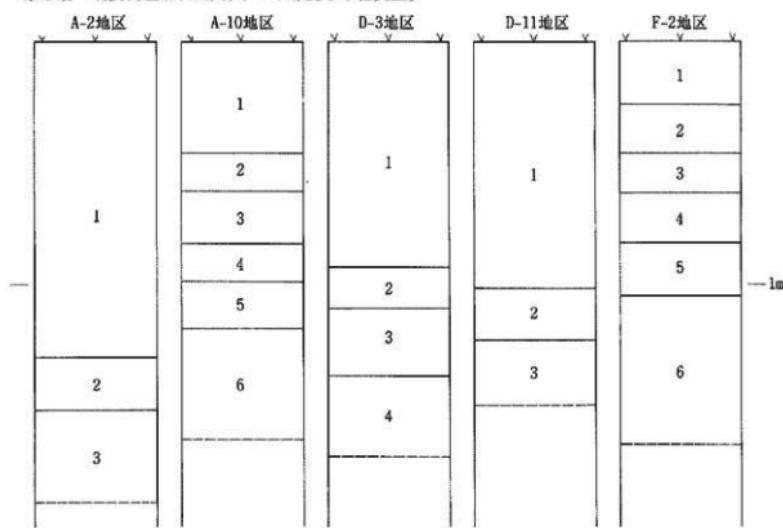
第4層 明黄褐色(10YR7/6)微粒砂混じり粘質土。

D-11地区的層序

第1層 盛土。

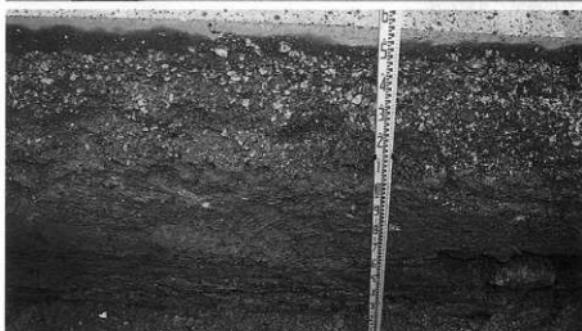
第2層 黄褐色(10YR5/8)粘質土。

第3層 明黄褐色(10YR6/8)小～中疊混じり粘質土。





調査地遠景



土層断面



土層断面

F - 2 地区の層序

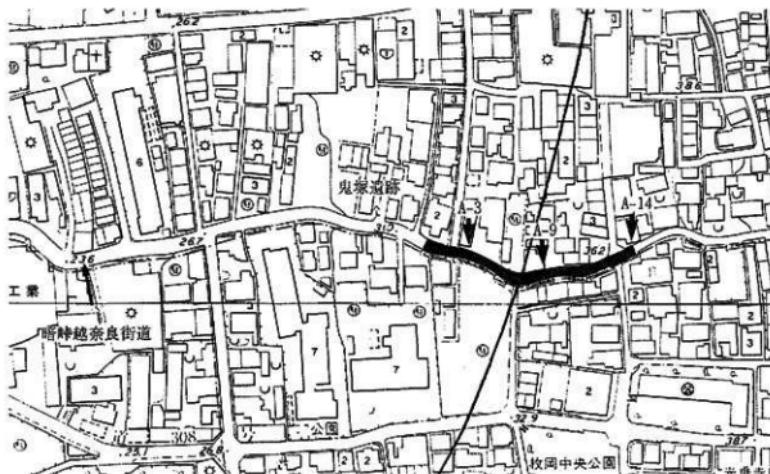
- 第1層 盛土。
- 第2層 黄褐色(10YR5/6)小礫混じり粘土。
- 第3層 暗黄褐色(2.5Y5/3)小礫混じり粘土。
- 第4層 暗灰黃色(2.5Y5/2)粘土。
- 第5層 黄褐色(10YR5/6)粘土。
- 第6層 明黄褐色(10YR6/6)巨石混じり粘土。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかつた。

第10章 暗峠越奈良街道・鬼塚遺跡(第25次)調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成10年度公共下水道第68工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市立花町地内
3	調 査 面 積	588m ²
4	調 査 期 間	平成11年11月25日～12年1月6日（延べ14日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は暗峠越奈良街道にあたり、また、西側の一部が鬼塚遺跡内に位置する。下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.9～3.9mで長さ314mの間であり、開削工法である。



1. 調査の概要

工事予定地は暗峠越奈良街道上で鬼塚遺跡の東端に位置するので立会調査を実施した。立会調査は西側よりおこなった。

2. 層序

A-3 地区の層序

- 第1層 盛土。
第2層 暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒砂混じり粘質シルト。
第3層 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)大疊混じり中～粗粒砂。
第4層 暗青灰色(5B3/1)粗粒砂混じり粘土。古墳～奈良・平安時代の遺物が出土。
第5層 暗青灰色(5PB3/1)粗粒砂混じり粘質土。
第6層 紫黒色(5P1.7/1)粗粒砂混じり粘質土。弥生時代の遺物が出土。

A-9 地区の層序

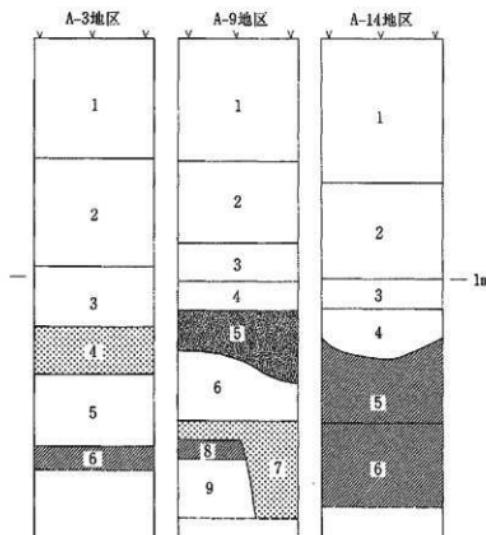
- 第1層 盛土。
第2層 灰オリーブ色(7.5Y6/2)細粒砂混じり粘質土。
第3層 灰色(5Y4/1)中疊混じり細粒砂。
第4層 灰オリーブ色(7.5Y4/2)細～粗粒砂。
第5層 オリーブ黒色(5Y3/2)小疊混じり粘質土。中世期の遺物が出土。
第6層 暗オリーブ色(5Y4/3)粗粒砂混じり粘質土。
第7層 暗緑灰色(7.5GY4/1)細～中粒砂混じり粘質土。古墳～奈良・平安時代の遺物が出土。
第8層 青黒色(5PB2/1)中～粗

粒砂混じり粘質土。弥生
時代の遺物が出土。

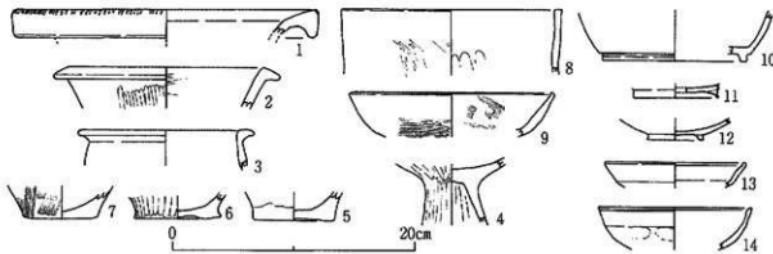
- 第9層 暗オリーブ色(5GY4/1)
小疊混じり粘質土。

A-14 地区の層序

- 第1層 盛土。
第2層 緑灰色(10GY5/1)シル
ト。
第3層 暗青灰色(10BG4/1)粘
質シルト。
第4層 暗青灰色(5PB4/1)小疊
混じり粘質土。
第5層 暗青灰色(5PB4/1)粘質
土。弥生時代の遺物が出
土。
第6層 暗青灰色(5PB3/1)粘質
土。弥生時代の遺物が出
土。



土層断面柱状図



出土遺物実測図

3. 出土遺物

弥生時代～中世期の遺物が出土した。

弥生土器 蓋・甕・高杯・底部の器種がある。1・2・15・16は後期の蓋である。1は口縁端部を下方へ拡張し、幅広の面をもつ。上端にキザミ目を施す。2は頸部が外上方に広がり、口縁端部を下方へ拡張する。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメの後ナデ調整する。15・16は口縁端部に擬凹線を施し、その上に竹管文を押した円形浮文を貼り付ける。3は前期の甕である。口縁部が逆し字形を呈する。調整法は不明。胎土は生駒西麓産である。4・17は後期の高杯である。4は柱状部であり、外面をヘラミガキ調整、内面をナデ調整する。17は杯部であり、外面に赤色塗料を施す。5～7は中期の底部であり、平底を呈する。

土師器 古墳時代(8・9)と奈良～平安時代のもの(13・14・18)がある。8は瓶である。体部が上方へ伸び、口縁端部が面をもつ。9は高杯である。杯部が皿状を呈し、口縁端部がやや面をもつ。外面はヘラミガキ調整、内面はハケメの後ナデ調整する。13は皿である。口縁部がやや外反し、口縁端部を内側へ巻き込む。14は口縁端部が内傾する杯である。18は皿か杯の高台である。

須恵器 10・19は高台のある奈良時代の杯である。

黒色土器 11は平安時代の黒色土器である。器種は碗であり、断面三角形の高台を貼り付ける。内面が黒色を呈する。

瓦器 12は中世期の瓦器椀である。断面が台形を呈する高台を貼り付ける。内外面は風化が著しく調整法は不明。

4.まとめ

今回の調査地は暗峠越奈良街道であるが、立会調査を実施した。調査区間の全域で古墳～奈良・平安時代と弥生時代の遺物包含層を確認した。出土遺物や周辺状況から鬼塚遺跡の続縁と考えられ、当遺跡の範囲をさらに東へ拡張する必要がある。



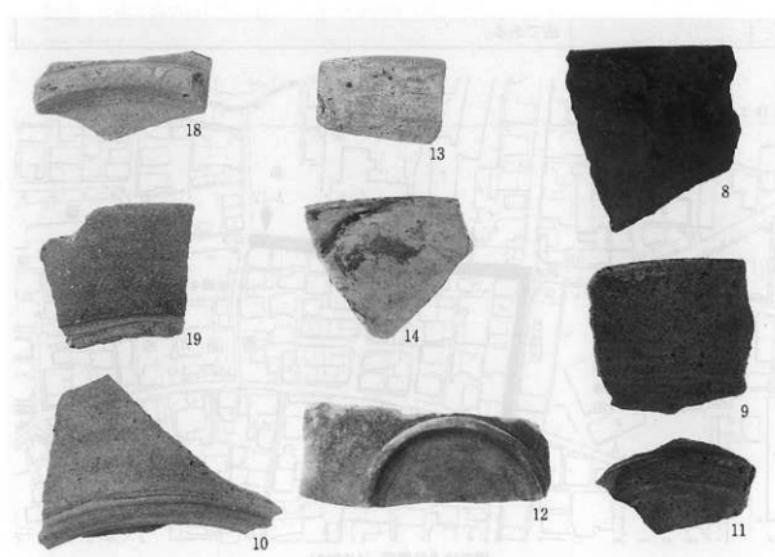
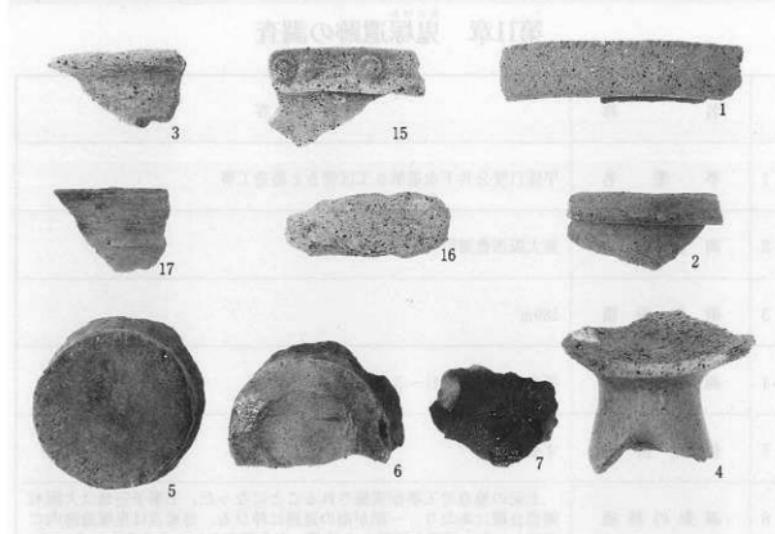
調査地遠景



掘削状況

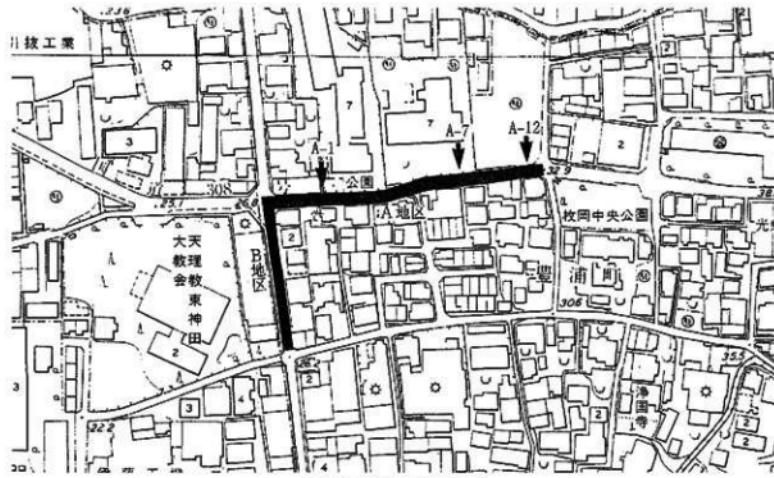


土層断面



第11章 鬼塚遺跡の調査

	名 称	内 容
1 事 業 名	平成11度公共下水道第9工区管きよ築造工事	
2 調 査 地 点	東大阪市豊浦町	
3 調 査 面 積	189m ²	
4 調 査 期 間	平成12年1月26日～3月8日（延べ26日）	
5 報 告 担 当	才原金弘	
6 調 査 の 経 過		上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪枚岡奈良線にあたり、一部が南の道路に伸びる。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。南の道路部分は工事の都合により、立会調査を実施することができなかった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ222mの間であり、開削工法である。



1. 調査の概要

西側より順次、立会調査を実施した。工事区域の道路は交通量が多く、短時間しか観察することはできなかった。

2. 層序

A-1地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰オリーブ色(5Y4/2)
粘質土。
- 第3層 オリーブ黄色(5Y6/3)
粘質シルト。
- 第4層 黄灰色(2.5Y4/1)砂混
じり粘質土。中世期の遺
物が出土。
- 第5層 オリーブ色(10Y5/2)砂
混じり粘質土。
- 第6層 オリーブ色(5Y5/4)砂
混じり粘質土。

A-7地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 灰色(10Y4/1)中～大礫混じり粘質土。
- 第3層 オリーブ黒色(10Y3/1)中礫混じり粘質土。炭化物を
含む。
- 第4層 黒褐色(2.5Y3/1)中礫混じり粘質土。炭化物を含む。
弥生時代の遺物が出土。

A-12地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(10YR3/2)小礫混じり砂質土。
- 第3層 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土。炭化物を含む。
- 第4層 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土質シルト。
- 第5層 暗灰黄色(2.5Y5/2)細粒砂混じり粘質土。
- 第6層 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト。弥生時代の遺物が出土。

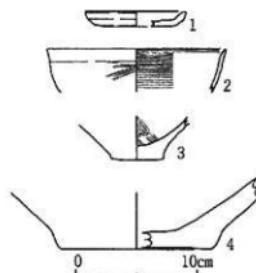
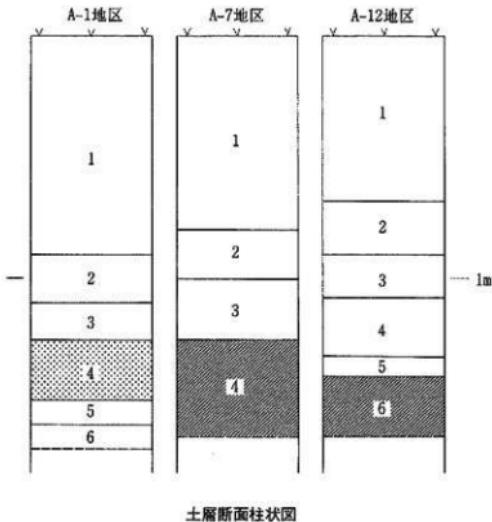
3. 出土遺物

弥生時代～中世期の遺物が出土した。

弥生土器 3・4は底部である。平底を呈する。

土師器 1は皿である。平底の底部より口縁部が内傾する。口縁端部は丸く終わる。底部と口縁部の境に稜がつく。

瓦器 2は大和型の椀である。体部はやや深く、口縁部が緩く外反する。口縁端部の内面に1条の沈線を施す。内面は密、外面はやや密なヘラミガキ調整する。

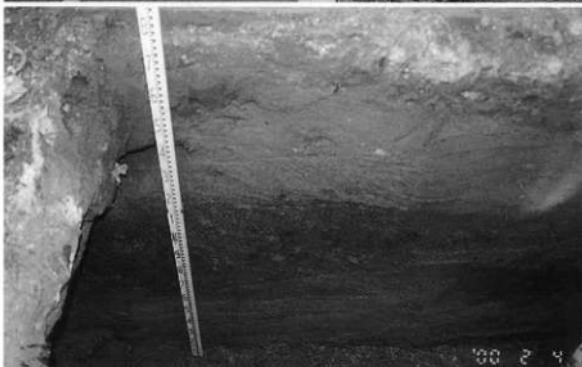


4.まとめ

工事の都合で短時間しか立会調査をできなかったが、弥生時代の遺物包含層は良好な状態で残っていることが確認できた。



調査地遠景



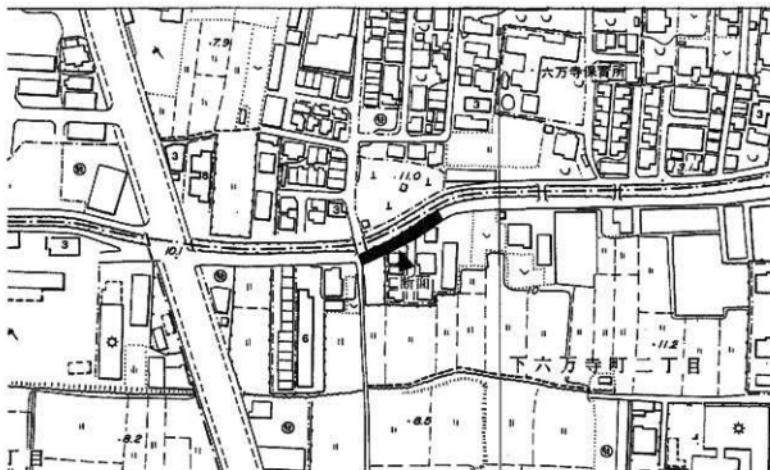
土層断面

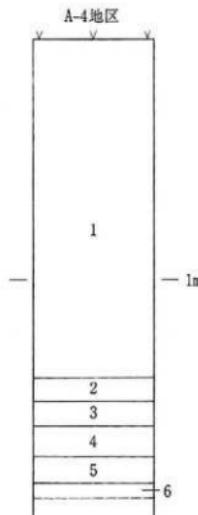
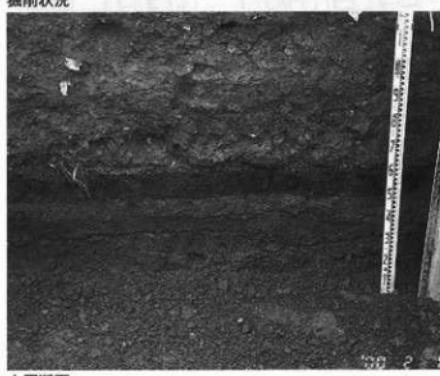


出土遺物

第12章 下六万寺遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第11工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町2丁目地内
3	調 査 面 積	83m ²
4	調 査 期 間	平成12年1月24日～3月1日（延べ11日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は長門川の南堤防上である。当地点は下六万寺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.8mで長さ46mの間であり、開削工法である。





土層断面柱状図

1. 調査の概要

A-4 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗紫灰色(5P3/1)中粒砂混じり
粘質土。

第3層 青灰色(10BG5/1)細粒砂混じり
シルト。

第4層 暗青灰色(5PB4/1)細粒砂。

第5層 青灰色(5BG5/1)粘質シルト。

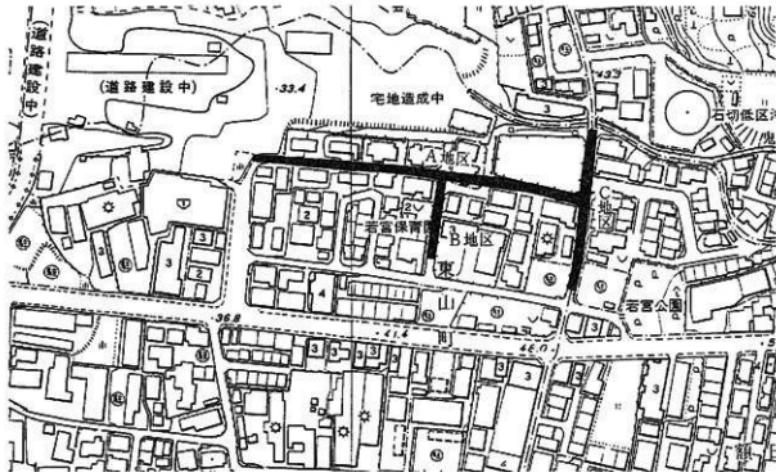
第6層 緑灰色(5G5/1)小礫混じり粘
質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は
検出できなかった。

第13章 神並遺跡(第28次)・若宮古墳群の調査

名 称		内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第20工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市東山町地内
3	調 査 面 積	229m ²
4	調 査 期 間	平成12年3月13日～5月15日（延べ34日）
5	報 告 担 当	木村健明
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は旧市営若宮住宅内である。当地点は神並遺跡・若宮古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ264mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



土層断面実測図

1. 調査の概要

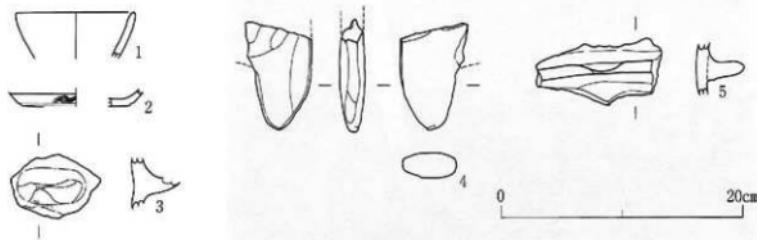
調査は便宜上A～C地区に分けて行った。A・B地区が神並遺跡、C地区が若宮古墳群の範囲内に位置する。各地区で調査開始地点を1とする通し番号をふっているが、A地区では工事の進行状況上の理由により、西端に16～20区が位置している。遺物はほとんどが深さ50cm付近から出土している。A・Bラインでは深さ50cm付近に包含層が存在することが確認できた。しかし、A地区的東半分とC地区では包含層を確認することができなかった。また、A地区西半部の両側で下水工事終了後、神並遺跡第26次調査が行われ、奈良～平安時代の遺構と遺物が出土している。

2. 出土遺物

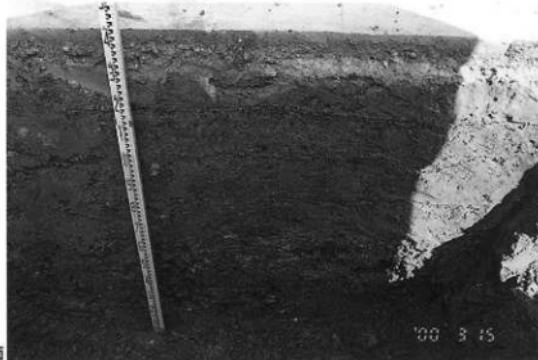
須恵器・土師器が出土した。いずれも細片であり、図化できたのは5点に留まる。このうち、1～3が神並遺跡、4・5が若宮古墳群での出土遺物である。1・2は須恵器である。1が提瓶、2が高杯である。2には波状文と凹線文が施されている。3・4・5は土師器である。3は把手、4は移動式竈の下端にある突起部分で、5は羽釜の鶴である。いずれも古墳時代後半に属すると思われる。

3. まとめ

今回の調査ではA・B地区で包含層を確認できた。隣接地の調査成果として奈良～平安時代の遺構・遺物が出土していることから、この時期に該当する層であると考えられる。ただし、今回図示することのできた遺物はいずれも古墳時代に属するものである。周辺にはかつて古墳が存在していたことから、これに関連する遺物であることも考えられる。



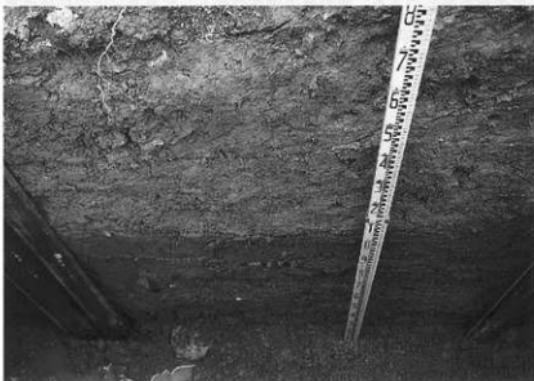
出土遺物実測図



A-3地区土層断面



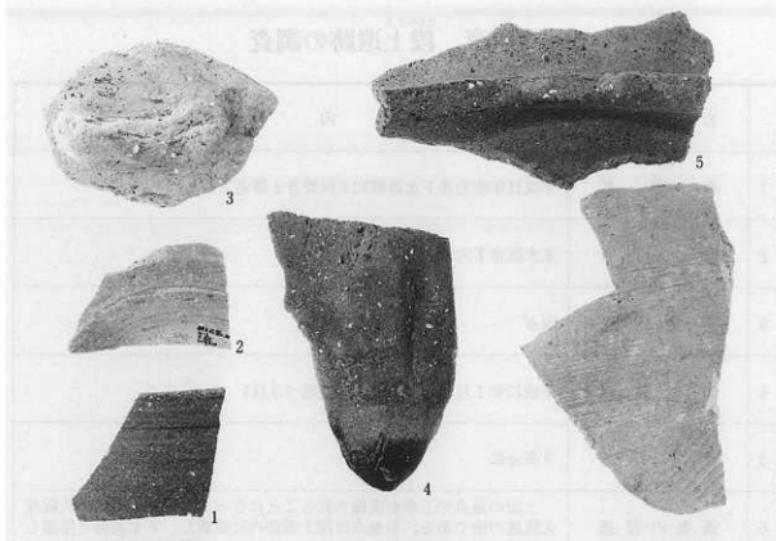
A-11地区土層断面



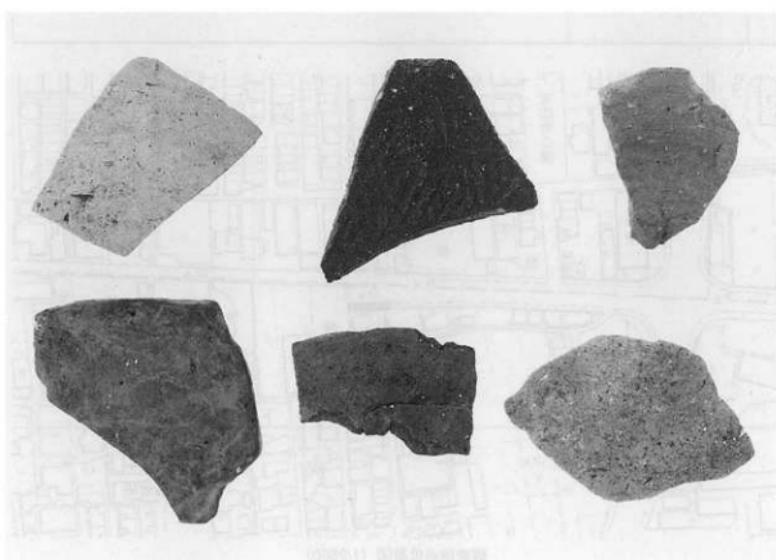
A-16地区土層断面



掘削風景



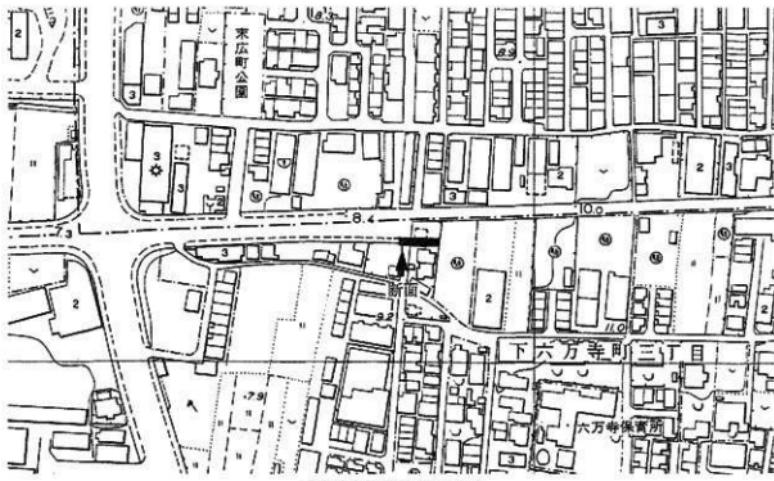
出土遺物（土師器・須恵器）

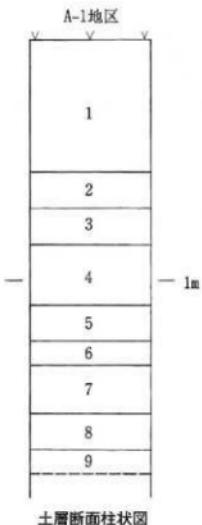


出土遺物（土師器・須恵器）

第14章 段上遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第32工区管きょ染造工事
2	調 査 地 点	東大阪市下六万寺町3丁目
3	調 査 面 積	24m ²
4	調 査 期 間	平成12年1月25日～1月28日（延べ3日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪東大阪線の南である。当地点は段上遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約1.2～1.3mで長さ19mの間であり、開削工法である。





土層断面柱状図

1. 調査の概要

A-1地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗青灰色(5B3/1)中粒砂混じりシルト。

第3層 暗青灰色(5B4/1)粗粒砂混じりシルト。

第4層 青灰色(5B5/1)粗粒砂と粘質シルトの互層。

第5層 暗青灰色(5B3/1)粗粒砂混じり粘質シルト。

第6層 青灰色(5B5/1)粗粒砂混じり粘質シルト。

第7層 青黒色(5B2/1)中粒砂混じり粘土。遺物出土。

第8層 青黒色(5PB2/1)中粒砂混じり粘土。遺物出土。

第9層 紫黒色(5P2/1)粗粒砂混じり粘土。遺物出土。

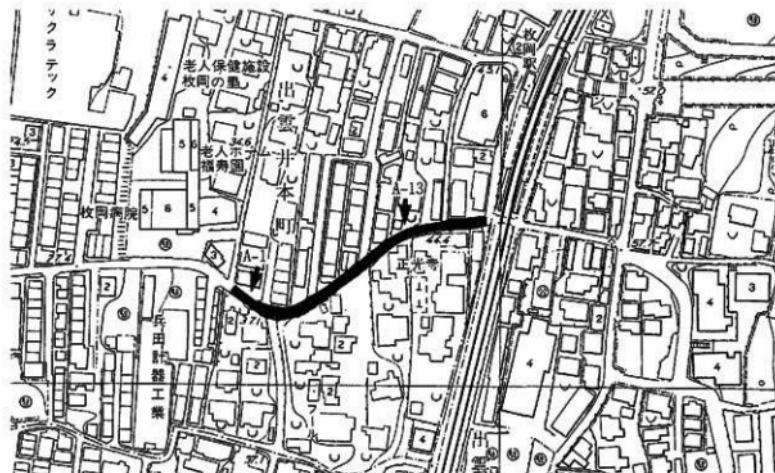
2.まとめ

第7～9層より古墳時代の土師器が出土したが、細片のため、形状の判るものはなかった。立会調査の範囲が狭いため、詳細は不明であるが当時期の遺跡が周辺に広がっていると考えられる。

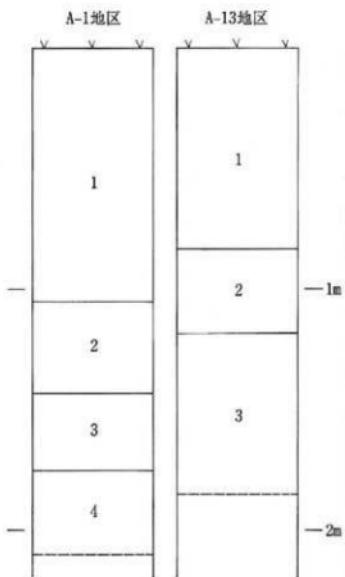


第15章 出雲井遺跡群の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第26工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市出雲井本町地内
3	調 査 面 積	107m ²
4	調 査 期 間	平成12年5月15日～7月7日（延べ26日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線枚岡駅の南西である。当地点は出雲井遺跡群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ107mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



調査地遠景



掘削状況



土層断面

1. 調査の概要

A-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒色(2.5Y2/1)中礫混じり粘土。

第3層 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。

第4層 黒色(10YR1.7/1)粗粒砂混じり粘質土。

A-13地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黑褐色(2.5Y3/1)粗粒砂。

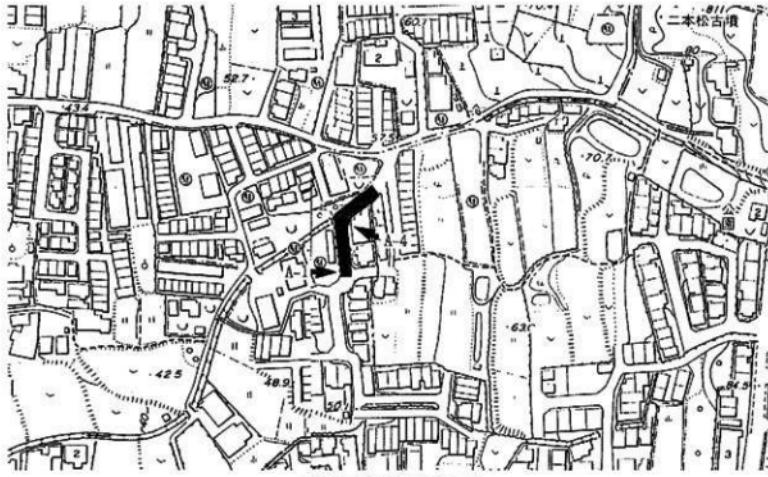
第3層 黒色(N2/0)粘土。

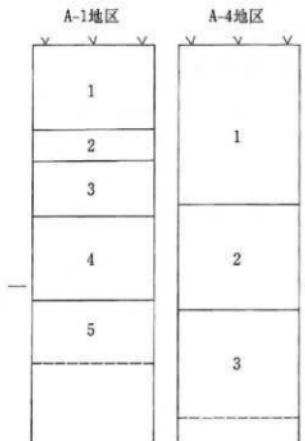
2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第16章 岩滝山遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第31工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市六万寺町1丁目
3	調 査 面 積	118m ²
4	調 査 期 間	平成12年5月17日～5月25日（延べ7日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は大阪府立東大阪養護老人ホームの南西である。当地点は岩滝山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ139mの間であり、開削工法である。





土層断面柱状図



調査地遠景



掘削状況

1. 調査の概要

A-1 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗灰色(10YR5/1)砂礫。
- 第3層 暗灰色(N3/0)砂礫。
- 第4層 灰色(N5/0)砂礫。
- 第5層 褐色(7.5YR4/4)シルト。

A-4 地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 暗青灰色(5BG4/1)粗粒砂混じり
シルト。
- 第3層 暗緑灰色(5G3/1)シルト～粗粒
砂。

2. まとめ

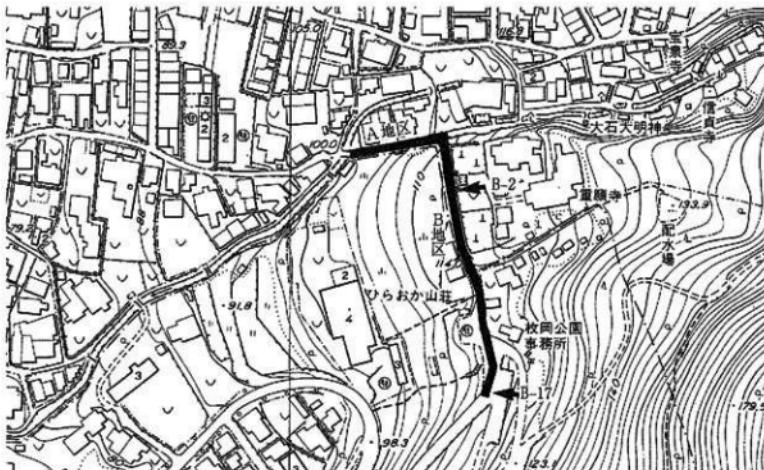
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。



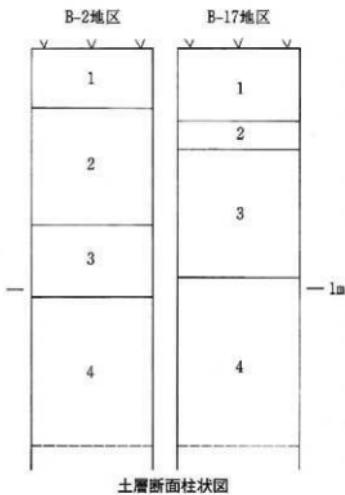
土層断面

第17章 みかん山古墳群の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第11-2工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市山手町~東豊浦町11
3	調 査 面 積	329m ²
4	調 査 期 間	平成12年4月7日~8月2日(延べ19日)
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は府営枚岡公園内である。当地点はみかん山古墳群内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8~1.1mで長さ353mの間であり、開削と一部推進工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



調査地遠景



掘削状況

1. 調査の概要

B-2 地区の層序

第1層 盛上。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/6)粘質土。

第3層 黄褐色(2.5Y5/3)細砂。

第4層 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト。

B-17地区の層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土。

第3層 黄褐色(2.5Y5/4)砂質土。

第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土。

2.まとめ

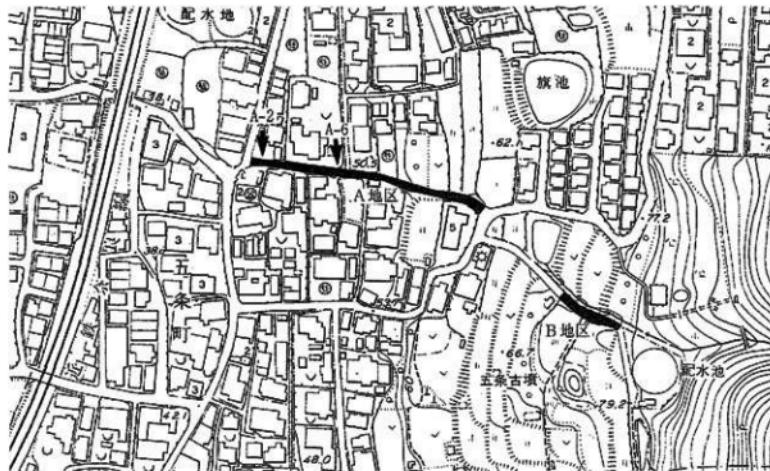
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。



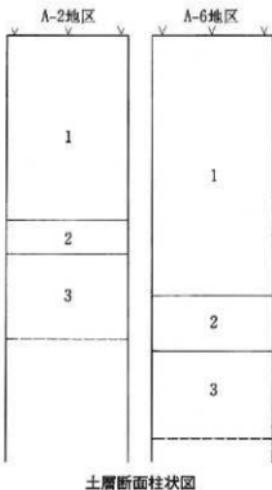
土層断面

第18章 水走氏館跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成11年度公共下水道第11-3工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市五条町
3 調 査 面 積	142m ²
4 調 査 期 間	平成12年9月4日～9月22日（延べ9日）
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄奈良線枚岡駅の南東である。当地点は水走氏館跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ166mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



土層断面柱状図



調査地遠景



掘削状況



土層断面

1. 調査の概要

A-2 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗青灰色(5B4/1)シルト。

第3層 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質シルト。

A-6 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗オリーブ褐色(5GY3/1)粘質土。

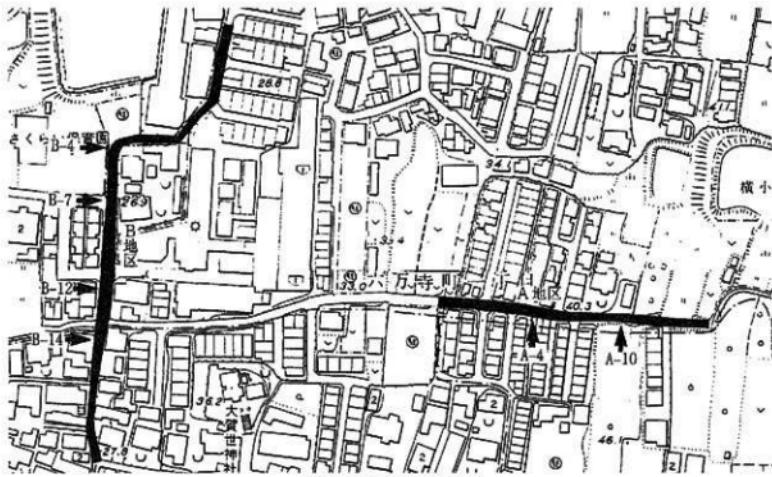
第3層 暗緑灰色(10GY3/1)粘質土。

2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第19章 半堂遺跡の第2次調査

	名 称	内 容
1 事 業 名		平成11年度公共下水道27第工区管きょ築造工事
2 調 査 地 点		東大阪市下六万寺町1丁目～横小路町1・2丁目
3 調 査 面 積		316m ²
4 調 査 期 間		平成12年4月12日～6月2日（延べ28日）
5 報 告 担 当		松田留美
6 調 査 の 経 過		上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は六万寺半堂池の南と東の2路線である。当地点は半堂遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～1.4mで長さ328mの間であり、開削工法である。



1. 調査の概要

本調査地は生駒山地の西側に広がるなだらかな丘陵上に位置する。南北をB地区、東西をA地区と呼称して調査を行った。各地区的断面図の詳細を以下に記す。

A - 4 地区の層序

第1層 盛土および擾乱。

第2層 褐色(10YR4/4)砂質土。30~40cmの巨礫を含む。

第3層 單灰褐色(10YR3/3)砂質土。小礫を多く、中礫を若干含む。

A - 10 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 褐色(10YR4/4)粘質土。中世の遺物が出土。

第3層 單灰黃色(2.5Y4/2)砂質土。明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じる。

第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)砂質土。明褐色(7.5YR5/6)砂質土が混じる。10cm程度の中礫を含む。

B - 4 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。中世の遺物が出土。

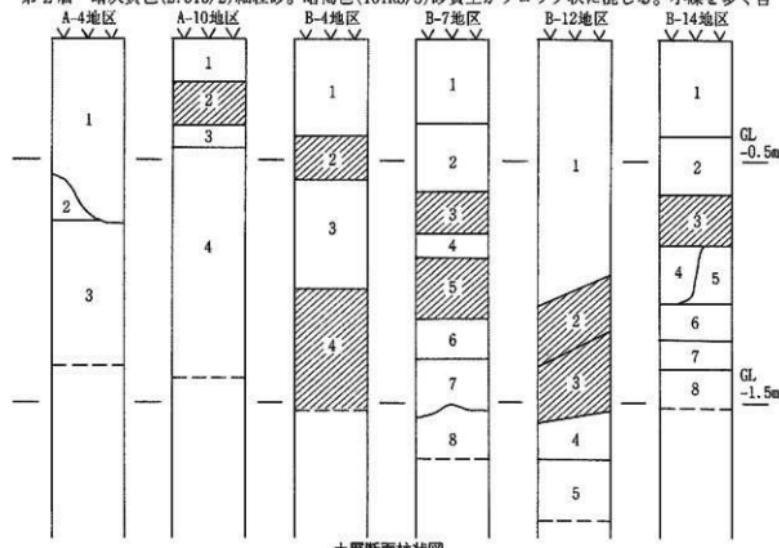
第3層 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土。酸化鉄沈着。

第4層 オリーブ黒色(10Y3/1)粗砂混じり粘質土。中礫を含む。中世の遺物が出土。

B - 7 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 單灰黃色(2.5Y5/2)細粒砂。暗褐色(10YR3/3)砂質土がブロック状に混じる。小礫を多く含む。



む。炭を含む。

第3層 灰黄褐色(10YR4/2)細粒砂。褐色(7.5YR4/4)砂質土が混じる。大礫を若干含む。中世の遺物が出土。

第4層 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂。

第5層 暗褐色(10YR3/3)粘質土。小～中礫を含む。弥生時代後期～中世の遺物が出土。

第6層 黒褐色(7.5YR2/2)粘質土。小礫を含む。

第7層 黒褐色(10YR2/2)粘質土。暗褐色(7.5YR3/4)砂質土が混じる。

第8層 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土。細粒砂を含む。

B-12地区の層序

第1層 振乱。

第2層 灰色(7.5Y4/1)細粒砂。

第3層 灰色(5Y4/1)細粒砂。小～中礫を含む。第2～3層から中世の遺物が出土。

第4層 黑色(5Y2/1)粘土質シルト。小礫、木片を含む。

第5層 灰色(10Y4/1)細粒砂。小礫を含む。

B-14地区的層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。

第3層 オリーブ黒色(5Y3/2)シルト。中世の遺物が出土。

第4層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト。木片を含む。下記遺構の埋土。

第5層 黒褐色(10YR3/1)シルト。粗粒砂を含む。上面において遺構検出。

第6層 灰色(5Y4/1)細粒砂。

第7層 灰色(7.5Y4/1)粗粒砂。

第8層 暗褐色(N3/)シルト。

2. 出土遺物

出土遺物には弥生土器、古墳時代の須恵器、埴輪、中世の土師器、瓦器椀、陶器、そのほか近世の石製品などがある。出土総数はコンテナで約1/2箱あり、そのうち固化したものは27点である。以下、概要を述べる。

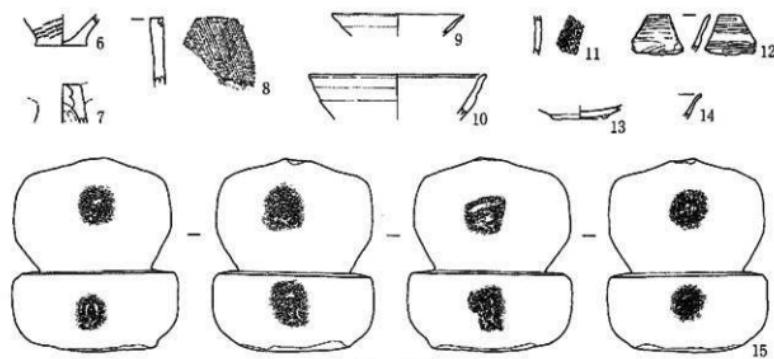
弥生土器（6）壺の底部である。外面に叩き目がみられる。底径は4.1cmを測る。後期の所産である。生駒西麓産。

埴輪（1・8・16）1・16は基底部、8は口縁部である。外面調整は1・16がナデで、1はわずかに面をもつ。8は外面を斜め方向に刷毛で調整する。内面調整は1が指ナデ、8は内面をナデ調整する。16は下端は指オサエ、それより上はナデ調整である。基底部径は1が14.2cm、16は16.6cmを測る。色調は淡黄色～浅黄橙色を呈し、胎土には長石、石英、クサリ礫を含む。

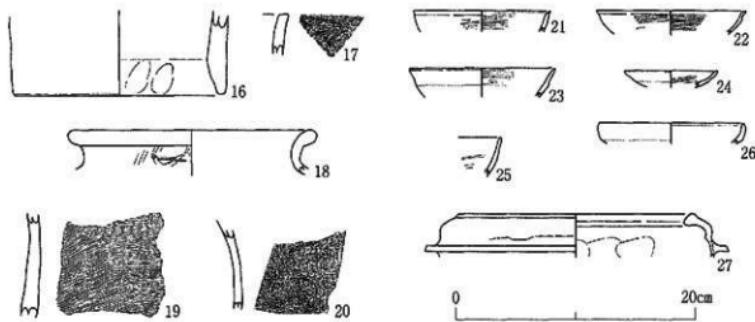
土師器（5・7・9・10・17・26・27）7は高杯の脚部である。杯部との接合部分で剥離している。胎土には長石、石英、雲母、クサリ礫を含み、色調はにぶい黄橙を呈する。古墳時代以前の所産であろう。9・10は杯の口縁部である。外面の調整は口縁部をヨコナデ、以下は不調整のもので、10は2段のナデを施す。26は皿の口縁部である。口縁端部に内傾する面をもつ。17は瓶の口縁部である。口縁端部に面をもつ。外面は刷毛調整で、内面はナデ調整である。5・27は羽釜である。5は鉢部である。27は羽釜の口縁部である。外に折返しておさえた口縁端部をもつ。肩に幅の狭い鐸をめぐらす。鐸より下には炭化物が付着する。14～15世紀の所産である。



A地区出土遺物



B地区出土遺物



出土地区不明遺物

出土遺物実測図

須恵器（2・3・11・18～20）18は壺の口縁部である。短く立ちあがる頭部の外面にヘラ記号がある。2・3・11・19・20は壺の体部である。外面は2・3・19が平行叩き、11・20は格子叩き痕が残る。内面は2には同心円の当て具痕が残る。それ以外は当て具痕をすり消しているもので、5世紀の所産である。

瓦器（12～14・21～25）12～14・21～23・25は椀である。12は口縁端部が内傾するもの、14は外弯するもの、21・22は内面に沈線を施し端部が短く外側に折れるもの、23・25は丸くおわるものである。12は外面に幅の広いヘラ磨きをまばらに、内面には密に、25は内面にまばらに施す。21・22は細いヘラ磨きを外側と内面に、23は内面に施す。13は底部である。断面三角形の低い高台が残る。24は小皿である。幅の広いヘラ磨きを内面に施す。

陶器（4）壺の体部である。外面を刷毛で調整し、内面はナデ調整である。色調は灰黄褐色～褐灰色を呈する。

石製品（15）一石五輪塔の空輪および風輪である。4面には刻した梵字と思われる痕跡がわずかに認められるが、表面が風化しているため文字は判別できない。残存高は16.3cm、最大径は空輪で13.0cm、風輪で13.7cmを測る。

3.まとめ

今回の調査ではA地区からB地区にわたって中世の包含層を検出し、B-14地区において第3層（中世包含層）直下で造構と思われる落ちを検出したが、矢板のため狭い範囲での確認にとどまった。出土遺物については、中世以降の遺物に混じって弥生土器や古墳時代の須恵器、埴輪が出土した。このうち埴輪はA地区の東側とB地区の北側で出土した。半堂遺跡は弥生～古墳時代にかけての遺跡で、周知されている範囲ではこれまでの調査によって古墳が3基みつかっている。B地区は昭和35年の調査で須恵器、埴輪が大量に出土したことから大賀世2号墳とされた工場敷地の西側に接しており、出土した埴輪片は大賀世2号墳に伴うものと思われる。A地区的東側でも埴輪片が出土しているが、当地周辺に古墳が存在した可能性も考えられる。



A地区遠景



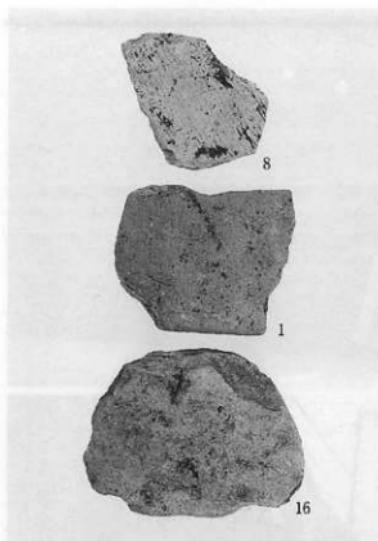
A-10地区土層断面



B地区遠景



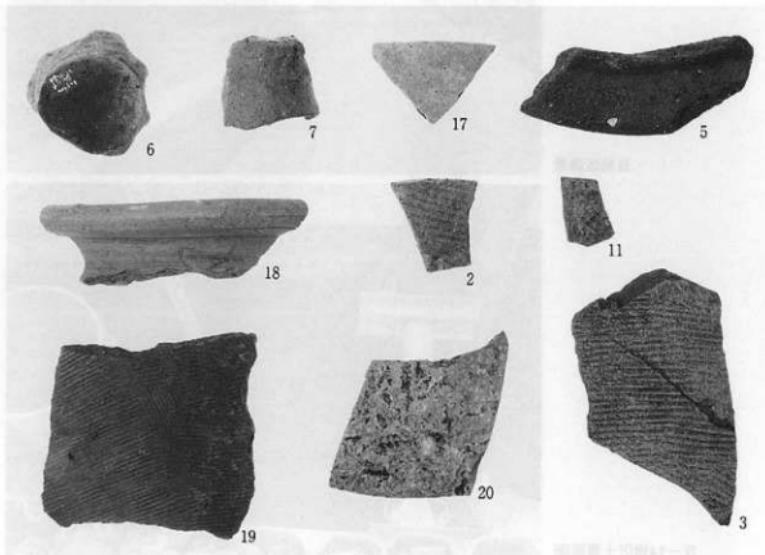
B-14地区土層断面



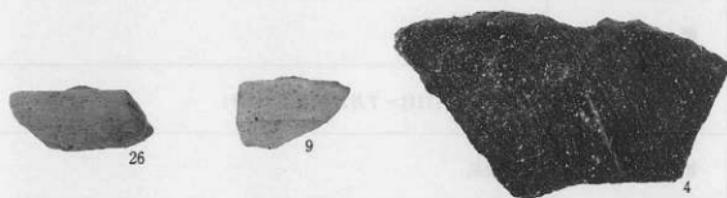
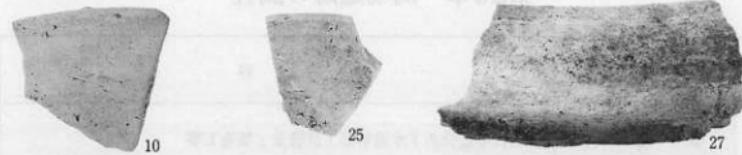
出土遺物（埴輪）



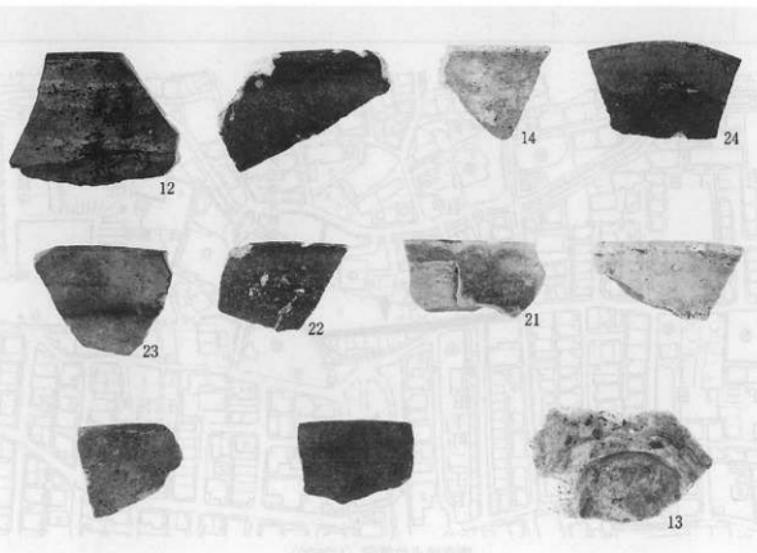
出土遺物（一石五輪塔）



出土遺物（弥生土器・土築器・須恵器）



出土遺物 (土師器・瓦器・陶器)



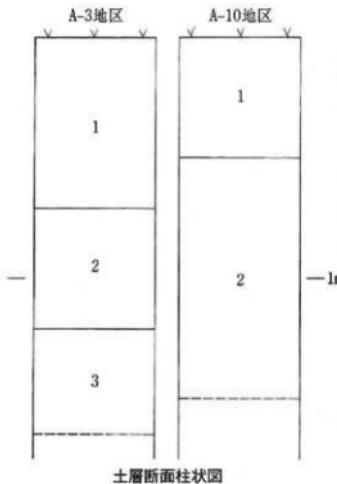
出土遺物 (瓦器)

第20章 馬場遺跡の調査

	名 称	内 容
1 事 業 名	平成11年度公共下水道第35工区管きよ築造工事	
2 調 査 地 点	東大阪市日下町2丁目	
3 調 査 面 積	117m ²	
4 調 査 期 間	平成12年7月11日～7月27日（延べ11日）	
5 報 告 担 当	才原金弘	
6 調 査 の 経 過		上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は馬場遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ137mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



土層断面柱状図



調査地遠景



掘削状況



土層断面

1. 調査の概要

A-3 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土
　　混じり粗粒砂。

第3層 黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂。

A-10地区の層序

第1層 盛土。

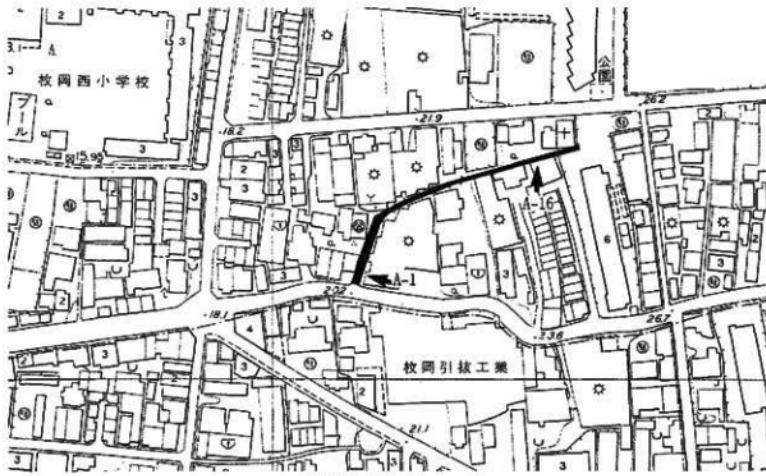
第2層 青灰色(5BG5/1)細～粗粒砂。

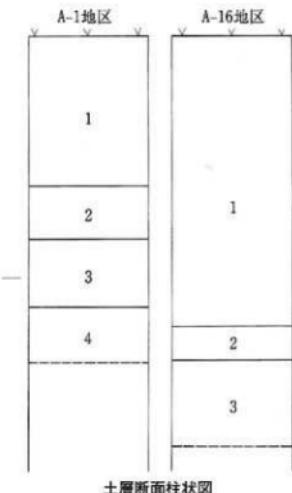
2. まとめ

立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

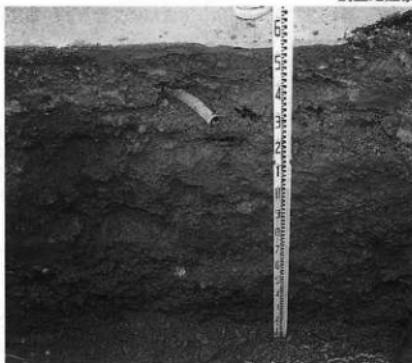
第21章 鬼塚遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第41工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市南莊町地内
3	調 査 面 積	114m ²
4	調 査 期 間	平成12年10月26日～12月18日（延べ25日）
5	報 告 担 当	才原金弘
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ134mであり、開削工法である。





調査地遠景



1. 調査の概要

A-1 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 黒褐色(2.5Y3/2)砂混じり粘質土。

中世期の遺物が出土。

第3層 オリーブ黒色(5Y3/2)砂質土。

第4層 オリーブ黒色(5Y3/1)砂質土。

A-16 地区の層序

第1層 盛土。

第2層 オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂。中世期の遺物が出土。

第3層 オリーブ黒色(7.5Y3/1)シルト。

2. まとめ

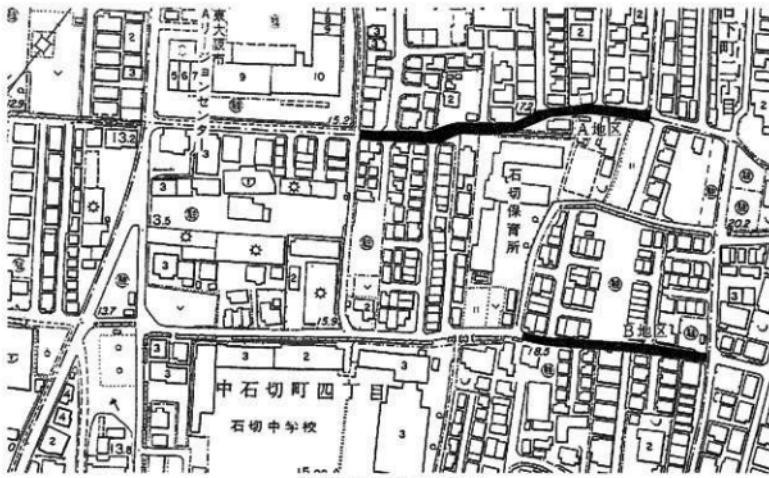
中世期の土師器・瓦器などが出土したが、谷筋内などの二次堆積の可能性が高い。

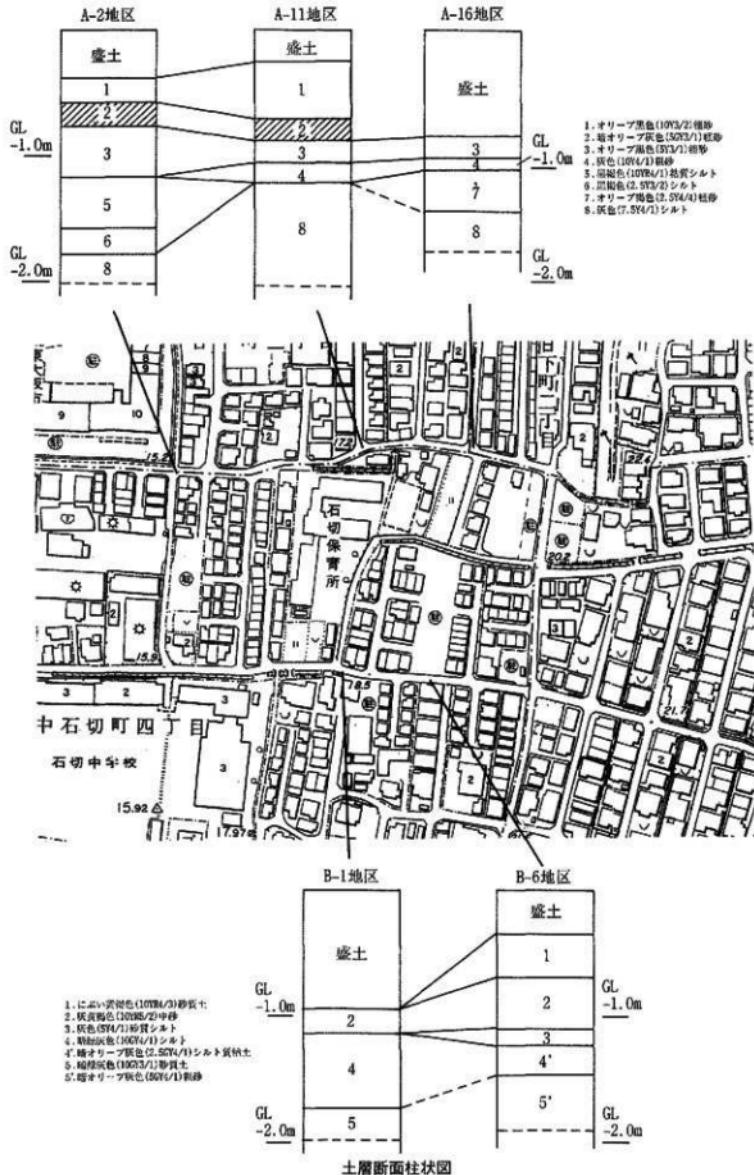


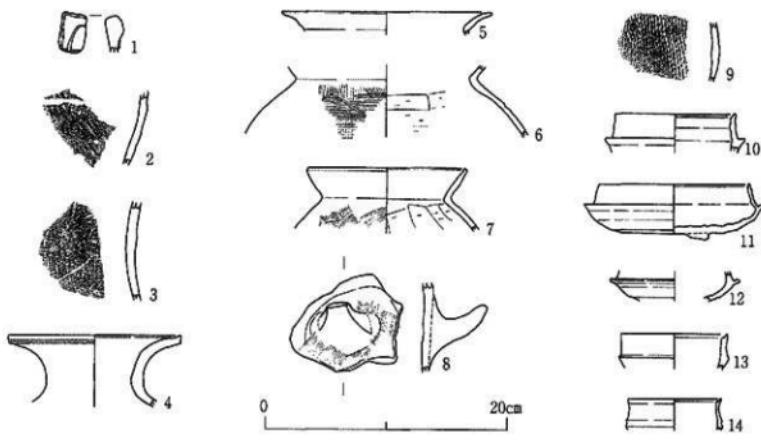
出土遺物

第22章 芝ヶ丘遺跡の第10次調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第43工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市日下町3丁目・中石切町4丁目
3	調 査 面 積	209m ²
4	調 査 期 間	平成12年7月27日～10月6日（延べ32日）
5	報 告 担 当	木村健明
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は石初中学校の東と北の2路線である。当地点は芝ヶ丘遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ246mの間であり、開削工法である。







出土遺物実測図

1. 調査の概要

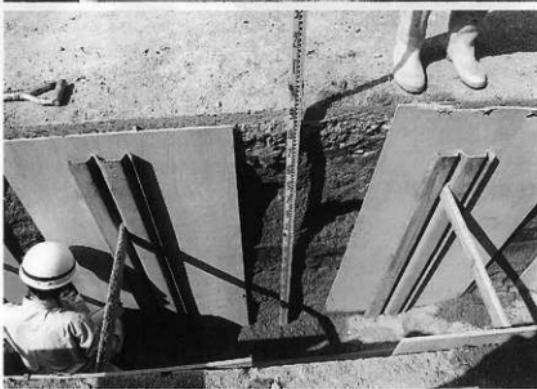
調査は石切保育所を挟んで北側をA地区、南側をB地区と呼称して行った。A地区ではA-11地区までは明瞭な包含層が確認でき遺物も多数出土したが、それ以東では搅乱がひどく包含層は確認できなかった。またB地区は現水路に沿って掘削が行われたため、水路による搅乱で深さ1m付近まで堆積を確認できない部分もあり、遺物もほとんど出土しなかった。土層断面は図に示した通りであり、A地区的2層が包含層である。この層からは、縄文土器や、古墳時代の遺物が出土している。さらに、若干ではあるがそれ以外の層からも遺物の出土が認められる。

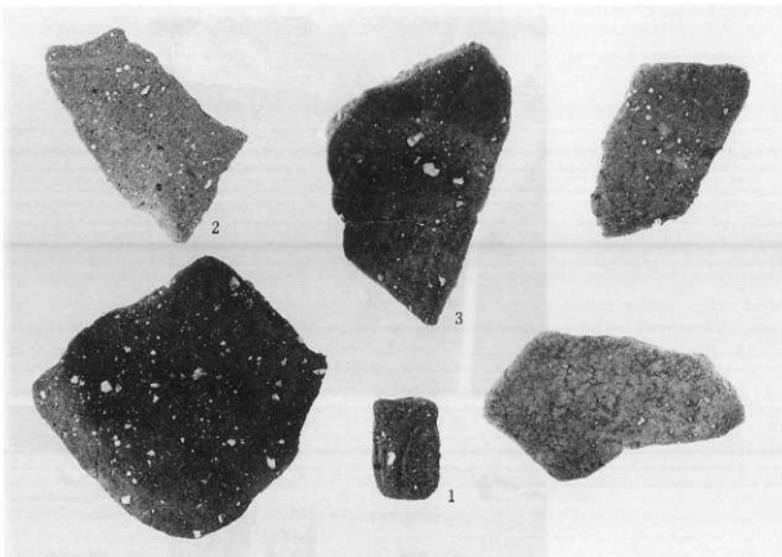
2. 出土遺物

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土した。図示したものの内、12のみがB地区からの出土で、他は全てA地区からの出土である。1~3は縄文土器で、縄文時代中期のものである。1は口縁部分と考えられる。2・3は器種は不明であるが、いずれも外面に施された縄文が明瞭に残っているものである。2には一条の沈線も認められる。4・5は弥生土器で、4は壺、5は甌である。いずれも摩滅がひどく、調整などは不明である。6・7は布留式土器の甌である。6には肩部に波状の文様が施されている。8は土師器の把手である。9は軟質の韓式系土器である。外面に繩席文タキによる調整がなされている。10~14は須恵器で10~12が杯身、13・14が高杯である。いずれも6世紀代のものである。

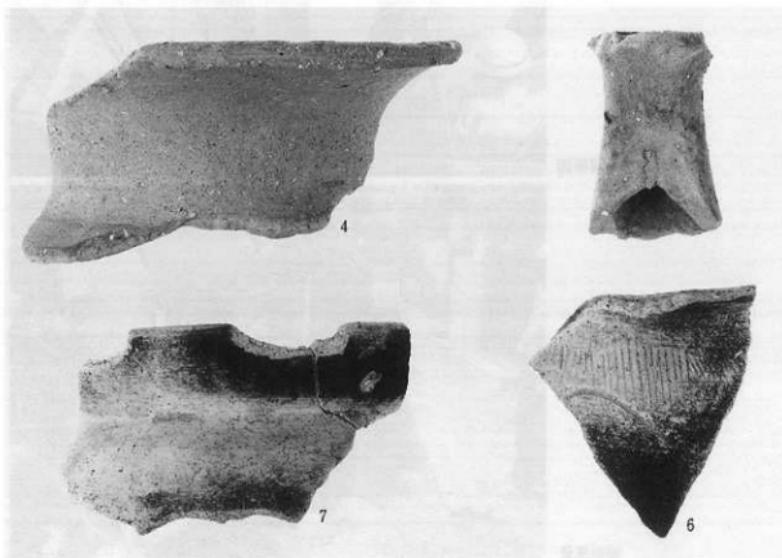
3.まとめ

今回の調査では主に北側のA地区で包含層を確認し、遺物も多数出土した。遺跡指定範囲の端から調査を始めたがそこでも明瞭な包含層が確認できたことから、更に遺跡範囲が広がることも可能性として考えられる。また、これまで主に調査が行われてきた石切中学校は今回の調査地の南西になる。出土した遺物の時期には従来の成果との差異はない。過去の調査においても出土しているが、韓式系土器の出土は注目される。

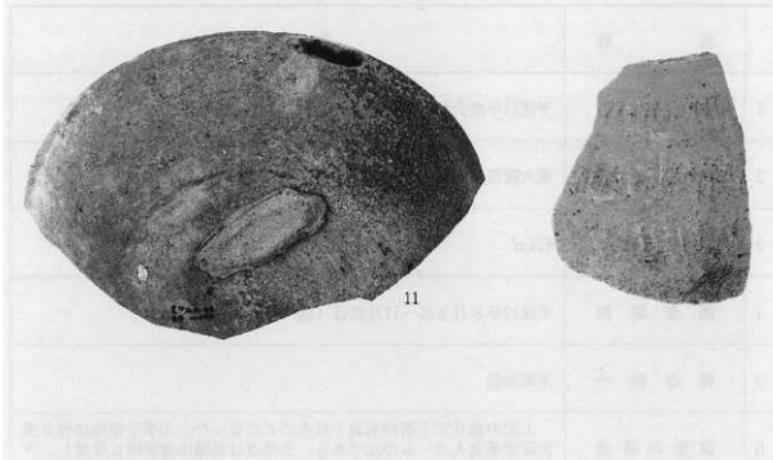




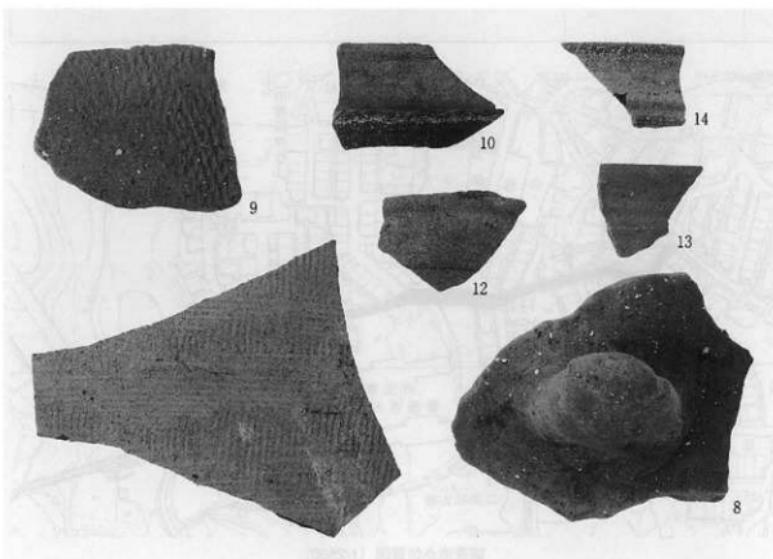
出土遺物（縄文土器）



出土遺物（弥生土器・土師器）



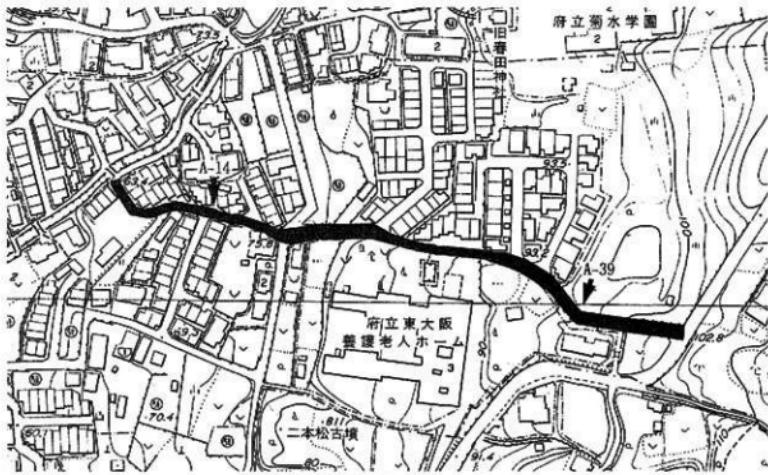
出土遺物（須恵器）

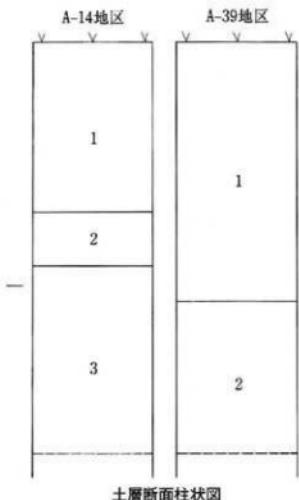


出土遺物（韓式系土器・土師器・須恵器）

第23章 岩滝山遺跡の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成11年度公共下水道第46工区管きょ業造工事
2 調 査 地 点	東大阪市上六万寺町
3 調 査 面 積	624m ²
4 調 査 期 間	平成12年8月1日～11月22日（延べ45日）
5 報 告 担 当	才原金弘
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は府立東大阪養護老人ホームの北である。当地点は岩滝山遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～1.2mで長さ616mの間であり、開削工法である。





1. 調査の概要

A-14地区の層序

第1層 盛土。

第2層 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)小～大
礫混じり砂質土。

第3層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)小礫混じ
り砂質土。

A-39地区的層序

第1層 盛土。

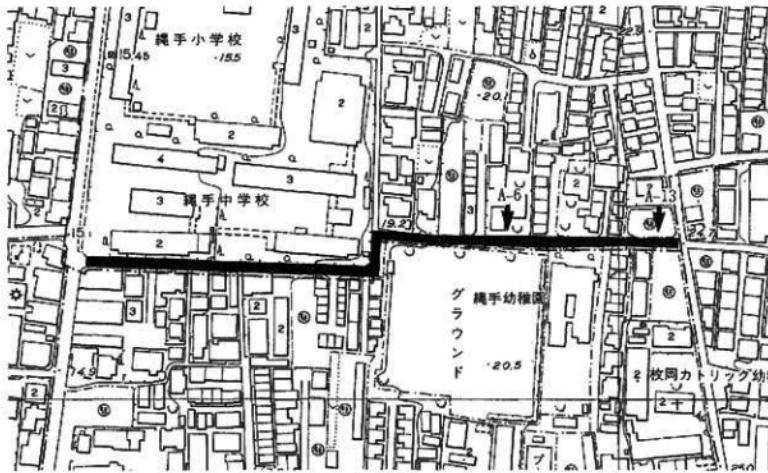
第2層 にぶい橙色(7.5YR7/4)粗粒砂混
じり粘土。

2. まとめ

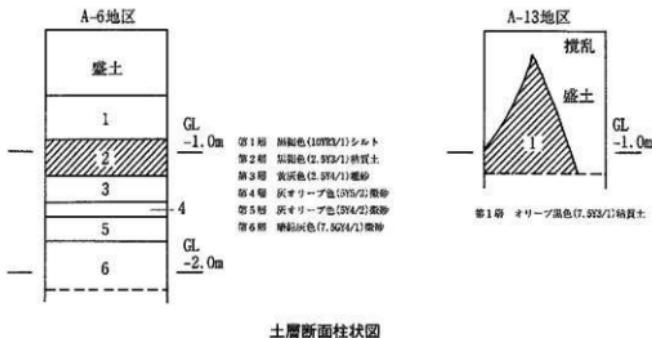
立会調査を実施したが、遺構・遺物は検出できなかった。

第24章 繩手(第15次)・上六万寺遺跡(第5次)の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第28工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市南四条町地内
3	調 査 面 積	264m ²
4	調 査 期 間	平成12年7月12日～8月1日(延べ9日)
5	報 告 担 当	木村健明
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は繩手中学校の南である。当地点は繩手・上六万寺遺跡内に位置し、調査をおこなうことになっていたが、連絡漏れにより工事区間の約1/2が事前着工されていた。下水道部と協議した結果、残りの部分を立会調査することになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ311mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)



1. 調査の概要

調査地点は、縄手中学校の南側であるが、中学校沿いの部分は事前着工のため調査することができなかった。調査範囲の大部分は縄手遺跡の範囲内であり、縄手幼稚園以東が上六万寺遺跡である。

調査範囲が2つの遺跡にまたがっているが、地区割は通し番号で行っており、事前着工区間をA-1地区とし、全体で13区を数えた。土層断面は図に示す通りである。包含層としてはA-6地区の第2層およびA-13地区の第1層があげられる。

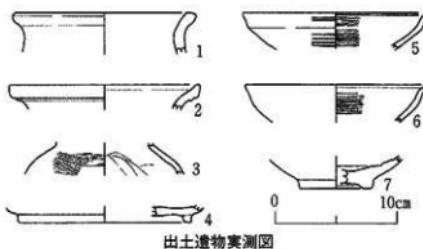
2. 出土遺物

須恵器・土師器・瓦器碗などが出土した。いずれも出土層位の確認はできていない。1・2は須恵器の壺、3は土師器の壺、4は須恵器の高台部分である。5・6は瓦器碗である。5は楠葉型で内面には密に、外面には疎らにミガキがほどこされている。6は大和型で内面には密にミガキが施されているが外面には認められない。7は白磁碗IV類の底部である。内面体部の立ち上がり部分に一条の沈線が入れられている。いずれも細片であるため確実なことは言えないが5～7は12世紀頃のものと考えられる。

3. まとめ

縄手遺跡でのこれまでの調査としては縄手小学校・中学校関連の調査を中心に十数回におよぶ調査が行われており、縄文時代後期および弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が出土している。

また、上六万寺遺跡では過去の調査で弥生時代後期の遺物および中世の遺構・遺物が出土している。今回の調査では、立会調査という制約および、一部分の事前着工ということもあるって古墳時代および中世の遺物の出土の確認に留まってしまい、周辺の調査で出土している縄文時代に関するものは全く確認できなかった。





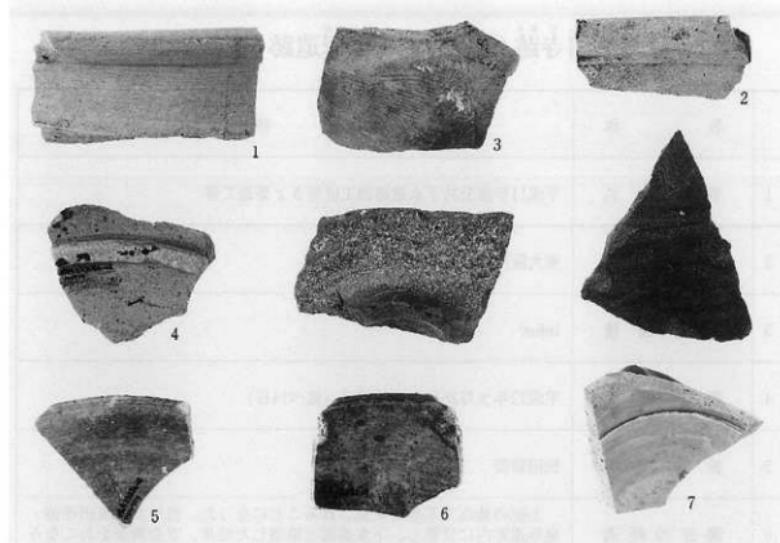
A-4 地区土层断面



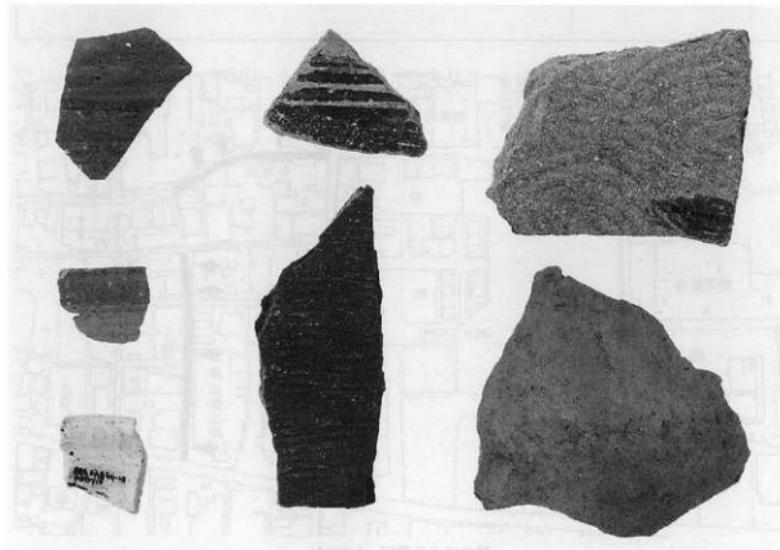
A-13 地区土层断面



掘削風景



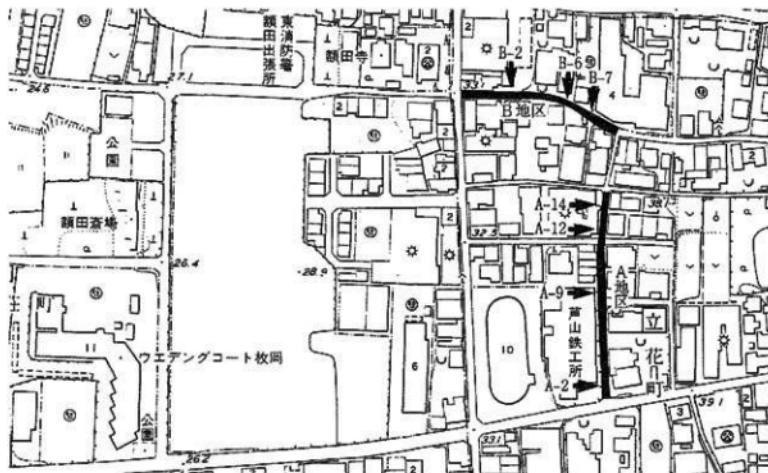
出土遺物（土師器・須恵器・瓦器・白磁）



出土遺物（土師器・須恵器）

第25章 頼田寺跡(第2次)・鬼塚遺跡(第26次)の調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成11年度公共下水道第29工区菅きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市立花町
3 調 査 面 積	166m ²
4 調 査 期 間	平成12年9月25日～10月13日(延べ14日)
5 報 告 担 当	松田留美
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。当地点は頼田寺跡・鬼塚遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、立会調査をおこなうことになった。工事範囲は幅約0.8～0.9mで長さ196mの間であり、開削工法である。



調査地点位置図 (1/2500)

1. 調査の概要

調査地は生駒山地の西麓の扇状地上に立地する。南北をA地区、東西をB地区と呼称した。包含層は現地表面から~0.2~1mの範囲に分布する黒色シルト層を主体とする。各地区的断面図の詳細を以下に記す。

A-2地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(2.5Y3/2)土。
- 第3層 灰黄褐色(10YR5/2)土。人頭大礫を含む。

A-9地区の層序

- 第1層 盛土および搅乱。
- 第2層 灰色(5Y4/1)シルト質細砂。細~中礫を含む。
- 第3層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。細~中礫を含む。
- 第4層 黒褐色(10YR2/3)シルト。細~中礫を含む。
- 第5層 黒色(10YR2/1)シルト。

A-12地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 オリーブ黒色(5Y3/1)粘質シルト。中世の遺物が出土。
- 第3層 黒色(10YR2/1)シルト。
- 第4層 オリーブ黒色(5Y3/1)粗粒砂混じり中粒砂。
- 第5層 喰灰黄色(2.5Y4/2)シルト。

A-14地区の層序

- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(10YR3/1)粘質土。
- 第3層 黄灰色(2.5Y4/1)粘質土。中世の遺物が出土。
- 第4層 黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。
- 第5層 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土。

B-2地区の層序

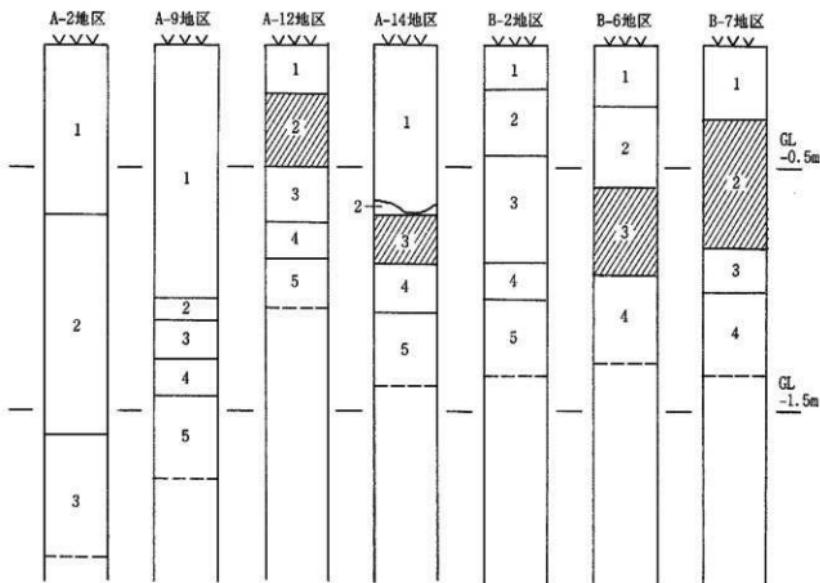
- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。中礫を多く含む。
- 第3層 オリーブ黒色(5YR3/1)シルト。酸化鉄沈着。
- 第4層 黒色(5Y2/1)シルト。
- 第5層 黒色(2.5GY2/1)粗粒砂。

B-6地区の層序

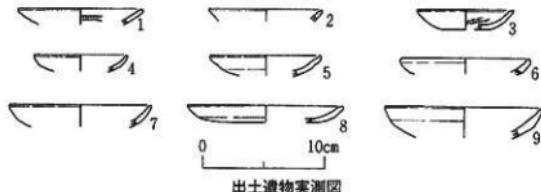
- 第1層 盛土。
- 第2層 黒褐色(2.5Y3/1)シルト。
- 第3層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト。
- 第4層 灰オリーブ色(5Y4/2)シルト。

B-7地区の層序

- 第1層 盛土および搅乱。
- 第2層 黒褐色(10YR2/3)土。細礫を含む。酸化鉄沈着。中世の遺物が出土。



土層断面柱状図



出土遺物実測図

第3層 黒褐色(2.5Y3/2)粘質土。細~大礫を含む。

第4層 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘質土。細~大礫を多く含む。

2. 出土遺物

出土した遺物は少量であるが中世の瓦器や土師器がほとんどで、古墳時代、奈良~平安時代のものと思われる須恵器、平安時代前半の黒色土器A類が若干混じる。これらのうち固化したものは9点である。A地区出土遺物は(1・2・4)、B地区出土遺物は(3・5~9)である。以下、概要を記す。

瓦器小皿(1~3) 1・3は内面に暗文をまばらに施すので、外面はナデ調整である。

土師器皿(4~9) 口径が10cm未満の小皿(4・5)と10~13cmの大皿(6~9)がある。色調は淡黄色~淡黄橙色を呈する。

3.まとめ

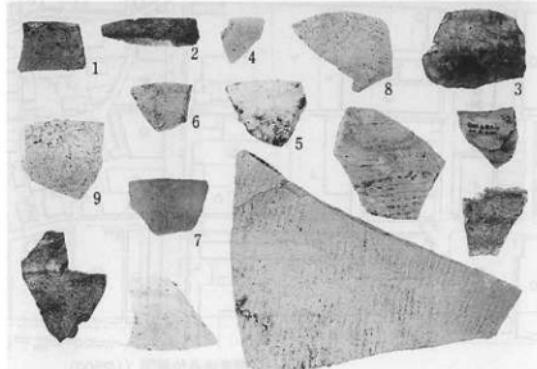
調査地は鬼塚遺跡の北東端から額田寺跡の南東部にまたがっている。今回の調査では遺構は検出できなかったが、両遺跡にわたって中世の包含層が分布していることがわかった。



B地区遺景



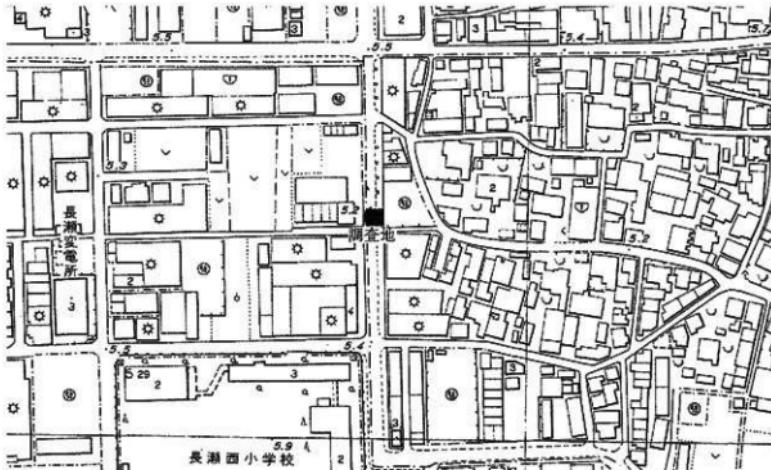
B-2地区土層断面



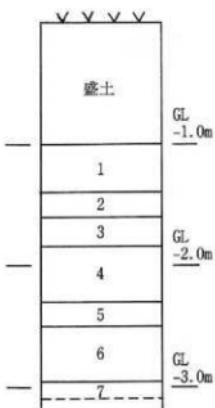
出土遺物

第26章 衣摺遺跡の調査

	名 称	内 容
1	事 業 名	平成11年度公共下水道第17工区管きょ築造工事
2	調 査 地 点	東大阪市衣摺3丁目
3	調 査 面 積	50m ²
4	調 査 期 間	平成12年12月14日～12月15日（延べ2日）
5	報 告 担 当	木村健明
6	調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は長瀬西小学校の北である。工事は推進工法によっておこなわれ、到達立坑が衣摺遺跡内に位置し、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。調査範囲は8.4×6.0mである。



調査地点位置図 (1/2500)



土層断面柱状図

1. 調査の概要

層序（南壁）

- 第1層 灰色(7.5Y6/1)粘土。
- 第2層 灰色(10Y6/1)微砂。
- 第3層 灰色(10Y6/1)微砂。(3層よりやや黒っぽい。)
- 第4層 灰色(5Y4/1)粘土。(微細な木片を含む。)
- 第5層 灰色(5Y4/1)シルト。〔黄灰色(2.5Y6/1)微砂がラミナ状に混じる。〕
- 第6層 灰色(5Y4/1)粘土。
- 第7層 灰色(5Y5/1)粗砂。

2. まとめ

衣摺遺跡は本格的な調査がほとんど行われておらず、実態が不明な点が多い遺跡である。

今回発掘調査を実施したが、土層の堆積は粘土と砂が交互に堆積している状態であり、かつての河川の跡と考えられる。遺構・遺物とも確認できなかった。



掘削風景



掘削風景



土層断面（第5～7層）

第27章 西ノ辻遺跡の第43次調査

名 称	内 容
1 事 業 名	平成11年度公共下水道第11-1工区管きよ築造工事
2 調 査 地 点	東大阪市弥生町・東山町
3 調 査 面 積	1555m ²
4 調 査 期 間	平成12年5月9日～10月18日（延べ103日）
5 報 告 担 当	才原(1)・吉田(2・3・4-3・4)・木村(4-2)・松田(4-1)・全員(5)
6 調 査 の 経 過	上記の地点で工事が実施されることになった。工事予定地は近鉄バス枚岡車庫の南に位置する。推進工法で工事を実施する計画であったが豎坑部分の作業ヤードとして調査地を削ることになり、下水道部と協議した結果、発掘調査をおこなうことになった。



調査地点位置図 (1/2500)

1. 位置と環境

西ノ辻遺跡は奈良県と大阪府の境となる生駒山西麓の扇状地上に立地し、標高7～20mを測る。現在の行制区分では東大阪市東山町、弥生町、南莊町、宝町、西石切町に相当する。遺跡の範囲は東西400m、南北600mに及ぶと推定されている。遺跡の範囲は開発が進んでおり、ほとんどが住宅や工場となっている。

生駒山西麓に入々が住み始めるのは旧石器時代からである。当時代の遺跡は標高100m前後の地点で多く発見されており、草香山、芝坊主山、正興寺山遺跡などが古くより知られている。また、鬼虎川遺跡の発掘調査では縄文時代前期の海食崖に落ち込んだ状態で旧石器時代の遺物であるナイフブレードや翼状剥片が出土している。

縄文時代になると当遺跡の東に神並遺跡が出現する。神並遺跡は早期の遺跡であり、多量の押型文土器と土偶、石鏡、石匙、有舌尖頭器などが出土している。前・中期の遺跡は前述した鬼虎川遺跡があり、当遺跡の西に位置する。後・晚期になると日下、鬼塚、縄手、馬場川遺跡などが出現する。日下遺跡は府下でも数少ない貝塚として著名な遺跡である。環状列墓や石室に炉を有する竪穴住居などが検出されている。縄手、馬場川遺跡では集落関係の遺構が発見されており、土器や各種の土製品、石器などが出土している。

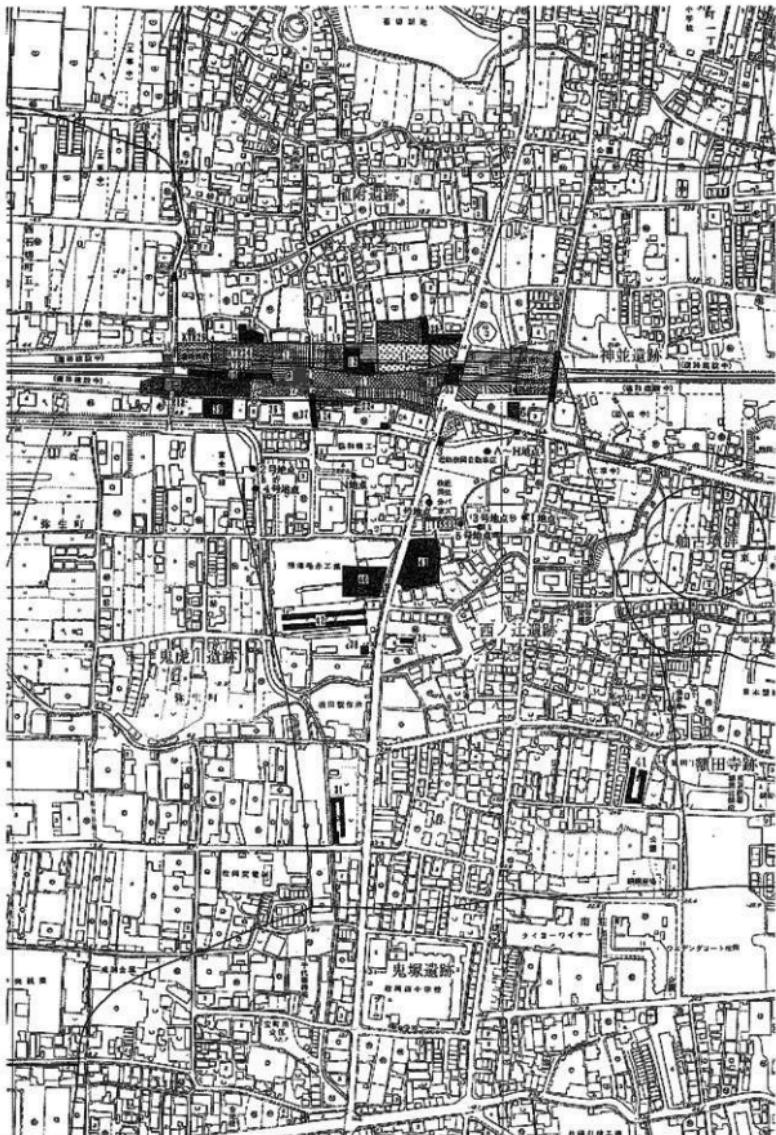
弥生時代の遺跡は前代に引き続き扇状地上に立地するもの、標高100m前後の高所に立地するものがある。また、平野部にも出現し、自然堤防上に集落を形成している。前期の遺跡は中垣内、鬼虎川、鬼塚、縄手、瓜生堂、山賀、高井田遺跡などがある。前期に出現した遺跡は中期にも継続し、大集落を形成するものが多い。中期になると新たに当遺跡や植附、山畑遺跡などが出現する。当遺跡では自然河川の谷や方形周溝墓、甕棺、溝などが検出されている。当遺跡の西に位置する鬼虎川遺跡でも方形周溝墓や木棺墓などが検出されており、隣接して墓域があったことが明らかになってきた。一方、平野部には瓜生堂遺跡があり、調査成果から大集落を形成していたことが明らかになっている。

山畑遺跡は高地性集落であり、遺跡の範囲は大きくなない。また、当遺跡は後期に継続するが、周辺には新たに北島池、岩滝山、馬場川、上小阪遺跡などが出現する。前・中期の遺跡は大集落を形成するものが多いが、後期の遺跡は小規模となる。

古墳時代の遺跡は芝ヶ丘、神並、鬼虎川、鬼塚、縄手、西岩田遺跡などがある。また、生駒山西麓の各尾根筋には古墳が多く造られるようになる。西ノ辻遺跡では自然河川の谷に木組暗渠や石組貯水施設などが造られている。神並遺跡では掘立柱建物が検出されている。鬼虎川遺跡でも方形の竪穴住居と掘立柱建物が発見されている。古墳時代の集落が除々ではあるが明らかになってきている。古墳は中期の時期のものが東大阪市域では最も古く塚山、えのき塚、大賀世古墳などがある。えのき塚や大賀世古墳からは多量の埴輪が出土している。後期になると古墳数は急激に増加し、群集墳を形成している。十基前後から数十基単位で構成されており、墓尾、神並、みかん山、出雲井、客坊山、山畠、花草山、五里山古墳群などがあげられる。また、近年の調査では削平された古墳も多く発見されてきている。

奈良時代以降になると当遺跡では掘立柱建物、井戸、土坑、土坑墓などが検出されている。当遺跡周辺には神並、水走遺跡などの集落がある。平野部には若江、瓜生堂遺跡などがある。若江遺跡は寺跡・郡衙と考えられている。また、東には法通寺、西には河内寺などがある。法通寺からは建物基壇などの遺構が検出されている。

当遺跡周辺は旧石器時代より今日に至るまで生活に適した場所であったらしく、各時代の遺構、遺物が多く存在する。



第1図 調査位置図

表1 西ノ辻選挙調査歴一覧

次第	調査名	調査地	調査対象	調査期間	調査回数	調査実績		実施年
						調査回数	調査回数	
1	西ノ辻選挙調査	西ノ辻町役場	西ノ辻町、木村木戸地区、多摩の井地区	1951・2・17 ~1951・4・10	西ノ辻町役場	「西ノ辻町と西ノ辻町周辺の選挙行動調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議会議事録）1952・3～4月	西ノ辻町役場	1952
2	西ノ辻選挙調査	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1951・4・26 ~1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
3	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
4	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
5	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
6	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
7	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
8	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
9	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
10	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
11	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
12	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952
13	西ノ辻選挙調査（西ノ辻町役場）	西ノ辻町役場	西ノ辻町選挙調査会	1952	西ノ辻町役場	「西ノ辻町選挙調査」 実施年：「西ノ辻町」（西ノ辻町行政会議事録）1952・11月	西ノ辻町役場	1952

27	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央区中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市中央会館組合	110坪	1985.4.26 新潟市中央会館、三越新潟、川口ビル開き典禮	「西ノ越野原町六・七番地新潟市中央二丁目新潟市中央会館」 1981 (社) 新潟市中央会館組合
28	新潟市立図書館	新潟市中央区中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立図書館組合	78坪	1986.11.14 午前の開館、後は午後の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立図書館」 1989 (社) 新潟市立図書館組合
29	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央区中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	36坪	1986.2.6 新潟市立水郷文化会館の竣工式典典禮	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1989 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
30	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央区中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	110坪	1986.5.13 午前の開館、後は午後の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1986 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
31	「丁寧な街」会館	新潟市中央一丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	80坪	1986.9.10 午前・午後の開館	「新潟市立水郷文化会館組合開館式」 1987 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
32	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	112坪	1986.10.20 午前・午後の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1986 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
33	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	52坪	1986.11.18 午前・午後の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1986 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
34	Y・K・G・S・新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	76坪	1987.3.10 午前・午後の開館	「新潟市立水郷文化会館組合開館式 - 『新潟市立水郷文化会館』」 1986 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
35	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	112坪	1987.6.13 午前の開館、後は午後の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1987 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
36	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	26坪	1989.1.19 午前・午後の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1990 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
37	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	26坪	1990.4.30 午前・午後の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1990 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
38	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	76坪	1991.6.13 午前の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1991 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
39	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	26坪	1991.10.21 午前の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1991 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
40	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	26坪	1992.2.21 午前の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1992 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
41	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	26坪	1992.5.11 午前の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1992 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
42	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	26坪	1993.11.25 午前の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1993 (社) 新潟市立水郷文化会館組合
43	新潟市立水郷文化会館	新潟市中央二丁目 新潟市中央二丁目	(社) 新潟市立水郷文化会館組合	152坪	1994.9.16 午前の開館	「西ノ越野原町二・三番地新潟市立水郷文化会館」 1994 (社) 新潟市立水郷文化会館組合

2. 遺跡の概略

西ノ辻遺跡は弥生時代～室町時代の複合遺跡である。昭和16年に現在の近鉄バス枚岡営業所地点で土器が採集されたことをきっかけに発掘調査が行われた。昭和16～17年に京都大学の小林行雄氏らによって行われた調査で出土した土器は、弥生時代中期末から後期の近畿地方における代表的な資料として取り上げられ、この遺跡は弥生時代後期の標識遺跡として学史的に著名となった。以来今日までに、遺跡の北端を東西に横切る近鉄東大阪線に沿った区域を中心に43回に及ぶ調査が行われている。

その結果、本遺跡は削状地の性格をもつ低位段丘面及び中位段丘面のうえに形成されたと考えられ、遺跡の北部では東から西にゆるく蛇行する谷状地形が存在していたことがわかった。幅10m、深さ3～5mの谷は縄文時代以降しだいに埋積され、奈良時代には浅い谷になり、中世には消滅することが明らかになっている。

本遺跡で最も古い遺構・遺物は、縄文時代前期以前と考えられる土坑や石器である。また谷内からは縄文時代後期・晩期の土器が出土しており、本遺跡の南端からは縄文時代晩期後半～末期の溝が検出されている。

弥生時代の遺構は遺跡の北側に集中しており、なかでも中期の方形周溝墓や壇棺墓、壇棺墓などが多数検出されている。方形周溝墓の主体部はいずれも後世の削平により残っていないが、周溝からは碧玉製管玉などが出土している。当時の墓域は東西約65m、南北30m以上と推定されており、本遺跡の西側に隣接する鬼虎川遺跡や北側に隣接する植附遺跡とは墓域を接していたことがわかっている。このほかに谷内から中期の貯木場が検出されており、また柱穴や大溝、貯蔵穴、護岸設備などが検出され、多量の弥生土器と石錐、石包丁などの石器が出土している。これらのことから弥生時代中期～後期にかけて大集落が存在していたことが明らかになっている。

古墳時代以降、平安時代までの遺構は減少する。古墳時代前期～中期のヒト及び馬の足跡や古墳時代末の掘立柱建物が検出されている。また古墳時代中期では、谷内を流れていた河川内から木組暗渠・石組貯水施設及びこれに平行した側溝などの水利遺構が検出されている。この遺構は比較的短い時間で廃絶されたようである。奈良時代には、同じく谷内を流れていた河川に杭を約100本打ち込んだ水流調節の遺構が検出されている。この遺構の付近からは、小型の竈、甕、瓶のセットや小型海獸葡萄鏡、人形などの祭祀遺物が散在した状況で出土した。遺構の位置から見て本遺跡の東に隣接する神並遺跡の祭祀場と推定されている。また奈良時代～平安時代前半の柱穴群や平安時代末頃の掘立柱建物が検出されている。柱穴群や掘立柱建物は遺跡の中央から東側にかけて見られることから、集落の中心が遺跡の北側から移動したとも推測できるが、今のところ明らかではない。

鎌倉時代～南北朝時代になると遺跡全体に遺構が見られ、集落の東西が約350mあったことが確認されている。掘立柱建物やヒト及び有蹄動物の足跡群、粘土探査坑と思われる方形土坑などを検出している。中世の土坑墓・木棺墓も數基検出されており、南北朝時代の木棺墓からは、40歳代の女性の人骨と中国製青磁碗、土師器皿が出土している。その東隣に位置する木棺墓からは40歳代の男性の人骨と土師器皿が出土している。この2基の木棺墓は近親者の墓と推測され、これらの墓は居住域の中か住居に隣接して當まれた屋敷墓と考えられている。また井戸からは「蘇民将来之住宅也」などの木簡や包丁、完形の土器などが出土し、中世の井戸における祭祀を考える資料といえる。

近世以降、遺物の出土は減少し、棚田や畦畔などの耕作関連の遺構が多く検出されている。近世から近代にかけては耕作地として利用されていたようである。以上のような調査成果から、西ノ辻遺跡は縄文時代以降、比較的継続して発展してきた地域と言える。

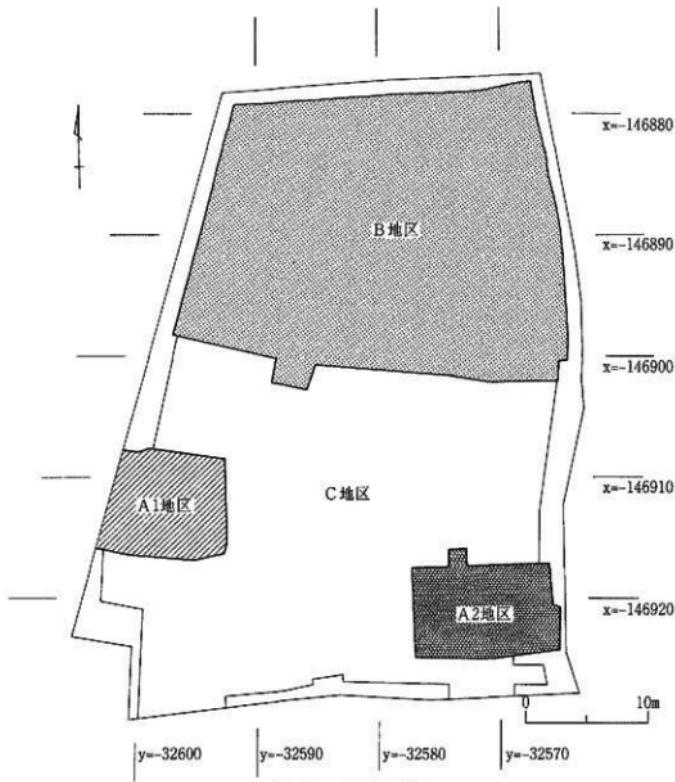
3. 調査の概要

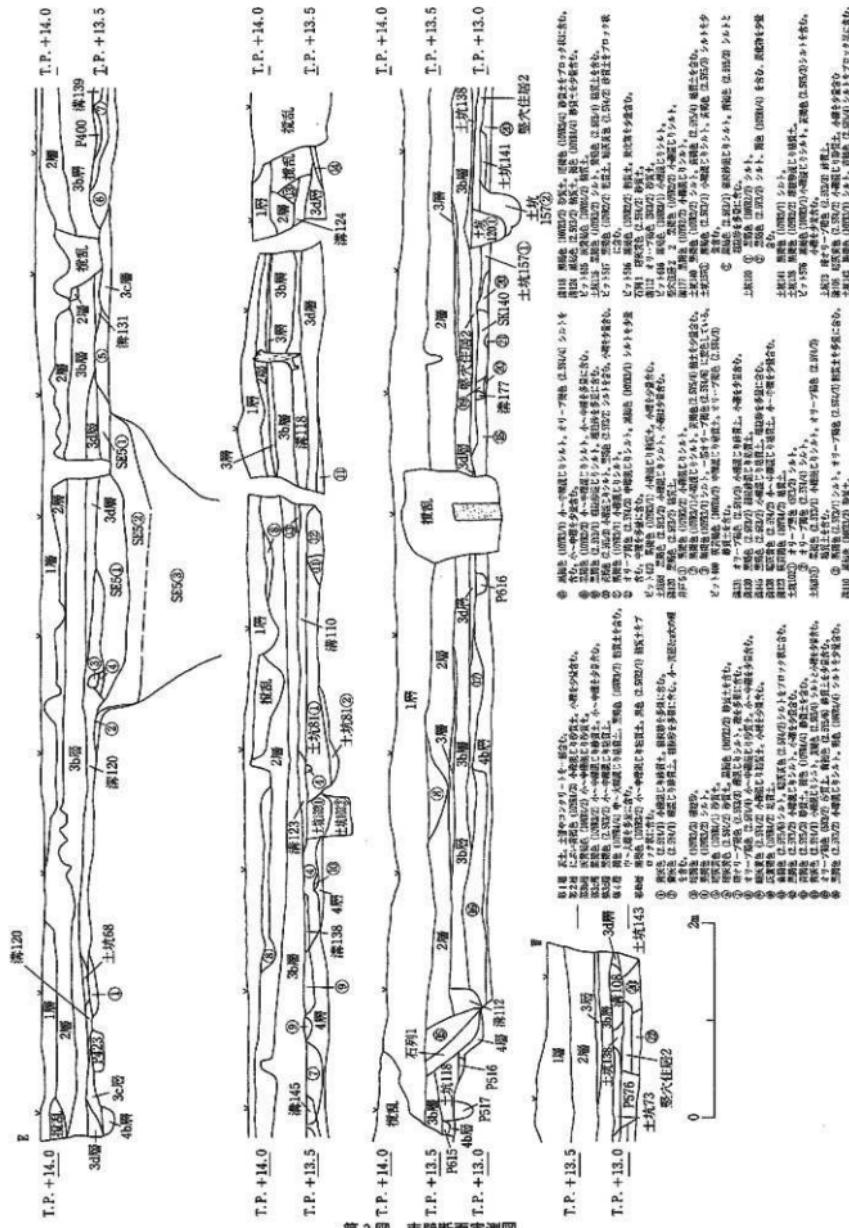
1) 地区割

今回の調査は、東西25~38m、南北47mの台形の調査範囲が設定された。調査面積は約1,550m²である。工事の都合上、調査地の西南にA1地区を、南東隅にA2地区を設定したのち、調査地の南北でB地区、C地区に分断した。A1、A2地区を調査終了後、B地区、C地区の順に調査を行った。なおB、C地区に関しては既往の調査成果と勘案するため、国家座標に基づく基準杭と調査杭を打設し、10mメッシュで遺物の取り上げなどを行った。調査地での各トレンチの位置及び座標位置は、第2図の通りである。

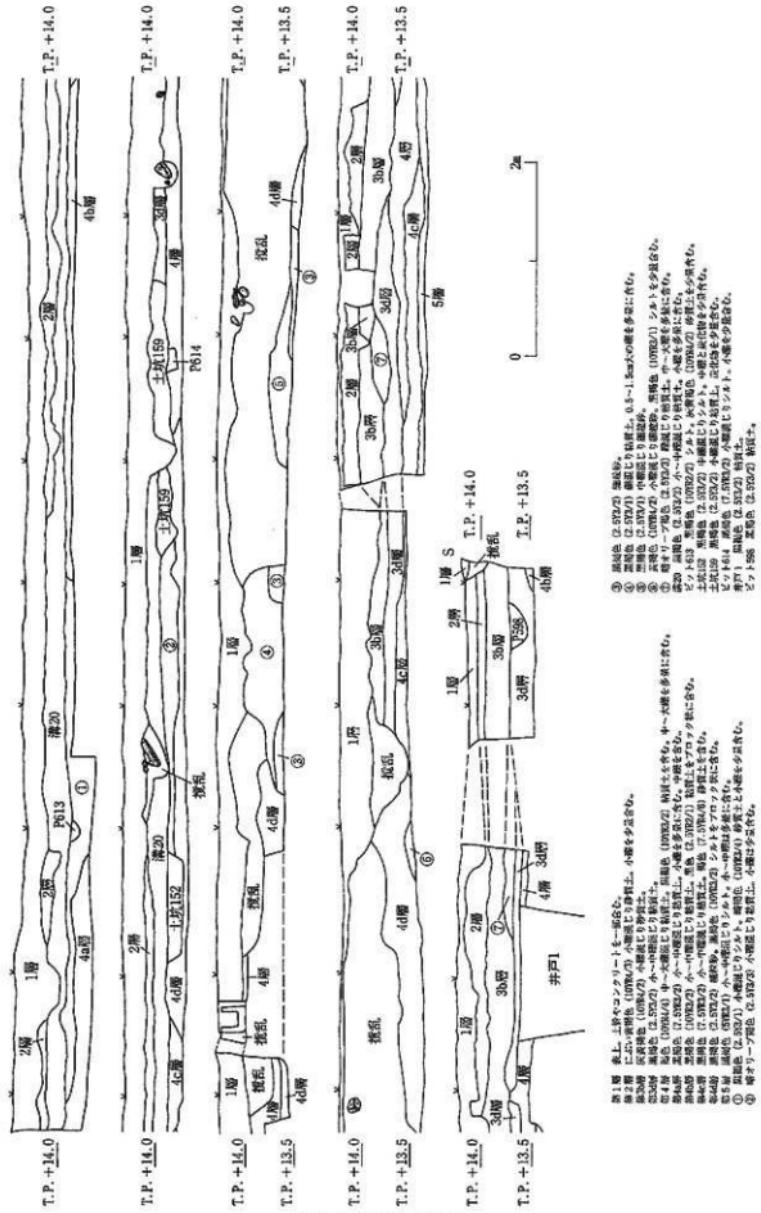
2) 調査の方法

機械掘削を現地表面から調査区西側では0.9m、東側では0.3mまで行った。その後、0.2~0.5mほど人力による掘削を行い、各層ごとに遺物、遺構の検出を行った。また一部では、下層確認のためサブトレンチを設け、4層上面から0.8mほど掘削した。





第3 図 断面実測図



第4図 東壁断面実測図

第1圖 館上一帯セメントクリートを一帶合て、
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。
地盤は主として砂質土、小礫を多量含む。

① 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
② 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
③ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
④ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑤ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑥ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑦ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑧ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑨ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑩ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑪ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑫ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑬ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。
⑭ 地盤は (2.5W) 砂質土、小礫を多量含む。

3) 層序

今回の調査で確認した層位は以下の通りである。

- 第1層 表土。土管やコンクリートを一部含む。厚さは調査区西側で50cm、東側では10cmである。
- 第2層 にぶい黄褐色(10YR4/3)小礫混じり砂質土。小礫を少量含む。厚さは10~30cmである。
- 第3層 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土。調査区西側で厚さは5~30cmである。調査区東南隅では堆積が見られない。
- 第3a層 オリーブ褐色(2.5Y4/3)小礫混じり粘質土。暗褐色(10YR3/3)砂質土と黄褐色(2.5Y5/4)砂質土を含む。調査区北西で10~20cmほど堆積している。
- 第3b層 灰黄褐色(10YR4/2)小礫混じり砂質土。調査地のほぼ全面に堆積しており、厚さは5~20cmである。わずかな中世の遺物に混じって弥生時代~平安時代の遺物が出土している。下面では中世の遺構を検出。
- 第3c層 黒褐色(10YR3/2)小~中礫混じり砂質土。小~中礫を少量含む。調査区の西端でわずかに見られる。厚さは10~20cm。弥生時代~平安時代の遺物を含む。
- 第3d層 黒褐色(2.5Y3/2)小~中礫混じり粘質土。調査区の東側に堆積し、南にいくと薄くなる。調査区北東隅で10cm、南東隅で20cmである。弥生時代~平安時代の遺物を含む。
- 第4層 褐色(10YR4/4)中~大礫混じり粘質土。黒褐色(10YR3/2)粘質土を含む。中~大礫を多量に含む。弥生時代~平安時代の遺構検出面である。調査区の北東隅から南東隅にかけて低くなっている。
- 第4a層 黒褐色(7.5YR3/2)小~中礫混じり粘質土。小礫を多量に含む。中礫を含む。調査区北西で見られ、厚さは10cmほどである。
- 第4b層 黒褐色(10YR3/2)小~中礫混じり粘質土。黒色(2.5YR2/1)粘質土をブロック状に含む。調査区東側に堆積する。
- 第4c層 黒褐色(7.5YR3/2)小~中礫混じり粘質土。褐色(7.5YR4/6)砂質土を含む。調査区北東に堆積する。
- 第4d層 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂。黒褐色(10YR3/2)シルトをブロック状に含む。
- 第5層 黒褐色(5YR3/1)小~中礫混じりシルト。小~中礫を多量に含む。
- 第5a層 オリーブ黑色(5Y2/2)細粒砂混じりシルト。細粒砂を多量に含む。
- 第5b層 黒褐色(2.5Y3/2)小礫混じりシルト。小礫を少量含む。
- 第6層 暗褐色(10YR4/3)シルト。黒褐色(10YR2/2)シルトを少量含む。

4) 遺構

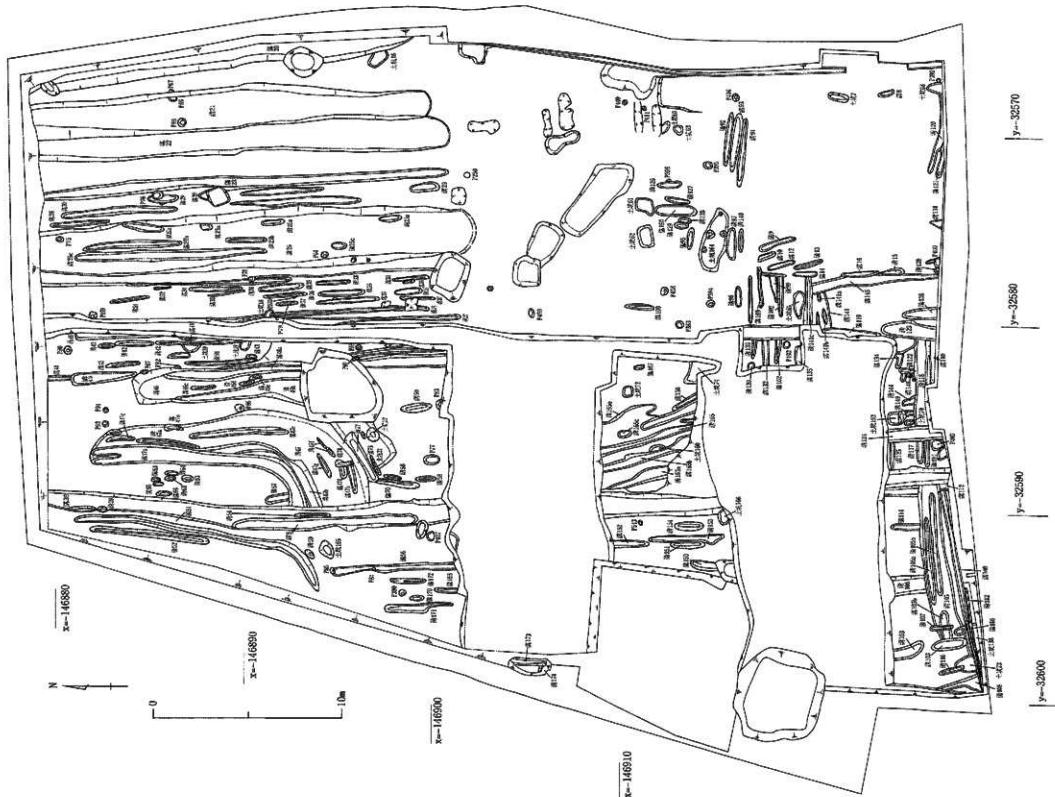
今回、中世の遺構及び弥生時代~平安時代の遺構を検出した。ここでは代表的な遺構について述べることとし、土坑やピットに関しては表2に記す。なお調査の都合上、遺構番号と遺構の該当時期が逆転するが、ここでは現地調査の遺構番号のまま用いることとする。

中世の遺構

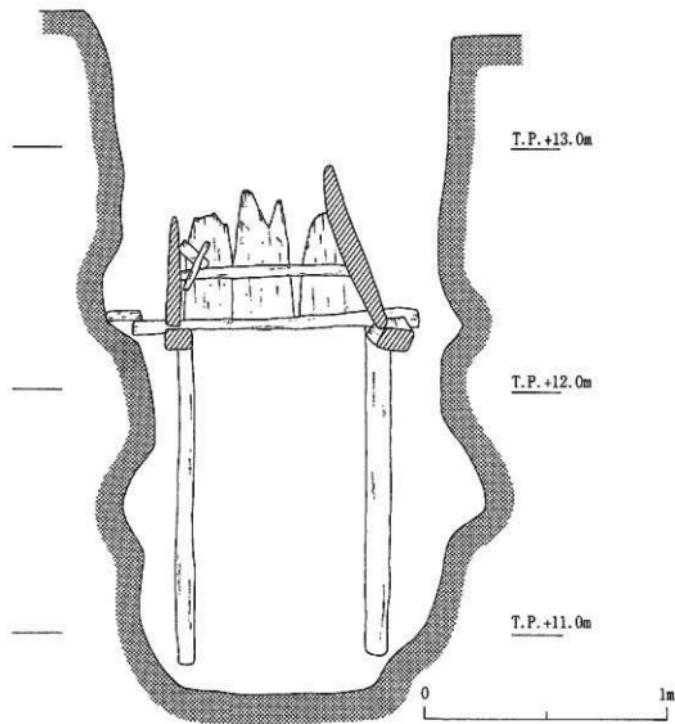
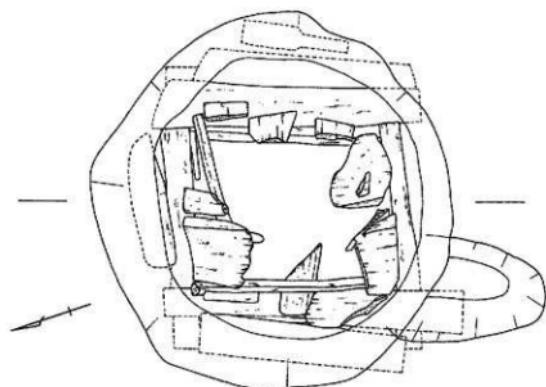
第3b層下面で多数の衛溝と思われる溝と石列、土坑、ピットなどを検出した。また落ち込みを調査区北側で検出したが、おそらく耕作に伴うものと思われる。

溝

ほとんどが南北方向に走るが、調査区南端になると東西に走る溝も見られる。幅30~50cmほどで、深さは10cmほど、断面は幅広いU字形を呈する。耕作に伴う衛溝と思われる。また中には幅1.5mを越すものが数条ある。おそらくこれらも耕作に伴う溝と思われる。弥生土器、土師器、須恵器を含む



第5図 遺構平面実測図（中世）



第6図 井戸1実測図

溝が多いが、中には瓦器片を含むものもある。

石列 1

調査区を北から南に走る石列 1 を検出した。石列は川原石を 1 ~ 2 段積み上げた状況で残存していたが、調査の都合上、機械掘削時に撤去した。石列の東側と西側ではおよそ 30cm の高低差があるため、この石列は棚田を区画するためのものと思われる。瓦器、中世土師皿、近世灯明皿、磁器の破片がわずかに出土している。

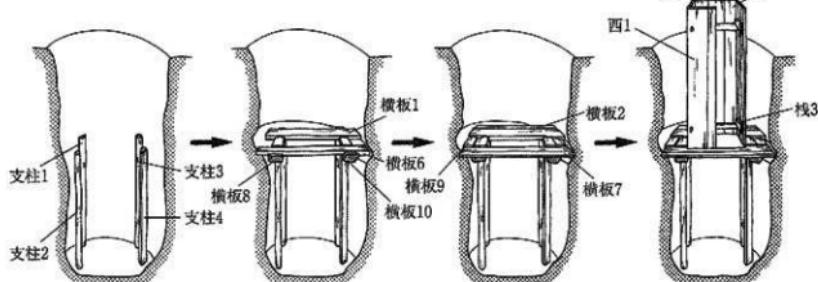
奈良時代～平安時代の遺構

4 層上面で、土坑、ピットなどを検出した。また調査区東南隅では井戸を 3 基検出した。土坑やピットは、検出数は少ないが調査区の南側にやや集中する傾向が見られる。

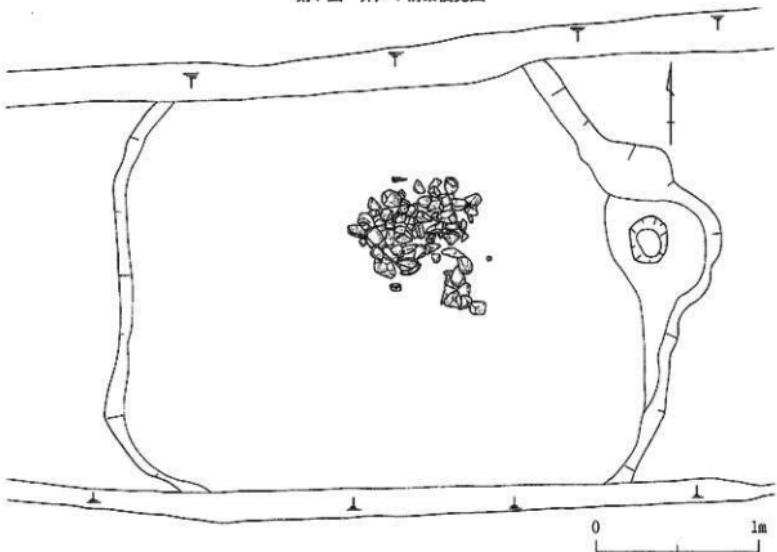
井戸

井戸を 3 基検出したが、いずれも木枠が残存する。また井戸 7 が井戸 5 の下から検出されたことか

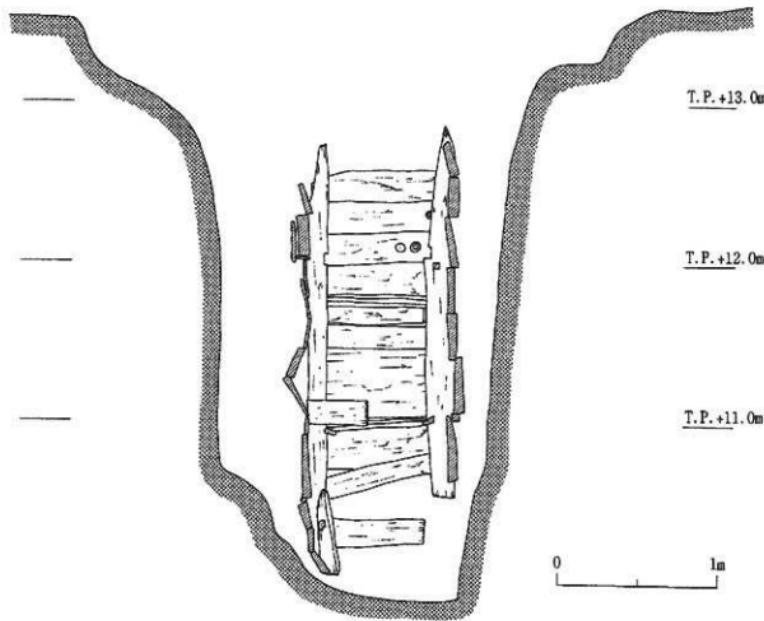
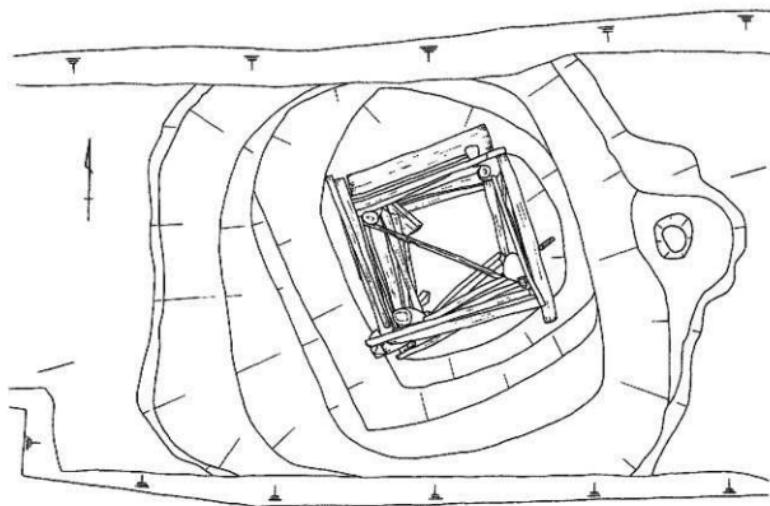
東3 東2 東1



第7図 井戸 1 構築復元図



第8図 井戸 5 集石状況実測図



第9図 井戸5・7実測図

ら井戸 5 は井戸 7 を造り直し使用した井戸であることがわかった。

井戸 1 は調査区南東隅で検出した。直径約1.6m、深さ2.5mの円形の井戸である。井戸枠は、まず井戸の底に4本の支柱を打ち、その上に組み板を用い横に板を並べ、さらにその上部に板を縦方向に組んだ約0.7m四方の継板組横桟どめの井筒になっている(図7)。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)粘質土である。井戸枠内は2層に分かれる。上層は埋土で黒褐色(2.5Y3/2)粘質土、下層は堆積土と思われ、黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂混じり粘質土で、細粒砂を多く含む。上層から土師器の壺や甌が、井戸の底からは十数点の土師器壺や口縁を打ち欠いた須恵器甌、曲物などが出土している。また下層から甌中が出土していることからも、井戸 1 では何らかの祭祀が行われていたと推測される。このほかに下層からはモモなどの種や小動物の骨などが出土しており、出土遺物から奈良時代末~平安時代初めに属する遺構である。

井戸 5、7 は井戸 1 から西南に3mほど離れたところで検出した。平面は一辺約3mの隅丸方形を呈し、深さは約3.7mになる。井戸 5 は3層に分層でき、①、②層は井戸の埋土、③層は掘り方の埋土と考えられる。①層は黒褐色(10YR3/2)小礫混じりシルト、②層は黒褐色(10YR3/1)小礫混じりシルトで、黄褐色(2.5Y5/4)粘土を少量含む。③層は黒褐色(10YR3/1)シルト、一部オリーブ褐色(2.5Y4/6)に変色している。②層上面から集石を検出し、その下面からは井戸枠を検出した。おそらくこの集石は非戸を埋めた時に伴うものと思われる。集石内から平瓦と土師器甌が出土している。①~②層からは土師器や須恵器、③層からは土師器のミニチュア土器などが出土している。井戸枠は4本柱を立てそれに横板を添わす横板組隅柱どめである。隅柱がずれないように途中2箇所、四方に棧を入れ、最上面の木枠から深さ1.6mのところの木枠内に斜め方向のかましが入っていた。また南側の横板を補強するために木枠の外側に継板を立てかけている。井戸枠内は2層に分層でき、①層はオリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂混じりシルトで、細粒砂をブロック状に含む。②層はオリーブ黒色(7.5Y3/1)細粒砂混じりシルトで細粒砂を多量に含み、また小~大礫含む。井戸枠内①層からは土師器や須恵器が出土している。また墨書き土器が数点出土しているが、これらは井戸 7 にともなう可能性がある。これらの遺物から平安時代初頭、井戸 1 よりやや新しいものと推測する。井戸 7 は井戸 5 の下面から検出した。埋土は掘り方が井戸 5 ③層と、井戸枠内が井戸枠内②層に相当する。現存した木枠から井戸 5 同様横板組隅柱どめと考えられる。ただ隅柱と東側の横板は残っておらず、隅柱には短い支柱に棧を渡し西側の横板を支えていた。このことから、井戸 7 を造り替える際、井戸 7 の木枠は一部再利用されたと考えられる。また造り替える際に、井戸を一回り大きくしたことが木枠と掘り方からわかる。

土坑

0.7~1mほどの方形の土坑を検出した。これらは柱穴の可能性が高いが、建物の復元には至らなかった。

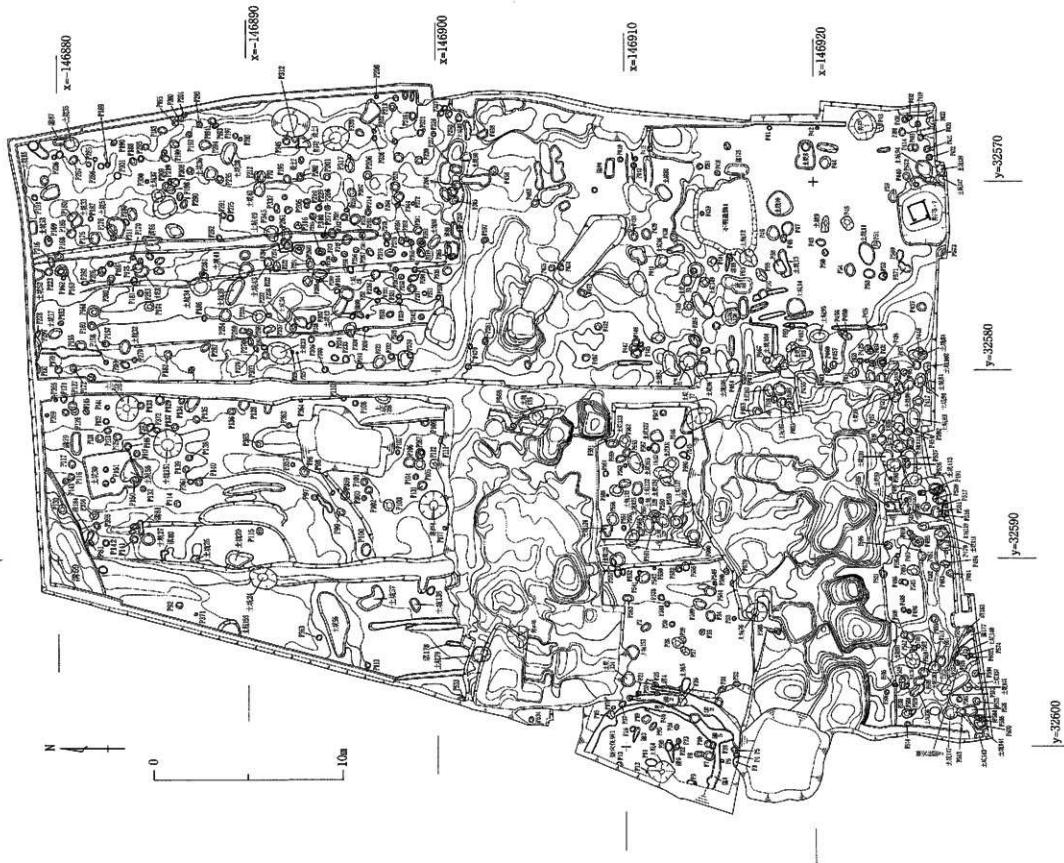
土坑126を調査区南側で検出した。擾乱による一部切断されているが、長さ1m、幅0.6mの方形を呈すると思われる。底面が10cmほど落ち込む所に、2個の焼石を検出した。方形の焼石は上面のみ、円形の焼石は全面的に火をうけているが、土坑の壁には焼けた痕跡が見られなかった。

古墳時代の遺構

溝や土坑、ピット、不明遺構を検出した。

溝

溝69を調査区北西隅で検出した。東西7.5m以上、幅3m以上で、調査区北西隅に向かって緩やかに落ち込む。埋土は2層に分層でき、①層は黒褐色(2.5Y3/2)少礫混じり粘質土で、暗褐色(10YR4/3)粘質土を含む。②層は黒褐色(10YR3/2)小~中礫混じり粘質土で、暗褐色(10YR4/3)粘質土を含む。土師



第10図 遺構平面実測図（弥生～平安時代）

器、須恵器、弥生土器などが多く出土した。

土坑

調査区の南側でややまとまって検出した。0.7~1mほどの土坑が多く、柱穴の可能性があるが、建物の復元には至らなかった。土師器、須恵器、製塙土器などが出土しており、主に古墳時代中期~後期のものである。

土坑30は、調査区北西で検出した、長さ約2.6m、幅約2.3mのほぼ方形の土坑である。深さも7cmと浅い。土師器や須恵器の破片が出土しているが、性格などは不明である。

ピット

柱根などをもつピットは検出できなかった。土師器、須恵器、製塙土器などが出土しており、多くが古墳時代中期~後期に属す。

不明遺構

調査区東南で1基検出した。平面は隅丸の台形を呈すると思われる。埋土は黒褐色(2.5Y3/2)小~中疊混じりシルトで、褐色(7.5YR4/6)砂質

土を含む。遺構内からは土師器片や製塙土器がわずかに出土した。その性格・時期などは不明である。

弥生時代の遺構

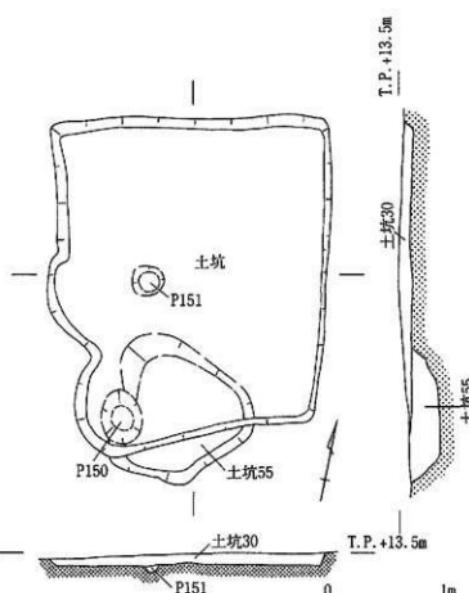
4層上面で竪穴住居、井戸、土坑、溝、焼土、ピットなどを検出した。

竪穴住居

調査地西南隅で円形の竪穴住居を2棟検出した。竪穴住居1は住居の東半分を検出した。残念ながら西半分は調査区に隣接する道路によりすでに削平されている。中央に炉穴があり、周溝が二重に巡ることから、一度拡張していることが推測できる。当初は直径約7.6m、拡張時には直径10mほどになる。住居跡からは壺、甕、高杯、器台などの多量の弥生土器とともに砥石、石鎌、削器、石槍などが出土しているが、この住居は弥生時代後期のものと思われる。竪穴住居2は住居の北端をわずかに検出した。古墳時代の土坑により壊され、周溝もわずかに検出できたのみである。直径は7mほどになると思われる。遺物はあまり出土しておらず、時期の確定は難しい。

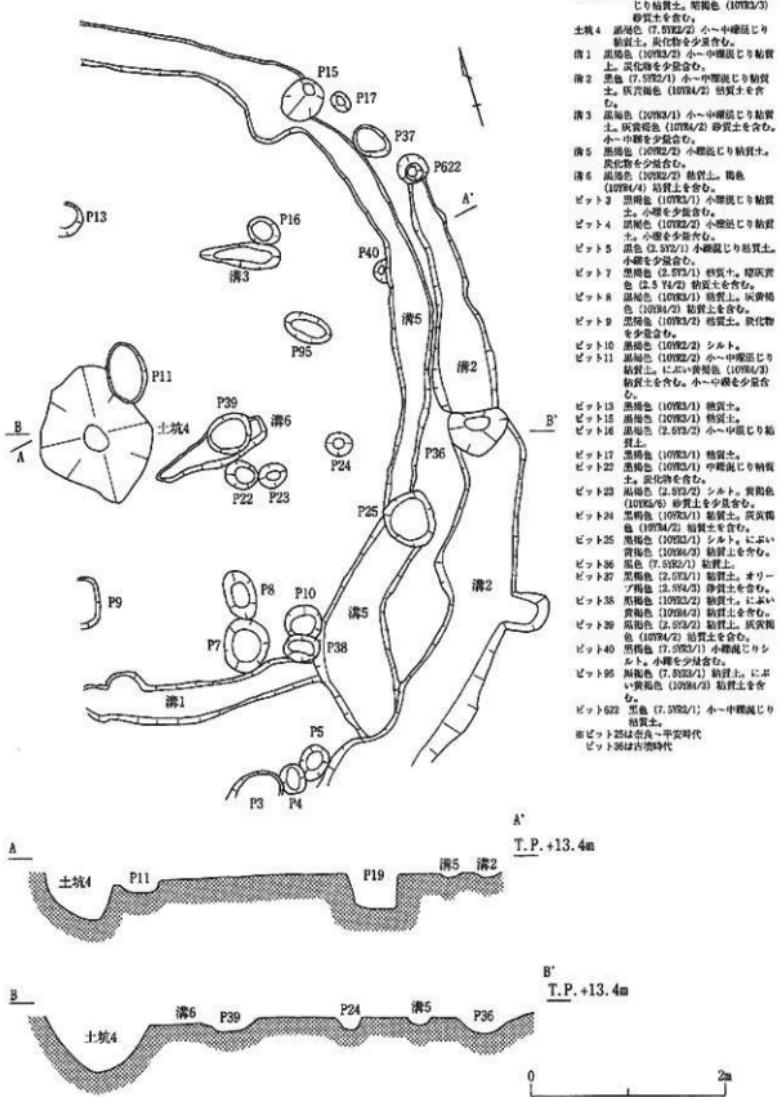
井戸

弥生時代の井戸も3基検出している。いずれも素掘りで、円形の井戸である。井戸2は直径1.2m、深さ1.3mほどである。3層に分層でき、①、②層は井戸の埋土、③層は井戸の堆積層と思われる。②層の下面では井戸に敷き詰められたかのような集石状況が見られた。①層~②層にかけて多量の弥



第11図 土坑30実測図

土坑30 黒褐色 (10YR3/1) 小~中疊混じり粘質土
土坑35 黑褐色 (10YR2/2) 小疊混じりシルト。灰白色 (10YR4/2) 粘質セラメカ物を含む。
ピット150 黒褐色 (20YR2/2) シルト。に付帯褐色 (10YR4/4) 砂質土を含む。
ピット151 黒褐色 (20YR2/2) シルト。褐色 (10YR4/6) 粘質土と粘化物を含む。



第12図 竪穴住居1 実測図

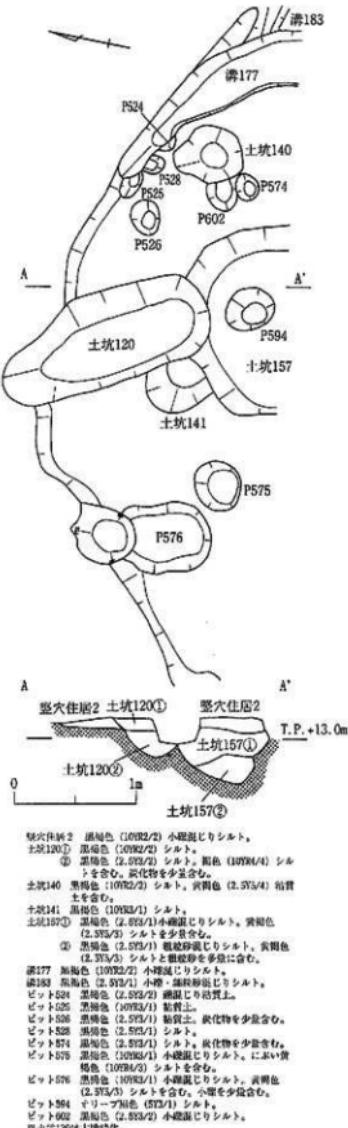
生土器が出土したが、③層ではあまり遺物は見られなかった。またイノシシの頸骨も出土している。出土遺物から弥生時代中期の井戸と思われる。井戸4は直径1.5m、深さ1.6mほどの井戸である。埋土は単層であったが、多量の弥生土器や石槍が出土しており、弥生時代中期の層属。井戸6は直径約1m、深さ1.8mほどの井戸だが、上部を現代の搅乱により削平されており、本来の深さは2.1mほどではないかと推測する。この井戸も3層に分けられ、③層は井戸の堆積土と思われる。②層からは多量の弥生土器の壺、甕、高杯などが出土した。同じく弥生時代中期に属す。

土坑

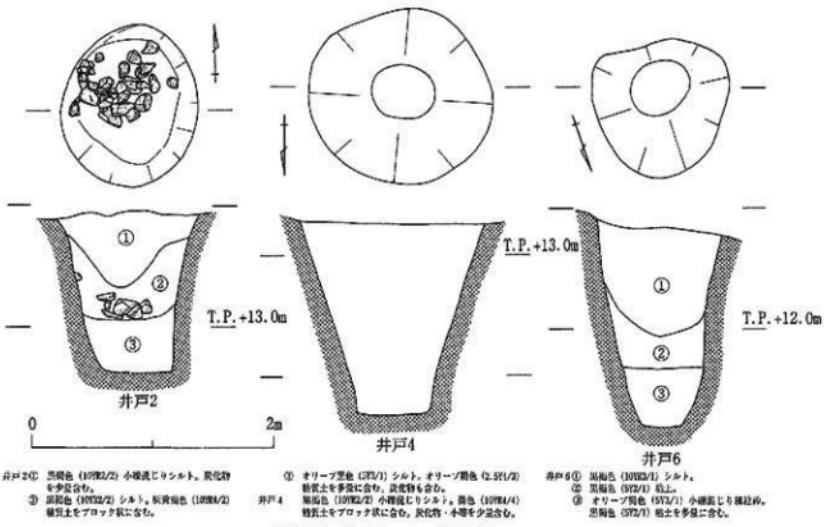
多数の土坑を検出したが、ここでは直径と深さが1m前後の円形土坑について取り上げ、便宜上、「井戸状土坑」と呼ぶことにする。この「井戸状土坑」は調査区内で10基検出されている。

土坑23は長径1.3mの梢円形を呈し、深さは0.8mほどである。単層だが、検出面より20cmほどのところで弥生土器の高杯、鉢、甕などがまとまって出土した。土坑24は、「井戸状土坑」に分類した中では最も大きく、平面が長径1.5mの梢円形を呈し、深さは約1.5mである。埋土は2層に分層できる。打製石槍や動物の骨が出土している。土坑25は直径約1.3mで、深さ約0.8m。埋土は2層に分層できる。土坑34は直径約1mで、深さ約1.1mで単層である。土坑35は直径0.8mほどで、深さは約0.8mである。弥生土器とともに石錐が出土している。土坑76は長径1.1mの梢円形で、深さは約0.9m。埋土は2層に分層できる。土坑77は、造構の東側と西側を現代の搅乱によって削平されているが、平面形は直径1.4mほどの円形に復元できる。深さは約1.1m。埋土は2層に分層でき、①層からは多くの弥生土器が出土したが、②層はあまり遺物を含まなかった。土坑79は直径約0.9mで、深さは約0.9m。埋土は3層に分層できる。イノシシの頸骨が出土している。土坑113は直径0.8mで、深さ0.7m。単層で、弥生土器とともに磨製石包丁が出土している。土坑135は直径、深さともに約0.8mである。単層で、動物の骨が出土している。土坑151は直径1.5mで、深さ1.1mである。埋土は3層に分層でき、①層と③層より動物の歯や骨が出土している。

これら「井戸状土坑」はほぼ炭化物を含み、多量の弥生



第13図 壁穴住居2実測図



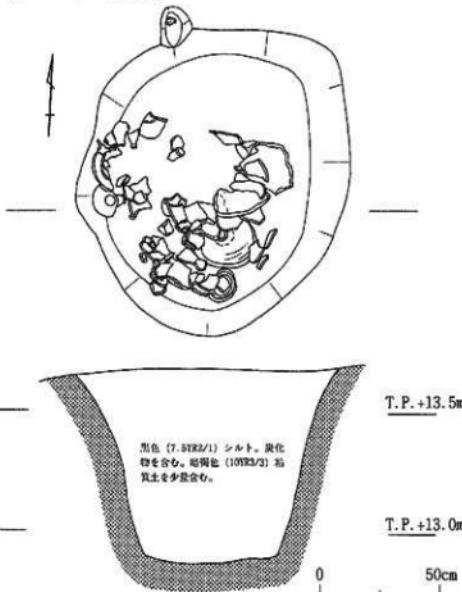
第14図 井戸 2・4・6 実測図

土器が出土することが共通している。出土土器よりいずれも弥生時代中期のものと思われる。これら造構の形状はきわめて井戸に近く、土坑24のように井戸の可能性が高いものもあるが、ほとんどが井戸にするにはやや深さが足りないようと思われる。このような土坑は昭和16~17年の調査や第23次調査、鬼虎川遺跡第7次調査でも検出された土坑に酷似しており、鬼虎川遺跡第7次調査では土坑内から未成品の木製品が出土したことから貯蔵穴と考えられている。

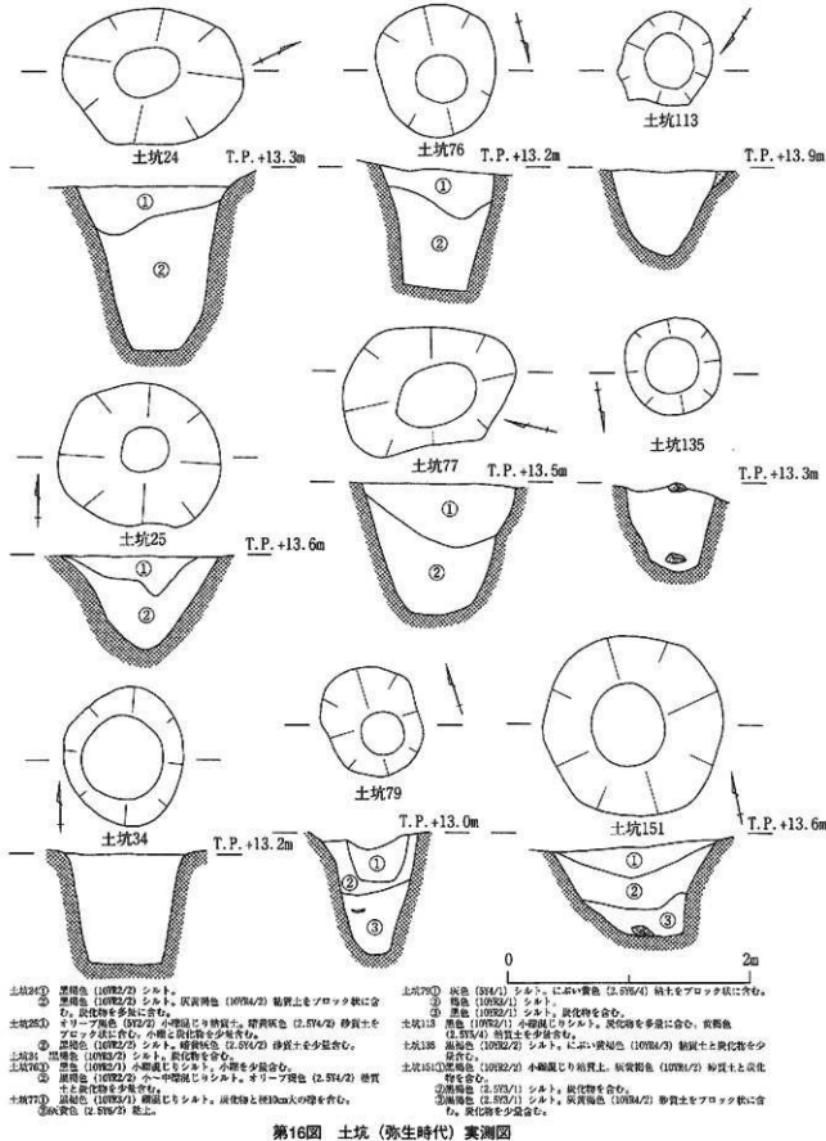
土坑12は、長径1m、短径約0.8mの梢円形土坑である。断面は台形を呈し、深さは約0.7mである。土坑37は直径0.6mほどの円形土坑で、深さは40cmほどである。ともに大量の弥生土器が出土し、弥生時代中期に属すと思われる。

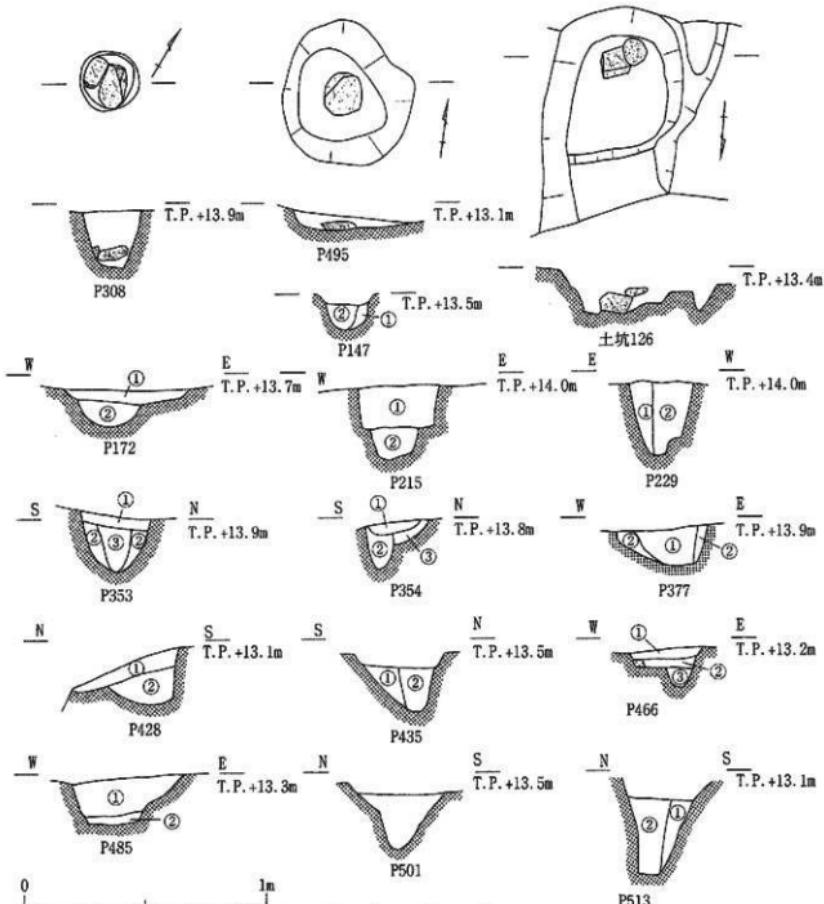
ピット

400以上のピットを検出した。



第15図 土坑23実測図





赤丸→半焼時代：土坑126、ピット215、ピット485、ピット512

古焼時代：ピット425、ピット308

未焼時代：ピット495、ピット147、ピット172、ピット229、ピット353、

ピット354、ピット377、ピット428、ピット466、ピット501

- | | | |
|--------|--|--|
| 北坑126 | 墨褐色 (2.95/1) シート。に灰土 (2.55/2) シートをプロック灰土に含む。 | ④ 墨褐色 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット308 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット321 (2.95/1) シート。 |
| ピット495 | 墨褐色 (2.95/1) シート。黄褐色 (2.95/2) 削り土を含む。 | ピット325 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物 (2.55/2) 分上土を含む。 |
| ピット147 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット349 (2.95/1) 中間層にリテラント。灰化物 (2.55/2) 分上土を含む。 |
| 土坑126 | 墨褐色 (2.95/2) 小切削じき粘土土。灰化物と小砾を少量含む。 | ピット350 (2.95/1) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット172 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット352 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット229 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット353 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット353 | 墨褐色 (2.95/2) (2.95/2) シート。 | ピット354 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット354 | 墨褐色 (2.95/2) (2.95/2) シート。 | ピット355 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット377 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット356 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット428 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット357 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット466 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット358 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| ピット485 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット359 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| P501 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット360 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |
| P513 | 墨褐色 (2.95/2) シート。 | ピット361 (2.95/2) 中間層にリテラント。灰化物を含む。 |

第17図 土坑126・ピット実測図

特に調査区東側中央部分に集中する。ピット308やピット495では底面で石を検出している。いずれのピットも柱根が残っておらず、建物の復元は難しい。また、ピット316では小型の甕が逆さまの状態で出土した。

表2 遺構一覧表
土坑

平面形	長幅	深	出土遺物	時代	平面形	長幅	深	出土遺物	時代	平面形	長幅	深	出土遺物	時代
1 直円形	180×70	6	漆	古墳	66 圓周形	100×360以上	20		古墳	97 四方形	465以上×45	19		馬鹿
2 直円形	680以上×40	7	陶、土、瓦、骨	中古	66 圓周形	100×360以上	24	陶、石	後生	98 圓周形	540×33	13		鉢底
4 円形	144×114	65	陶、土、石、骨	後生	66 圓周形	80×70	26	陶	古墳	99 圓周形	74×46	36	盆、土、瓦	古墳
5 圓形	82×62	43	陶、土、石、骨	後生	66 圓周形	850以上×64	5	陶	後生	100 圓周形	90×36	26	盆	古墳
7 圓形	180×43	13	陶	中古	66 圓周形	112×94	12	陶	古墳	101 圓周形	687×48	22		古墳
9 方形	182×109	47	陶、土、瓦、基盤	奈良～平安	66 圓周形	65×66	13	陶	後生	102 圓形	560×33以上	39	上、伝、私財	古墳少層
9 圓形	69×35	20	陶、土、瓦、製陶	古墳	63 方形	70×48	15	土、陶、製陶	古墳中期	103 圓周形	80×62	39	陶、土、瓦	古墳
10 正方形	143×135	7	陶	古墳	64 圓周形	114×54	12		古墳	104 圓周形	100×46	39		古墳
11 直円形	127×90	23	土、瓦、質陶、瓦	中古中期	65 圓周形	130×122	18	陶	後生	105 圓周形	85×50	21	盆、土、瓦	古墳
12 圓形	162×65	43	陶、瓦、骨	後生中期	66 圓周形	106×105	20		後生	106 圓周形	67×38	21	盆、土、瓦	古墳
13 圓形	144×56	16	陶、土、瓦、製陶	奈良～平安	67 圓周形	145×74	9	陶	後生	107 圓周形	54×48	39	盆、土、瓦、製陶	古墳
14 正方形	98	33	陶、土、瓦、石	古墳	68 圓周形	106×44	24	陶	奈良～平安	108 圓周形	465×47	26	盆、石	冠丸～平安
15 圓形	94×105以上	20	陶、土、瓦	古墳	69 圓周形	472以上×43	3		中古	109 圓周形	643以上×58	21	盆、土、瓦	古墳
16 不規則	120×17	13	土	中古	61 方形	97×77	5	土	中古	111 圓周形	457×46	16	盆、土、瓦	奈良～平安
17 圓形	60×38	11	陶、土	奈良～平安	62 圓周形	118×52	12	陶、土	中古	112 圓周形	76	71	陶、石、灰土	古墳中期
18 圓形	52×39以上	6	陶	中古	63 圓形	83×51	3	陶、土、瓦器	中古	114 圓周形	87×72	28	盆、土、製陶	奈良～平安
19 圓形	60×41以上	3		中古	65 圓形	145×57	5	陶、土、瓦	中古	115 圓周形	76×49	12	陶、土、瓦	中古
20 圓形	147×83	23	陶、土、瓦	古墳	66 圓周形	109×105以上	22	陶、土、瓦	中古	116 圓周形	722×62	21	盆、土、瓦	奈良～平安
21 方形	227以上×180	5	陶、土、瓦、瓦器	中古	67 圓周形	133×31	6	陶、土	中古	118 圓周形	71×265以上	23	盆、土	奈良～平安
22 正方形	77×39	2	陶、土、瓦、瓦器	中古	72 圓周形	105×57	17	陶、土、瓦	古墳	119 圓周形	123×82	25	盆、土、瓦	古墳
23 圓形	138×112	52	陶、瓦、骨	後生中期	73 圓周形	125×105	6		中古	120 圓周形	178×76	39	盆、土、瓦、石	古墳
24 圓形	181×110	146	陶、石、骨	後生中期	74 方形	140以上×117	14		中古	121 圓周形	190×38	19	盆、土、瓦	古墳
25 圓形	136×115	80	陶、石	後生	75 方形	63×75	12		古墳	122 圓周形	69×51	16	陶、瓦	古墳
26 圓形	68×41	7	土	古墳	76 圓周形	110×55	2	陶、土、瓦器	古墳中期	123 圓周形	91×52	42	土、瓦	古墳中期
27 圓形	72×62	17	陶	奈良～平安	76 圓周形	144以上×103以上	119	陶、石	後生中期	124 圓周形	67×40	31	盆、土	古墳
28 圓形	107×72以上	54	陶、石	後生	77 圓周形	94×72	162	陶、石、骨	後生中期	125 圓周形	88×64	36	陶、土、瓦、制陶	古墳中期
29 圓形	903.1×35	23	陶	中古	78 圓周形	96×58	22	陶、土、瓦	古墳	126 圓周形	823以上×70	22	盆、土、瓦	奈良～平安
30 圓形	258×227	7	陶、土、瓦、石	古墳	81 圓周形	121以上×105以上	16	陶、土、瓦	後生	127 圓周形	96×60	29	盆、土、瓦	古墳中期
31 圓形	80×46	5	陶	後生	82 圓周形	135以上×54	20	陶	後生	128 圓周形	78×64	52	盆、土、瓦	古墳中期
32 圓形	74×52	26	陶	後生	83 圓周形	105×67	12	土、瓦	古墳	129 圓周形	64	19		骨
33 圓形	22×46	13	陶	古墳	84 圓周形	98×48	25		後生	130 圓周形	58×45	11	盆、土、瓦	古墳中期
34 圓形	108×45	196	陶、石	後生中期	85 圓周形	112×72	56	陶、土、瓦	奈良～平安	131 圓周形	77×72	37	盆、土、瓦、制陶	古墳中期
35 圓形	28	陶、石	後生中期	86 圓周形	96×26	36	陶、土、瓦	古墳中期	132 圓周形	74×36	46	盆、土、瓦	古墳中期	
36 圓形	24	30	陶	後生	87 圓周形	138×75	19		古墳	133 圓周形	68×41	20	盆	奈良～平安
37 圓形	45	34	陶	後生	88 圓周形	106×65	19	陶、土、瓦	古墳	134 圓周形	93×62	30	盆、土、瓦	古墳
38 圓形	120×68	23	陶	奈良～平安	89 圓周形	104×53	41	陶、土	古墳	135 圓周形	79	27	陶、土	古墳中期
39 圓形	188×67	30	陶	後生	90 圓周形	95×60	15	陶、土、瓦	古墳	136 圓周形	79×38	15	陶、土	後生
40 圓形	214×85	25	陶	後生	91 圓周形	75×52	36	土、瓦、瓦器	奈良～平安	137 圓周形	70×58	26	盆、土、瓦	古墳中期
41 圓形	85×55	15	陶	後生	92 圓周形	81×61	14	陶、土、瓦	古墳	138 圓周形	110以上×68以上	7	陶、土、瓦、石	小舟
42 長方形	186×68	36	陶	後生	93 圓周形	98×85	47	陶	後生	139 圓周形	635以上×43	17	土、瓦	古墳
43 圓形	88×82	47	陶	後生	94 圓周形	92×75	17		後生	140 圓周形	46	20		後生
44 圓形	24×64	34		古墳	95 圓周形	108×38	21	陶、土、瓦	古墳	141 圓周形	84?	2	陶	後生
45 圓形	96	36	陶	古墳	96 圓周形	97×71	32	陶、土、瓦	後生	142 圓周形	897×303以上	20	奈良～平安	

平田村	属地	総面積	山地	平原	水田	林地	未上地物	開墾	半田村	総面積	在	山土塙化	時間
144 田原 428.1	23 佐、木、原	桑島~平安	150 内田	65ha7×62	19 無、石	稻作	162 半田村	32×20以上	2			中性	
147 沢内田 548.1上×48	24		泽生	154 内田	28×70	44 佐、御室、青	古墳	162 方形	68×60?	30	石	中性	
148 沢内田 137×47	25	佐生	泽生	155 沢内田	120×75	33 佐、木、原	古墳	163 半田村	120×1.5×74	4		中性	
149 沢内田 160×39	26	佐、木、原、澤生	桑島~平安	156 沢内田	49×27	31 佐	古墳	164 半田村	320×132	6	土、砾、瓦器	中性	
150 沢内田 99×62	27	佐、木、原、澤生	桑島~平安	157 内田	137×79以上	45 佐	深淵	165 半田村	325×66	45		中性	
151 内田 153	28	佐、木	桑島~山	158 内田	127×66以上	9 佐	稻作	166 方形	290×1×40	4		中性	
152 154	29		佐生	159	28	18	中生						

ビット

半田村	属地	総面積	山地	平原	水田	林地	未上地物	開墾	半田村	総面積	在	山土塙化	時間
2 沢内田 39×36	30 佐、木	桑島~平安	44 内田	67×60	16 佐生	稻作	31 半田村	36×24	9	佐、海土地	中性		
3 内田 35×36以上	31		佐生	45 方形	28×51	35 佐、木、原	名島~平安	94 半田村	33×27	15	砂、土、起土塊	中性	
4 内田 33×28	32	佐生	佐生	46 内田	90×70	10 佐	佐生	35 半田村	34×28	7	砂	幼生	
5 沢内田 38×27	33 佐	佐生	47 沢内田	75×60	20 佐生	稻作	36 内田	35×48	8	砂	幼化		
6 沢内田 22×18	34	佐生	48 沢内田	42×32	18 佐生	稻作	37 内田	31	6	幼生			
7 沢内田 35×47	35 佐	佐生	49 沢内田	52×40	23 佐、松坂	内塙	38 半田村	28×20	7	幼生			
8 沢内田 52×33	36 佐、木	佐生	50 内田	36	23 佐	香港	39 内田	38×38	20	砂	幼生		
9 乍那 31×26以上	37 佐	佐生	51 内田	45×45	20 佐、木	古墳	40 半田村	38×39	13	幼生			
10 内田 37	38 佐	佐生	52 内田	45×34	10 佐、木、稻、無葉	内塙和斜	41 半田村	38	20	砂	幼生		
11 沢内田 45×41	39 佐、石、池底	佐生	53 沢内田	60×47	12 佐、木、原	古墳	42 半田村	41	14	砂	苔類		
12 沢内田 13×8	40 佐	佐生	54 沢内田	72×59	16 佐、木、原	古墳	43 半田村	38×56	8	幼、土	古墳		
13 内田 30×7×34	41 佐	佐生	55 沢内田	94×46	22 佐、生、稻	内塙	44 半田村	31×28	20	幼生			
14 沢内田 45×36	42 佐	佐生	56 内田	68	22 佐	古墳	45 半田村	38	14	幼生			
15 沢内田 33×27	43 佐	佐生	58 内田	72×68	20 佐、松坂	古墳	46 半田村	34×38	11	砂	幼生		
16 沢内田 22×17	44	佐生	59 沢内田	70×62	20 佐、木	内塙	47 半田村	28	12	幼生			
17 乍那 65×41	45 佐、木、利馬	古墳	60 内田	65	14	古墳	48 半田村	36	20	古墳			
18 沢内田 27×19	46	佐生	61 41	20 佐	古墳	49 半田村	42×28	26	幼生				
19 乍那 25×20	47 佐	佐生	62 45	7	佐生	稻作	50 半田村	24	14	幼生			
20 沢内田 34×25	48 佐	佐生	63 沢内田	42×30	20 上	古墳	51 半田村	42×25?	24		古墳		
21 乍那 30×25	49 佐	佐生	64 内田	50×19	8 佐	中生	52 半田村	38	18	砂	古墳		
22 乍那 25×24	50 佐	佐生	65 沢内田	47×33	9 朝	中生	53 半田村	29	6	砂	幼生		
23 乍那 33	51 佐、土	桑島~平安	67 内田	28	25 上	中生	54 半田村	35	17	砂	幼生		
24 乍那 35×16	52 佐	佐生	68 沢内田	45×23	16 佐、木、稻	中生	55 半田村	27	7	砂	幼生		
25 乍那 50×37	53 佐、土、原	古墳	69 内田	65×13	18 佐	古墳	56 半田村	36×33	7	砂	古墳		
26 乍那 45×32	54 佐	佐生	70 沢内田	35×38	7 中	古墳	57 半田村	42×37	9	幼生			
27 乍那 40?	55 佐、土	古墳	71 沢内田	38×46	7 个	中生	58 半田村	31	9		中生		
28 乍那 29	56 佐	佐生	72 沢内田	53×34	6 土、原	中生	59 半田村	28	17	砂	中生		
29 乍那 43×30	57 6 土、原	古墳	73 沢内田	36×27	23	中生	60 半田村	48×7×34	9		幼生		
30 乍那 44×36	58 6 土、原	古墳	74 内田	36	41	中生	61 半田村	32	12	砂	幼生		
31 乍那 20	59 6 佐	佐生	80 内田	37	11 佐、稻、瓦器	中生	62 半田村	34	6		幼生		
32 乍那 47×26以上	60 土	古墳	81 沢内田	32×18	16 佐生	稻作	63 半田村	41	9	砂	古墳		
33 乍那 35	61 土、原	古墳	82 内田	36	7 佐	中生	64 半田村	36×37	12	砂	古墳		
34 乍那 42×54	62	古墳	83 内田	87?	5 佐	中生	65 半田村	42	15	砂	古墳		
35 乍那 45×29	63 佐	佐生	84 沢内田	22×13	3 中	中生	66 半田村	48	17	砂	幼生		
36 乍那 38×28	64 佐	佐生	85 内田	25×21	5 佐	中生	67 半田村	32以上×50	10		幼生		
37 乍那 52×43	65 佐	佐生	86 内田	65×29	7 佐	中生	68 半田村	44	21	砂	古墳		
38 乍那 24	66 佐	佐生	87 沢内田	38×23	9 上、原	中生	69 半田村	31×49	18		幼生		
41 乍那 20×22	67	古墳	89 内田	32	44 佐、生、質出	中生	70 半田村	36	13		幼生		
42 乍那 16	68	佐生	90 沢内田	22以上×18	25 土	中生	71 半田村	36	8		幼生		
43 乍那 38以上×43	69 佐	佐生	92 沢内田	37×35	5 佐生	稻作	72 半田村	36	11 佐	幼生			

平面形	底面	深	出土遗物	时期	平面形	底面	深	出土遗物	时期	平面形	底面	深	出土遗物	时期
134 长方形	36×26	15		新石	102 西周	32	22	陶、瓦	商周	245 圆形	32×41	19		宋代
135 圆形	37	13	陶	陶	103 长方形	35×22	17		古砖	246 圆形	32×42	21		宋代
136 圆形	40×25	25	陶、石	陶	104 圆形	40	19		陶土	247 圆形	27	13		宋代
137 圆形	39	36		陶	105 圆形	36	16	陶	陶瓦	248 圆形	49×28	27	陶	宋代
138 圆形	40×32	12	土	陶罐	106 长方形	49×36	14	陶、陶罐	良渚~平安	249 圆形	35×46	16	陶	宋代
139 圆形	36×34	26		陶	107 圆形	28	16	陶	陶化	250 圆形	38.7		陶	宋代
140 圆形	40	9		陶	108 圆形	47×45	19	陶	古砖	251 圆形	28×35	16	陶、石	古砖
141 圆形	40	18	陶	陶灰	109 圆形	49×41	34	土	古砖	252 圆形	31×25	15		清末
142 圆形	31	20	陶	古砖	110 圆形	36	22		陶灰	254 圆形	68×60	16	陶	宋代
143 圆形	31×26	6		良良~平安	111 圆形	36	14		古砖	255 圆形	34×39	22	陶、土	古砖
144 圆形	26	6		古砖	112 圆形	35	13	陶生	256 圆形	35	26	陶	古砖	
145 圆形	31	27	陶、石、陶土罐	陶生	103 圆形	22	17	陶生	257 圆形	54×38	17	陶	古砖	
146 圆形	38	19	陶	古砖	104 圆形	33×27	29		古砖	258 圆形	41×29	29	砖	宋元
147 圆形	25×32	19	陶灰	陶灰	105 圆形	30	26	陶、土、陶罐	古砖	259 圆形	25×31	14		中宋
148 圆形	41×33	19	陶	陶生	106 圆形	45	22	陶、灰	古砖	260 圆形	68×46	49	陶、土、石	古砖
151 圆形	25	4	陶	陶灰	107 圆形	48×44	22		古砖	261 圆形	46×54	49	陶	古砖
152 圆内凹	82×53?	17	陶	陶灰	108 圆形	23×19	19	陶生	262 圆内凹	43×35	23	陶	宋良~平安	
153 圆形	38×4	18	陶、土	陶灰	109 圆形	48×32	12	陶生	263 圆内凹	42×36	12	陶	宋代	
154 长方形	38×44	17	陶、瓶、瓶底或	古砖	210 圆形	38×23	24		古砖	264 圆形	35×38	25	陶、石、陶	宋代
157 圆形	49×34	24	陶生	211 圆形	45×30	27	陶生	265 圆形	39×31	32	陶	宋代		
166 圆形	23	16	陶	陶生	212 圆形	42×36	20	陶生	266 圆形	36×36	9	陶	宋代	
155 圆形	42	24		中空	213 圆形	38×31	24	陶生	267 圆形	44×38	29	陶	宋代	
160 圆形	43	19		内壁	214 圆形	38×31	24	陶生	268 圆形	38				
161 圆形	54×17	14	土	古砖	215 圆形	34×38	23	陶、灰	269 圆形	41×38	12	陶	宋代	
162 圆形	24×29	34		陶生	216 圆形	45×30	27	陶生	270 圆形	43×38	26	陶、石	古砖	
163 圆内凹	20×56	42	陶、土、灰、陶罐、灰	长颈小口瓶	217 圆形	42×30	18	陶生	271 圆形	25	10	陶	宋良~平安	
166 圆形	29	36	陶	陶灰	218 圆形	36×26	12	陶生	272 圆形	25	7	陶	宋代	
168 圆形	48×38	13	陶	陶灰	219 圆形	36×16	12		陶生	273 圆形	43×24	11		
169 圆形	37×40	28	陶	陶灰	220 圆形	42	20	陶	盒盒~平安	274 圆形	37	5	陶、石	古砖
170 圆形	26	14	陶	陶灰	221 圆形	46	16	陶	古砖	275 圆形	36	14	陶	古砖
172 圆形	31	12	陶	陶灰	222 圆形	43×36	19	陶生	276 圆形	38×23	22	陶	古砖	
174 圆形	52×46	16	陶	陶灰	223 圆形	42	23	陶生	277 圆形	136×744上	20	陶	古砖	
175 圆形	56×47	26	陶	陶灰	224 圆形	46×41	29	陶生	278 圆形	43×34	11	陶	宋代	
176 圆形	60×56	6	陶灰	225 圆形	35	30	陶、石	陶生	279 圆形	27	16	陶	宋代	
177 圆形	21	22	陶	陶生	226 圆形	44×45	16	陶	陶生	280 圆形	50×36	16	陶	宋代
178 圆内凹	60×56	21	陶、石	陶灰	228 圆形	36×21	26	陶、土	古砖	281 圆形	41×22	15		
179 圆形	36	19	陶	古砖	229 圆形	34	31	陶	陶生	282 圆形	33	15		
180 圆内凹	53×42	9	陶	陶生	231 圆形	22	17		片玻璃	283 圆形	33×34	30	陶	古砖
181 圆内凹	44×34	18	陶	陶灰	232 圆内凹	32×24	4	陶	陶生	285 圆形	28×24	13	陶	宋代
182 圆形	40×49	16		六瓣	233 圆形	41×36	20	陶	陶生	286 圆形	21	12	陶	宋代
183 圆内凹	52×34	5	陶	陶罐	234 圆内凹	36×26	20	陶	陶生	288 圆内凹	18×14	14	陶	宋代
184 圆内凹	36×28	17	陶、土	古砖	235 圆形	48×38	16	陶	陶生	289 圆内凹	18×14	9	陶	宋代
185 圆形	32×44	19	陶	陶灰	236 圆形	22	22	陶	陶生	290 圆内凹	44×31	22	陶	古砖
186 圆内凹	32×26	28	陶	陶生	237 圆内凹	48×34	45	陶	陶生	291 圆形	24	15		
187 圆内凹	26	6	陶	陶生	238 圆形	28	36	陶、石	陶生	292 圆内凹	37×30	22	陶	宋代
188 圆内凹	41×33	29	陶	古砖	240 圆内凹	31	8	陶	陶生	293 圆内凹	34×28	15		
189 圆形	37	13		古砖	241 圆形	25	10	陶	陶生	294 圆形	40×30	16	陶	宋代
190 圆内凹	32×25	22	陶	陶生	242 圆形	37×44	13	陶	陶生	295 圆形	36×32	13	陶	宋代
191 圆形	38×39	15	陶	陶生	243 圆形	29×26	10	陶	陶生	296 圆内凹	50×40	29	陶、土	古砖

平面图	地层	带	出土器物	特征	平面形	规格	层位	出土遗物	时间	平面图	规格	带	出土器物	特征
207 内形	36×36	22	花生	303 盆形	32×42	27	5#	陶盆	412 内形	29	16	青釉		
208 内形	29×33	23	花生	304 盆形	41×32	36		陶盆	413 内形	39×31	18	花生		
209 内形	22×23	11	花生	305 盆形	34×26	25		陶盆	414 内形	26	15	花生		
210 内形	35	18	花生	306 内形	46×43	15		吉字	415 内形	40×35	7			中孔
212 仰内形	54×36	21	花生	307 内形	23	8		吉字	417 仰内形	38×48	17	5#,6#	吉字	
213 内形	35	25	花生	308 盆形	38×23	14		中孔	418 内形	27	9	花生		
204 内形	37	22	5#,6#	309 内形	45	31	土	带鱼~平底	419 内形	29	12	深灰		
205 仰内形	37×36	17	花生	310 内形	26	5		花生	420 花内形	29×31	19	5#	花生	
207 仰内形	34×29	34	花生	311 内形	35×25	18		吉字	421 内形	26	8			
208 内形	36	23	吉字	312 内形	25	7		花生	422 内形	31	14	吉字		
210 内形	35×36	22	花生	313 内形	35	14		花生	423 内形	31×43?	14	5#,6#,7#,8#	吉字	
211 内形	33	9	花生	314 内形	29.7×31	5		花生	424 仰内形	36.3×26	61	5#	鱼纹~平底	
212 仰内形	36.3×36	5	花生	315 内形	41×36	27	5#	油渣	425 内形	36	14	上	带鱼~手印	
214 内形	32×35	13	花生	316 内形	25×36	8	年	吉字	426 内形	28×30	18		花生	
215 内形	37	25	花生	317 内形	52×46	15	舟	吉字	427 内形	46	15		花生	
217 内形	19	3	花生	318 内形	35×31	26	舟	油渣	428 仰内形	26.3×27	23	农	花生	
218 内形	56×51	29	5#,6#	319 内形	19	11		吉字	429 仰内形	28×48	13	土,灰	油渣~手印	
219 内形	33	23	5#,6#	320 盆形	42×32	13		中孔	430 仰内形	38×39	12		花生	
220 仰内形	48×36	7	花生	321 内形	18×34	9		油渣	431 仰内形	28×22	23		花生	
221 内形	36	9	带鱼~手印	322 仰内形	38×38	10		油渣	432 内形	38×22	8		吉字	
222 内形	22	14	花生	323 仰内形	34×35	13		小盒	433 仰内形	34×27	5	青	深灰	
223 仰内形	77×39	17	花生	324 仰内形	35×35	17	5#	带鱼	434 仰内形	28×12	34		花生	
226 内形	73×62	24	花生	325 仰内形	36×41	28		花生	435 仰内形	34×30	24	黑,土,灰	油渣	
225 仰内形	12	19	花生	326 内形	22×28	25		花生	436 内形	48	19	黑,石	吉字	
226 内形	26	36	花生	327 仰内形	36×39	23		花生	437 内形	49×41	3		花生	
227 仰内形	28	11	花生	328 仰内形	35×35	10		油渣	438 仰内形	43×36	25	黑,土	带鱼~手印	
228 内形	27	9	花生	329 仰内形	45	8		花生	439 内形	22	7		吉字	
229 内形	16	9	花生	330 仰内形	39×39	14		花生	440 内形	28	6	深	花生	
230 仰内形	33×37	15	花生	331 内形	42	16	5#	中孔	441 仰内形	72×59	35	深	带鱼~手印	
231 仰内形	26	9	花生	332 仰内形	42×36	10		中孔	442 仰内形	20×28	19	深	花生	
232 仰内形	31	10	花生	333 仰内形	78×95	7		花生	443 内形	39±7	4		花生	
233 仰内形	44×38	26	花生	334 仰内形	35×28	17		中孔	444 内形	31	14		深灰	
235 内形	39×31	9	花生	335 仰内形	38×31	3		中孔	445 内形	31×38	11	5#,6#	吉字	
236 内形	39	14	吉字	336 仰内形	39×34	11		花生	446 内形	44×36	13	深	带鱼~手印	
238 仰内形	31×34	13	米粒	337 仰内形	23	7	5#,6#	吉字	447 仰内形	49×38	14	深	吉字	
239 仰内形	51×38	11	花生	338 仰内形	37	18		花生	448 内形	42	18		花生	
240 内形	31	12	5#	339 仰内形	48×37	8		中孔	449 内形	47	22	土,灰	吉字	
241 内形	19	6#	花生	340 内形	32	8		中孔	450 仰内形	53×39	22	5#,6#	吉字	
242 内形	30	10	花生	341 仰内形	40	9	5#,6#	带鱼~手印	451 内形	53	25	深	花生	
243 内形	30×36	19	花生	342 仰内形	36×36	4		花生	452 内形	39	16	深	花生	
244 内形	44	6	带鱼~手印	343 仰内形	36×36	1		中孔	453 仰内形	40×44	20		深灰	
245 内形	29	33	花生	344 仰内形	56×26.3	8	5#,6#	中孔	454 内形	41×40	6		吉字	
246 内形	36	17	花生	345 仰内形	39×36	3	5#,6#	中孔	455 内形	41×41	20		花生	
247 内形	38	14	5#	346 仰内形	36×32	29		中孔	456 内形	39	19		花生	
248 内形	20	10	带鱼~手印	347 仰内形	39.7×39	29	5#,6#	中孔	457 仰内形	43×33	19	土	吉字	
249 内形	36	42	花生	348 仰内形	46×43	6	5#,6#	吉字	458 仰内形	48×45	18		吉字	
250 内形	47×40	29	花生	349 仰内形	45×45	16		中孔	459 仰内形	44×32	14	瓦砾	中孔	
251 仰内形	36×43	21	花生	350 仰内形	37	7		中孔	460 仰内形	36×34	26	深	花生	
252 内形	37×39	26	花生	351 仰内形	28	19		花生	461 仰内形	38×32	18	深	花生	
253 仰内形	35	35	花生	352 仰内形	23	12		中孔	462 仰内形	38×32	18	带鱼~手印	吉字	

甲壳类	地层	序	出土遗物	时期	平面图	器形	序	出土遗物	时期
402 内形	43X38	24	陶	新石	516 圆内形	24以上>22	6	陶	新石
403 盒内形	63.7×60	25	灰、土、陶	古董	517 圆内形	26.1.1.23	25	陶	新石~平安
404 圆形	54.7	22	陶	陶土	518 圆内形	28×28	28	陶	古董
405 圆形	46×35	29	灰、土、陶	陶土~平安	519 圆内形	30	36	陶	古董
406 内形	31×40	9	灰、石	陶土	520 圆内形	38	21	陶	古董
407 圆形	36	25	灰	陶土	521 圆内形	38×39	41	灰、土、陶	古董
408 圆形	39	14	灰	陶土	522 圆内形	19	5	陶	古董
409 圆形	32×35	14	灰	陶土	523 圆内形	38×38	5	陶	新石
410 圆形	36	21	灰、土~平安	陶土	524 圆内形	20×24	9	陶	新石
411 盒内形	45×34	10	陶	陶土	525 圆内形	31.7×13	5	陶	新石
412 盒内形	43×34	34	陶土	526 圆内形	38×15	18	陶	古董	
413 圆形	38×34	10	灰	陶土	527 圆内形	43×35	14	陶	古董
414 方形	40×25	6	陶	陶土	528 圆内形	31×26	26	陶	新石
415 盒内形	70×52	25	灰、土~平安	陶土~平安	529 圆内形	56×44	14	陶	新石
416 圆形	30	15	陶	陶土	530 圆内形	32	15	陶	古董
417 圆形	43	17	陶	陶土	531 圆内形	60×48	46	陶	新石
418 盒内形	58×44	22	陶	陶土	532 圆内形	38	15	陶	古董
419 圆形	34×16	5	陶	陶土	533 圆内形	16×19	22	土、石	新石~平安
420 盒内形	38.8上×42	19	灰、石	陶土	534 圆内形	31	17	陶	新石
421 盒内形	68×50	36	灰、土~平安	陶土~平安	535 圆内形	56×38	33	土、石、陶	古董
422 圆形	34	15	陶	陶土	536 圆内形	22	16	中残	新石
423 圆形	27	9	灰	陶土	537 圆内形	19×21	15	灰、土、陶	古董
424 圆形	39	35	陶	陶土	538 圆内形	42×36	5	灰	新石
425 圆形	38	38	陶	陶土	539 圆内形	74×35	16	灰、土、陶	古董
426 盒内形	6.8×36	30	陶	陶土	540 圆内形	56×39	15	灰、陶	古董
427 圆形	22	19	陶	陶	541 圆内形	21	15	陶	新石
428 圆形	25	17	灰、土	古董	542 圆内形	16	12	中残	新石
429 圆形	38	18	灰	古董	543 圆内形	21	12	中残	新石
430 圆形	23	6	陶	陶土	544 圆内形	19×21	15	灰、土、陶	古董
431 圆形	39	35	陶	陶土	545 圆内形	42×36	5	灰	新石
432 圆形	38	38	陶	陶土	546 圆内形	74×35	16	灰、土、陶	古董
433 圆形	22	19	陶	陶	547 圆内形	56×39	15	灰、陶	古董
434 圆形	22	19	陶	陶	548 圆内形	21	15	陶	新石
435 圆形	25	17	灰、土	古董	549 圆内形	16	12	中残	新石
436 圆形	38	18	灰	古董	550 圆内形	21	12	中残	新石
437 盒内形	63.8上×56	65	灰	陶土	551 圆内形	58×23	22	陶	古董
438 圆形	21	6	陶	陶土	552 圆内形	83	24	土、石	古董
439 圆形	39	27	陶	陶土~平安	553 圆内形	37×36	20	山猪	新石
440 盒内形	41×33	15	土	古董	554 圆内形	42×26	29	陶	新石
441 圆形	39×21	5	陶	陶土	555 圆内形	65×60	25	陶	新石
442 圆形	35	20	古董	古董	556 圆内形	20	7	陶	新石
443 圆形	38	5	陶	陶土	557 圆内形	83×36	24	土、石	古董
444 圆形	38	5	陶	陶土	558 圆内形	87×36	25	陶	中残
445 圆形	36×30	13	陶	陶土~平安	559 圆内形	83×64	45	灰、土、陶	古董~平安
446 盒内形	53×45	19	灰	中残	560 圆内形	36	4	灰	古董
447 圆形	54×45	12	陶	陶土	561 圆内形	23×18	6	陶	新石
448 圆形	62	39	灰、石	陶土	562 圆内形	34×26	17	陶	新石
449 盒内形	29×21	9	陶	陶土	563 圆内形	52×14以上	5	灰	新石
450 圆形	42	25	灰、石	陶土~平安	564 圆内形	59×30以上	12	土、陶	古董
451 圆形	38	13	陶	陶土	565 圆内形	43×41	20	土、灰、陶	古董~平安
452 盒内形	38×25	13	陶	陶土	566 圆内形	24以上	9	灰、土、陶	古董

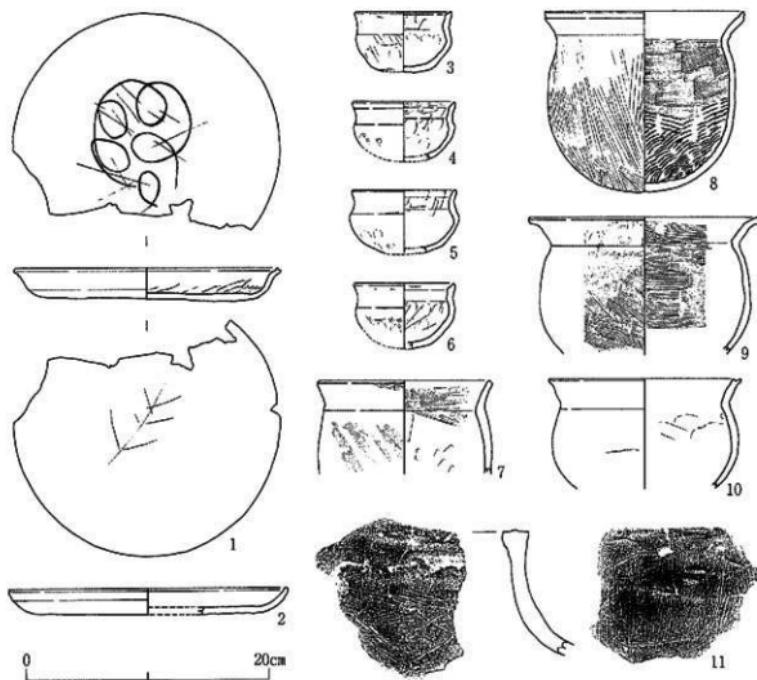
出土遗物：陶~灰生土器、土~土器，颈~颈器，领罐~领罐土器，石~石器，骨~动物遗体

4. 出土遺物

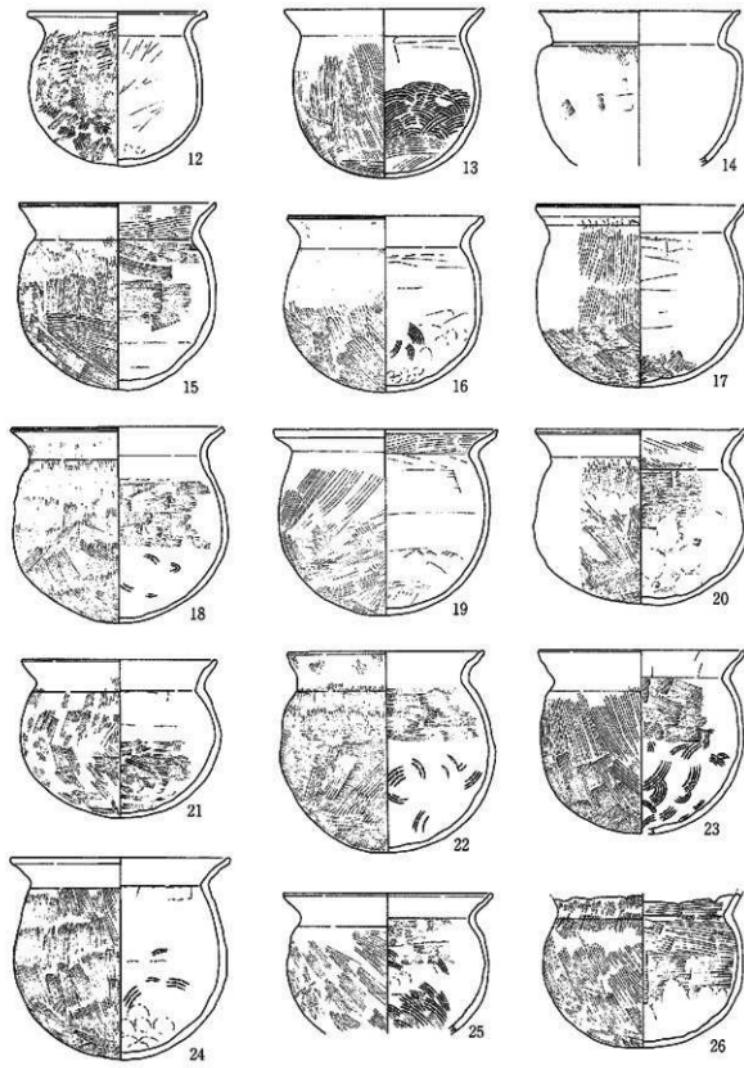
1) 奈良～平安時代の土器

当該期の遺物は井戸、溝、土坑、ピットから出土している。井戸以外の遺構から出土したものは小片のため図化し得なかった。このため井戸1と井戸5から出土した遺物について記述する。井戸1と井戸5から出土した遺物には土師器、須恵器、墨書き土器、製塙土器、瓦がある。井戸1の埋土は上層と下層に分けられ、上層では完形に近い土師器壺とともに皿、甕、壺が出土している。壺は小型のもので人面を墨書きすることがあるが、今回出土したものには墨書きはない。下層では完形に近い土師器甕とともに土師器壺、須恵器壺などが出土し、甕は煮炊きに使用後、あるいは口縁を打ち欠いて廃棄している。これらの土器は祭祀に使用されたものと思われ、良好な一括資料である。時期は奈良時代末～平安時代初頭。井戸5では墨書き土器が5点出土し、吉祥句と思われる「富益」と記されたものもある。また祭祀具として甕とセットになるミニチュア甕が出土した。井戸5の下から井戸7を検出しており、墨書き土器は最初に作られた井戸7に伴う可能性が高い。時期は平安時代初頭。これらの中には律令期の集落における井戸祭祀の形態を考えるうえで興味深い。

以下、遺構ごとに遺物の概要を記す。8世紀代の土器の分類および調整の技法の表記については、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ、ⅩⅠ』に準ずる。



第18図 井戸1 上層出土遺物実測図



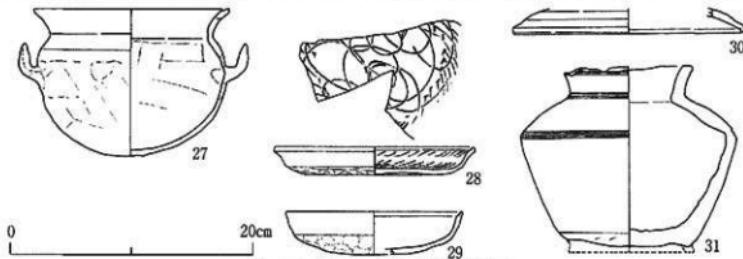
第19図 井戸1下層出土遺物実測図

井戸1上層（第18図）

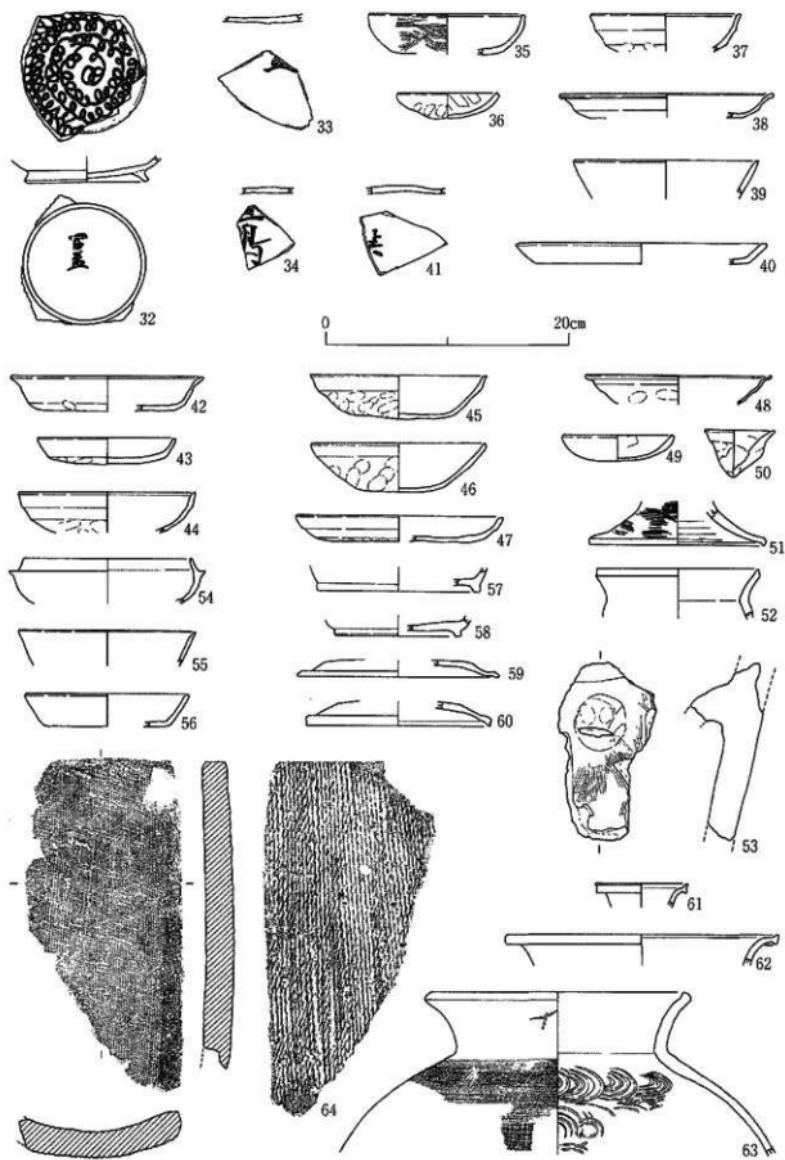
土師器（1～11）1・2は壺Aである。1は平底から斜め上に内弯して立ち上がり、上端がわずかに外弯する口縁部からなり、端部を内側に折りかえす。口縁部内面には1段の斜放射文、底部内面には螺旋文の暗文をもつ。底部外面には焼成後に葉脈状の線刻、底部内面には不定方向の線刻がある。外面調整はb0手法である。2は平底から内弯して斜め上方にたちあがる口縁部をもち、端部は丸く肥厚する。外面調整は口縁部がヨコナデ、以下は表面が剥離のため不明である。内面は表面が剥離のため不明である。3～6は壺Bである。丸底と球形に近い体部から口縁部が短く直立するもの。口縁端部は内傾し、少し凹む。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部は指オサエ後刷毛調整を施し、指頭痕がわずかに残る。内面は指オサエ後板状工具でナデ調整を行うが、4は口縁部を刷毛調整する。3は底部付近に黒斑がある。色調は橙色を呈する。7～10は壺Aである。7～9は体部の内・外面を刷毛調整するもので、8は内面の体部下半に同心円の当て具痕が残る。10は体部の内・外面とも調整はナデで、外面には指頭痕が残る。球形に近い体部から斜め上方に広がる口縁部を持つもの（8・9）、肩の張らない体部から斜め上方に広がる口縁部を持つもの（7）があり、7は生駒西麓産の胎土である。前者は口縁端部の形態により3つに分けられる。①口縁端部を上につまみあげ、強いヨコナデのため外面が四線状に凹むもの（8）、②外反して丸く肥厚するもの（9）、③端部上面が水平な面をもち、やや凹むもの（10）である。11は甌である。外面を刷毛調整、内面は刷毛調整後ナデ調整する。生駒西麓産。

井戸1下層（第19～20図）

土師器（12～29）12～26は壺Aである。球形に近い体部から斜め上方に広がる口縁部をもつもので、12・13・15～26は体部外面を刷毛調整、14は刷毛調整後ナデを施すが、指頭痕が明瞭に残る。全部で16点出土した。口縁部や底部が欠損しているものが若干あるが、ほとんどが完形である。口径は最小の12が14.4cm、最大の19が18.4cmを測り、16.0～17.0cm代のものが多い。12は体部外面に叩き目が残る。内面は刷毛調整するものが大半で、体部下半に同心円の当て具痕が残るもの（13・16・18・22～25）、ヘラ削りするもの（12）、板状工具でナデ調整するもの（14・16・19・24）がある。26は口縁部を故意に打ち欠いている。外面や内面に炭化物が付着しているものがほとんどであるが、12・20・23・26には付着がみられない。また23・26は体部外面に黒斑がある。口縁端部の形態により①内側に丸く肥厚するもの（12）、②端部上面に水平な面をもつもの（13・14）、③口縁端部を上につまみあげ、強いヨコナデのため外面が四線状にくぼむもの（15～17）、④外傾する面をもつもの（18・20）、⑤口縁端部を上につまみあげるもの（19）、⑥口縁端部が内弯して丸くおわるもの（21～25）の6つに分けられる。27は壺Bである。器形は壺Aと同じで、肩部の相対する位置に把手をもつものである。把



第20図 井戸1下層出土遺物実測図



第21図 井戸5出土遺物実測図

手は肩部に差し込んで取り付けている。体部はほぼ完形で口縁部が1／2残る。内・外面とも工具によりナデ調整を行い、体部から底部外面にかけて指頭痕が残る。口縁部内面、体部外面に炭化物が付着する。また体部外面に黒斑がある。28は坏Aである。平底から外弯して口縁部が立ちあがり、端部が丸く肥厚する。底部内面には螺旋文、体部には1段の斜放射文の暗文を施す。外面調整はb 0手法である。29は坏Cである。丸みを帯びた底部から直立気味に立ちあがる口縁部を持ち、口縁端部が内傾する。外面調整は口縁部をヨコナデ、以下は不調整、内面はナデ調整である。

須恵器（30・31）30は坏B蓋の口縁部である。黒色粒が墨を流したように流れる胎土を持つ。31は壺である。頸部および肩部に2条ずつ沈線が巡る。肩～頸部にかけて自然釉が付着する。底部外面には高台が剥離した痕跡が残る。口縁部を意図的に打ち欠いている。

井戸5（第21図）

32～41は井戸幹内埋土、42・43・45・46・48・52・56・57・61～64は井戸の最終埋土である第1層、47・49・53・58は第2層、45・59は第1～2層、44・50・51・54・55・60は井戸掘り方の埋土である第3層から出土したものである。

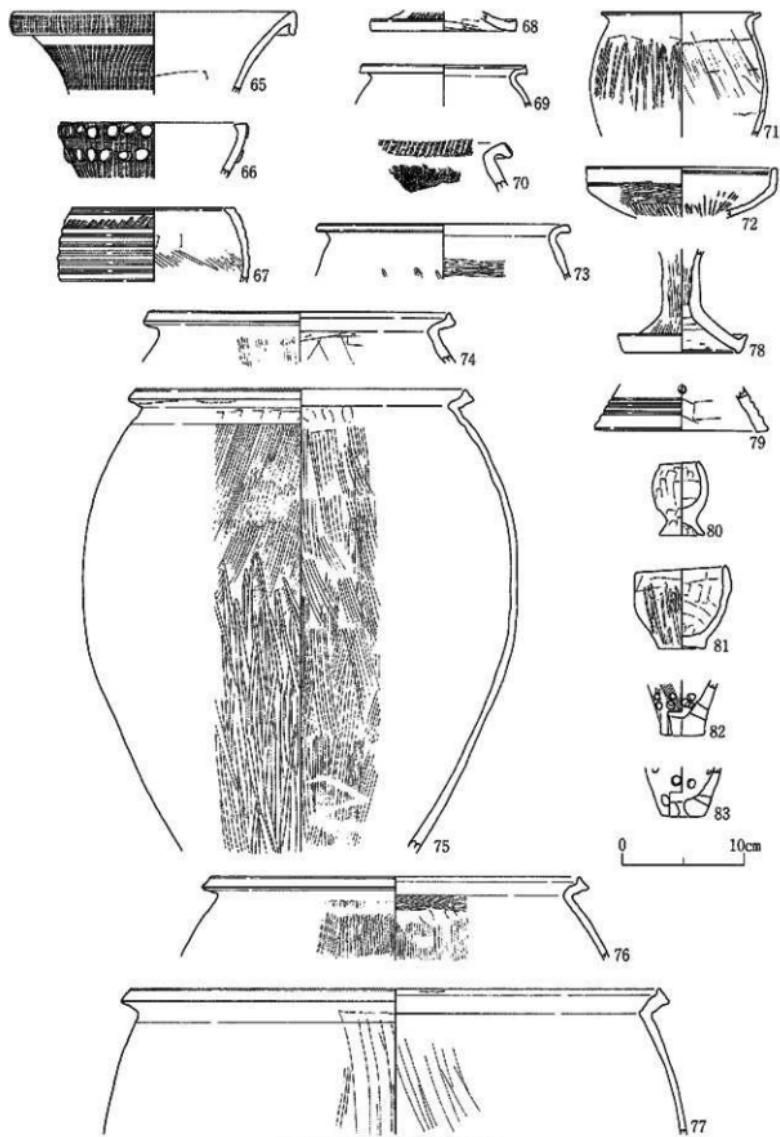
墨書土器（32～34・41）32は土師器坏B底部である。内面に螺旋文の暗文を密に施し、外面には「富益」の墨書がある。33・34は土師器坏ないし皿の底部である。外面に33は「益」、34は「三嶋」の墨書がある。これらのはかに土師器坏ないし皿の底部で、外面に判読不明の墨書が記されたものが1点ある。41は須恵器坏ないし皿の底部である。外面に「乙□□」の墨書がある。

土師器（35～38・42～53）35・42は坏Aである。35は外面調整がb 1手法で、ヘラ磨きをまばらに施す。内面はナデ調整である。42は外面調整がa 0手法で、内面はナデ調整である。36・49は小皿である。手づくね成形である。36は完形である。37・44～46は碗Aである。口縁部外面をヨコナデ、以下は不調整で指頭痕が残るものである。37・44は口縁部外面を2段のナデで調整する。45は完形である。38・47は皿Aである。47は口縁部外面を2段のナデで調整する。43は皿Cである。外面調整はa 0手法である。48は皿である。「て」字状口縁をもつ。口縁部外面をヨコナデ、以下は不調整のため指頭痕が残る。50はミニチュア壺である。外面に指頭痕、内面には粘土紐を巻き上げた痕跡が明瞭に残る。ほぼ完形。51は高坏の脚部である。据部外面をヘラ磨きする。52は壺である。口縁端部を上につまみあげ、強いヨコナデのため外面が四線状にくぼむ。生駒西麓産。53は壺である。生駒西麓産。

須恵器（39・40・54～63）39・55は坏、56は坏Aである。39は外面に重ね焼き痕がある。57・58は坏Bである。底部外面には断面四角形のしっかりした高台がつく。40は皿Cである。平底から斜め上方にひらく短い口縁部からなる。口縁端部は外傾する面をもつ。54は坏Hである。6世紀末。混入品である。59・60は坏B蓋である。59は口縁部外面に重ね焼き痕がある。61・62は壺である。63は壺である。頸部外面にヘラ記号「十」がある。体部外面には格子叩き後カキ目を施し、内面には同心円の当て具痕が残る。

瓦（64）平瓦である。凸面に縄目叩き、凹面に布目が残る。桶巻き作りである。生駒西麓産の胎土を持つ。

製塙土器（國版27下段）井戸幹内埋土および第1～3層から出土した。小片のみで、國化し得なかった。内面に粗い布目痕や、細かい布目痕、ハケメのあるものが少しがらわれる。色調は淡黄色～にぶい橙、灰色を呈する。胎土に1～4mmの砂砾を多く含む。



第22図 井戸2出土遺物実測図

2) 弥生時代の土器

今回の調査で出土した弥生土器はコンテナ約70箱分である。整理期間の都合により、遺構出土の遺物を報告対象としており、包含層出土遺物は報告対象に含めていないことを明記しておく。

遺物を掲載した遺構の内、堅穴住居1以外は弥生時代中期後半に属する遺構であるため基本的に遺構の種類ごとかつ番号順に記述していくこととする。また、所謂「生駒西麓」の胎土についてはこの胎土の土器の方が多いを占めているので、文中では特に触れずにそれとは明らかに異なる胎土の土器についてのみ文中に「非生駒西麓」と記す。

弥生土器の記述および分類は、中期の遺物については『河内平野遺跡群の動態VI』(財)大阪文化財センター 1993)に、後期の遺物については『河内平野遺跡群の動態VII』(財)大阪府文化財調査研究センター 1999)にそれぞれ従っている。

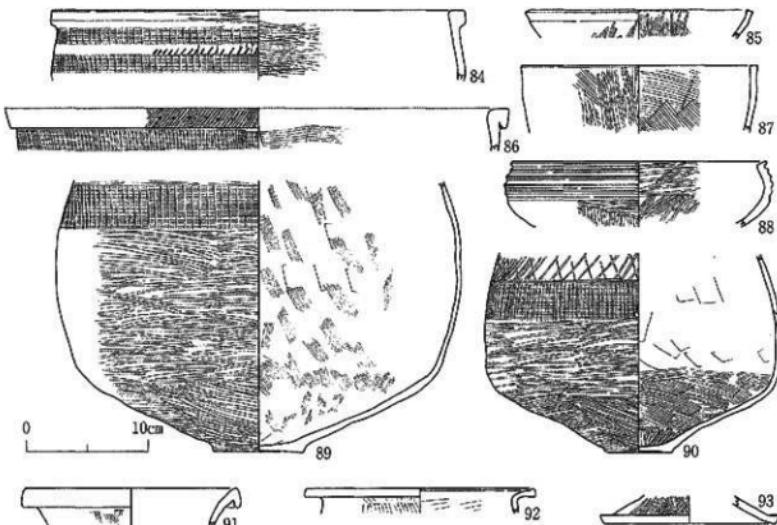
井戸2(第22~23図)

26点を図示した。器種は壺(65・89・90)、細頸壺(66・67)、甕(69~71・73~77)、蓋(68)、高杯(72・78・88)、鉢(79・84~87)、ミニチュア土器(80・81)、多孔土器(82・83)である。

壺 65はA1形態で端部を下方に拡張し端面と頸部に簾状文を施す。頸部の簾状文は幅広のものである。89・90はA2形態で下半は共にミガキ調整され、上方に簾状文を施す。90には簾状文の上に斜格子文も施している。また胴部に1ヶ所外側から開けられた穿孔(直径4mm)が存在する。

細頸壺 66は口縁端部が面をなし、外面に簾状文を施し、円形浮文を2帯貼り付けている。67は頸部上端に列点文、口縁部~頸部にかけて凹線文を施している。非生駒西麓の胎土である。

甕 A1(71・73)・B(70)・C(69)・D(74~77)の各形態がある。71の端部は外側へつまみ出したような形態である。70は端部を下方に拡張し、端面に刻み目を施している。69は端部を上方に拡張す



第23図 井戸2・4出土遺物実測図

る。D形態の4点はいずれも端部が肥厚し、上下方に拡張されて面をなし、ナデ調整がなされている。

蓋 68はB形態で裾端部が上方に拡張され、その上端に刻み目が施されている。煤の付着は認められない。

高杯 72・88はA2形態の楕状の杯部である。72は内外面にそれぞれ1条の凹線文を施す。88は外面に凹線文を5条施し、上端は面をなす。78は筒状の柱状部から裾部が大きく広がる脚部である。柱状部の内面にはシボリメが残り、裾部内面はケズリ調整され端部は上下に拡張される。非生駒西麓の胎土である。

鉢 A1(85)、A2(87)、B2(84・86)の各形態がある。84・86は口縁端部が共に段状をなしているが84は体部と接しており、86は若干の隙間が存在する。文様は84では体部に簾状文と列点文、86では体部に簾状文、端面に列点文と刺突文を施す。85は端部に細かい刻み目を施す。おそらく把手付鉢になると思われる。87は無文で、バケツ状の深い器形となるのであろうか。非生駒西麓の胎土である。79は台付鉢の脚部で凹線文3条と円形透かし穴が2個残存している。

ミニチュア土器 台付鉢もしくは台付無頸壺を模したもの(80)と鉢を模したもの(81)がある。いずれもユビオサエ・ユビナデなどの痕跡を残したままで、口縁端部の調整もなされていない。

多孔土器 82・83は土器の底面及び側面に多くの穿孔がなされている。この土器については角南聰一郎氏によって分析がなされている(角南聰一郎「弥生時代多孔土器初論」「滋賀考古 第21号」滋賀考古学研究会 1999.8)。孔は82には19個、83には8個が残存している。いずれも焼成前穿孔である。共に平底で底に1つ、側面に残りの孔が開けられている。また83には白色の物質が外面の一部と内面の全体に付着している。孔の内側にも付着していることから孔から中のもの(おそらく液体)が外に出ていたのであろう。82には付着物は認められない。共に非生駒西麓の胎土である。この他に底部に穿孔された小型壺が2点出土している(図版31-296・297)。297は非生駒西麓の胎土である。

井戸4(第23図)

3点を図示した。器種は壺(91)、甕(92)、蓋(93)である。

壺 A1形態で内外面とも無文であり、口縁端部は下方に拡張される。

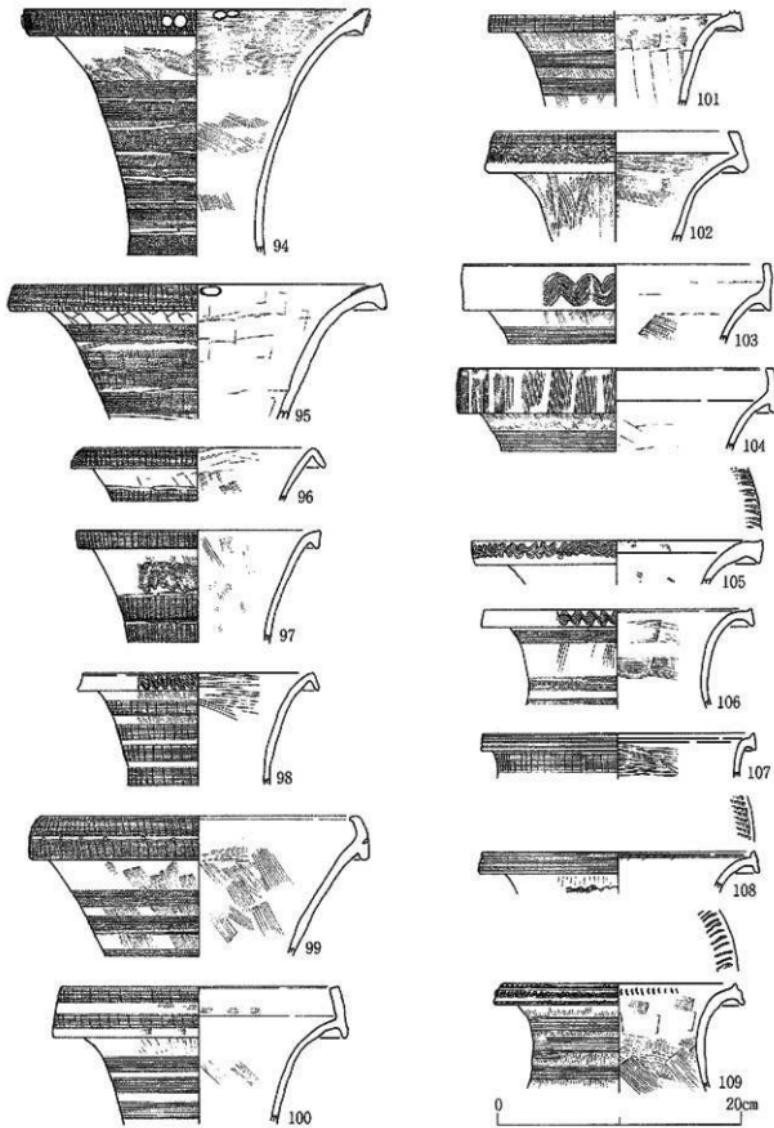
甕 A1形態で、直立する体部から口縁部が直角に外反し、口縁端部は上方に拡張される。

蓋 B形態で、裾部が上方に拡張され端面をもつ。煤の付着は認められない。

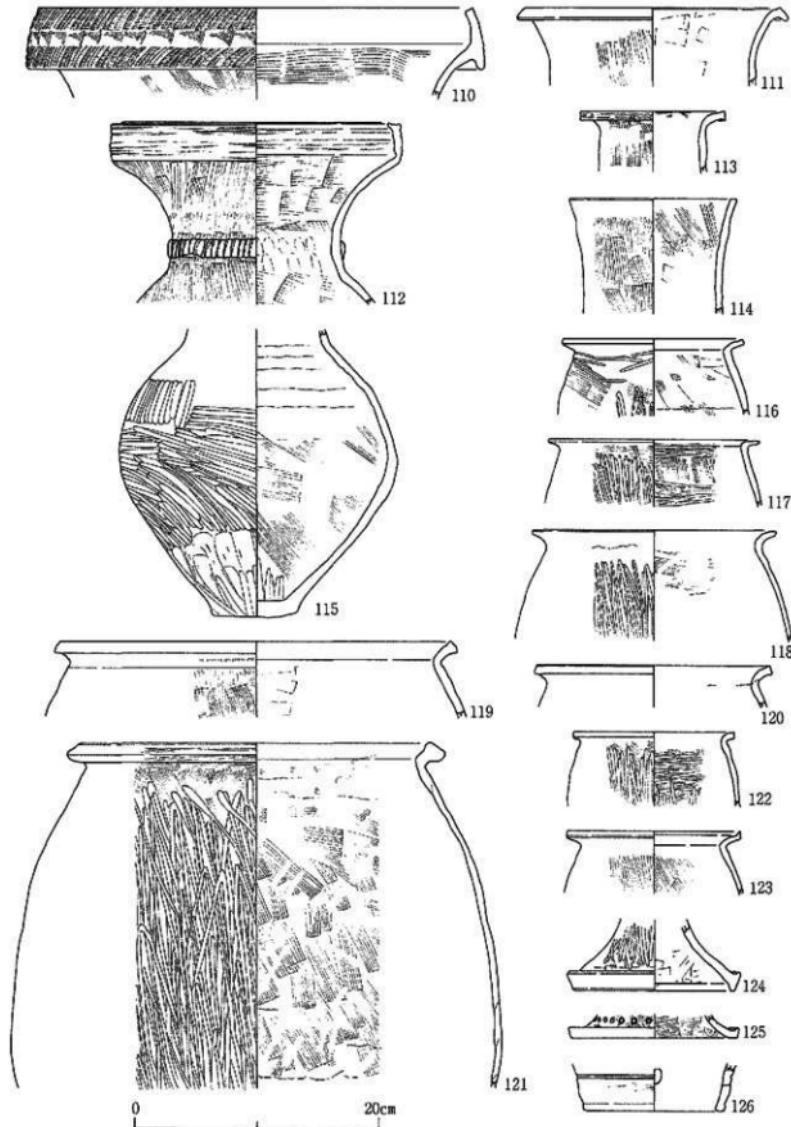
井戸6(第24~26図)

39点を図示した。器種は壺(94~113・115)、長頸壺(114)、甕(116~123・127)、高杯(124)、鉢(125・128~132)、脚部(126)である。

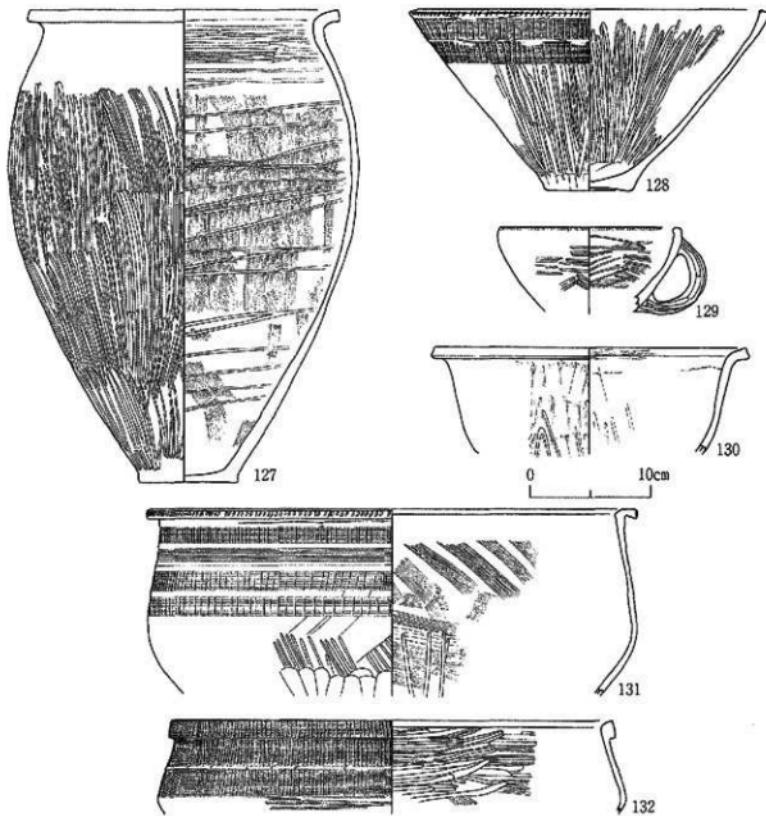
壺 A1(94・95・115)、A2(96~98・111)、A3(99~104・110)、C(105~109)、D(113)、F(112)の各形態がある。94は端面に簾状文と刻み目、頸部に直線文と簾状文を施しており、端面と口縁内面のそれぞれ対応する位置に円形浮文を2個1組(内外とも4組ずつ)で貼り付けている。95は端面に簾状文と刻み目、頸部に直線文と簾状文を施し、口縁内面に円形浮文を1個貼り付けている。115は体部で口縁部~頸部を欠く。肩部内面に粘土の接合痕が明瞭に認められる。96は端面および頸部に簾状文を、97は端面に簾状文、頸部に波状文と簾状文を、98は端面に波状文、頸部に簾状文を施している。111は内外面とも無文である。99は立ち上がった端面がやや内彎して上端がやや丸くなっている。端面に刺突文と簾状文、頸部に直線文を、100は端面と頸部に簾状文を施している。101は端面の拡張された部分が粘土の接合部分から剥離している。端面に簾状文、頸部に直線文を施している。



第24図 井戸 6 出土遺物実測図



第25図 井戸6出土遺物実測図

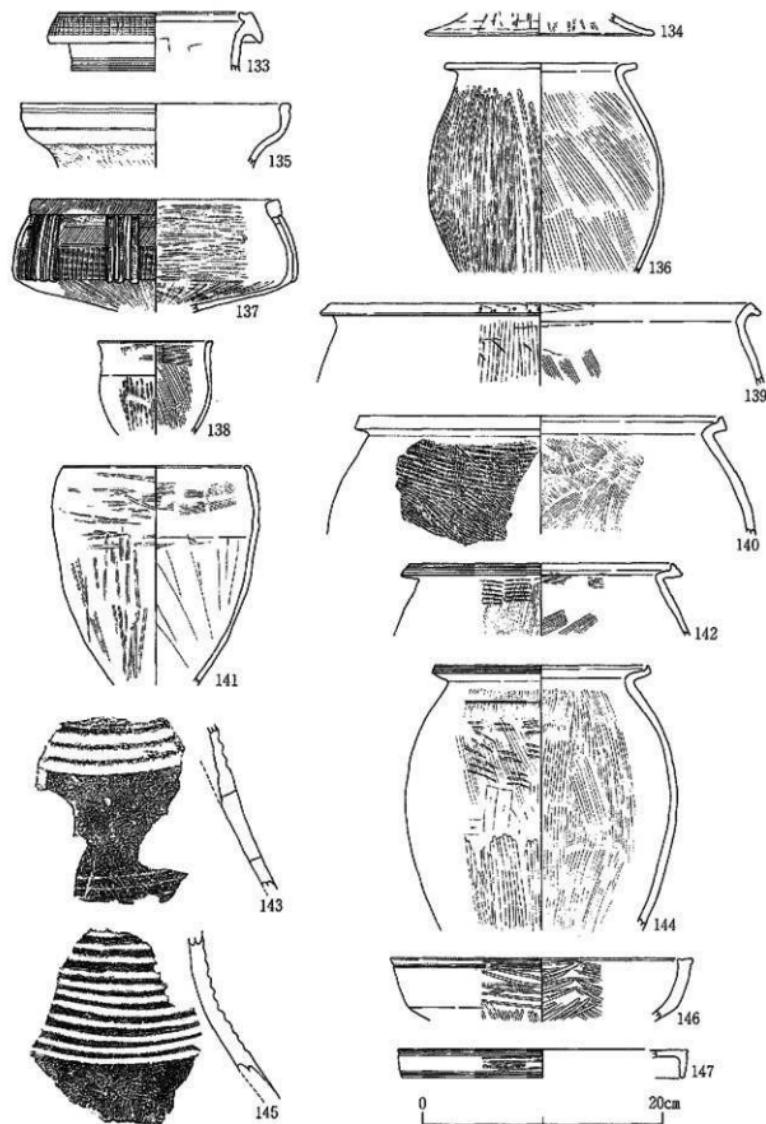


第26図 井戸6出土遺物実測図

102は端面に縦状文、波状文、扇状文を、103は端面に波状文、頸部に直線文を、104は端面に縦位直線文、頸部に直線文を施す。110は他のものより大型の壺で、端面に列点文、簾状文、扇状文を施している。105は端面に波状文、口縁内面に列点文を、106は端面に波状文、頸部に直線文を、107は端面に四線文、頸部に簾状文を、108は端面に凹線文、頸部に波状文、口縁内面に列点文を施している。106～108は非生駒西麓の胎土である。109は端面に波状文と凹線文、頸部に直線文、口縁内面に刻み目を施している。113は直立する頸部から外反する口縁をもち、端面を作り出すが文様は施されない。112は端部上端が面をなし、内側が若干つまみ上げられる。頸部に貼付突帯がつけられている。

長頸壺 114は筒型の頸部から口縁部が若干外反し上端部は面をなす。非生駒西麓の胎土である。

壺 A 1 (116～118・120)、A 2 (122)、B (119・121・127)、C (123)の各形態がある。116・120・122・123は端部が面をなし、117・118は端部を丸くおさめている。119・121・127は端部を下方に拡張している。



第27図 土坑12出土遺物実測図

高杯 124は脚部である。「ハ」の字状に開き、裾端部を上下方に拡張する。内面はケズリ調整されている。

鉢 A 2 (128・129)、B 1 (130・131)、B 2 (132)の各形態がある。128は体部が底部からまっすぐ広がるもので、口縁部が肥厚し端面をつくる。端面には内外両面に刻み目、口縁直下に簾状文を施す。129は把手付鉢で端部は面をなし、内外両面に細かい刻み目を施す。130は椀状の体部から短く外反する口縁をもつ。文様は施されていない。131は内彎する体部と短く外反する口縁をもつ。端面に刻み目、体部に簾状文と直線文を施している。体部下半にはケズリ調整が、内面見込みには放射状ミガキがなされている。132は内彎した体部と段状の口縁をもつ。端面および体部に簾状文を施す。125は台付鉢の脚部で裾端部は上方に拡張され、外面には竹管文を施している。

脚部 126は台付鉢もしくは台付無頸壺の脚部で、凹線文を2条施し円形透かしが1個残存する。

土坑12(第27図)

15点を図示した。器種は壺(133・135)、蓋(134)、甕(136・138~142・144)、台付無頸壺(137)、高杯(146・147)、器台(143・145)である。

壺 133はA 3形態で端部を上下に拡張する。端面に簾状文、頸部に直線文を施す。端部上面は潰れて亞になっている。135はF形態で外面に2条の凹線文を施す。非生駒西麓の胎土である。

蓋 134はC形態である。端部は丸くおさめられる。裾部に粘土の接合痕が認められる。内面に煤が付着している。

甕 A 1 (136)・A 2 (138)・B (139)・C (142・144)・D (140)の各形態がある。136は口縁部が水平に外反し端部を丸くおさめる。138は口縁端部の内外両面に細かい刻み目を、139は口縁端部を下方に拡張し端面に刺突文を施している。142・144は端部を上方に拡張し端面に凹線文を施す。140は端部を上方に拡張する。140・142・144の外面調整はいずれもタタキ調整の後にハケ調整を施している。140・144は非生駒西麓の胎土である。141は口縁部が作られておらず、上部に向かうにつれて内彎し、端部の調整は非常に粗く場所によって成形に差が見られる。外面に煤の付着が認められるので使用していたことは間違いない。

台付無頸壺 137は体部が内彎して立ち上がり口縁端部が段をなし端面をもつ。外面下半に簾状文を施し、棒状浮文が貼り付けられる。浮文は3本1組と4本1組が交互に貼り付けられ、細かい刻み目を施している。2孔1対の紐穴が開けられており、内面見込みには放射状ミガキがなされている。

高杯 146はA 2形態で杯部の形態が椀状で口縁上端が面をなすものである。外面の口縁付近に1条の凹線文を施す。147はB 1形態で端部が大きく垂下するものである。端面の上下端に1条ずつ凹線文を施す。共に非生駒西麓の胎土である。

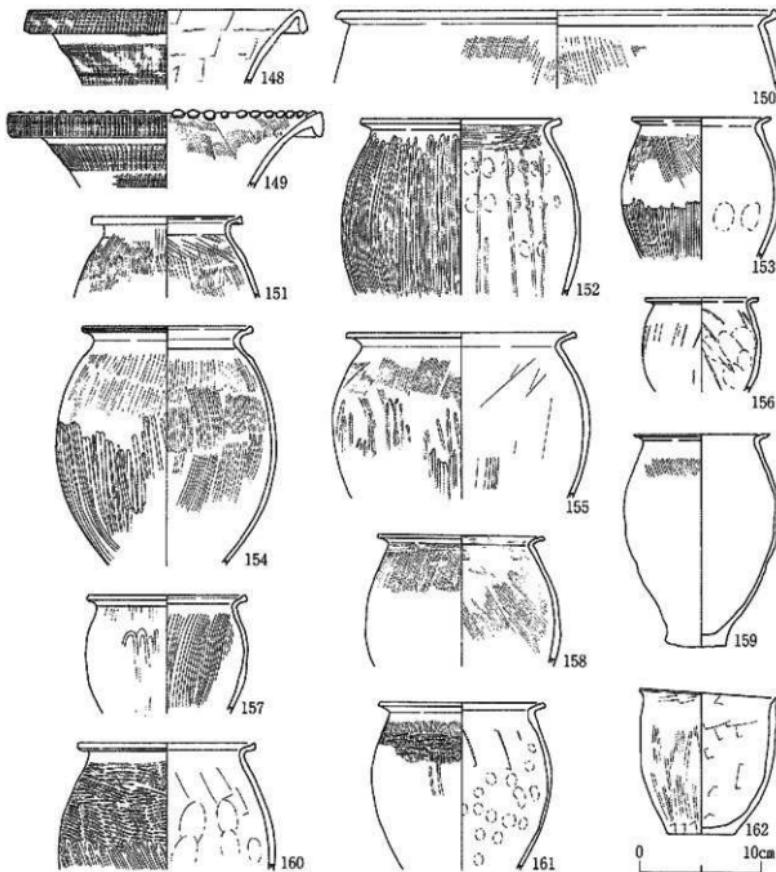
器台 143・145は共に体部の破片である。共に幅広の凹線文を施しており、円形透かしが143には2個、145には1個部分的に残存している。

土坑23(第28~29図)

21点を図示した。器種は壺(148・149)、蓋(150~162)、蓋(163)、高杯(164・166)、鉢(165・167・168)である。

壺 共にA 1形態である。148は端面と頸部に簾状文を施す。頸部の簾状文は幅が広いものである。149は端面に簾状文と刺突文、頸部に簾状文を施す。口縁内面に円形浮文を貼り付けている。

甕 A 1 (152・153・155・158・161)、A 2 (159・162)、C (151・154・156・157・160)・D (150)の各形態の甕がある。159は器表面の剥落が著しい。162は頸部のくびれがほとんど認められず、口縁部は若干上方方に外反しているようである。C形態・D形態の6点はいずれも口縁端部を上方に拡張



第28図 土坑23出土遺物実測図

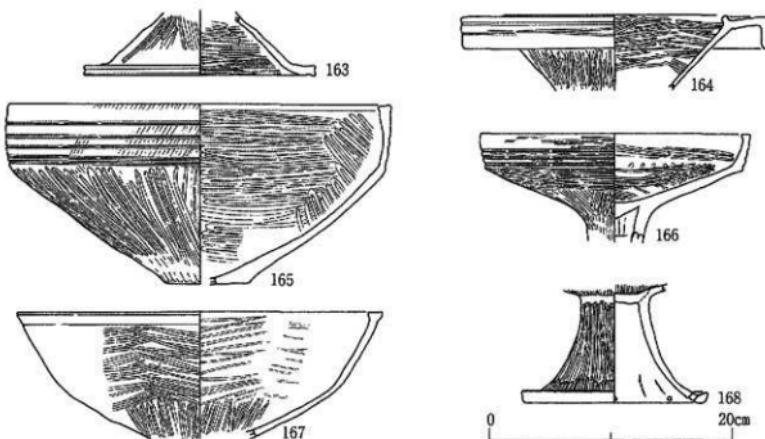
する。156は端面に刻み目を施している。155は非生駒西窓の胎土である。

蓋 163は「ハ」の字状に広がり、裾部が外反するものである。内面に焼の付着が認められる。

高杯 B 1形態(164)とA 2形態(166)がある。外面に凹線文を164には1条、166には3条施す。166は柱状部にシボリメが認められる。

鉢 共にA 2形態である。165は口縁部がやや内湾して頸部に凹線文を5条施している。体部下半および内面はミガキ調整がなされる。167は無文で内外面ともミガキ調整されている。168は台付鉢脚部で「ハ」の字状に広がり裾部を上方に拡張する。裾付近に円形透かし穴が8個存在し、端部上面に刻み目を施している。

土坑24(第30図)



第29図 土坑23出土遺物実測図

9点を図示した。器種は壺(169)、甕(170・171・173)、高杯(174)、鉢(175~177)、蓋(172)である。

壺 169はA 3形態で、口縁端面に波状文を施している。

甕 C形態が171・173、D形態が170であり、173は体部のふくらみが小さく、口縁部は短くほぼ水平に外反する。171は口縁端部を上方に拡張し、170は端面を上下に拡張する。

高杯 174はA 2形態で口縁部がゆるやかに立ち上がる。外面に凹線を5条施している。

鉢 A 2形態(176)、B 1形態(175・177)の2種類がある。176は体部が内彎して端面をもつ。175は体部が上外方に広がり口縁部は下方に折り曲げられる。177は体部が内彎して口縁上面が面をなし、無文である。非生駒西麓の胎土である。

蓋 172は「ハ」の字状に広がり、裾部を上下方に拡張して面をもつ。2孔1対の紐穴が上部に残存している。内面はケズリ調整される。

土坑34(第31図)

12点を図示した。器種は壺(178・179・181)、長頸壺(180)、甕(182~184)、水差形土器(185)、蓋(188)、鉢(186・187)、高杯(189)である。

壺 178はA 3形態で端部を上下に拡張し端面に簾状文を施している。179はF形態で端部を上方に拡張し端面に波状文、頸部に凹線文を5条、更に間隔を開けて1条が残存している。181はC形態で、端部を上下に拡張し上端部に刻み目を施している。179・181の胎土は非生駒西麓の胎土である。

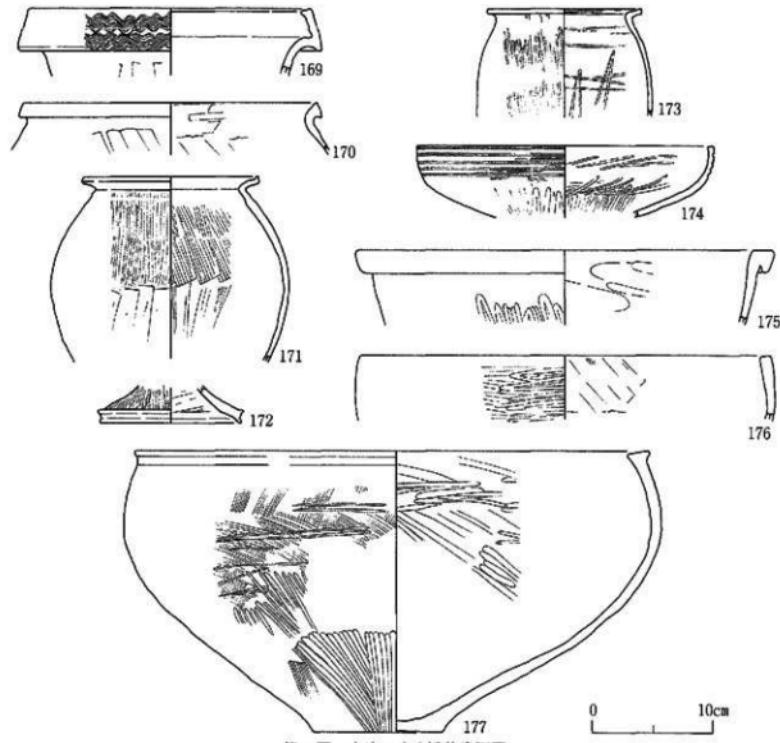
長頸壺 180は内外面ともハケ調整がなされ上端は面をなす。頸はほばまっすぐになら立あがる。

甕 182・183はA 1形態で同一個体の可能性もある。184はD形態で、口縁は肥厚し、端面に刻み目を施している。

水差形土器 185はA形態で口縁部が把手側に低くなるよう斜め方向に傾斜している。把手は欠損している。外面上半には簾状文を施し、下半はミガキ調整がなされている。

蓋 188はC形態で、「ハ」の字状に大きく開くもので、端部は面をなす。内面に煤が付着している。

鉢 186・187はB 1形態である。186は最大径が体部下半にあり、内彎する体部と短く外反する口縁をもつ。端面と体部に簾状文を施す。187は椀状に広がる体部と短く外反する口縁をもつ。端部は



第30図 土坑24出土遺物実測図

丸くおさめられ、体部に簾状文を施す。

高杯 189はA 2形態でやや内彎しており、端部は面をなす。外面に凹線文を5条施す。

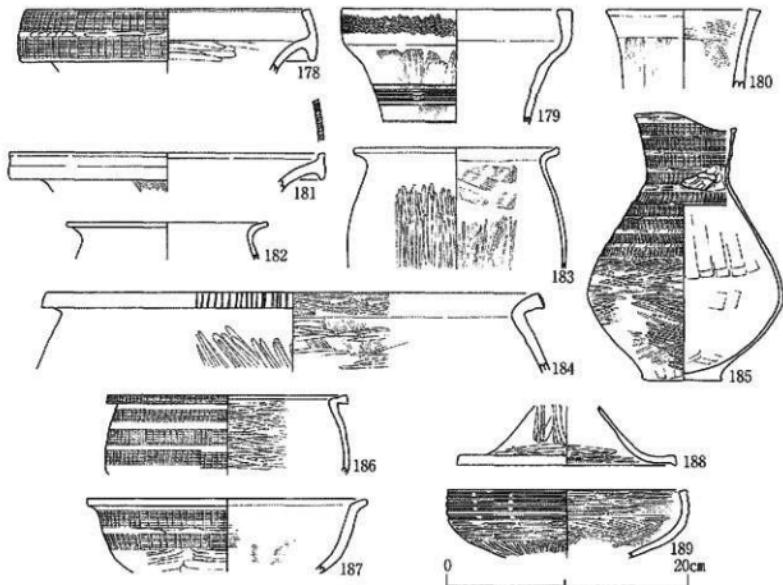
土坑77(第32図)

22点を図示した。器種は壺(190・191・194・195・197)、細頸壺(192)、壺(198~206・208)、鉢(207・209・211)、蓋(196)、高杯(193・210)である。

壺 A 2(191・197)、A 3(190・194・195)の各形態がある。191は端面に簾状文、197は刺突文を施す。190は口縁を上下に拡張するが特に上方に大きく拡張し、端面に列点文、簾状文と刺突文2帯を施し、円形浮文が1列4個のもの2列を1組として貼り付けている。頸部には簾状文を施している。194・195は端面に刻み目を施す。

細頸壺 192は四線文8条と直線文を施している。

壺 A 1(198・199・201・206)、B(200・202・203)、C(204)、D(205・208)の各形態がある。198・201は端部を丸くおさめている。199は端部に「O」字状の刻み目を施す。非生駒西麓の胎土である。206は端部に粘土を足して拡張している。200・202は端部を大きく下方に拡張し、202は端面に刺突文を施す。203は端部を上方に拡張する。204は球形の体部をもち端部を上方に拡張し、体部中央



第31図 土坑34出土遺物実測図

以下はケズリ調整がなされる。205は口縁を下方に拡張し、端面に凹線文を2条施す。208は端部を上方に拡張し、文様なのは不明であるが体部に爪状の圧痕が複数、不規則につけられている。

鉢 A 1 (207)、A 2 (209)、B 2 (211)形態がある。207は口縁内面に細かい線状の刻み目、外面に簾状文を施す。209は体部が内寄して立ち上がり上端が面をなす。外面に刻み目、簾状文、波状文を施す。いずれも非常に細かい施文である。211は口縁が段状をなし端面に列点文、体部に幅広の簾状文を施す。

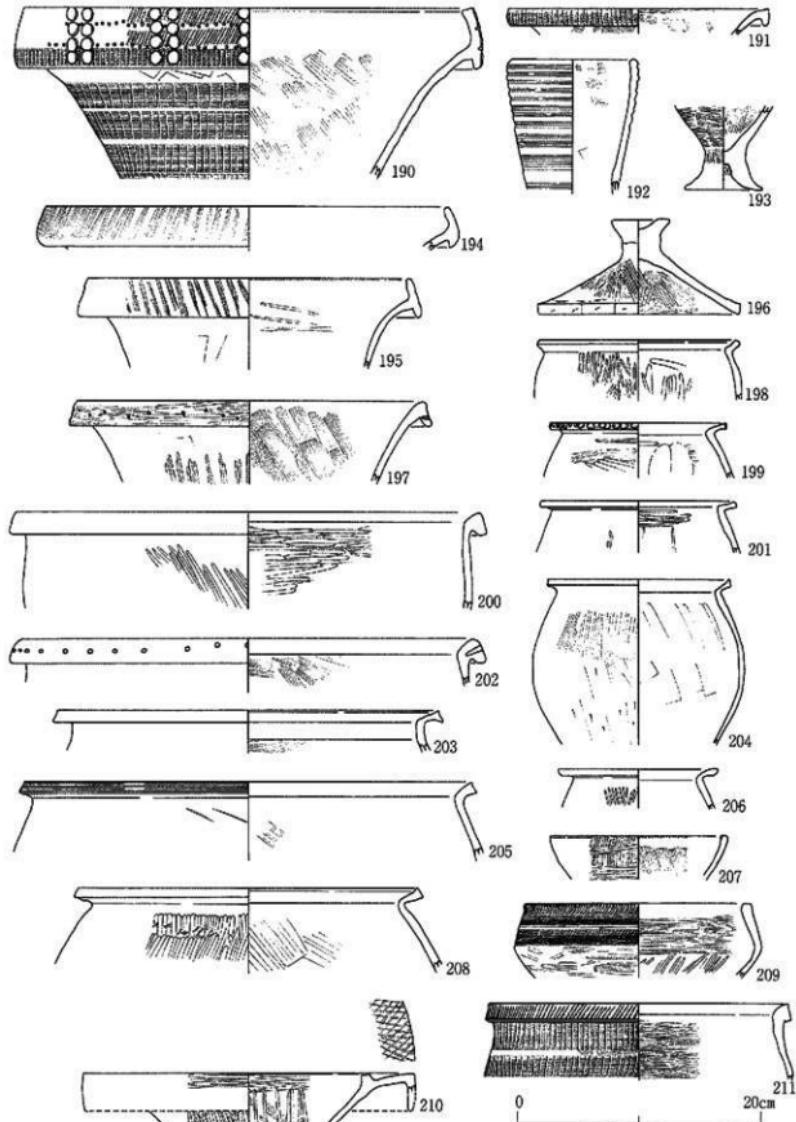
壺 196は「ハ」の字状に広がり端部が面をなす。つまみは大きく、頂部を丸く压ませ上端部を広げて握りやすくしている。握縁面はケズリ調整される。裾の周縁部は赤変しており煤も付着する。

高杯 210はB 1形態で口縁部上面に暗文風斜格子ミガキを施す。脚部(193)は裾部が短くて脚高が低く、脚部の器壁も厚い。

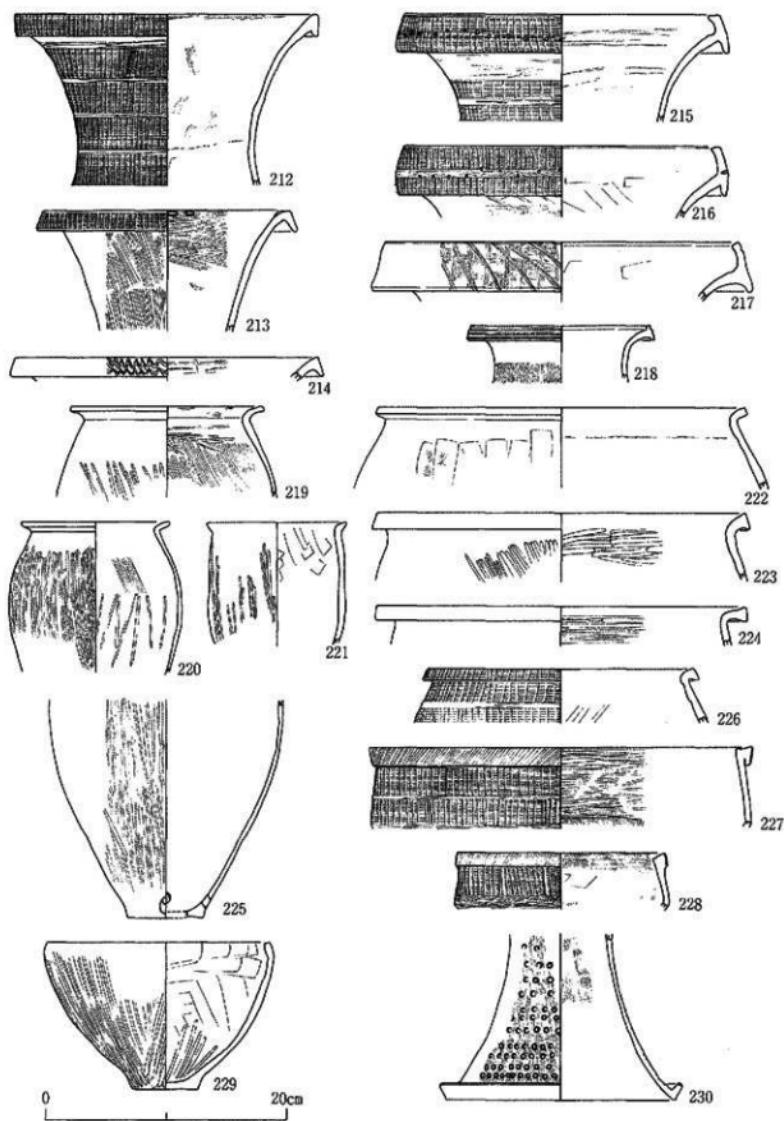
土坑79(第33図)

19点を図示した。器種は壺(212~218)、壺(219~225)、鉢(226~230)である。

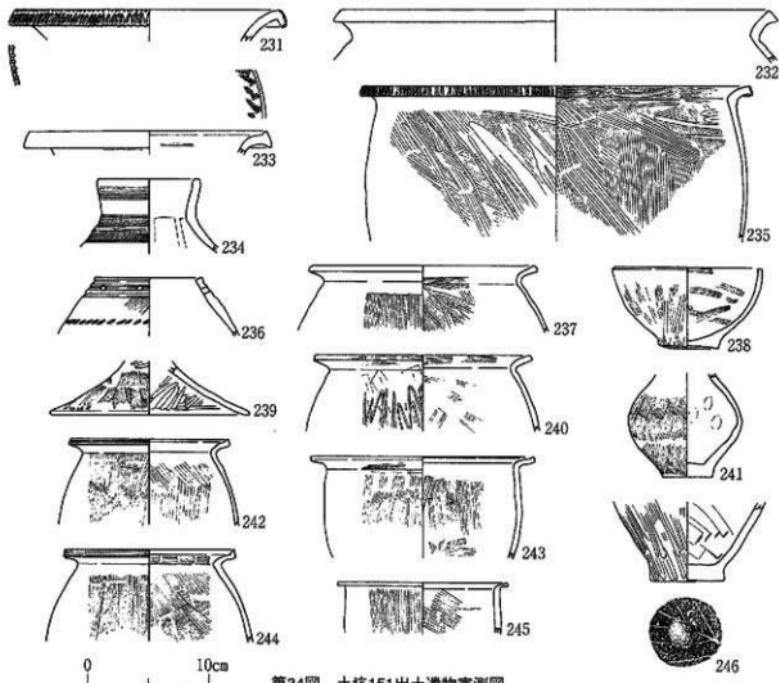
壺 A 1 (213・214)、A 2 (212)、A 3 (215・216)、B 2 (217)、D (218)の各形態がある。213は端面に簾状文を施し、口縁内面に円形浮文を2個1組として貼り付けている。214は端面に波状文、212は端面および体部に簾状文を施す。簾状文の幅はかなり広く、頸部は太く筒状を呈する。215・216は口縁を上下方に拡張し、共に端面の上下に簾状文、中央に刺突文を、215は頸部にも簾状文を施す。217は端部を上下に拡張し、端面に斜格子文を施す。218は頸部が短く直立し、筒状を呈する。口縁を上下方に拡張し端面に凹線文を3条施す。非生駒西麓の胎土である。



第32図 土坑77出土遺物実測図



第33図 土坑79出土遺物実測図



第34図 土坑151出土遺物実測図

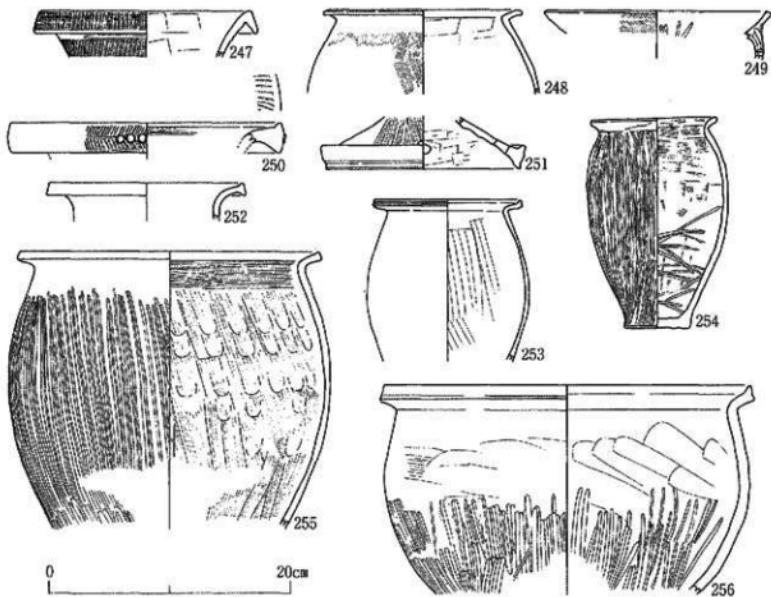
壺 A 1 (219・220・221)、B (222)、D形態(223・224)がある。219は端部が若干面をなし、220・221・222は端部を丸くおさめる。221は直立する体部から短い口縁部が外反する。223・224はいずれも端部を上下に拡張し面をなす。225は底部で、焼成後外面から穿孔を1ヶ所開ける。298(図版44)は著しく歪んでいるが、短く外反して厚い口縁をもち、端面をつくる。この器形の歪みは土圧によるものではなく、焼成前に既に歪んでいたと考えられるものである。

鉢 A 2 (229)、B 1 (226)、B 2 (227・228)の各形態がある。229は内外面とも無文で、口縁部は内寄りして、端部は面をなす。226は内寄する体部と短く外反する口縁をもつ。端面および体部に籠状文を施す。227・228はB 2形態で口縁部が段をなすが、228の段は退化し痕跡に過ぎなくなっている。共に端面に列点文、体部に籠状文を施す。228は体部にも列点文を施す。230は台付鉢の脚部で「ハ」の字状に広がるものである。外面にびっしりと竹管文を施すが、上方に行くにつれて文様の間隔が開いてくるようである。さらに上方に拡張された端部の上面に部分的に刻み目を施す。

土坑151(第34図)

16点を図示した。器種は壺(231・233・241)、無頸壺(236)、壺(232・235・237・240・242~246)、水差形土器(234)、壺(239)、鉢(238)である。

壺 231はA 1形態で端面に刻み目を施す。いずれの刻み目も深くはっきりと施している。233はC形態で端部を上下に拡張し、口縁内面に層状文を施す。241は小型壺で口縁部を欠いている。



第35図 土坑25・35・37・76・ピット316出土遺物実測図

無頸壺 236はB2形態で凹線文と刻み目を施し、2孔1対の縫穴が開けられている。

壺 A1(237・240・243・245)・B(232・235)・C(242・244)の各形態がある。237は端面をもち、240は端部を丸くおさめる。243・245は直立する体部から口縁部が直角に外反する。243は若干端部が肥厚する。232・235は共に端部が面をなす。232は無文、235は端面に刻み目を施す。242・244は端部を上方に拡張し、端面に凹線文を施す。246は底面に木の葉压痕が残っている。

水差形土器 234は頸部および体部に直線文を施している。

蓋 239はC形態で、外面にハケ調整、内面にミガキ調整がなされる。非生駒西麓の胎土である。内面に煤が付着する。

鉢 238はA2形態で、内外面ともハケ調整がなされ無文である。平面形態は非常に歪んでいる。

土坑25(第35図)

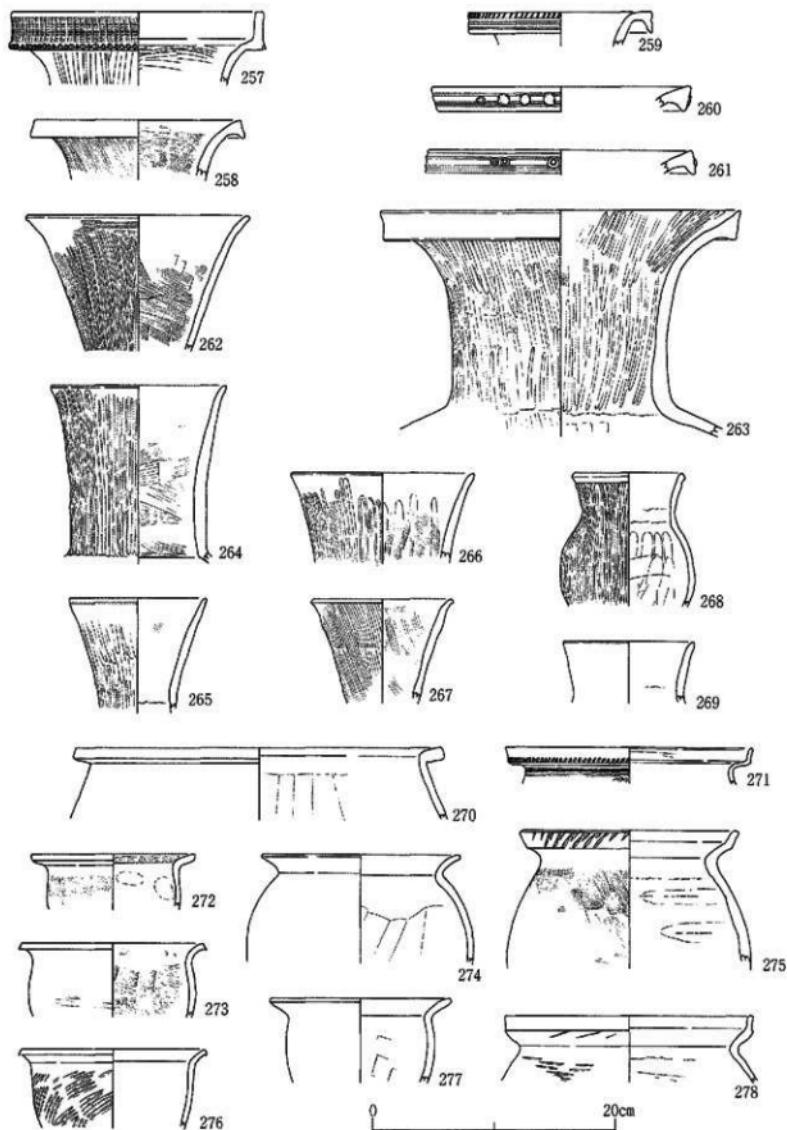
6点を図示した。器種は壺(247・250・252)、壺(248)、鉢(249)、脚部(251)である。

壺 A1形態(247)、C形態(250・252)であり、247は端面に籠状文と刺突文、頸部に簾状文を施す。250は口縁端面に羽状列点文、内面に列点文を施し、口縁端面には円形浮文が貼り付けられる。252は内外面とも無文で、端部を上方に拡張する。250・252は非生駒西麓の胎土である。

壺 248はA1形態で口縁は一度外反した後若干下方に下がる。端部は丸くおさめる。

鉢 249はA2形態で把手付鉢である。体部外面に綾杉文状の刻み目、口縁内面に刺突文を施す。把手に直径1mmの極小さな穿孔が1ヶ所存在する。

脚部 251は「ハ」の字状に広がるもので、端部は上下方に拡張される。端面下方に凹線文を1条施し、円形透かし穴も残存する。内面はケズリ調整される。



第36図 穂穴住居1出土遺物実測図

土坑35(第35図)

甕C (253) 1点を図示した。端面に凹線文を1条施し、端部は上方に拡張される。外面は著しく剥離している。

土坑37(第35図)

鉢B 1 (256) 1点を図示した。端部を強く上方に拡張する。端面下端に鋭い棱をもつ。口縁部形態だけでは甕との区別がつき難いが、器高よりも胴部最大径の方が大きくなるようなので鉢とした。

土坑76(第35図)

甕C (255) 1点を図示した。端部を上方に拡張し、面をなす。

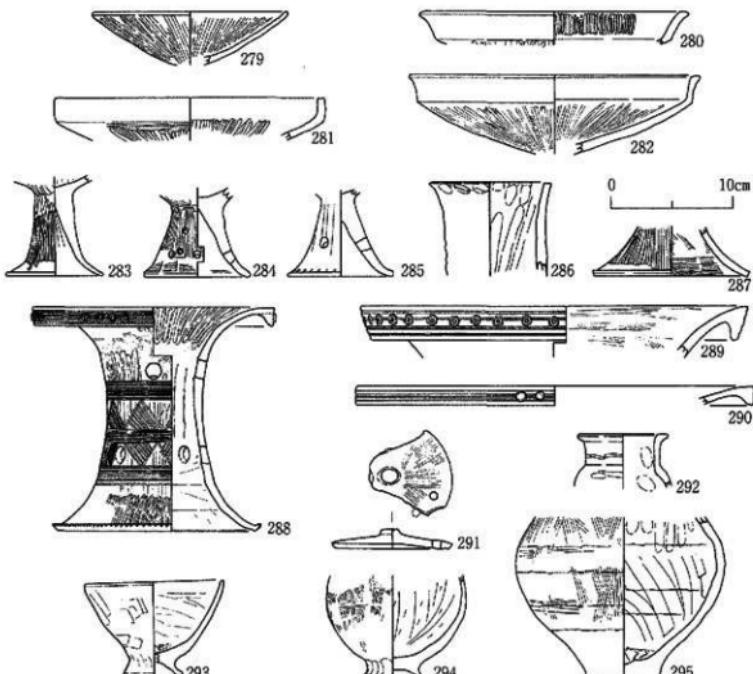
ピット316(第35図)

甕A 1 (254) 1点を図示した。完形で出土した細身の甕で、端部は丸くおさめる。

堅穴住居1(第36~37図)

39点を図示した。器種は広口甕(258~261・263)・長頸甕(262・264~267・286)・短頸甕(268・269)、甕底部(294・295)、甕(271~278)、高杯(279~285)、器台(288~290)、蓋(291)、楕形鉢(293)、ミニチュア土器(292)、脚部(287)である。

造構の時期としては弥生時代後期に属するが、若干中期の遺物も含まれている(257・270)。周囲か



第37図 堅穴住居1出土遺物実測図

らの混入と考えられる。257は壺Fで端面に縦状文と刻み目を施している。270は壺Bで無文である。

広口壺 259～261の3点は端面に凹線文と刻み目(259)・円形浮文(260)・竹管文(2個1組)(261)を施している。260は端面および口縁内面に、261は竹管文内に赤色顔料の痕跡が認められる。263は肩部までほぼ完形の状態で出土した大型壺で、口縁内面に赤色顔料の痕跡が認められる。

長頸壺 いずれも無文であるが、頸部から口縁部にむかって外反するもの(262・265・267)とほほまっすぐに伸びるもの(264・266・286)の2種類が認められる。286は非常に成形が難で、内面や口縁には成形時のユビの跡が残り、器形にも大きな歪みが認められる。

短頸壺 共に無文である。269の外面は丁寧にミガキ調整されている。294・295は壺の底部である。294は外面に高台状のものを付け足している。内面はケズリ調整がなされている。295は粘土の接合痕が明瞭に認められる。

壺 272・273・276・277の4点は外反口縁鉢に分類される可能性もあるが、とりあえず壺に含めておく。いずれも無文であるが、276は外面にタキ調整がなされている。非生駒西麓の胎土である。271はいわゆる近江型の壺で、口縁端面に刻み目を施す。ただし、胎土は生駒西麓のものである。275は端面に刻み目を施す。275・278は口縁が受け口状に立ち上がる。

高杯 杯部には楕円形の279と立ち上がりを持つ280～282の2種類が認められる。脚部はいずれも「ハ」の字状に開く形態のものであり、284・285には円形透かし穴がある。284には図上では4個あるように見えるが、内側まで貫通しているのは1個のみであり、残りは竹管文風の窪みになっているだけである。285には透かし穴は3個開けられ、裾部に刻み目を施している。

器台 いずれも装飾を施しており、端面に凹線文と竹管文(288・289)または円形浮文(290)を施している。特に288は全体の形状を知ることができ、凹線文、竹管文、円形透かし穴、直線文、鋸歯文、刻み目を施す。鋸歯文は播磨以西でよく用いられている施文である。ただし、胎土は生駒西麓のものである。また288には端面と口縁内面、289には竹管文内と凹線文内及び口縁内面、290には円形浮文と口縁内面にそれぞれ赤色顔料の痕跡が認められる。

蓋 291は低いつまみを持ち、2孔1対の紐穴を開けている。煤の付着は認められない。

楕円鉢 293は鉢に低い高台がつくもので内外面共にナデ調整がなされている。

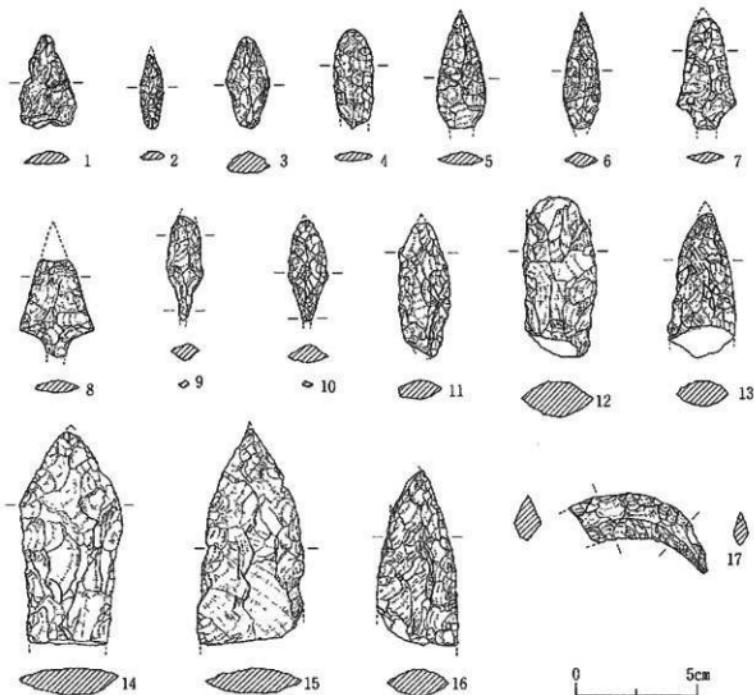
ミニチュア土器 292は短頸壺もしくは長頸壺を模したものと思われる。ユビオサエの痕跡が内面に残り、口縁端部が肥厚して外反する。

脚部 287はどの器種に付くものか不明であるが「ハ」の字状に開き端部が面をなす。

3) 石器(第38・39図)

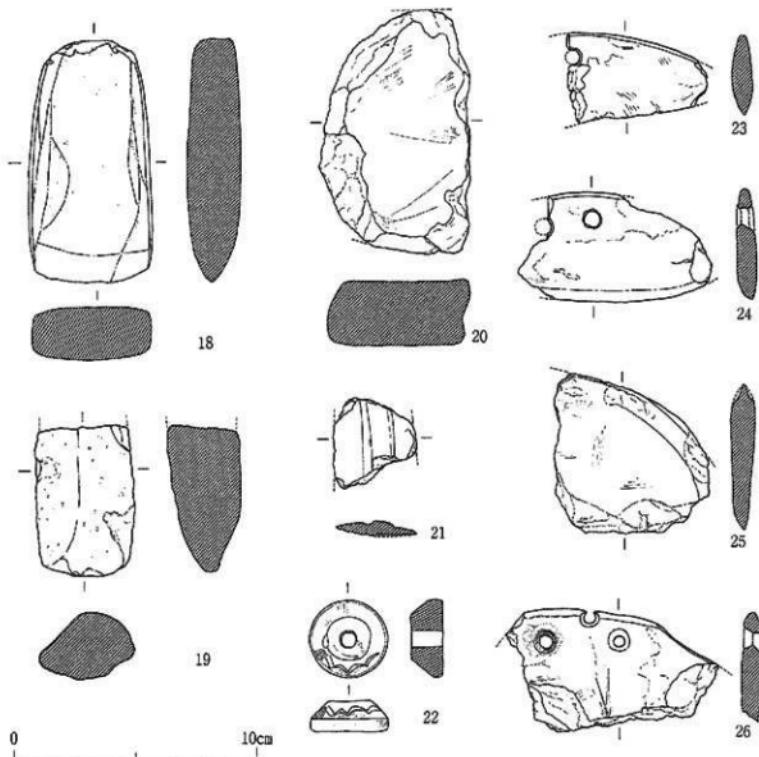
打製石器では、石鎚(32点)、石槍(10点)、削器(17点)、石剣(7点)、石錐(2点)、石小刀(1点)と多量の剥片が出土している。

1～8は石鎚である。1は、3層出土で、凹基式で、縦型剥片である。長さ3.85cm、幅2.3cm、厚さ0.5cm、重さ4.05gである。製作途中品と思われる。溝46から出土した2は、凸基式で、横型剥片である。先端部が欠損しており、残存長3.05cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.04gを測る。3は土坑35から出土した。縦型剥片で、製作途中品である。長さ3.8cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm、重さ5.01gを測る凸基式である。4は3b層から出土した。凸基式だが、基部が欠損している。残存長4.1cm、幅1.6cm、厚さ0.35cm、重さ2.54g。3c層から出土した5は、横型剥片で、サヌカイト製の凸基式である。両端が欠損しており、残存長4.7cm、幅1.95cm、厚さ0.5cm、重さ3.90gを測る。6は溝46から出土した。凸基式だが、両端は欠損している。残存長4.65cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ3.36g。7は土坑35出土で、凸基有茎式である。両端を欠損しており、残存長は4.6cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm、重さ4.71g



第38図 打製石器実測図

を測る。4層上面出土の8も凸基有茎式である。両端を欠損しており、残存長4.0cm、幅3.0cm、厚さ0.5cm、重さ5.68g。9は石錐である。3~4層で出土した。錐部が細長く、頭部と錐部の境が明瞭である。先端が欠損しており、残存長4.3cm、幅1.5cm、厚さ0.65cm、重さ3.80gを測る。10も石錐で、3b層下面で出土した。平面形は菱形を呈し、基部に回転穿孔による擦過痕がみられることから両端を錐部にしたと思われる。両端が欠損しており、残存長4.15cm、幅1.6cm、厚さ0.7cm、重さ3.93g。11~16は石槍である。11はピット436から出土した。平面形は側刃に最大幅があり先端部と基部に向かって幅を減じ、断面形は菱形を呈する。基部には原面が見られ、製作途中品と思われる。先端が欠損しており、残存長5.5cm、幅2.1cm、厚さ0.8cm、重さ11.38g。擾乱から出土した12は、平面形は両側刃が平行し、断面形は菱形を呈する。両端が欠損しており、残存長6.65cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm、重さ37.52gである。13は溝118から出土した。横型剥片で、断面は菱形を呈する。両端が欠損しており、残存長5.95cm、幅2.8cm、厚さ1.05cm、重さ17.53gを測る。14は井戸4から出土しており、片面が製作途中と思われる。両端が欠損しており、残存長8.8cm、幅4.2cm、厚さ1.1cm、重さ58.47g。3b層出土の15も両端が欠損しており、残存長8.9cm、幅4.4cm、厚さ1.0cm、重さ43.60gを測る。16は4層上面から出土した。縱型剥片で、断面は菱形を呈する。基部が欠損しており、残存長7.3cm、幅3.3cm、厚さ1.1cm、重さ33.83gである。裏面に研磨痕と思われる痕が見られる。17は残土出土の石小刀で、

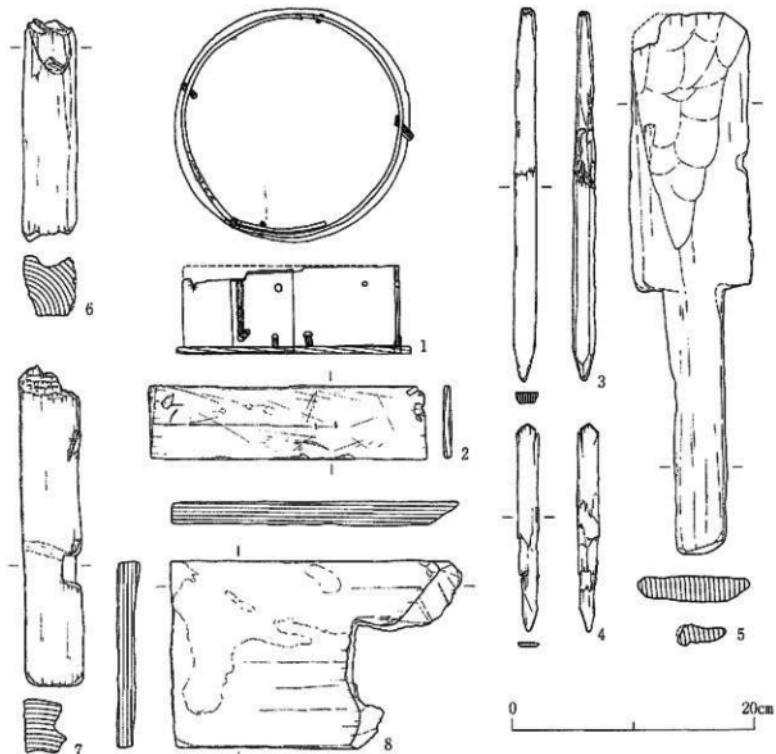


第39図 磨製石器実測図

サスカイト製である。平面形は全体的に弧を描き、両面調整が丁寧である。両端が欠損しており、残存長5.7cm、幅1.8cm、厚さ1.05cm、重さ10.60gである。

磨製石器では石包丁(5点)、石斧(4点)、石剣(1点)、紡錘車(1点)、砥石(5点)などがある。

18は大型蛤刃石斧である。北側溝掘削時に出土した。平面形は基部が弧を描き刃部が広くなる長台形を呈し、断面は扁平である。刃部に刃こぼれが見られる。長さ10.1cm、幅5.05cm、厚さ2.2cm、重さ216.34gである。19は閃綠岩の太型蛤刃石斧で、2層から出土した。基部は欠損しており、残存長6.2cm、幅4.0cm、厚さ2.8cm、重さ120.74gである。20は砥石で、3層から出土した。砥面は2面で、残存長10.1cm、残存幅6.3cm、厚さ3.6cm、重さ279.03gである。21は石剣である。3b層から出土した。黒色粘板岩製の有柄式と思われる。残存長3.7cm、残存幅3.4cm、厚さ0.6cm、重さ7.65gである。22は滑石製紡錘車で、3d層から出土した。縦断面形は台形を呈し、上面の直径1.8cm、下面の直径3.2cm、厚さ1.3cm、重さ20.10gを測る。全体に砥石による擦過痕が見られ、側面には波状文の線刻が施されている。23~26は石包丁である。23は2~3d層出土である。半月形を呈し、両刃である。残存長



第40図 木製品実測図

5.8cm、幅3.7cm、厚さ0.8cm、重さ22.77gである。24は3b層下面で出土した。片刃で、外湾刀半月形と思われる。紐孔は外転穿孔である。残存長8.0cm、幅4.6cm、厚さ0.8cm、重さ34.74g。25は溝47aから出土した。片刃で、直線刃半月形である。残存長7.15cm、残存幅6.3cm、厚さ1.0cm、重さ74.25gを測る。大型の石包丁と思われる26は土坑113から出土した。全体に使用による欠損が見られ、砥石による線条痕が裏表に見られる。紐孔は3ヶ所あり、上部の紐孔は最初の加工時のもので、下部の紐孔は再加工時に穿ったものと考えられる。紐孔は回転穿孔である。残存長8.8cm、残存幅5.2cm、厚さ0.8cm、重さ56.77gである。

4) 木製品 (第40図) (図版56~68)

今回の調査では、井戸1、5、7から木枠が出土した。木枠に関する詳細は表3に記しているので、ここでは割愛するが、井戸5からは組上げ順を記したであろう墨書きの入った木枠板が出てることに注目しておきたい。

木枠のほかに、井戸1、5から曲物、簾串、用途不明品などが出土した。1は、井戸1の下層から

表3 井戸柱計測表

井戸1

柱番号	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	形状	木取り	備考
横板東1	48.5	24.5	6.0	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
東2	53.5	17.5	8.0	板	板目	上部腐食
東3	45.0	30.0	3.5	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
横板西1	40.5	24.0	6.0	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
西2	67.5	18.5	6.0	板	板目	上部腐食
西3	43.5	27.0	4.5	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
横板南1	56.0	30.5	7.5	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
南2	25.5	9.5	3.5	板	板目	上部腐食
南3	72.5	26.5	8.0	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
横板北1	68.0	30.5	8.5	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
北2	44.5	11.0	4.5	板	板目	上部腐食
北3	45.0	26.5	9.0	板	板目	胸穴1個所(貫通) 上部腐食
柱1	60.0	4.5	5.0	角材		両面に歯があった可能性あり 南側の歯?
柱2	60.0	5.5	5.0	角材		一方の邊に歯あり(片方は欠損)
柱3	26.5	6.5	4.0	板	板目	一方の邊に歯あり(片方は欠損) 東側
柱4	77.0	7.5	3.5	板	板目	両面に歯あり 北側
柱5	83.5	8.0	5.0	板	板目	両面に歯あり 南側
柱6	38.0	9.5	5.5	板	板目	上部腐食
柱7	50.0	9.5	5.5	板	板目	上部腐食
横板1	119.0	20.5	5.5	板	板目	片面に加工あり
横板2	85.0	13.0	3.5	板	板目	
横板3	45.0	10.0	5.0	板	板目	叩き板状用途不明品
横板6	121.5	14.0	6.5	板	板目	片面に加工あり
横板7	87.0	17.0	3.5	板	板目	
横板8	117.0	14.0	7.0	板	板目	片面に加工あり
横板9	61.5	16.0	2.5	板	板目	
横板10	115.0	15.0	8.0	板	板目	片面に加工あり
横板11	78.0	10.5	4.5	板	板目	片面に加工あり
支柱1	183.0	10.0		柱状(半円形)		北東脚 加工痕あり
支柱2	135.5	6.5		丸太材		北西脚 腐皮残る
支柱3	139.0	8.0		丸太材		南東脚 腐皮残る
支柱4	139.5	10.0		柱状(半円形)		南西脚 加工痕あり

井戸5

柱番号	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	形状	木取り	備考
横板東8	100.0	20.0	5.8	板	板目	腐食質しい
東7	110.5	34.3	7.2	板	板目	外削や腐食
東6	95.5	31.2	3.6	板	板目	外削や腐食質しい
東5	97.0	28.5	5.8	板	板目	外削や腐食
東4	94.4	28.0	5.0	板	板目	外削加工痕あり 外削や腐食
東3	96.1	34.0	5.0	板	板目	腐食質しい 「東二」の墨跡あり
東2	87.5	5.0	3.6	角材		胸穴1個所(貫通) やや腐食(補強材)
東1	97.7	42.0	5.2	板	板目	外削加工痕質しい
横板西10	108.0	17.2	4.8	板	板目	
西9	117.0	24.6	6.8	板	板目	加工痕あり
西8	71.5	10.0	1.0	板	板目	
西7	94.0	15.0	1.0	板	板目	
西6	85.8	28.0	1.8	板	板目	
西5	96.7	18.0	2.2	板	板目	「西五」の墨跡あり 墨迹は不明瞭
西4	98.6	19.0	4.3	板	板目	加工痕明瞭 「西四」の墨跡あり
西3	101.0	24.5	2.2	板	板目	加工痕明瞭 「西三」の墨跡あり

西2	100.7	10.0	2.6	板	板目	
西1	97.0	41.0	4.8	板	板目	加工痕明顯
横板南10	73.7	21.5	5.0	板	板目	腐食著しい
南9	110.0	27.0	5.6	板	板目	腐食著しい
南8	95.8	18.0	2.6	板	板目	納穴2箇所(貫通・板状の鋼材あり) 外面加工痕あり
南7	113.5	30.5	6.2	板	板目	加工痕あり 片方の小口に切削加工痕あり
南6	96.0	12.8	3.0	板	板目	
南5	95.0	15.0	2.7	板	板目	外側やや腐食
南4	99.0	28.0	2.4	板	板目	
南3	99.5	38.0	2.4	板	板目	腐食著しい
南2	96.5	18.2	4.7	板	板目	外側加工痕明顯
南1	99.7	41.2	3.7	板	板目	
横板北11	110.0	18.5	6.3	板	板目	内面加工痕あり
北10	98.5	19.2	3.9	板	板目	納穴1箇所(貫通・板状の鋼材あり)
北9	91.5	17.5	2.7	板	板目	筋筋る 納穴2箇所(貫通・一方には、板状の鋼材あり)
北8a	95.5	18.5	3.6	板	板目	
北8b	96.5	18.7	2.1	板	板目	腐食著しい
北7	95.5	15.0	1.8	板	板目	やや腐食
北6	94.0	16.0	2.3	板	板目	外側やや腐食
北5	100.0	11.7	1.5	板	板目	外側やや腐食 箔残る
北4	94.5	18.0	2.2	板	板目	外側やや腐食
北3	96.0	14.6	2.5	板	板目	
北2	97.4	16.0	3.0	板	板目	外側やや腐食
北1	99.0	35.0	3.8	板	板目	外側やや腐食
棟1	73.0	3.5	2.0	角材	ナリあり 上部支持	
棟2	73.0	5.5	4.0	角材	上部支持	
棟3	74.5	5.8	5.2	角材	質量にナリあり 納穴2箇所(片方は貫通) 上部支持	
棟4	66.5	6.5	6.0	角材	質量にナリあり 納穴1箇所(貫通) 上部支持	
棟5	79.5	4.3	3.0	角材	内側加工あり 下部北側	
棟6	68.0	5.0	5.0	角材	納穴1箇所(貫通せず) 下部南側	
棟7	58.0	6.0	4.5	角材	納穴1箇所(貫通せず) 下部東側	
棟8	80.0	5.7	3.2	角材	同上にナリあり 下部西側	
支柱1a	148.3	41.0	4.5	板	板目	腐食著しい 南側の横板を木枠外から支えていた
支柱1b	118.5	21.0	3.2	板	板目	南側の横板を木枠外から支えていた 支柱1aの西側にあり
支柱2	106.0	8.5	2.2	板	板目	加工あり 木枠内を南西隅から北東隅にわたる支符
横柱1	231.0	14.5		柱	丸太	納穴1箇所 北東隅
横柱2	246.2	12.3		柱	丸太	納穴2箇所 北西隅
横柱3	247.0	11.0		柱	丸太	納穴1箇所 南東隅
横柱4	241.5	15.0		柱	丸太	納穴3箇所 南西隅

井戸7

板番号	長さ(cm)	幅・径(cm)	厚さ(cm)	形状	本取り	備考
横側西3	77.0	17.5	6.5	板	板目	腐食る
西2	77.7	17.0	2.6	板	板目	腐食る 加工痕あり
西1	76.3	13.3	6.0	板	板目	外側やや腐食
横側南3	76.0	20.0	5.0	板	板目	腐食る
南2	76.7	12.0	5.0	板	板目	外側加工痕あり 腐食る
南1	76.0	13.0	4.5	板	板目	外側に傷あり
横側北2	76.0	10.3	1.0	板	板目	
北1	72.5	17.7	3.0	板	板目	腐食る
棟1	46.0	4.5	2.3	角材	板目	ナリあり
棟2	74.8	3.8	3.3	角材	板目	内側に加工あり 西側
棟3	73.0	3.2	2.0	角材	板目	同上にナリあり 井戸7西3と井戸8西1の雨をかますのに軽用している
支柱1	52.0	6.5	4.0	角材	板目	西南西隅
支柱2	57.0	8.1	5.5	角材	板目	納穴1箇所(貫通せず) 南南西隅
支柱3	67.5	9.0	3.7	板	板目	納穴1箇所(貫通せず) 北西隅

出土した円形曲物である。ヒノキの薄板を円筒形に曲げ、底板とは桜の皮で5ヶ所留めている。底は「カキイレゾコ」で、側板は重なり部分の最後5cmのところに0.8~1.1cm間隔で5本の刻み目を入れ、桜の皮で1列内2段綴じしている。側板の上部に5ヶ所穴があいていることからさらに上につながっていたことがわかる。底板の外面上には、数条の切り傷があるが、漆の痕跡は見られない。底部径19.4cm、残存高7.2cm。2は方形曲物の部材である。井戸5井戸枠内②層から出土した。材質はヒノキで、縦木取り、つなぎには桜の皮を使用している。小口を刃物による切り目を入れて割っていることや、刃物による切り傷が多数あることから、のちに転用していることが推測できる。長さ22.8cm、幅6.0cm、厚さ1.2cmである。

3は簀串である。長さ30.9cm、幅1.8cm、厚さ0.9cm。カンナによる縱方向のケズリ調整が見られ、下部は一面を残し鋭角に削っている。4も簀串である。長さ17.2cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmである。縦木取りで、上部は圭頭状をなし、そのすぐ下に左右の切り掛けを施す。また刃物による切り傷痕が2条見られる。3、4ともに井戸1下層から出土している。

5~8は用途不明品である。5は叩き板状をしており、体部と細長い柄部からなる。体部の片面は平らに、もう一面は体部中央から斜め方向にノミで荒く削っている。体部と柄部の境は段をなさず、なだらかに仕上げる。長さ44.5cm、体部幅9.9cm、柄部幅4.3cm、厚さ2.1cm。材質はカシで、縦木取りをしている。井戸1の横板材に転用している。6は棒状の用途不明品である。長さ18.3cm、幅4.6cm、厚さ5.2cm。一面は樹皮を向いた状態のままだが、残りの三面を縱方向に削っている。縦木取りで節が残る。小口の一方は四方を各3回刃物で切込みを入れたのち折っている。柄穴が1ヶ所あるが、貫通はしていない。7も棒状の用途不明品で、長さ27.2cm、幅4.8cm、厚さ4.8cm。一面は樹皮を向いた状態のままだが、残りの三面を縱方向に削っている。小口の一方は焼いた痕跡があり、もう一方は三方を各3回刃物で切込みを入れたのち折っている。柄穴があるが、貫通はしていない。6と7は井戸5③層から出土しており、転用材の可能性もある。8は長さ24.0cm、幅15.4cm、厚さ1.8cmで、板状をしている。材質は針葉樹で、縦木取りである。抉りが1ヶ所ある。縱方向にケズリ痕が見られ、抉りのある小口は斜め方向にケズリ、尖らしている。

5.まとめ

今回の発掘調査で得られた知見を列記してまとめとしたい。

1. 調査で検出した遺構・遺物は弥生時代中期～中世期の時期がある。遺構は弥生時代中期・後期、古墳時代・奈良時代末～平安時代初め、中世期のものが確認された。遺構面は2面あり、弥生時代中期～平安時代初めと中世期がある。弥生時代中期・後期、古墳時代・奈良時代末～平安時代初めの遺構は同一面で検出されており、中世期以降に削平を受けている可能性が高い。また、中世期の遺構は上面で検出した。

2. 弥生時代の遺構は中期と後期のものが確認され、井戸、土坑、ピット、堅穴住居などがある。井戸は3基あり、すべて素掘りである。堅穴住居は2棟が検出され、堅穴住居1が後期初頭の時期であり、堅穴住居2は遺構が重複しているため詳細な時期が不明である。いずれの遺構も中期末～後期初頭の集落関係のものと考えられる。西ノ辻遺跡の第12・13次調査などでは自然流路になっている谷筋、第26・42次調査では方形周溝墓を主体とする墓域が確認されている。今回の調査地と照らして考えると北に大きな谷筋があり、西及び西北に墓域が広がっていたと思われる。また、当調査地及び東と東南に住居などの集落関係遺構があったことが推定される。

3. 堅穴住居1は当初の規模が径約7.6mであった。その後、1回の建替えがあり、径約10mに拡張して

いる。土器の出土状況より拡張時の床面は、当初より上にあると思われるが、調査では明確には確認できなかった。また、出土遺物より、後期初頭に廃絶したと考えられる。

4. 古墳時代の遺構は土坑、ピットなどが確認された。ピットは大きさなどから掘立柱建物などの柱穴と考えられるが擾乱が著しく明確な建物規模を確認できるものはなかった。調査地周辺に集落が広がっていたと推定される。

5. 奈良時代末～平安時代初めの遺構は井戸、土坑、ピットなどが確認された。土坑及びピットは掘立柱建物の柱穴と考えられるが、明確な建物規模を確認できるものはなかった。調査地周辺に集落が広がっていたと推定される。

6. 奈良時代末～平安時代初めの井戸は3基確認した。いずれも木枠を使用する。井戸1、5、7がある。井戸1は類例の少ない形状のものであり、下部に4本の支柱を打ち、その上に横板を組み、さらに上部は縦板組横棟どめである。下部は精査したが井筒の痕跡はなく、当初より素掘りであったと考えられる。当時期の井戸の形態を知る上では興味深い例である。井戸内より土師器壺や須恵器壺などの完形品が多く出土している。意図的に投入されたと考えられ、祭祀がおこなわれていた可能性が高い。また、井戸5と7は同一位置に造られており、造り替えがおこなわれたと思われる。本来の井戸は7であり、枠の基底部のみが残っていた。井戸5は造り替えの際に規模を一回り大きくしていることが確認できた。井戸枠は4本柱を立てた横板組隅柱どめである。東の横板は基底部より2番目に東二、西の横板は基底部より3・4・5番目に西三・西四・西五の墨書きが残っていた。同様の類例は奈良県の平城京発掘報告ⅡのSE168-Aがあり、組上げ番付の墨書きと考えられている。西ノ辻遺跡の墨書きも横板の位置と番号が一致していることから組上げ番付と考えられ、当初より、組立の順番が決まっていたと推測できる資料である。

7. 弥生時代～平安時代初めの時期は集落を形成していた当地点も中世期には耕作地に変化しており、鉢溝が多数検出された。

8. 弥生時代の土器が井戸2・6や土坑12・23・77・79などから多量に出土している。横描文と四線文より構成されている土器群であり、中期末の一括資料と考えられる。



調査地全景



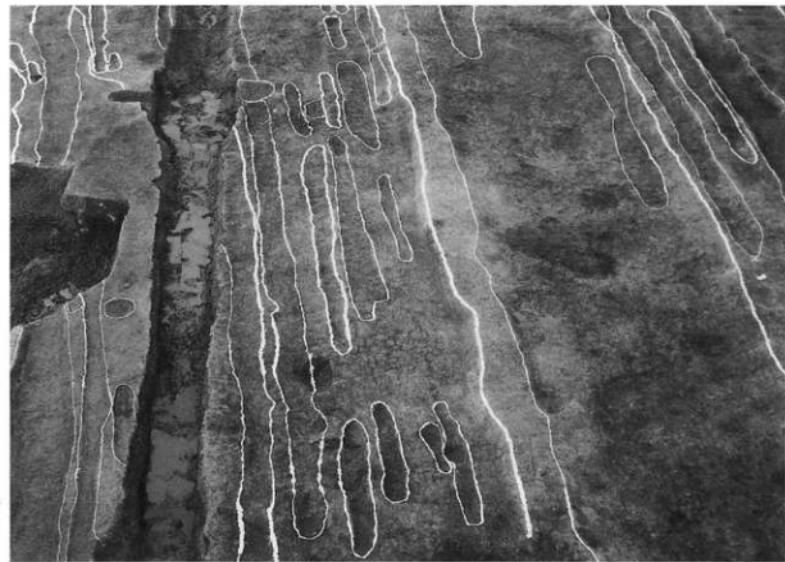
遺構全景（B地区）（弥生～平安時代）



遺構全景（C地区）（弥生～平安時代）



鉢溝検出状況（中世）



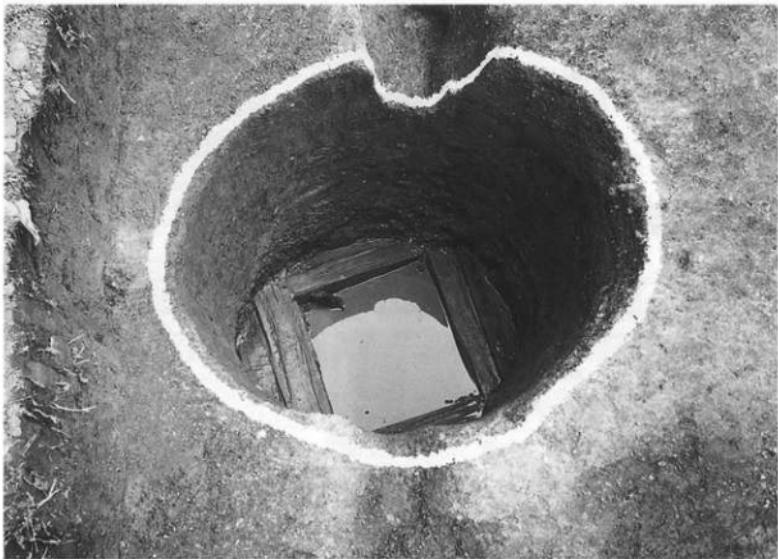
鉢溝検出状況（中世）



鉢溝検出状況（中世）



井戸 1 井戸枠検出状況



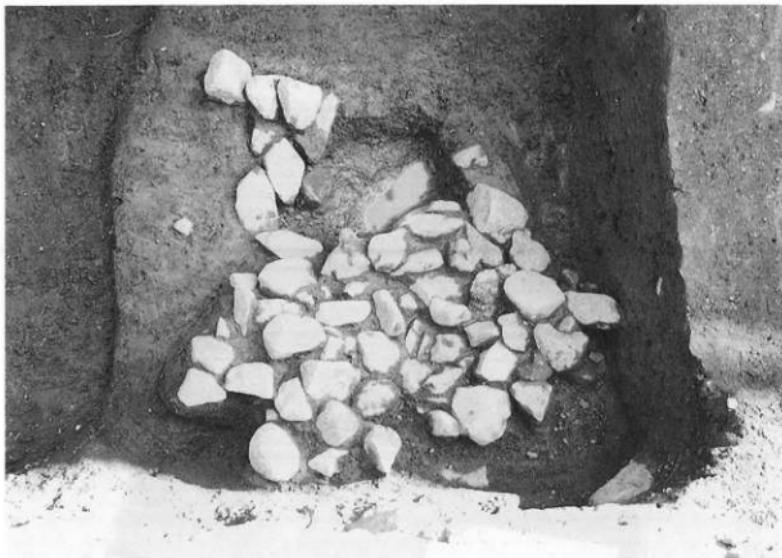
井戸 1 横板検出状況



井戸 1 支柱検出状況



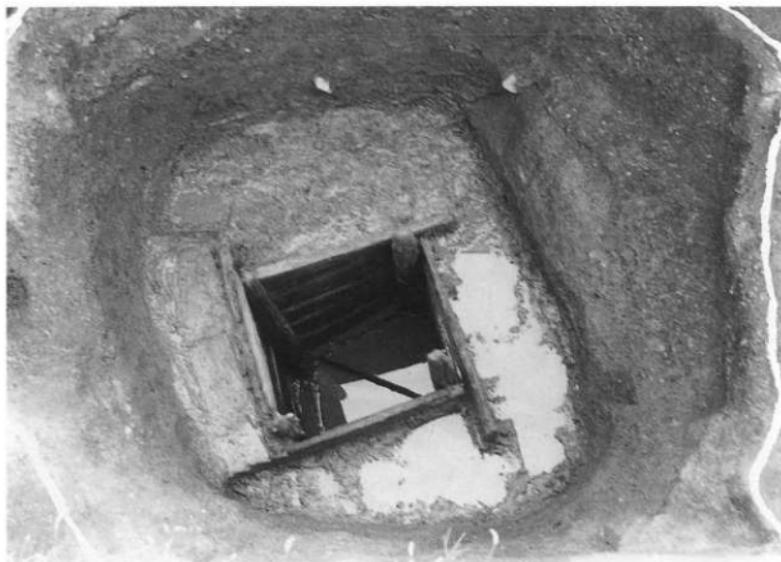
井戸 1 挖削後状況



井戸 5 集石検出状況



井戸 5 井戸枠検出状況



井戸 5 井戸枠検出状況



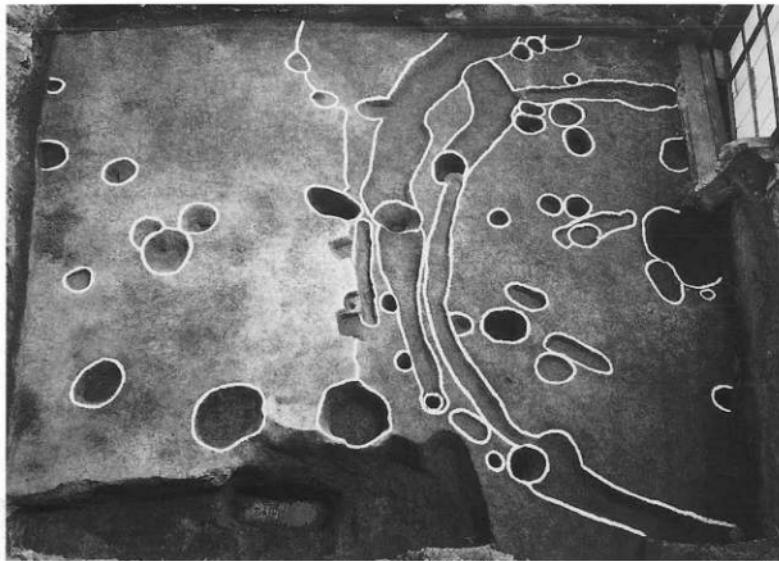
井戸 5 下部横桟検出状況



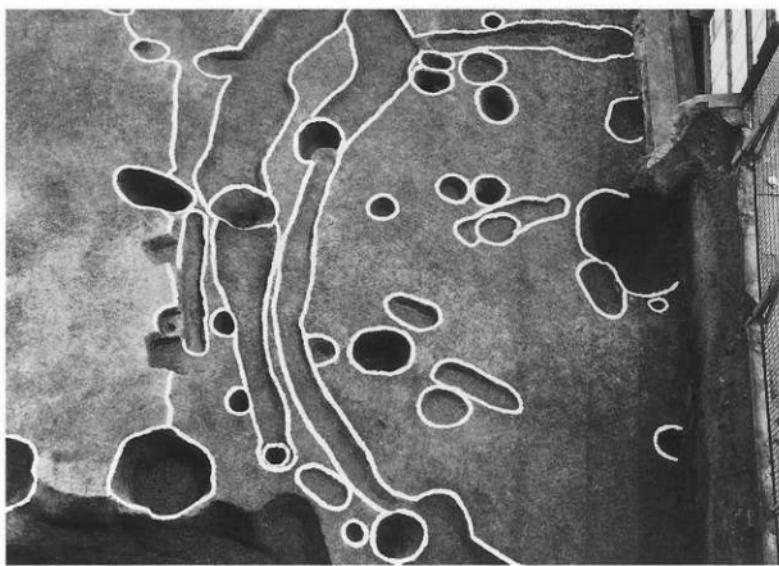
井戸 5 最下部井戸枠、井戸 7 井戸枠検出状況



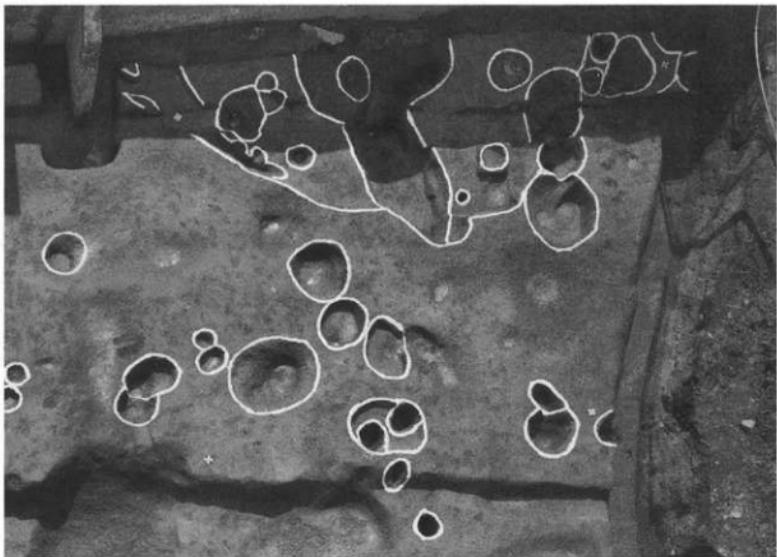
井戸 5・7 挖削後状況



豊穴住居1検出状況



豊穴住居1検出状況



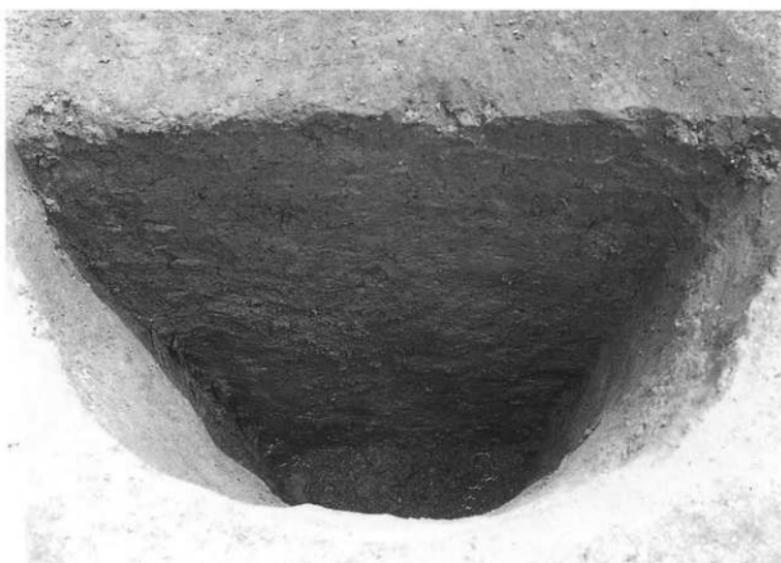
竪穴住居 2 棟出状况



竪穴住居 2 土層断面



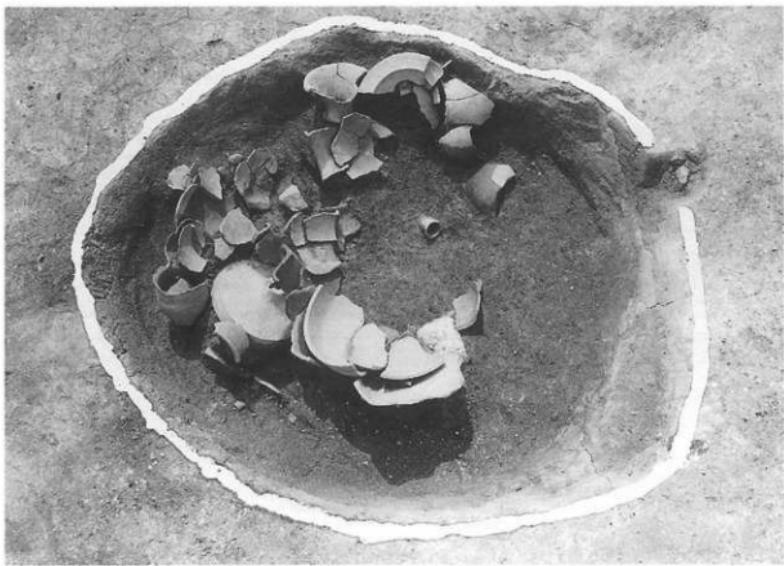
井戸 2 集石検出状況



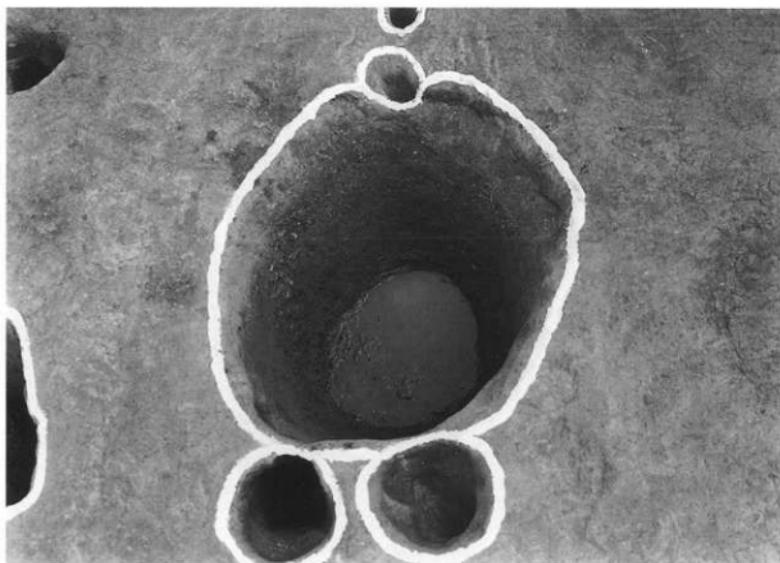
井戸 4 土層断面



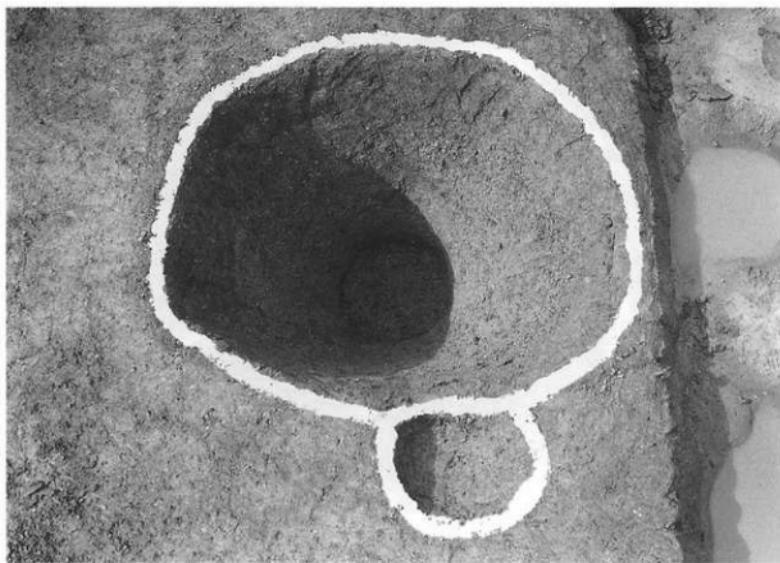
井戸 6 検出状況



土坑23遺物出土状況



土坑23掘削後状況



土坑25検出状況



土坑76検出状況



土坑77検出状況



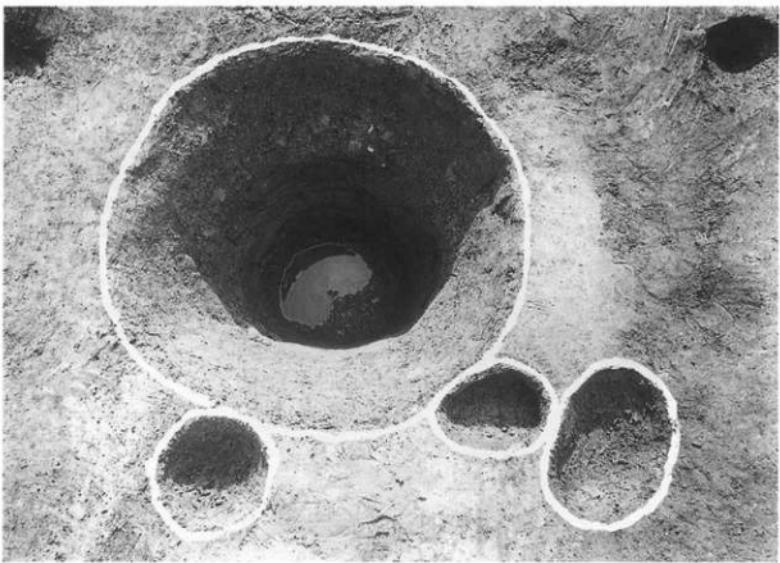
土坑79検出状況



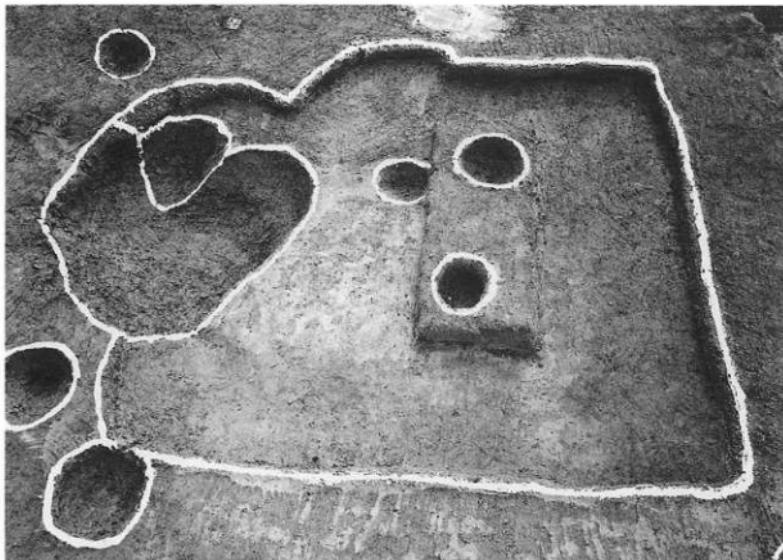
土坑113土層断面



土坑135土層断面



土坑151検出状況



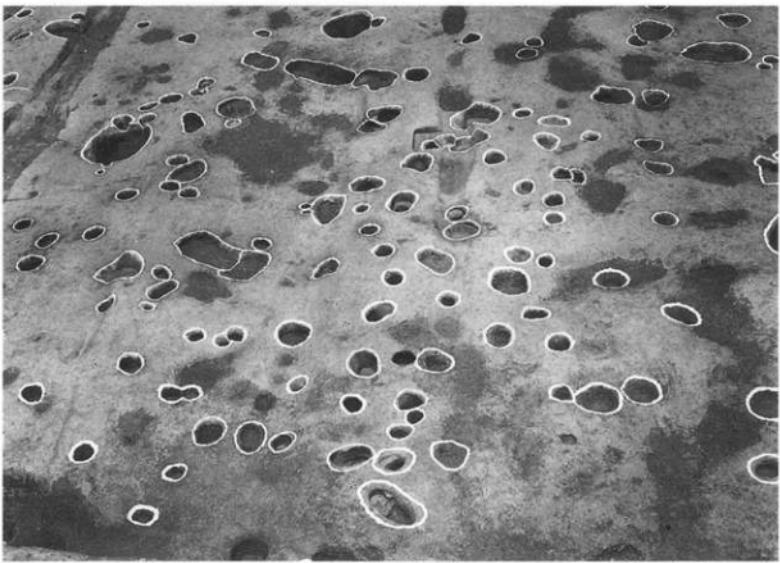
土坑30検出状況



土坑126焼石棟出状況



ピット308石検出状況



土坑・ピット群検出状況（弥生～平安時代）



ピット群検出状況（弥生～平安時代）



ピット群検出状況（弥生～平安時代）



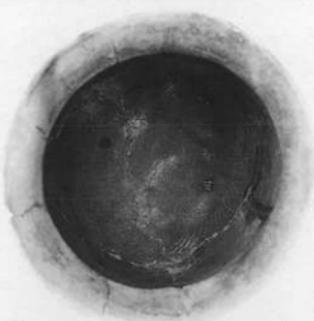
調査区東壁土層断面



調査区南壁土層断面



3



8'



4



5



8

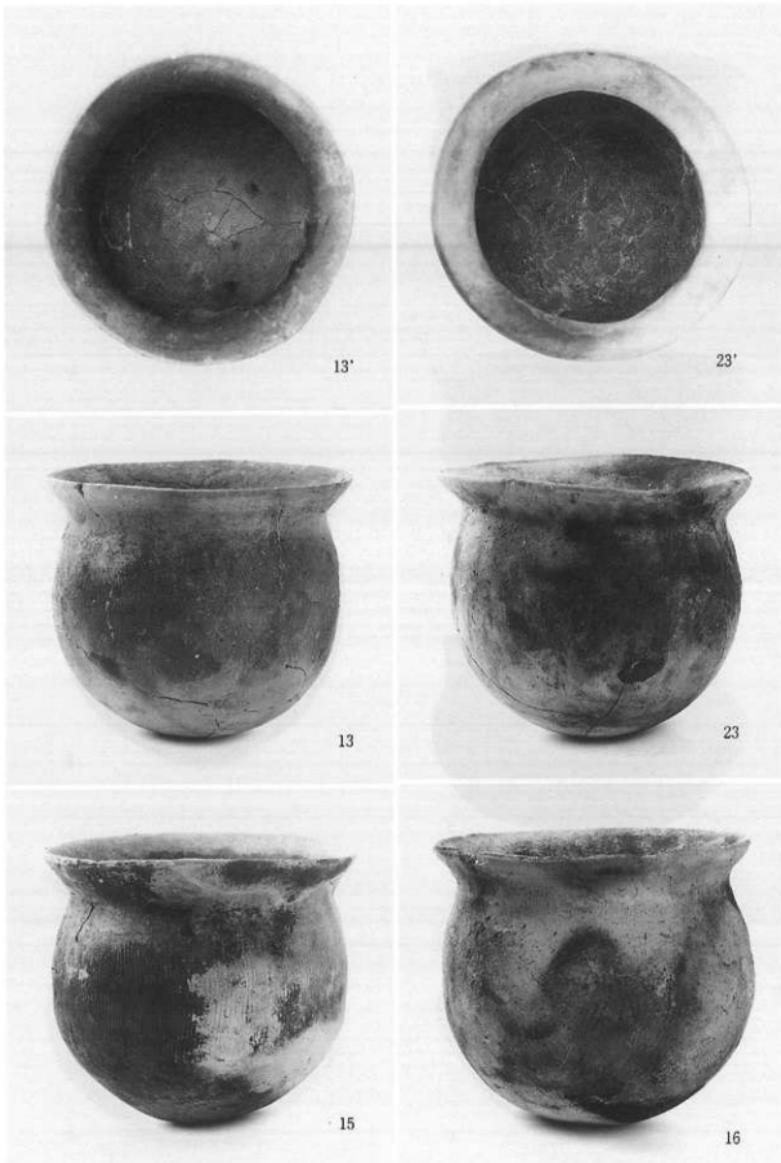


6



12

井戸 1 出土土器 壺 (3~6)、甕 (8~12)



井戸 1 出出土師器 鏡 (13・15・16・23)



17



20



18



21

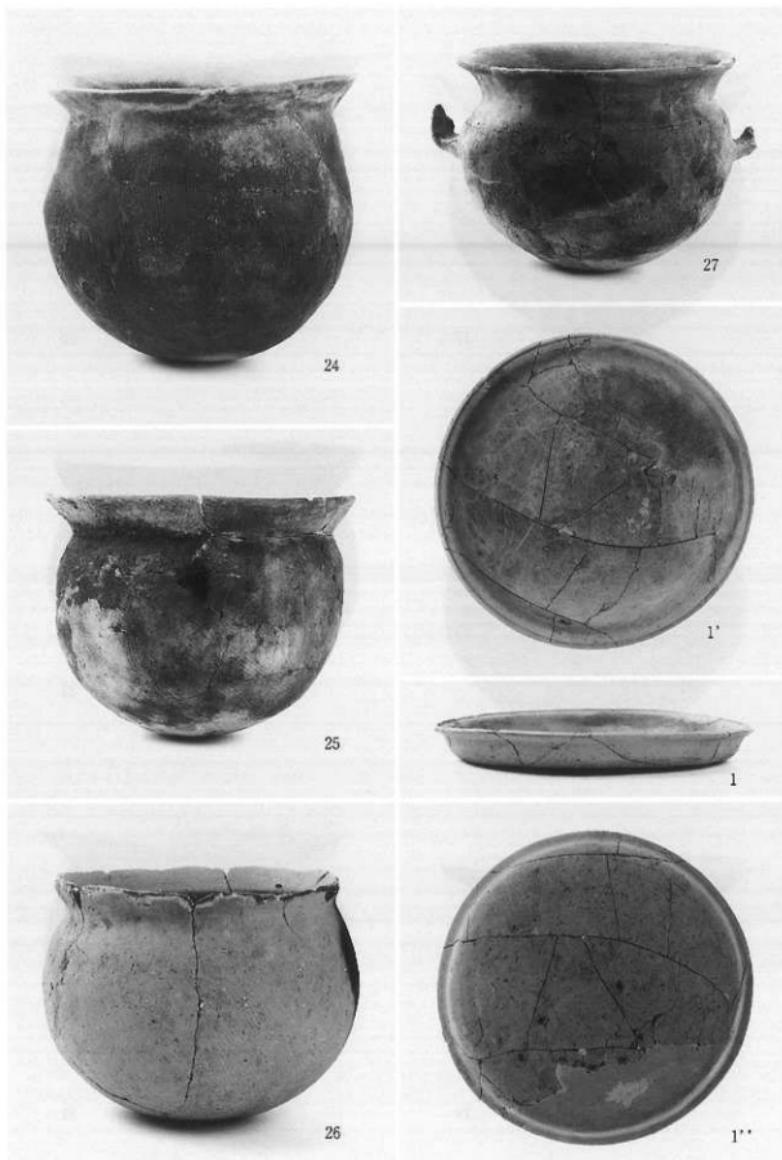


19



22

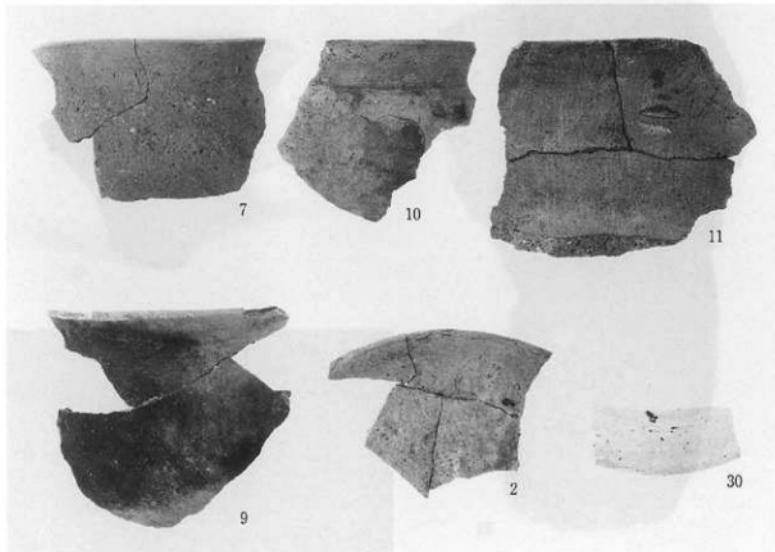
井戸 1 出土土師器 壺 (17~22)



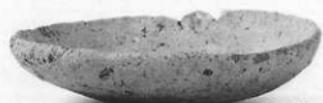
井戸1出土土師器 皿(1)、甌(24~27)



井戸 1 出土土器 土師器坏 (28・29)、須恵器壺 (31)



井戸 1 出土土器 盆 (2)、甌 (7・9・10)、壺 (11)、坏B蓋 (30)



36



46



49



45



50



53

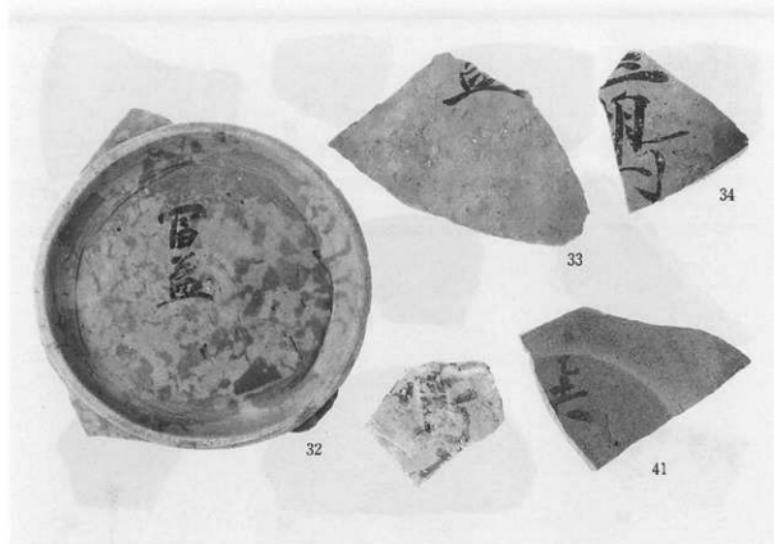


63

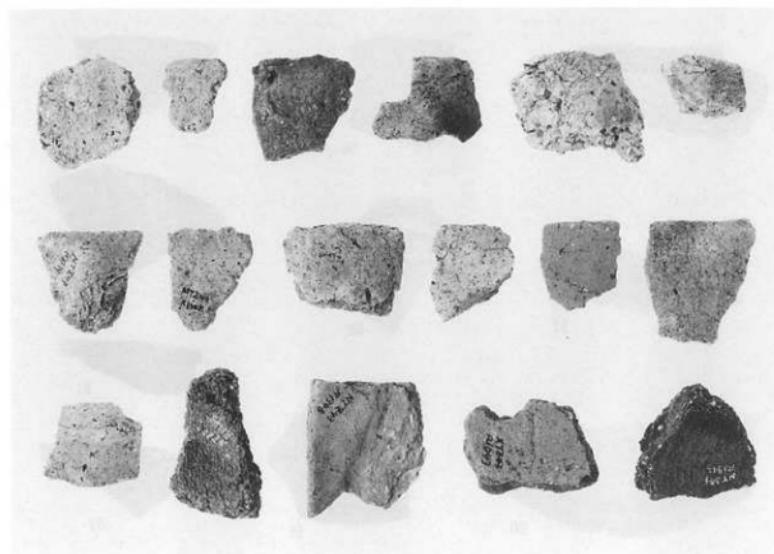


63

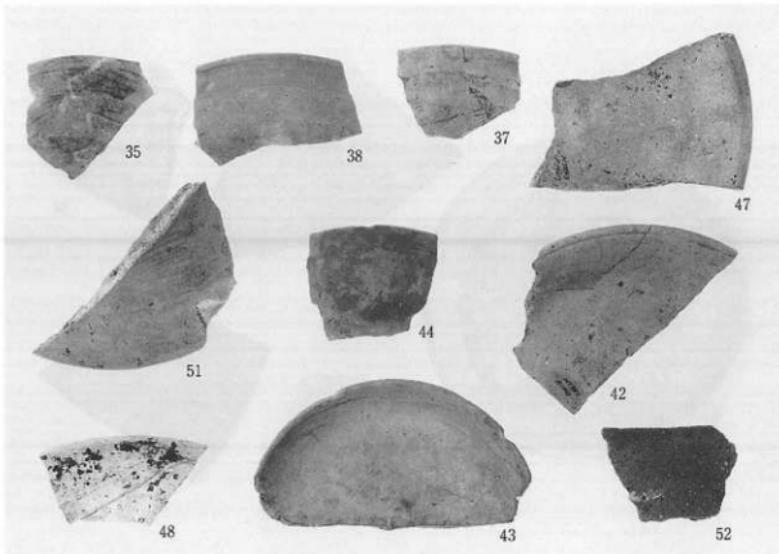
井戸5出土土器 土師器小皿（36・49）、楕（45・46）、ミニチュア甕（50）、甕（53）、須恵器甕（63）



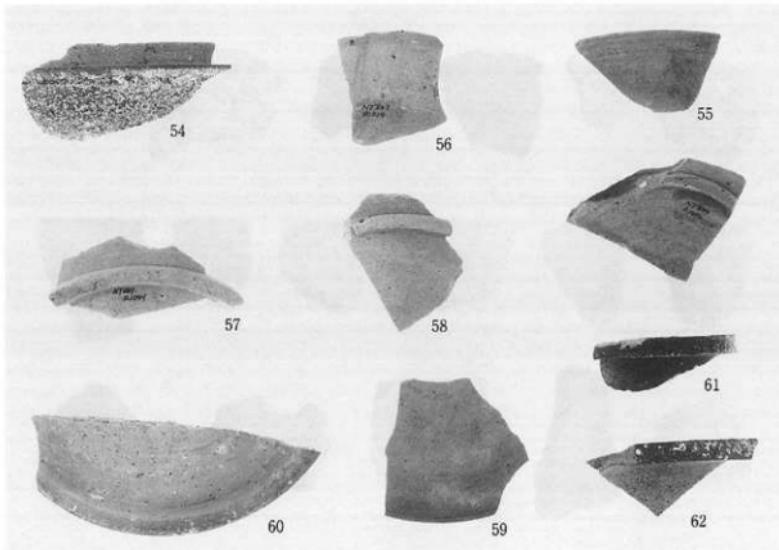
井戸 5 出土墨書き器 土師器 (32~34)、須恵器 (41)



井戸 5 出土制塙土器



井戸 5 出土土師器 坯 (35・42)、皿 (38・43・47・48)、椀 (37・44)、高坏 (51)、甕 (52)



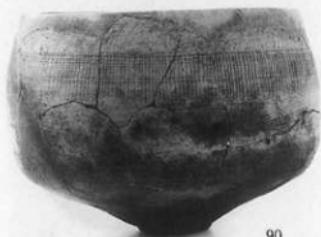
井戸 5 出土須恵器 坯 (54~58)、坏B蓋 (59・60)、甕 (61・62)



89



75



90

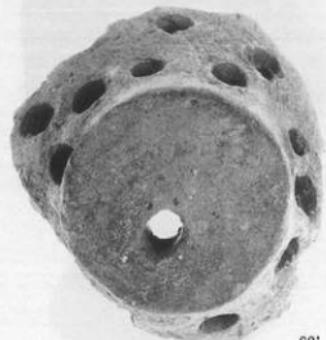


71

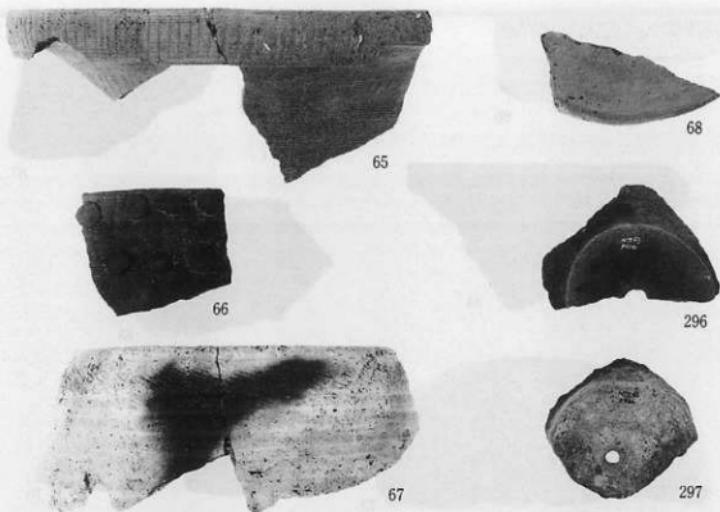


80

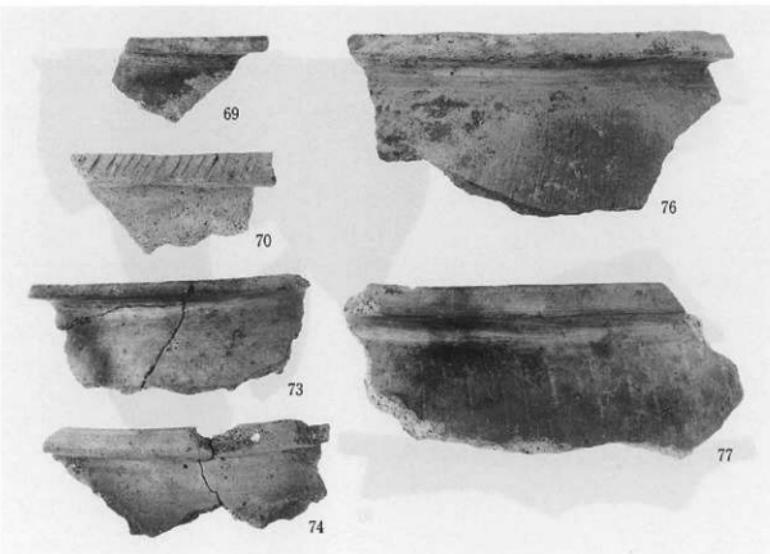
井戸 2 出土弥生土器 壺 (89・90)、甕 (71・75)、ミニチュア土器 (80)



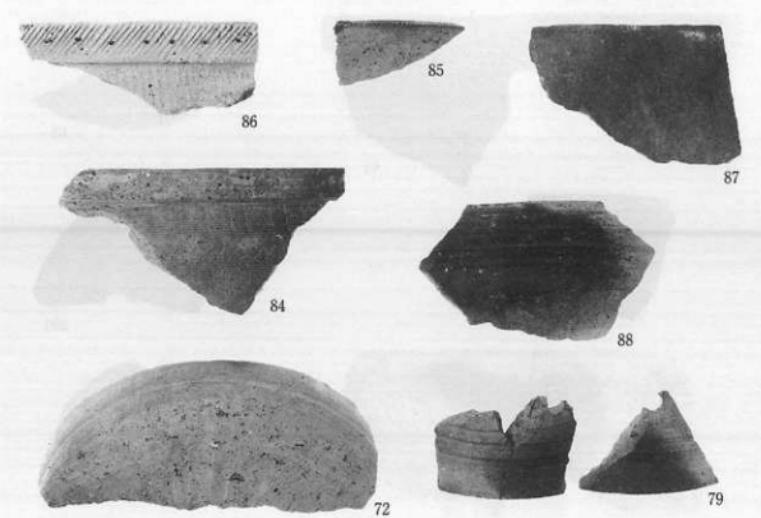
井戸 2 出土弥生土器 高坏 (78)、ミニチュア土器 (81)、多孔土器 (82・83)



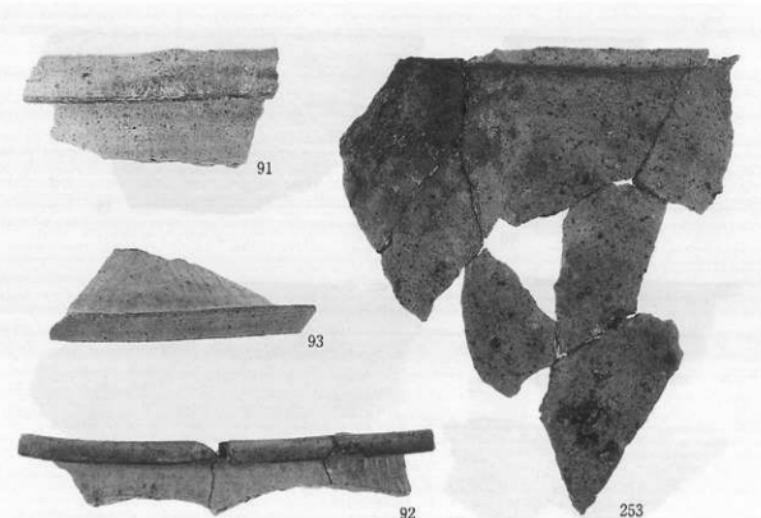
井戸 2 出土弥生土器 壺（65）、細頸壺（66）、無頸壺（67）、蓋（68）、壺（296・297）



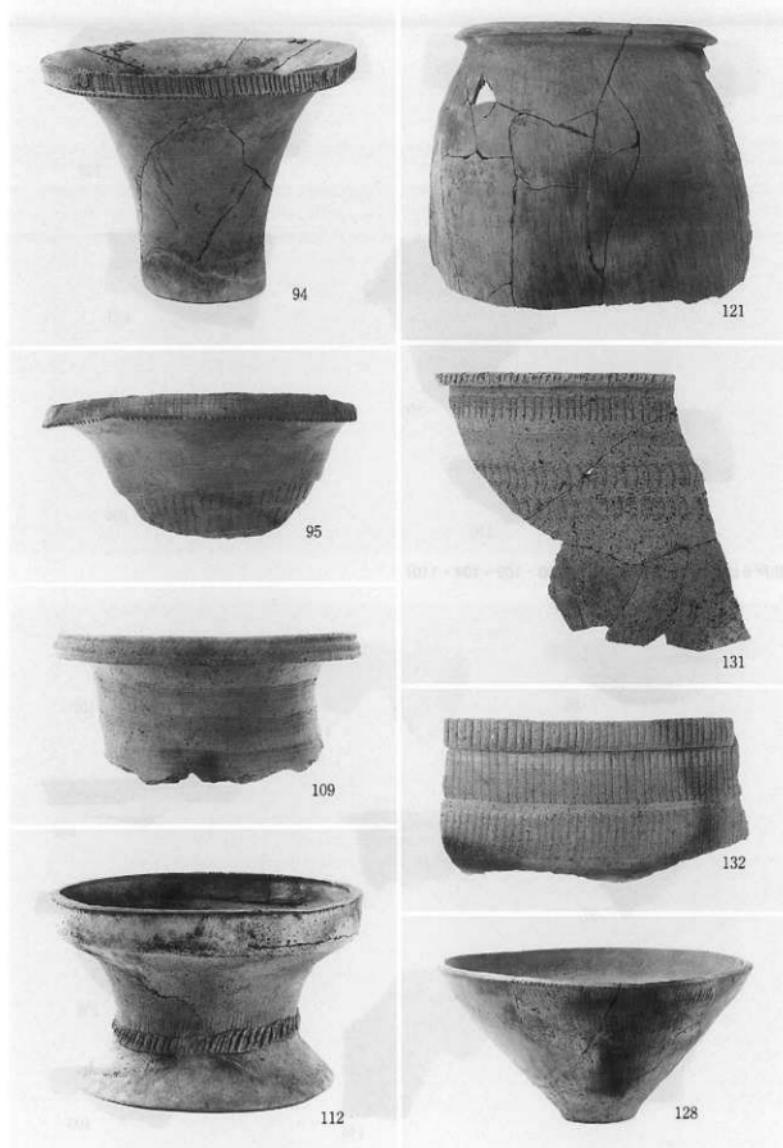
井戸 2 出土弥生土器 壺（69・70・73・74・76・77）



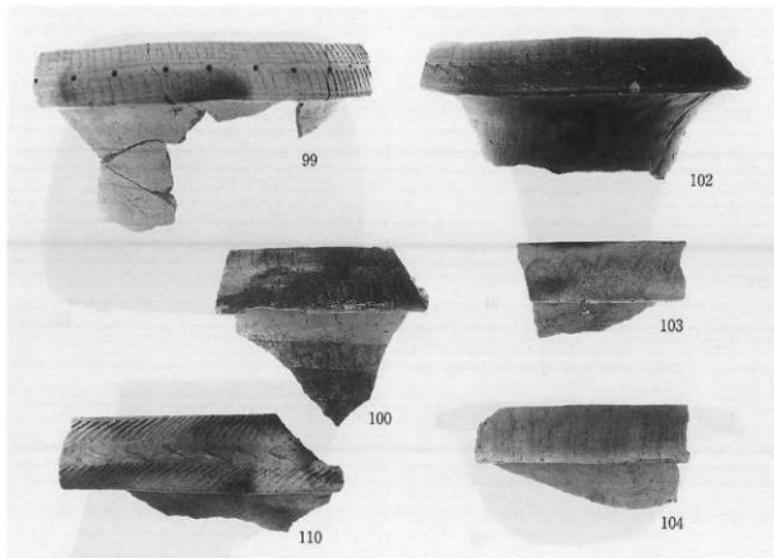
井戸 2 出土弥生土器 鉢 (79・84~87)、高坏 (72・88)



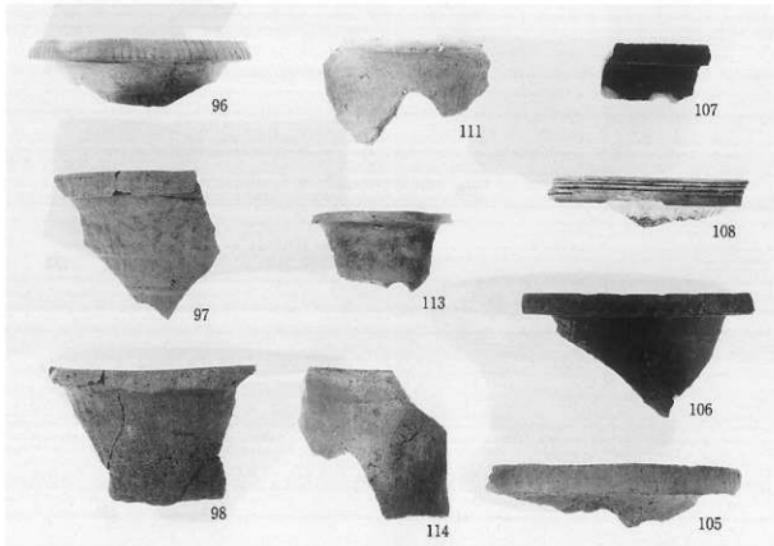
井戸 4 出土弥生土器 盖 (91)、甕 (92)、蓋 (93) 土坑37出土弥生土器 瓶 (253)



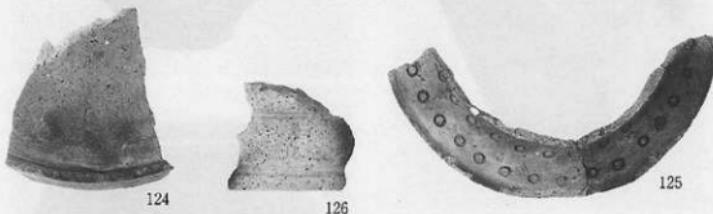
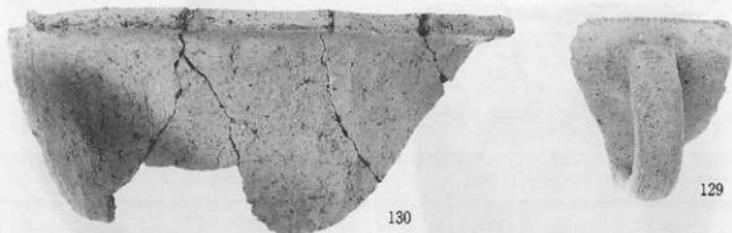
井戸 6 出土弥生土器 壺 (94・95・109・112)、甕 (121)、鉢 (128・131・132)



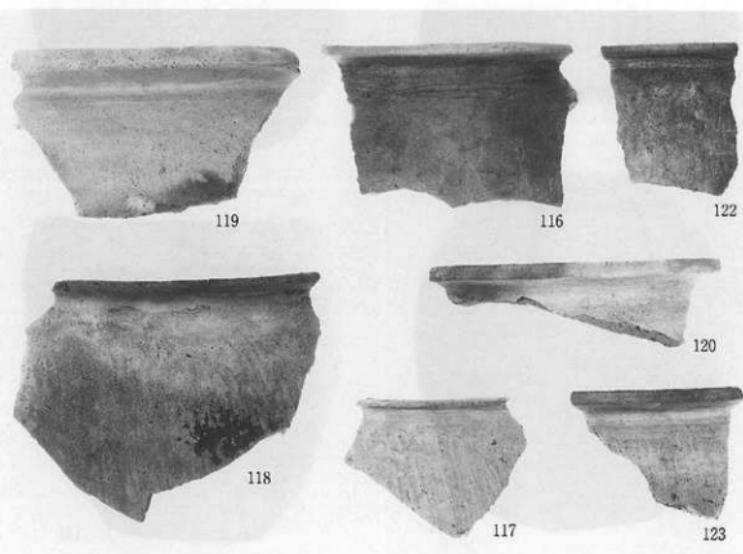
井戸 6 出土弥生土器 壺 (99・100・102~104・110)



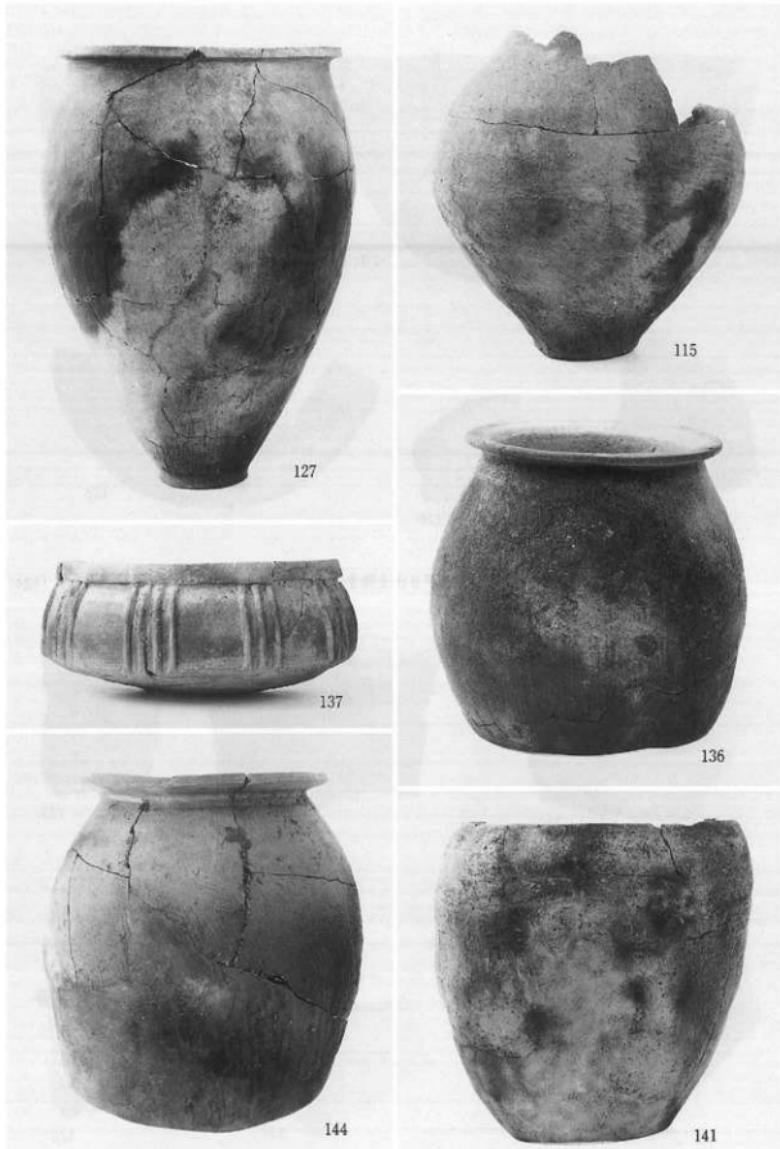
井戸 6 出土弥生土器 壺 (96~98・105~108・111・113・114)



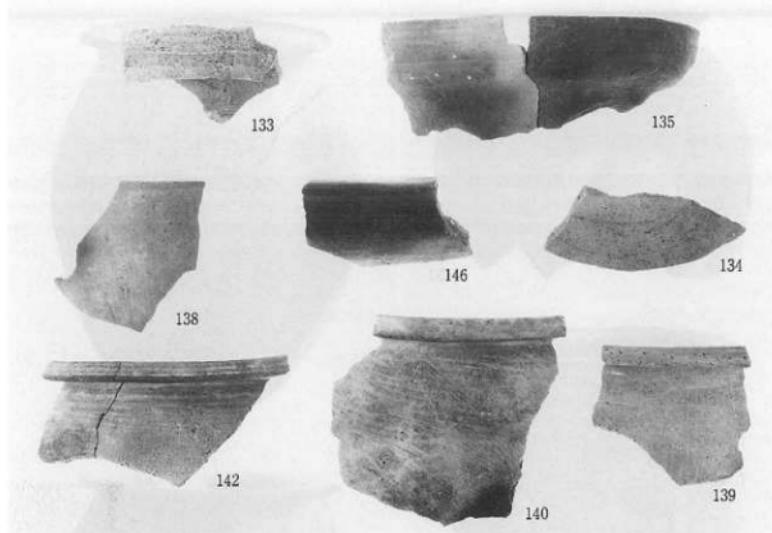
井戸 6 出土弥生土器 鉢 (125・126・129・130)、高坏 (124)



井戸 6 出土弥生土器 壺 (116~120・122・123)



井戸 6 出土弥生土器壺 (115)、甕 (127)　土坑12出土弥生土器　台付無類壺 (137)、甕 (136・141・144)



土坑12出土弥生土器 壺（133・135）、甌（138～140・142）、蓋（134）、高环（146）



土坑12出土弥生土器 器台（143・145）、高环（147）



152



154



161



158



159



162

土坑23出土弥生土器 瓢 (152・154・158・159・161・162)



148



166



167



165



177



168



173

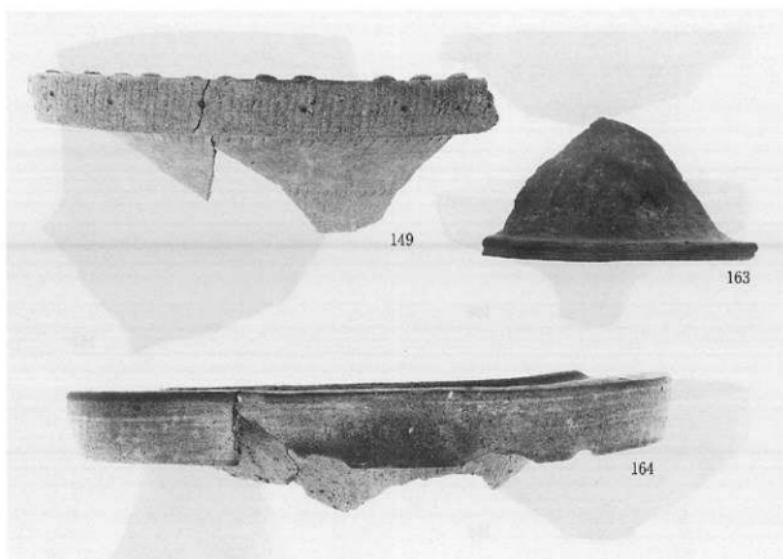


185

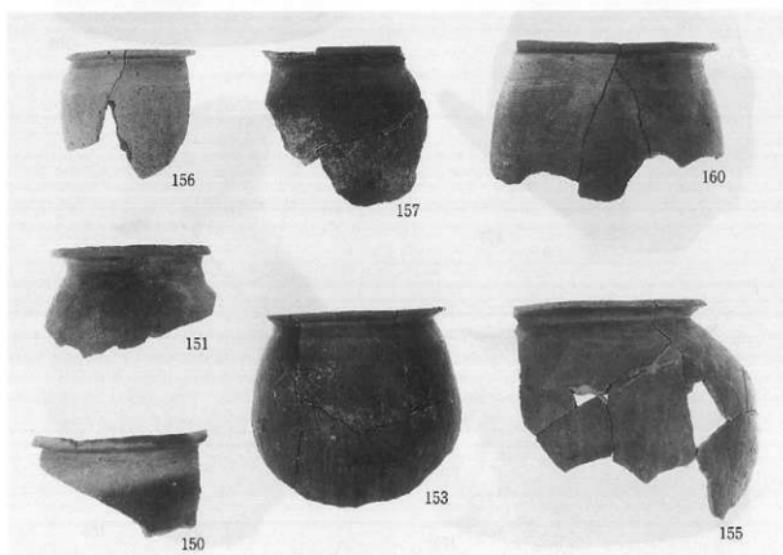
土坑23出土弥生土器 壺（148）、鉢（165・167・168）、高坏（166）

土坑24出土弥生土器 壺（173）、鉢（177）

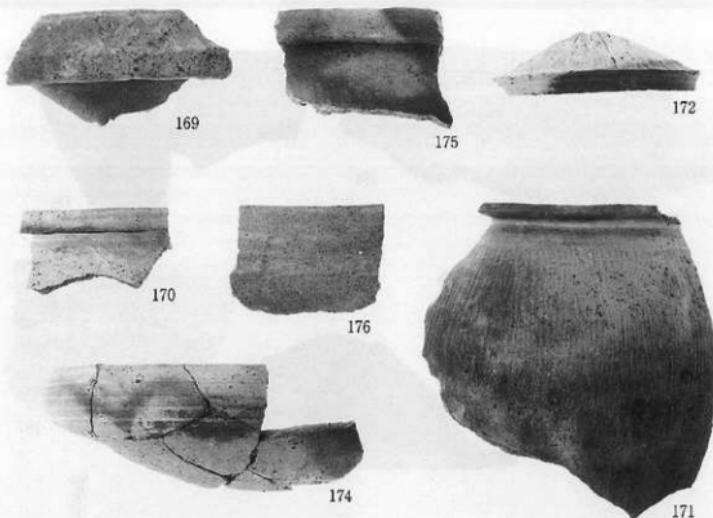
土坑34出土弥生土器 水差形土器（185）



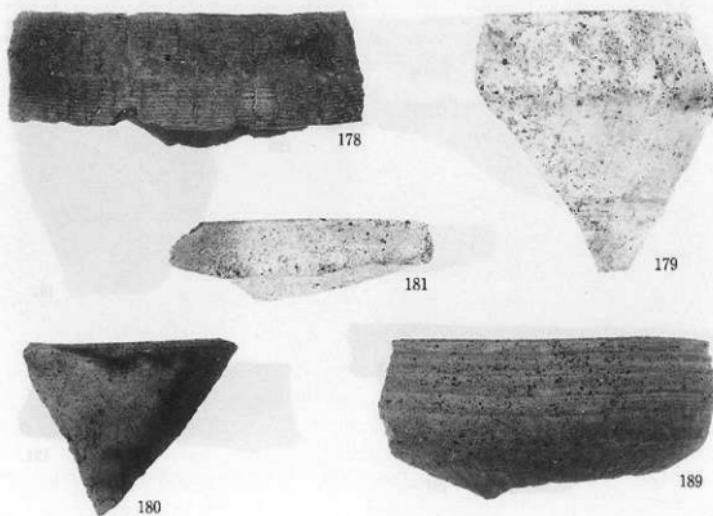
土坑23出土弥生土器 壺（149）、蓋（163）、高坏（164）



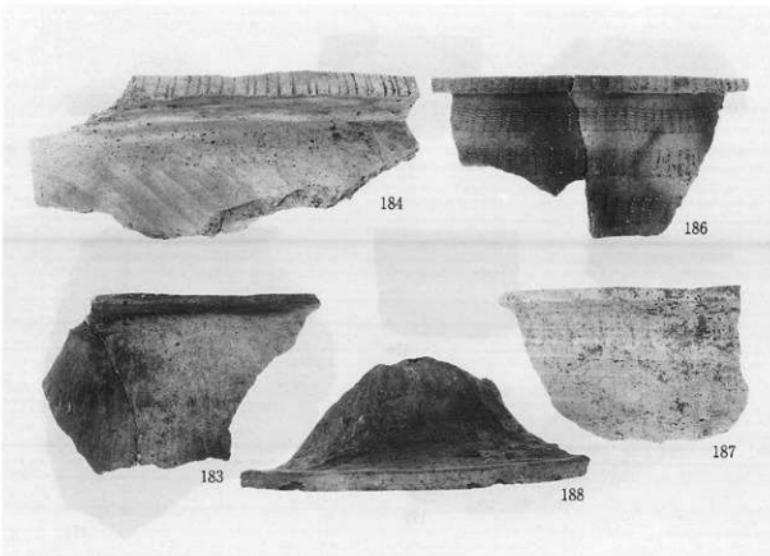
土坑23出土弥生土器 壺（150・151・153・155～157・160）



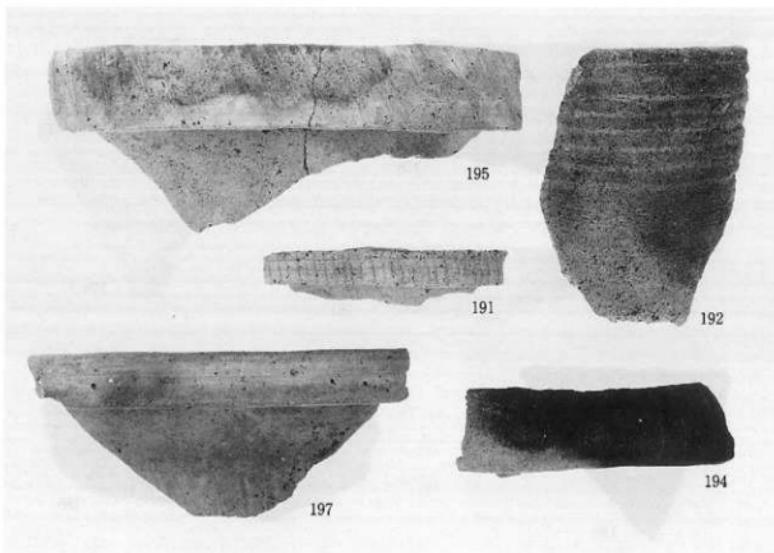
土坑24出土弥生土器 壺（169）、壺（170・171・175）、蓋（172）、高杯（174）、鉢（176）



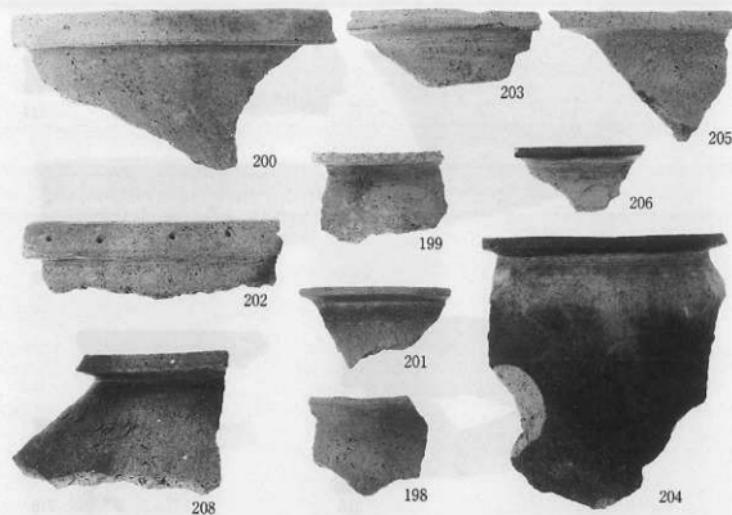
土坑34出土弥生土器 壺（178～181）、高杯（189）



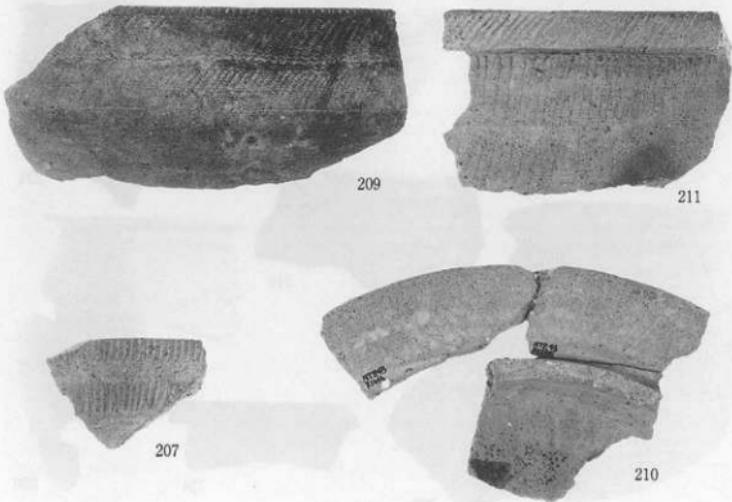
土坑34出土弥生土器 壺（184）、鉢（183・186・187）、蓋（188）



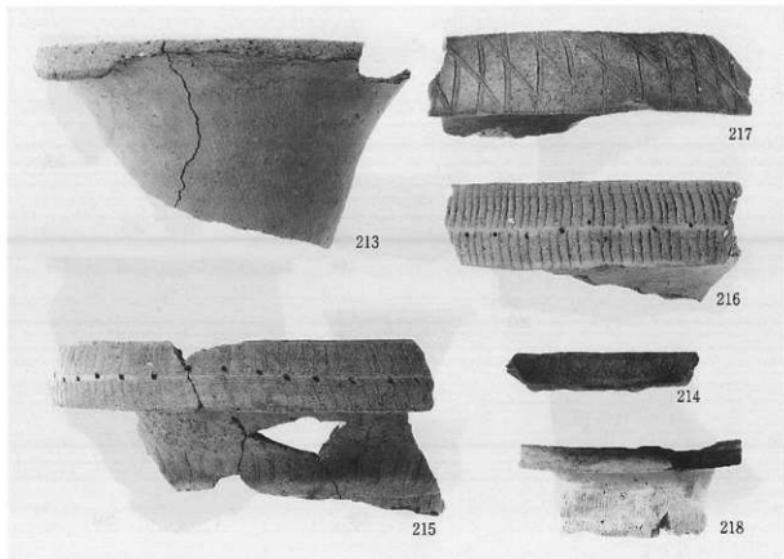
土坑77出土弥生土器 壺（191・192・194・195・197）



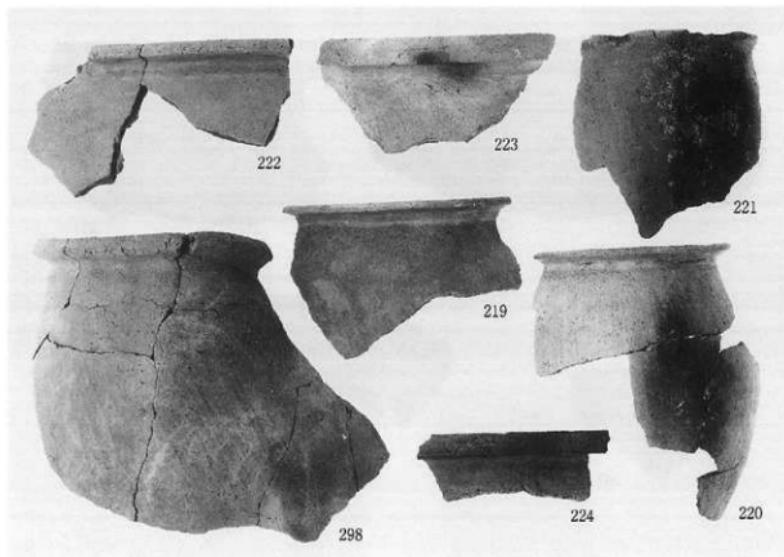
土坑77出土弥生土器 壺（198～206・208）



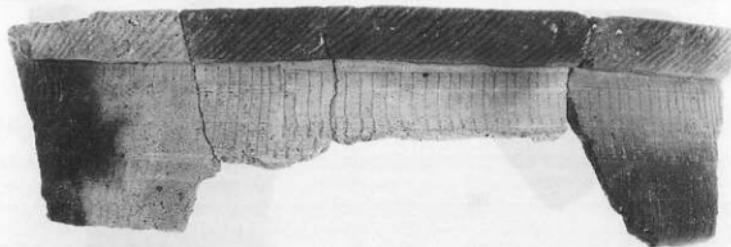
土坑77出土弥生土器 鉢（207・209・211）、高杯（210）



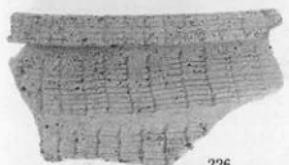
土坑79出土弥生土器 壺 (213~218)



土坑79出土弥生土器 壺 (219~224・298)



227



226

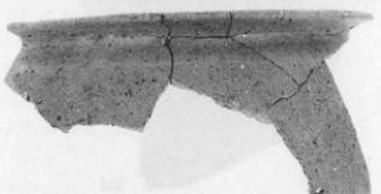


228

土坑79出土弥生土器 鉢 (226~228)



247



248



250



249

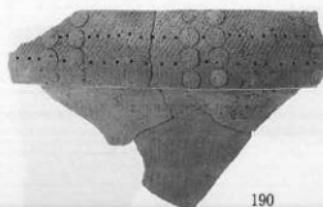


252



251

土坑25出土弥生土器 壺 (247・250・252)、甕 (248)、鉢 (249)、脚部 (251)



190



193



196



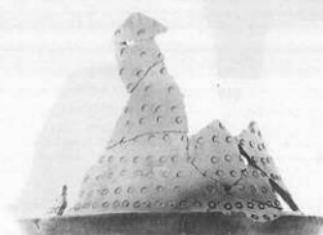
229



212

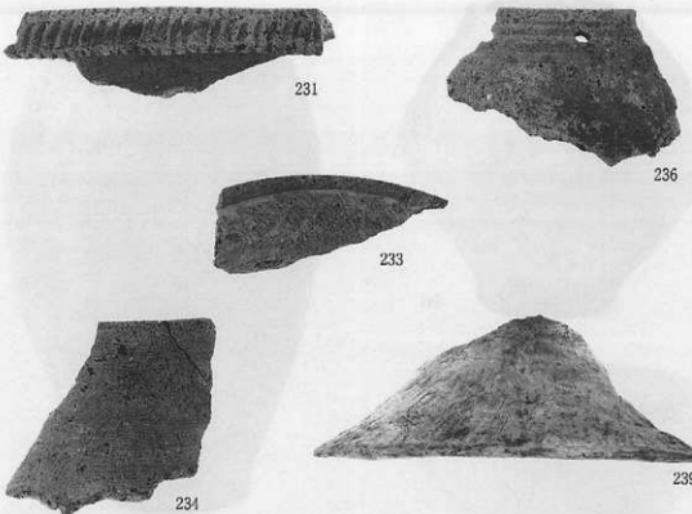


230

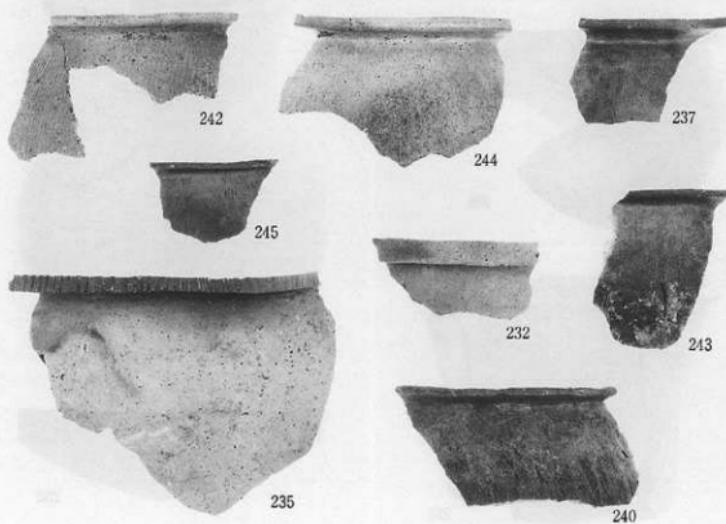


230

土坑77出土弥生土器 壺（190）、高環（193）、蓋（196） 土坑79出土弥生土器 壺（212）、鉢（229・230）
土坑76出土弥生土器 壺（255）



土坑151出土弥生土器 壺（231・233）、水差形土器（234）、無頸壺（236）、蓋（239）



土坑151出土弥生土器 壺（232・235・237・240・242～245）



241



254



238



256



268



286



282

土坑36出土弥生土器 鉢（256） 土坑151出土弥生土器 鉢（238）、壺（241） ピット316出土弥生土器 壺（254）
竪穴住居1出土弥生土器 短頸壺（268）、高壺（282）、長頸壺（286）



263



293



295



294



285

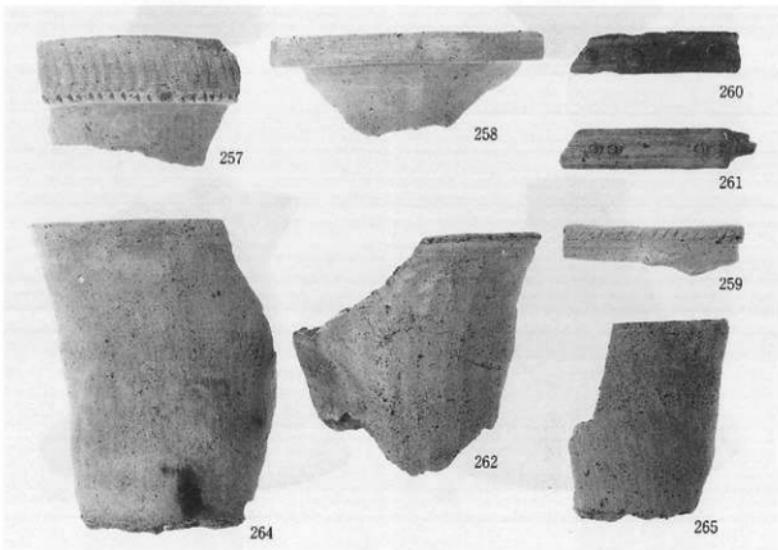


284

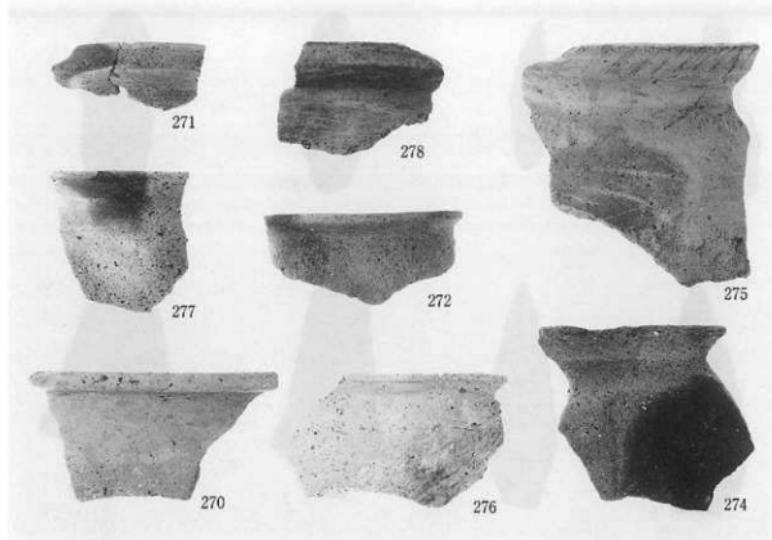
堅穴住居 1 出土弥生土器 壺 (263・294・295)、楕形鉢 (293)、高環 (284・285)



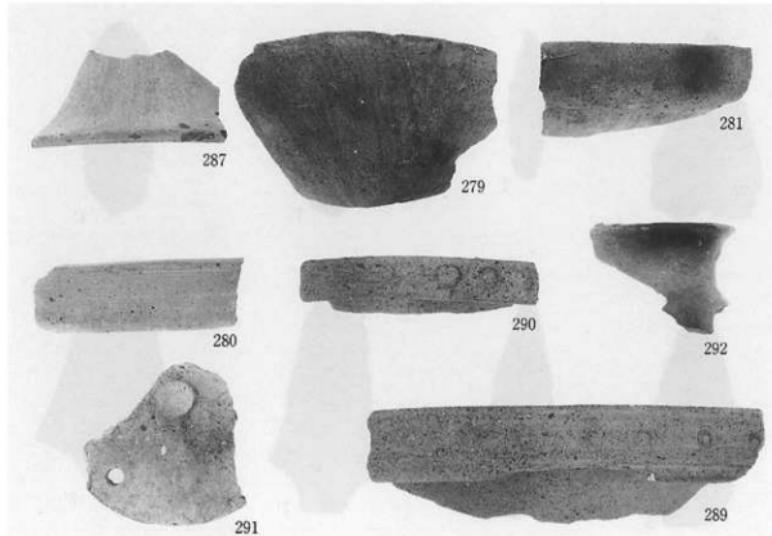
竪穴住居1出土弥生土器 高杯（283）、器台（288）



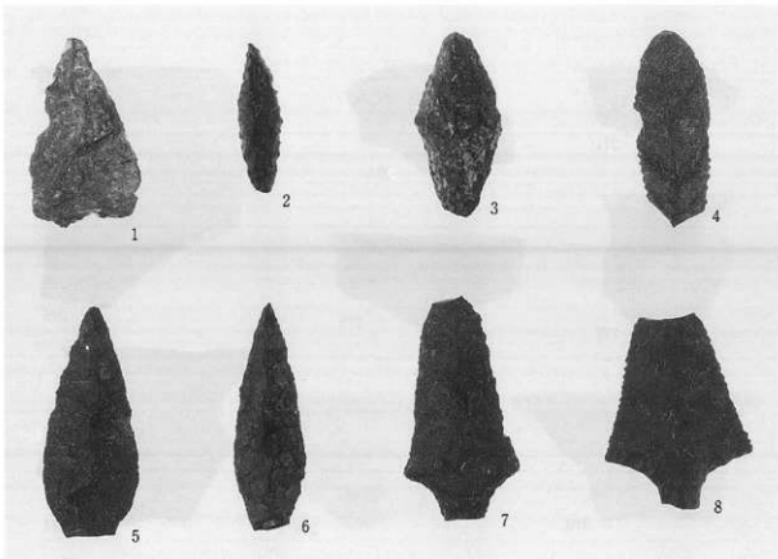
竪穴住居1出土弥生土器 壺（257～262・264・265）



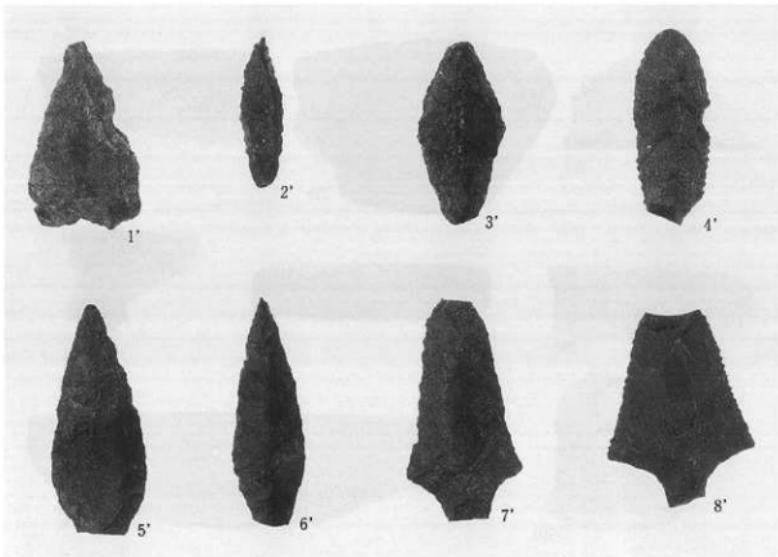
竪穴住居1出土弥生土器 鞘 (270~272・274~278)



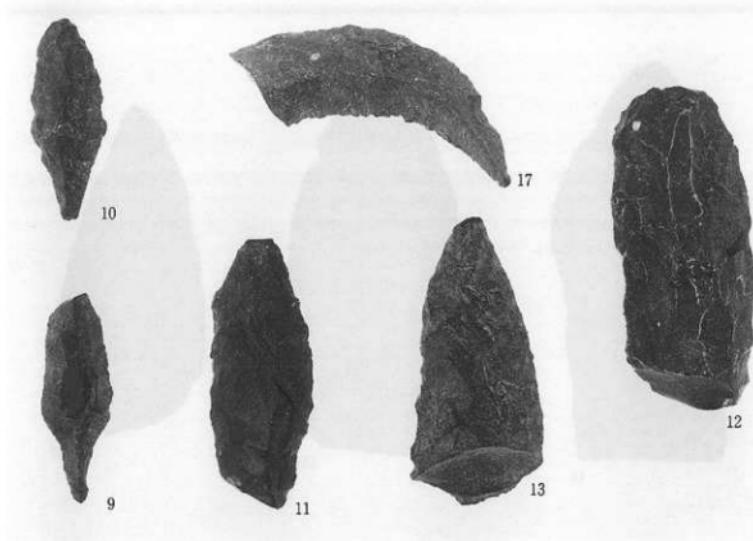
竪穴住居1出土弥生土器 高坏 (279~281)、器台 (289・290)、蓋 (291)、ミニチュア壺 (292)、脚部 (287)



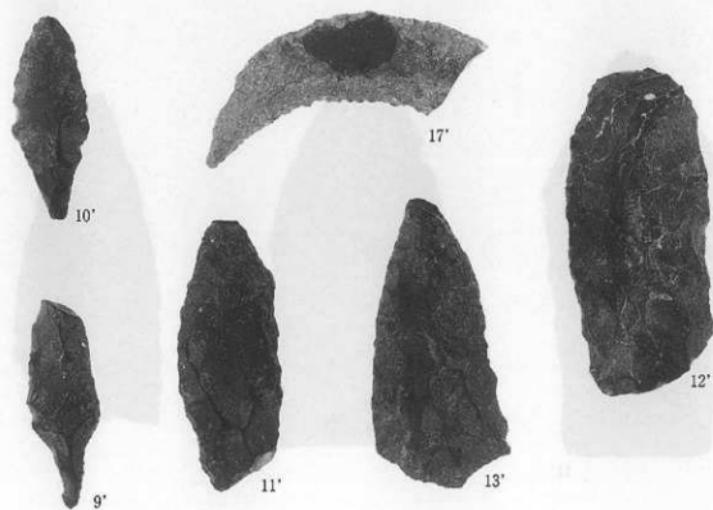
石器 石鏃 (1~8)



石器 同上 (裏面)



石器 石錐（9・10）、石槍（11～13）、石小刀（17）



石器 同上（裏面）



14



15



16

石器 石槍 (14~16)



14'

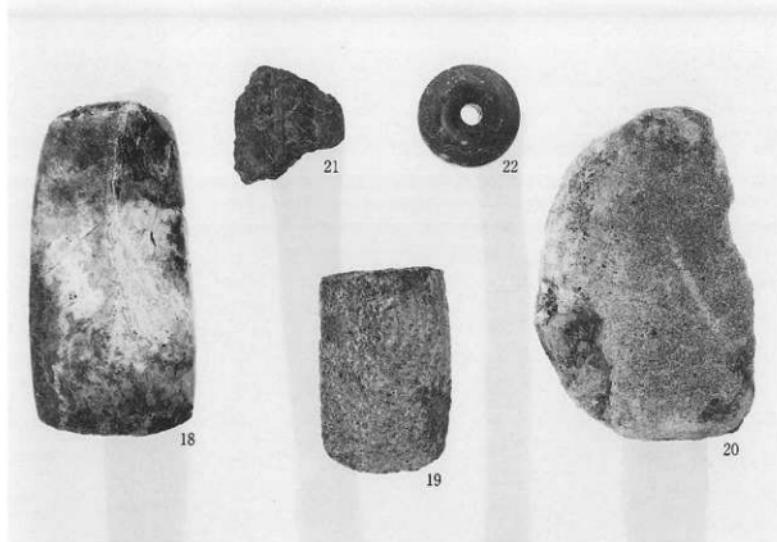


15'

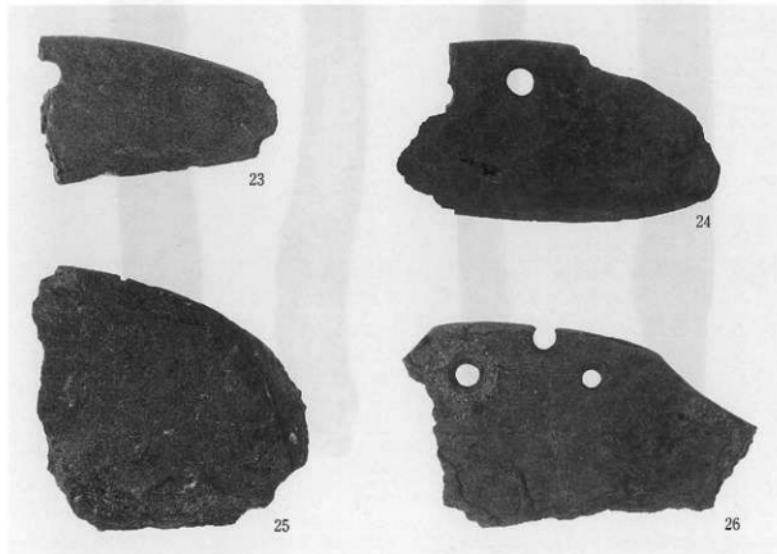


16'

石器 同上 (裏面)



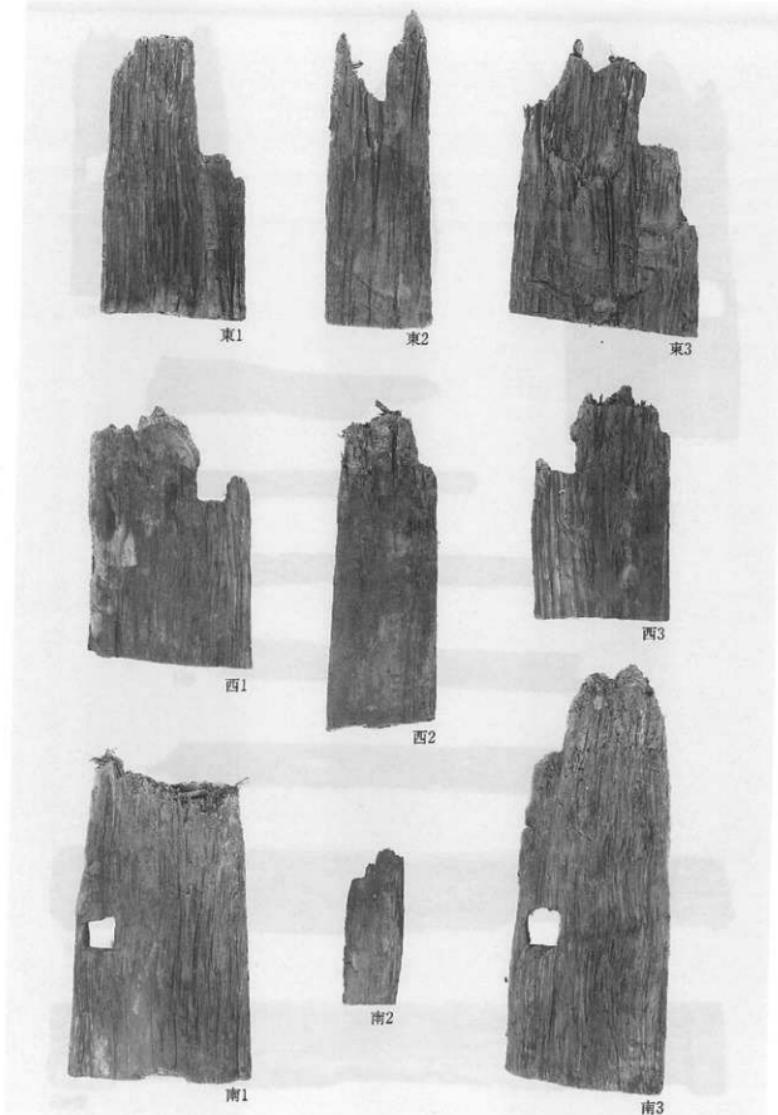
石器 石斧（18・19）、砥石（20）、石劍（21）、紡錘車（22）



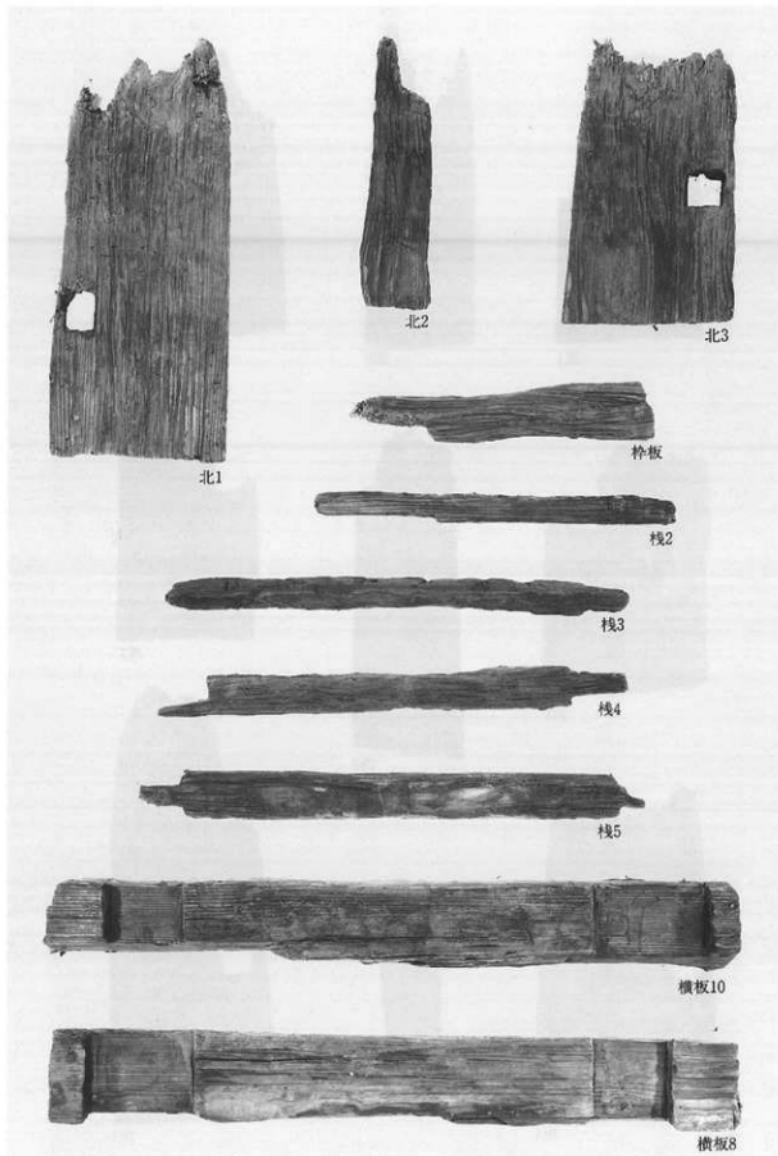
石器 石包丁（23～26）



井戸1出土木柱 支柱



井戸 1 出土木棒 繩板 (東1～東3・西1～西3・南1～南3)



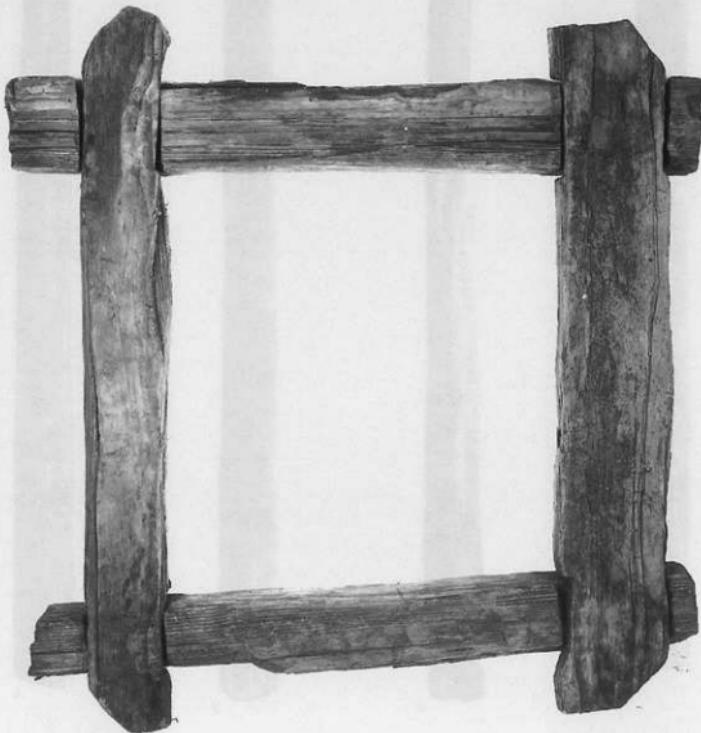
井戸 1 出土木枠 縦板（北1～北3）、枠板、横枠（棧2～棧5）、横板（10・8）



横板1



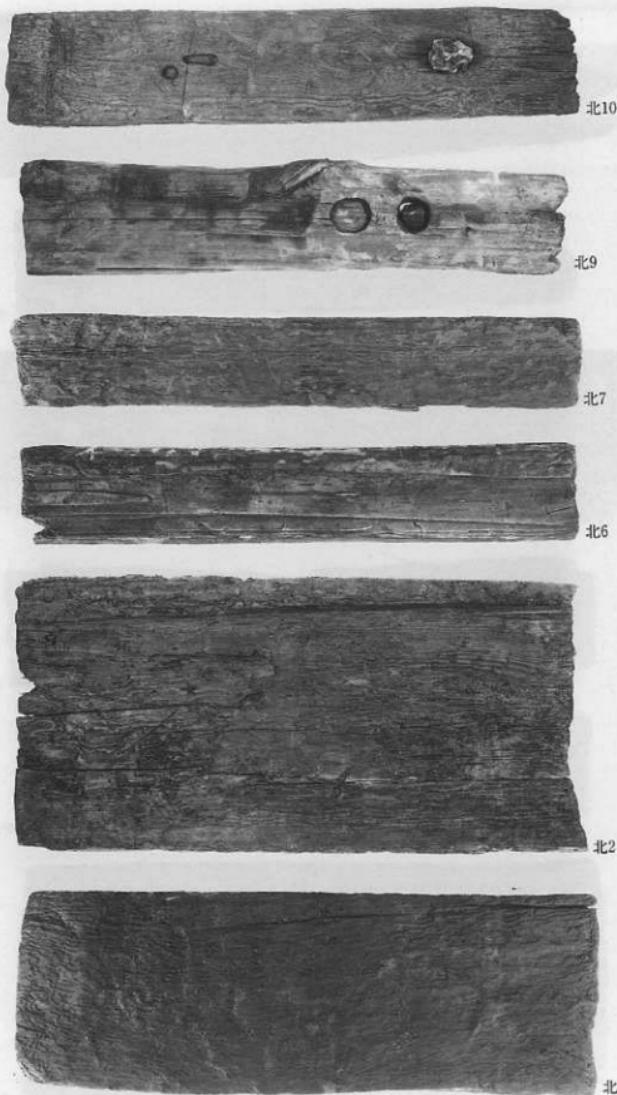
横板5



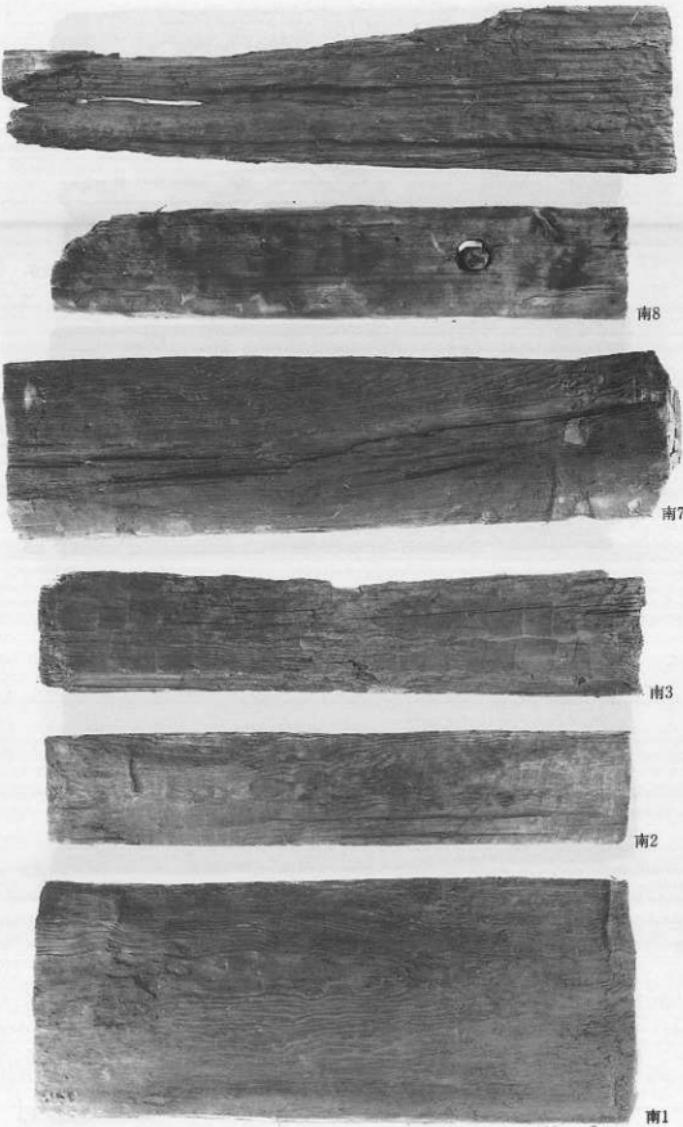
井戸1出土木枠 横板(1・6)、横板組立状況



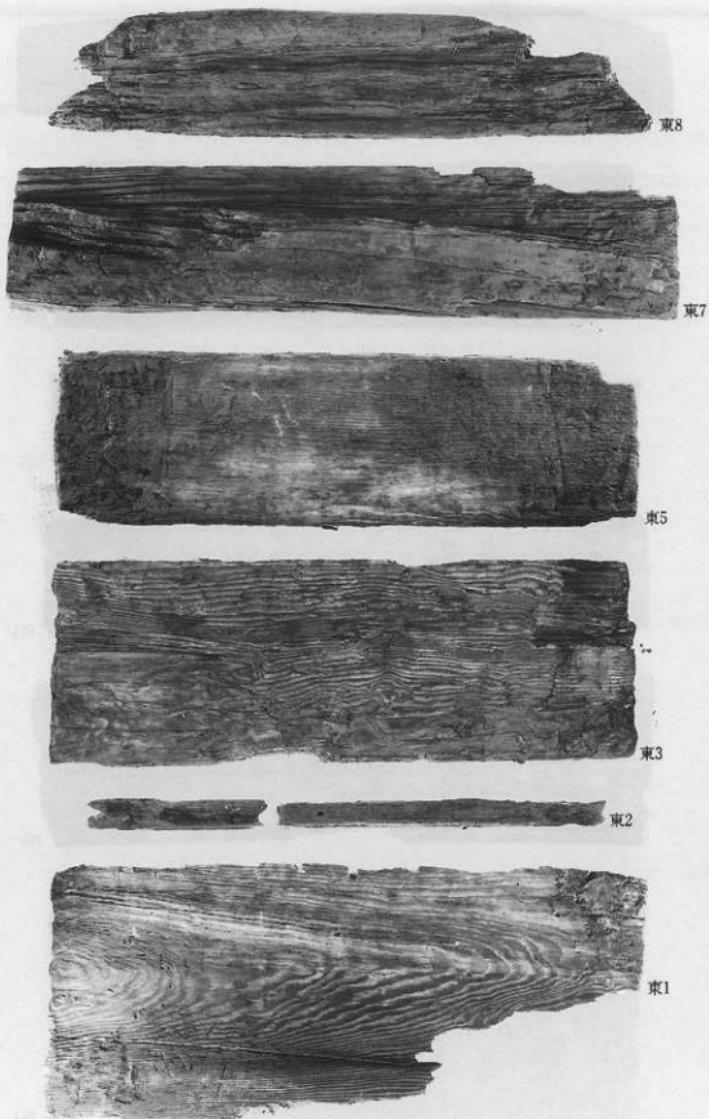
井戸 5 出土木枠 棚柱 (1~4)



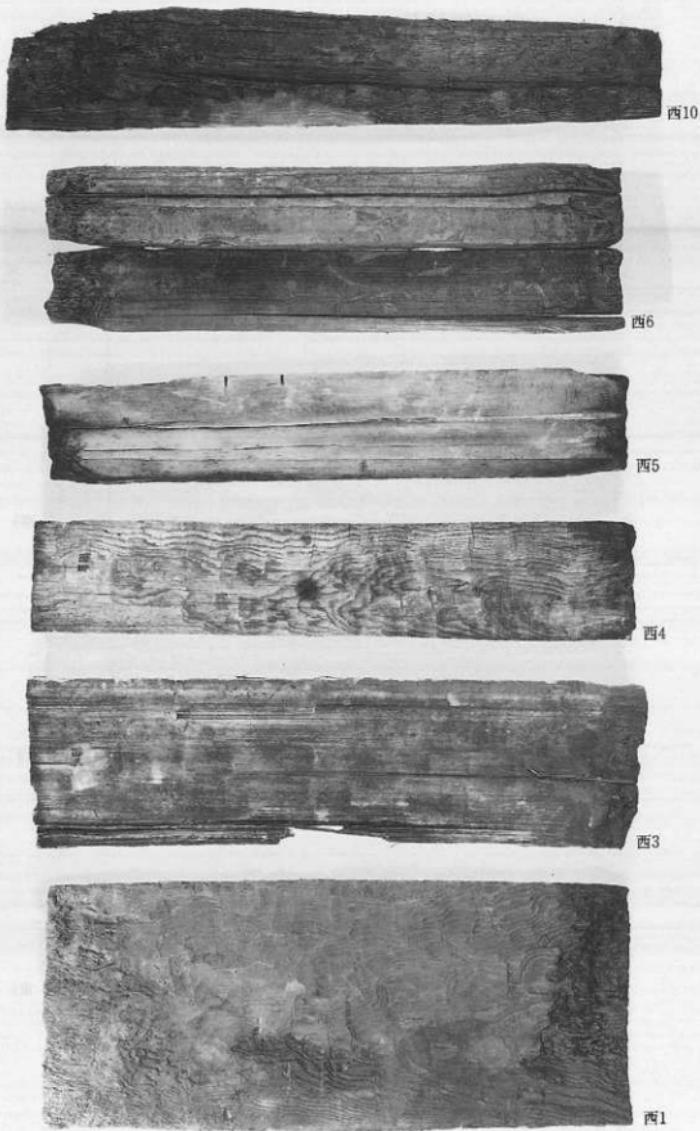
井戸 5 出土木枠 横板 (北1・2・6・7・9・10)



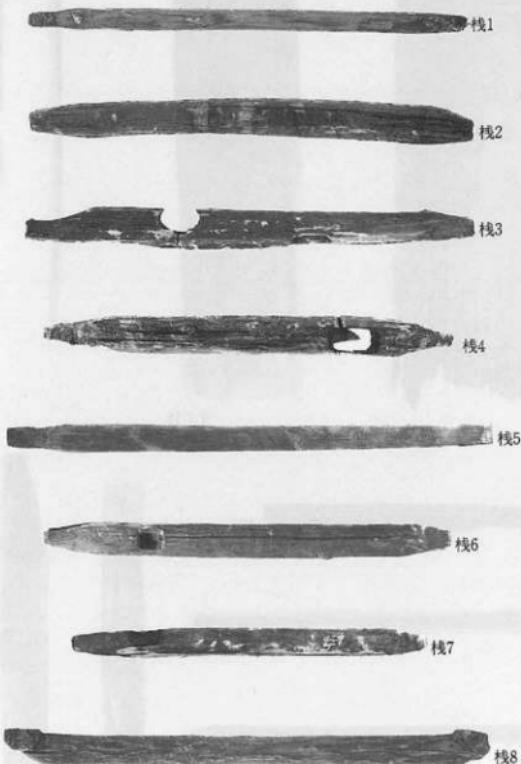
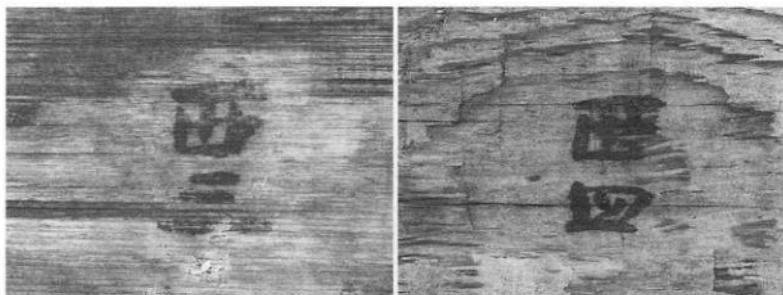
井戸5出土木枠 横板（南1・2・3・7・8・9）



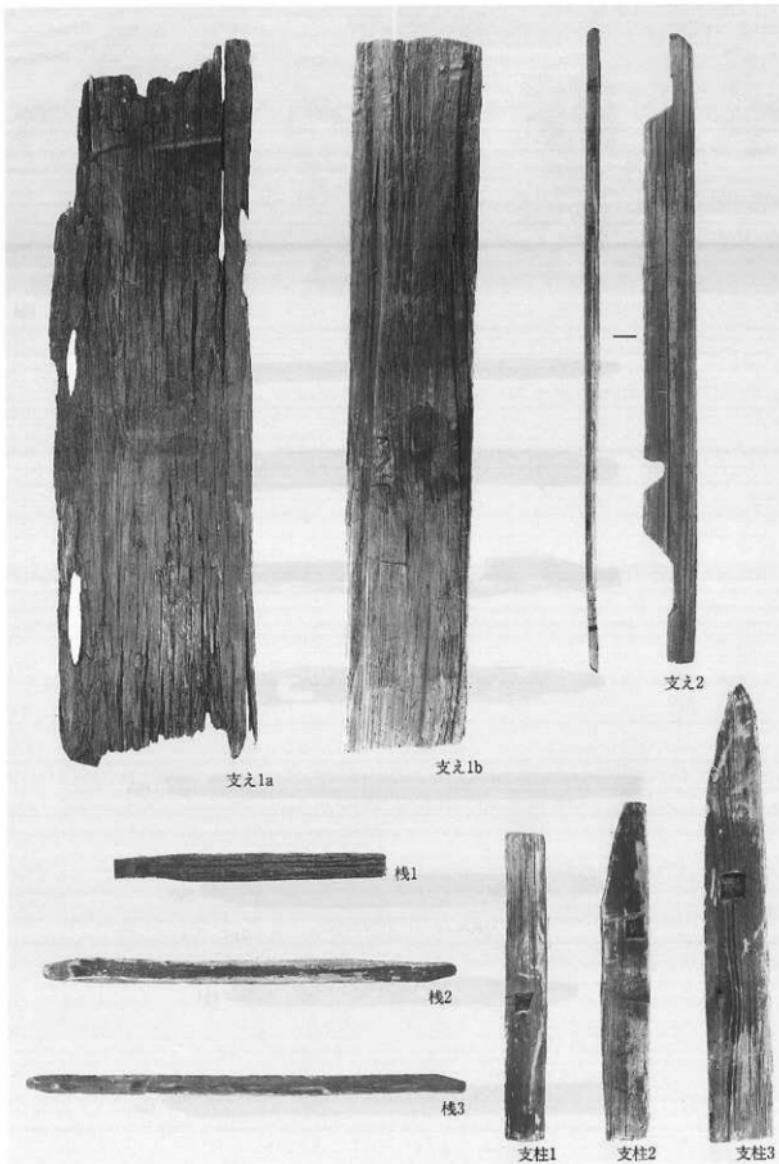
井戸 5 出土木棒 横板 (東1・2・3・5・7・8)



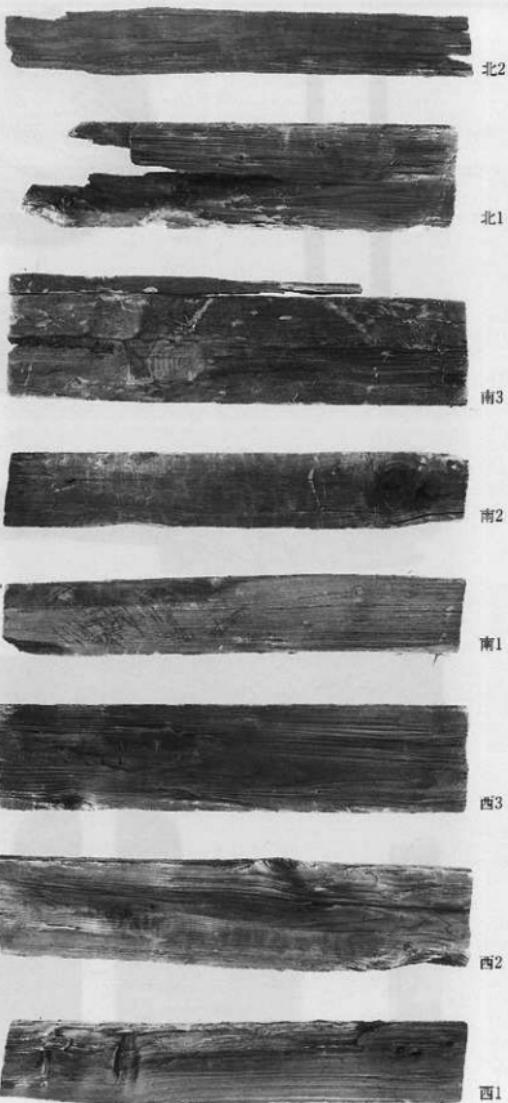
井戸5出土木枠 横板（西1・3・4・5・6・10）



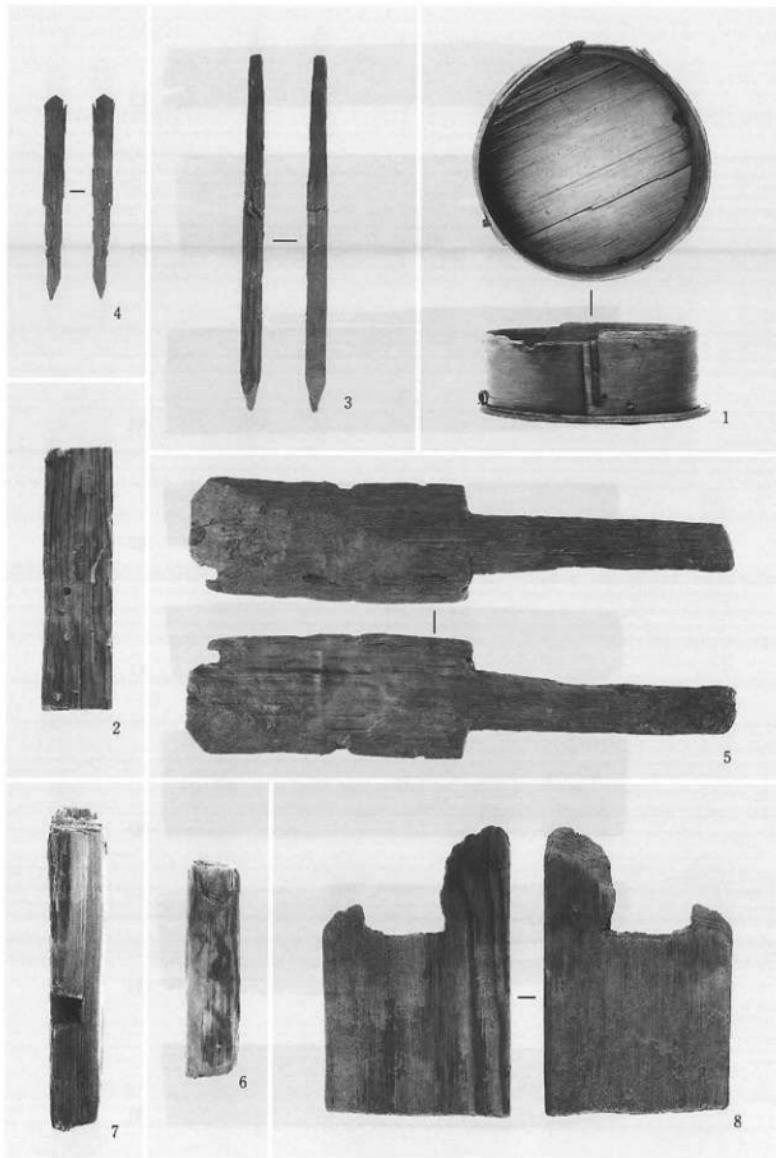
井戸 5 出土木枠 横板墨書（西3・西4）、上部横棟（棟1～棟4）、下部横棟（棟5～棟8）



井戸5出土木枠 支え(1a・1b・2) 井戸7 横横(棚1~棚3)、支柱(1~3)



井戸 7 出土木枠 横板（北1・2 南1～南3 西1～西3）



井戸 1 出土木製品 曲物 (1・2)、直串 (3・4)、用途不明品 (5~8)

東大阪市下水道事業関係
発掘調査概要報告

-平成12年度-

平成13年3月31日

発行所 東大阪市教育委員会
印刷所 (株)近畿印刷センター